

(表紙)

西南之役懲役人筆記 十四 茨城県

(中表紙)

上 申 書

茨城県

一 岩尾彌四郎上申書

上申書

熊本県管轄第二大区十小区

飽田郡横手郷古町村居住

(熊本市)

岩尾九十郎実父隠居

平民

岩尾彌四郎

本年二月
五十四年一ヶ月

書取ヲ以奉上申候、昨明治十年一月十九日薩州之大勢熊

(二)

本県川尻町迄出張いたし候由ニ付、家族共甲佐郷岩下町

親族之方エ差送り置キ、自在在宿仕居候処、薩州之本陣并ニ熊本県本陣近隣ニテ、追々之用談いたし候ニ付、不得止世話致シ居候処、三月廿六日熊本県士本陣池部吉十郎ヨリ大至急之用談有之候間、参ヘリ呉候様申来候ニ付直チニ罷越シ候処、薩州之桐野利秋別三名同席ニテ、池部吉十郎申聞候義ハ、坪井川筋石塘細工町エ入口ヲ一時ニ積留、牧崎・段山入口ヲ一円水漂申度談判相決、積留手配等之義ハ弓削新助引受ケ、最首先刻引取申候、本陣ヨリハ大矢野十郎別出張、然ルニ想考候ニ、弓削新助志人ニテハ百事之世話行届キ間敷哉、殊更本陣ヨリ之出張人数ハ若輩之者ニテ、何分遅々破損無之様積留之儀無覚束、積留及遅弁申候テハ難成、万一及ヒ破損候儀有之候節ハ猶亦難ク相濟、自分エモ罷出周旋いたし候様申聞候ニ付、隠居之身分右等之儀ハ重疊不吞込ニ有之、相断候処、惣撰ノ弓削新助并ニ本陣ヨリモ大矢野十郎別出張いたし候ニ付、自分エモ是非ニ出張いたし候之様ニ申聞候ニ付、自分報答ニハ、城ヨリ西手段山入口一円水漂申候義、籠城之節右場所ヲ積留申候手当ニ相成居、則チ加藤子ヨリ之申伝ヲ承諾いたし居、却テ寄手ヨリ至急之積留如何之子細ニ有之候哉ト申向ケ候処、当時牧崎・島崎外日

向崎・筒口右四ヶ所へ人数三千人余出張いたし居り、右
之人數之内微シク番兵迄残シ置キ、南方之官軍防キ不申
候テハ難相成、川筋積留水漂置、城兵出テ来リ不申候様ニ
留置キ、右人数引揚申度、至急成事ニ付是非ニ出方いたし
候様申聞候間承引仕、三月廿七日早朝ニ羽矢利平召連出
張仕候、同日積留ニ相成申候、戰爭之儀ハ一月廿二日ヨリ
四月十三日迄之間昼夜砲聞無止事、同十四日早朝ニ本陣
引払申候ニ付、私義ハ同十七日ヨリ八代親族共エ罷越、
同廿一日同所熊本県出張所エ自分一身丈之自首仕、同十
月五日長崎臨時裁判所ニ於テ、懲役一ケ年ニ被為所、同
日当御県エ御廻シニ罷成、方今懲役中ニ有之候、依之此
段書取ヲ以奉上申候也、

明治十一年二月四日

右

岩尾彌四郎〇(印)

二 有馬七左衛門・小城愛兵衛連署上申書

口上覚

明治十季二月中西郷隆盛等上京ノ際熊本ニ於テ戰爭ニ及

私共儀

ト候処、戸長野元直彦ヨリ出兵スベキ旨承知シ、同三月
六日鹿兒島出立、同十二日熊本へ着、翌日本營へ届出候処
池ノ上四郎ヨリ遊撃三番小隊ノ小隊長ハ大迫梅三半隊長有馬へ、分
隊長小城へ被申付、直ニ鹽屋へ番兵トシテ兵數六操出シ、
同四月五日木留口ニ在ル五番大隊九番小隊ニ応援トシテ
軍ヲ転シ、昼夜九日間ノ連戦勝敗モ決セサル内川尻ノ敗
ヨリ、同月十二日午後六時頃ヨリ熊本本柵燧へ引揚、一日
滞在ニテ東ノ方木山へ軍ヲ退ケ、一日逗留ニテ熊本市新南部村
へ番兵致シ居候処、官軍官兵千五進撃ヲ拒キ味方三戦ヒ大
勝利ニテ、其日午后七時頃川窪ノ敗報ヲ聞キ再ヒ木山へ
引揚ケ、翌日又官軍押シ寄官兵五甚タ防禦セシガ味方五
ニ敗軍ニテ直ニ矢邊へ引挙、一宿ニテ馬見原ヨリ人吉へ
転軍、二日宿陣ニテ木ノ瀬へ操出シ、滞在三日ニシテ岩
井坂へ軍ヲ転シ、爰ニ於テ隊名鵬翼一番ト改称シ、翌日
午前八時頃官軍ノ攻撃ヲ官兵式邀へ戦フテ味方六之ニ勝テ、
其午后五時頃ヨリ大野村へ軍ヲ廻シ、滞陣十日余ニテ佐
敷へ進撃官兵二敗走シテ味方四再ヒ大野村へ引揚、在陣八九
日ニシテ國見山へ進撃味方四勝利ニテ官兵五又夕前所へ
引揚ケ、三日兵ヲ休メ再ヒ國見嶽へ進撃味方三百四、直ニ切
込ミニテ大勝利官兵六直チニ本日午後五時頃ヨリ前キノ大

野村へ又々引揚、宿陣三四日橋ヶ寺へ進軍味方二百人位二日連戦、

初戦勝利ニテ後チ二敗軍夜中ニテ官兵ノ員數分ララス直ニ渡り村へ引揚、休

兵一日ニシテ堺村へ番兵トシテ操出シ、夫ヨリ七日目ニ

官軍ヨリ官兵二百人位襲撃セラレ直ニ敗走味方五十名余再ヒ人吉ノ町へ引

揚、直ニ大垣村へ軍ヲ移シ三日位番兵致シ居ル内人吉町

敗報ヲ得、田ノ村へ引揚十二日在陣、統テ大畑敗軍ノ報知

ヲ聞キ鹿兒島県内大口へ軍ヲ退ケ、一日逗留ニテ吉田郷

へ軍ヲ移シ、一日在陣ニテ小林郷へ出軍、五六日滞在ニテ

飯野郷城山へ進撃官兵山中在ルヲ以テ兵數分ララス勝敗決セス味方六十人余直ニ再ヒ小

林郷へ退軍、四五日滞在ニテ須木郷水越ヨリ人吉ノ内坪

屋村へ進撃味方二百四十人余勝利ニテ官兵二百人位其地ノ山中ニ伏ス人家ナキヲ以テ

翌日又々小林郷ニ引揚三四日在留ニテ高原へ転軍、一泊

ニテ岩川郷へ進撃味方百五十人余勝利官兵百十人余五日在陣ニテ恒吉郷へ

軍ヲ転シ、滞在三日ニシテ大崎へ軍ヲ発ス味方五十人余、二日連

戦官兵山中ニ在ルヲ以テ兵數分ララス共ニ勝利、滞軍三日直ニカレ川へ進軍、一

日大戦官兵千八百人余敗北味方六百五十人余、速ニ戦地ヲ引揚距離三里余ノ所

ニ滞在三日、都城へ進撃官軍ノ三台場ヲ拔掃シ后チ二敗

軍ス官兵千名余、翌日高岡へ引揚十五日目ニ当所赤谷ニテ官

兵ヨリ官兵二百人余攻撃サレ、防キ戦シニ遂ニ敗走味方八十人余佐土原へ

引揚、在留一日ニシテ美々津へ退軍、又滞在一日ニテ延岡

へ引揚、当地ニテ降伏仕候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

有馬七左衛門

明治十一年二月

小城愛兵衛

三 木原武志上申書

口上覚

西郷隆盛等政府へ尋問ノ儀有之由ニテ明治十季丁丑旧正二月十五

月三日鹿兒島発足、途中熊本ニ於テ開戦ノ段伝聞仕居候

処、其徒有川勘助副戸長家村九左衛門等ヨリ出兵ヲ嚴責

サレ、同季三月六日出足同月十日人吉へ着速ニ本營へ出

頭候処、十一番大隊九番小隊ノ小隊長被申付、同所テリ

カク筋山径ノ番兵ヲ承知シ、右番兵中病ニ罹リ鹿兒島県

内栗野病院へ退キ療治仕候得共、快方覚束ナク同四月廿

六日帰区仕候、然ル処官軍鹿兒島御征討相成、日ナラス

帰順取調ヘトシテ御巡回ニ付、同七月十五日自首仕謹慎

罷在候処、同月廿四日隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来、諸所排

布ノ巡查捕縛スヘキ旨布達セシト承リ候ヘトモ、其儀ニ

応セス間居罷居候処、同廿六日午前七時頃ニ至リ市街ノ
動揺大形ナラス、因テ其動靜ヲ窺ハント門外へ立出候処
家財諸品ヲ運送スルモノ少ラス、即其由ヲ問フニ皆謂フ、
賊軍已ニ市來駅マテ押シ来レリト、是ニ於テ熟々苦慮ス
ルニ、最早里程モ僅カニ三里位ノ距離ナレハ斯ノ如ク安
居シ、爰ニ襲来ラハ我等ノ帰順自首セシヲ敵罰セン事ヲ
恐レ、不図巡查追捕ノ念ヲ起シ、其旨同盟兩三友ニ通シ置
キ、川内河ノ枝川ナル舟場へ立出候処、追々同輩馳セ加
ハリ川出口へ到ル頃惣計二十八名ニ相成リ、此所ニテ暫
時櫓揖ヲ止メ巡查ノ在否ヲ探偵スルニ、昨廿五日昧爽三
里程川下モナル京泊口(川内市)へ拔錨アリト、然レトモ猶賊ノ我
等ヲ苛酷ニ処置セン事ヲ恐レ、兎角京泊マテ差越シ候テ
ハ其怒責免レ難シト衆議ヲ決シ、即時発船ノ処途中夜分
ニヲヨヒ着船、爰ニ於テ問屋ヲ召呼姓名不知ト巡查ノ脱跡ヲ尋
ヌルニ、昨朝解纜ノ処逆風ニ隔テラレ前所へ帰舟ナリシ
ト、且惣人員七十名位内病ムモノ三十名位ナリト云、時
キニ水引ノ住人姓名不知ノ者五六名ニ会シ詳細評議ニ涉
リ候処、衆皆謹慎ノ身トシテ再ヒ斯ノ如ク暴動セハ順道
ニ戻ルベク儀ト衆議ヲ定メ、帰宿仕居候処、官軍再ヒ鹿
兒島へ御追討ノ際、川内警視分署へ召捕ラレ、同十三日

同県谷山出張所へ差廻レ同月廿四日鹿兒島城下前ノ濱ヨ
リ長崎へ廻漕、翌廿五日着港仕候ニ付、戦地ノ形状相分
リ不申此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

明治十一年二月

木原武志

四 橋口喜平次外五名連署上申書

口上覚

私共儀

明治十季二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際熊
本ニ於テ戦争ニ及候処、戸長橋口仲二ヨリ出兵スベキ旨
承知シ、三月廿九日頃宿元出発同四月十一日熊本県川尻
へ到着本営へ届出シニ、池ノ上四郎ヨリ遊撃四番小隊へ
小隊長本編入スベキ旨承リ、直ニ当地ノ番兵ヲ持受ケ味方五
田中ノ丞罷在候処、十三日目ニ官軍三百名余押寄せ、三昼夜連戦敗
軍ニテ木山(益城町)へ引揚、休兵一日ニシテ御舟へ進撃味方八
十名余暫時
戦争官兵百
名余勝利ニテ、其儘四日滞在、再ヒ官軍ヨリ官兵千二
百名余
進撃、拒キ戦ヒシカ遂ニ敗走直ニ鐘打へ引揚、一週間位
番兵ニテ、日向国内尾前(椎葉村)へ転軍番兵三十日間位、夫ヨリ

(不土野、椎葉村)
不動野へ軍ヲ退ケ味方百二十名番兵三日ニシテ官軍ノ進撃ヲ二百

四五拒キ、烈戦四時間計リニシテ遂ニ敗走橋口宗一郎・松下市

名余区仕直ニ江代へ引揚、番兵三日ニシテ岩野へ軍ヲ移シ兵百二十名

数度ノ戦争、終ニ敗北直ニ米良へ引揚、滞在三十三日ノ

間数十戦互ニ勝敗アリ、夫ヨリ穗北へ引揚、無程官軍ヨ

リ推寄セ遂ニ敗走是ニ於テ中尾本隊ヲ失シ、帰区ノ上帰順自

首仕謹慎罷在候処、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際賊營ヨ

リ諸郡出張ノ巡查ヲ捕縛スベキ旨戸長橋口仲二其布達ヲ

承知シ通達スルヨリ、止ムヲ得ズ其意ニ応シ且ツ賊勢ノ

甚々盛ナルヲ聞キ、同所西方町口へ番兵致シ候マデニテ、
直ト引取申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

橋口喜平次

橋口宗一郎

中尾覺太夫

松下市助

林 八之進

上野藤之助

明治十一年二月

五 木原權太郎外二名連署上申書

口上覚

私共儀

西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際、区长汾陽光輝ヨ

リ通告ヲ受ケ、明治十季二月十六日第四番大隊七番小隊

ニ編入シ小隊長石原当地出立、同廿二日熊本県下へ着、速ニ

戦端ヲ開キ、翌日午前一時頃ヨリ植木ノ駅ニ軍ヲ軋シ、

山鹿へ出軍ノ途中木ノ葉ノ砲声ヲ聞キ間道ヨリ官軍ノ横

ヲ衝キ、大勝利ニテ追撃十五六町、同日午后六時頃ヨリ

植木へ引挙官兵二千名一泊ニテ山鹿へ官軍在居ト聞キ出

軍セシ処味方二千名最早官兵ハ引揚シ跡ニテ其儘番兵、二三日

目ニ官軍ノ襲撃ヲ邀撃シ勝利ニテ前所へ引揚、守台四五

日ニシテ南ノ關へ進軍ノ途中、岩村ニ於テ官兵官兵山

ルヲ以テノ防禦ヲ受ケ一昼夜連戦勝敗決セスシテ再ヒ山鹿

へ引揚、即時応援トシテ田原口へ操出、其本道ナル左右

へ十台ヲ築キ、二十七日間昼夜連戦、夜ニ至レハ官軍探

砲ヲ発スル事釜中ニ胡麻ヲ焼カ如ク、同三月卅日味畠田

原坂ノ敗ヨリ間道ヲ取り山鹿本道へ出デ、向フ坂ニ於テ

拒キ止メ激戦三時間位ニシテ植木マテ追ヒ返シ、官賊共

ニ台ヲ築キ三十日間位昼夜連戦勝敗決セス、川尻ノ敗報

ヲ聞永嶺へ引揚、翌日晚方ヨリ(熊本市)下南部へ操出(味方四、五百名)、番兵二

日ニシテ官軍ヨリ進撃(官兵數)前戦敗レ後ニ勝利ニテ先キノ

台ヲ守ル、午後十二時頃川窪ノ危キヲ聞キ総軍木山へ引

揚、速ニ矢邊へ軍ヲ退ケ、馬見原ヨリ江代へ軍ヲ移シ、

滞在二三日ニシテ人吉へ操出、即時鹿兒島城山へ転軍當

地伊敷へ一泊、翌日城山ノ官軍ヲ攻撃、不利ニシテ前所

へ引揚、二日在陣ニシテ天保山ヨリ進撃(振武八小隊 奇兵一小隊)勝敗決セ

スシテ各前所ニ引揚ケ、然トモ余カ一小隊ヲ(四十人)以テ玉

江橋へ番兵五十日間位、六月廿二三日頃川内口ノ援兵ト

シテ軍ヲ転シ、翌々日着スルヤ直ニ戦争(味方百六 十名余)敗北、本隊

ヲ失ヒ帰区ノ後七月十五日自首謹慎罷在候処、同月廿四

日隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸郡出張ノ巡查ヲ捕縛ス

ヘキ旨布達セシト友輩ヨリ承リ居候処、廿六日午前八時

頃又々友輩ヨリ舟場へ立出ツベキ段通シ来リ、其儘速ニ

馳セ出デシニ最早十二三人集リ居、其由ヲ問フニ巡查捕

縛ノ企テニテ其意ニ応シ申候、其ヨリ下文京泊へ発船吟

味ノ上直ニ帰宿仕候儀木原武志ノ上申書ニ異リ不申候、

此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

明治十一年二月

木原權太郎

野村賢藏

岩月伊八

六 野田強之進・中村清藏連署上申書

口上覚

私共儀

明治十季二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際区

長汾陽光輝ノ通告ヲ受ケ、同二月十七日五番大隊九番小

隊(小隊長國 分隊助)ニ編入シ、兵卒ニテ即日鹿兒島出発、同廿二日熊

本県城下ニ到着スルヤ直ニ籠城ノ官兵ト戦端ヲ開キ(官兵ヨ 始)

ラ始四時間位ノ内、北ノ方植木駅ニ官兵ノ到ルト聞キ、當

所ハ余隊ニ譲リ置キ急ニ右植木へ発軍スル(味方二百十 五六名余)途中、

最早味方ヨリ植木へハ番兵ヲ張りシト報知ヲ得、向フ坂

近隣ヲ番兵シ、一泊ニテ植木ヨリ木ノ葉へ操出セシニ(玉東町)

余、当木ノ葉ニテ官軍三千名余ト戦争、正面ニ衝入り勝

利ニテ植木へ引揚、一日間兵ヲ休メ翌日山鹿へ発軍(味方千 三百名)

余番兵致シ居候処、官軍(二千五 百名余)寄セ来リシニ九番小隊ヲ以

テ横撃セシニ間モナク勝利ニテ、翌日木留へ転軍番兵(植木町)

方

二百名余 一二日ニシテ、三月六日頃三鳥へ軍ヲ進メ九日位番

兵、同月十四日頃夏山(那知山、楳木町)へ進撃敗軍ニテ又三鳥台場へ引揚

シニ、吉次峠(玉東町)ノ敗報ヲ聞キ木留へ引揚、十二日間昼夜連

戦官ノ兵數分ラヌ中味方援兵トシテ六十名余来リシカトモ勝敗ヲ決セ

ザルニ、川尻ノ破ヨリ永嶺へ軍ヲ退ケ兩三日番兵ニテ矢

邊ニ引揚、滞在一日ニシテ山田(矢部町)ニ転陣、三日逗留ニテ江

代上村へ引揚、滞軍十日位ニシテ人吉へ退キ、一泊ニテ鹿兒

島県内吉田郷へ操込ミ、夫ヨリ鹿兒島吉野雀ヶ宮へ発軍、

直ニ攻撃勝利ニテ、翌日加治木郷へ転軍、別府川へ進撃味方

五百名、勝敗不決ニシテ官兵分明ナラス夫ヨリ國分郷陣ヶ岡へ軍ヲ廻

シ番兵中味方三百名官軍ヨリ押寄セ官兵千五百名余激戦十時間程、遂ニ全

隊潰散シテ帰区、其後帰順自首仕謹慎罷在候処、隆盛等再

ヒ鹿兒島へ襲来ノ際、友輩ノ者ヨリ巡查捕縛ノ意且ツ賊

營ノ布達ノ意ヲ通シ来、其意ニ応シ木原武志等へ同道致

シ候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

野田強之進

明治十一年二月

中村清藏

七 海老原爲平・濱田良啓連署上申署

口上覚

私共儀

去十季二月西郷隆盛上京ノ折熊本へ赴候処、彼ノ地ニ於

テ戦争ニ及ヒ、右ニ付貴島清日向国宮崎ニ於テ兵員相募

リ、右へ加入致シ八番大隊後ニ隊号販武ト改称スノ大小荷駄ヲ被申付、

三月始頃出発、同県田原口戦地へ進撃候処、遂ニ敗戦ニ

及ヒ四月中旬同所引揚、五月始鹿兒島へ転軍、彼モ同断

敗軍、六月末同所引揚、其後日々逢追戦鹿兒島県諸原郡

ニテ七月帰順仕候、最モ濱田儀ハ始出軍ノ砌大砲四門三

十六名ノ長トシテ、三月十七八日比田原口へ着シ一戦ス

ルヤ否ヤ問モナク彼ノ地敗走、悉ク砲ヲ失シ兵卒ハ銃隊

へ編入仕、同人儀右大小荷駄へ加入仕候、且官軍ノ兵員

ハ大略二千人余ト見受ケ申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

海老原爲平

明治十一年二月

濱田良啓

八 淵邊元副上申書

口上覚

私儀

明治十年二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニ付上京ノ際、
 篠原國幹ヨリ随行ノ指揮ヲ受ケ、(池上四郎隊長)五番大隊二番小隊ノ
村田三助押伍ニテ同月十七日鹿兒島発足、同廿二日熊本県城下
 へ着スルヤ、直ニ植木駅へ番兵トシテ(兵數二百十操出シ居候
四五名余)
 処、同日午後六時頃ヨリ官軍一聯隊位押シ寄セ直ニ砲発
 ニ及ヒ候処、其砲声ヲ聞キ味方三小隊位応援トシテ馳セ
夜分ノ事ニテ
隊員分ラヌ三時間計ノ激戦ニテ、其中手傷ヲ負ヒ近隣ノ
 人家ニ退キ居候ウチ間モナク大勝利ニテ、聯隊旗等ヲ得
 タル報ヲ聞キ、夫ヨリ川尻病院へ入院、三月初旬ニ至リ
 帰県療治中本営詰中島健彦ヨリ、同季六月初旬(大口市)牛山郷へ
 出張致スヘク旨通告ヲ受ケ速ニ出立、同月中旬到着其地
 ノ本営ニ引合セシニ、邊見十郎太ヨリ雷撃八番小隊ノ半
 隊長被申付、翌日八番・九番ノ二小隊ヲ以テ旧羽月郷へ
一隊六進撃
十名余分ラヌ官軍兵數 勝敗決セサル中再ヒ手負、同県都城病院
 へ退キ療養致居候処、折々各口敗軍ニ付日向國延岡へ転
 院、同所モ遂ニ破レ取敢ヘズ小船ニ乗込ミ当地ヲ忍ヒ出

テ諸所へ廻船、九月十五日同県谷山郷へ上陸致シ候処、
 直ニ巡查ヨリ捕縛ニ相成、当所警視出張所へ御差廻ニ付
 戦地ノ形状等更ニ相分リ不申候、此段形行奉上申候、以
 上、

鹿兒島県

明治十一年二月

淵邊元副

九 山口彌九郎上申書

口上覚

私儀

明治十年二月中西郷隆盛上京ノ際、篠原國幹ヨリ随行ノ
(村田新八隊長)指揮ヲ受ケ、第二番大隊九番小隊ニ編入(小隊長伊集、
院権右衛門)、同月十
 六日当地発程同廿二日熊本県下ニ着シ、直ニ籠城ノ官軍
 ト戦争、翌日木ノ葉(玉葉町)ニ軍ヲ転シ(味方千五百
五六名余)候処、当所ニテ官
 兵二千余名ニ行逢ヒ直ニ戦争、暫時ニシテ勝利ヲ得、本
 日午後六時ヨリ植木駅マテ退キ、翌日二本木エ引揚休息
(玉名市)一日ニテ高瀬へ操出シ(味方三
百名余)候処、官軍ヨリ進撃ヲ受ケ(兵
數)
分ラ激戦三時間位ニシテ互ニ勝敗分ラヌ、再ヒ植木駅ニ引
 揚、一日滞在ニテ稻佐岡へ発軍(味方三百
二十名余)番兵兩日ニシテ官

軍二千人余寄せ来リ、午前七時頃ヨリ午後五時頃マテ攻撃セシガ、彈丸空乏ニ及ヒ遂ニ敗走、植木近村へ滞在一日ニテ、田原口本街道ヨリ西ノ方畑中ニ台場ヲ築キ居候処、其夕刻ヨリ攻撃ヲ始メ連戦四昼夜ニ及ヒ、相互ニ勝敗決セザル内其台場ヲ交代シ、直ニ熊本城外段山口へ番兵、兩三日余ニシテ城兵押シ出^{八百}接戦中手傷ヲ負ヒ、直ニ川尻病院へ退キ療養、十余日ノ后帰県致シ居、同季六月下旬自首自宅謹慎中、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際、諸所出張ノ巡查ヲ捕縛シ悉ク鹿兒島本営^{本営}へ可差廻旨布達アリシト山川郷戸長ヨリ脅迫サレ、且ツ勢ノ止ムヲ得サルヨリ穎娃郷内仙田村^{開閉町}マテ数名出會セシト聞キ、取敢ハス罷越候得共謹慎中ユヘ其儘帰家仕居候処、直ニ警察ヨリ御召捕ニ相成申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

明治十一年二月

山口彌九郎

一〇 橋口仲五郎・松下彦次郎連署上申書

口上覚

私共儀

明治十季二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際、途中熊本県ニテ戦争ニ及候処、戸長所ヨリ出兵スヘキ旨通達ヲ承知シ、三月初旬宿元出発同月中旬熊本県下ニ着シ、賊本営へ届出候処貴島清ノ指揮ニ従ヒ、八番大隊六番小隊ニ編入、同月下旬^{勢地市}限府へ百四十人余操出シ番兵十六七日余ニシテ官軍ノ進撃ヲ邀ヘ戦ヒ勝利ヲ得、而シテ番兵十余日ニシテ後^{日分}兩日間昼夜攻撃遂ニ敗走、大津町へ引揚番兵致シ居候処、五月中旬豊後竹田ノ城へ軍ヲ転シ、数々戦争ニ及、同月下旬古城ニ於テ敗軍ノ折手負ニテ延岡病院へ退キ療治仕候処、折々各口敗走スルヨリ同道ニテ帰区ノ上帰順自首自宅謹慎中、隆盛再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸郡出張ノ巡查ヲ捕縛スヘキ旨布達セシト副戸長橋口仲二ヨリ通告シ、同所^{山内市}西方町口へ暫時番兵致シ候テ其儘帰家仕候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

明治十一年二月

橋口仲五郎

松下彦次郎

一一 高木敬介上申書

口上覚

私儀

明治十季二月中西郷隆盛等上京ノ際、熊本県ニ於テ砲発
 二及候処、鹿兒島県内川内ニテ賊本官中山甚五兵衛ノ募
 兵ニ雷働脅迫サレ、勇義八番小隊ノ人員八小隊長申付ラレ、
 同県阿久根郷へ出兵スベキ旨承知致シ、四月中旬川内本
 營ヲ操出シ当日同郷本道竊ノ口へ番兵仕居候処、官軍四
 百名余押寄セ二時間位戦争味方百五
十名余遂ニ敗走シ、右川内マ
 テ引揚、川ヲ夾ミ守リヲ付ケ居候処、間モナク再ヒ官軍ヨ
 リ寄セ来リ二昼夜連戦セシ処、其川下モナル高江郷川内市ノ内
 ヲリ敗レ来リ候ヨリ全隊潰散セシニ付、直ニ帰宅仕帰順
 致シ申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

明治十季二月

高木敬介

二 谷口藤次郎外一三名連署上申書

口上覚

私共儀

去明治十季二月中西郷隆盛上京ノ際熊本ニ於テ戦争ニ及

候処、同季四月中旬鹿兒島県下川内川内市向田ニ於テ、賊本官
 中山甚五兵衛ヨリ出兵スベキ旨脅迫サレ、止ムヲ得ス其

募リニ応シ、勇義九番小隊小隊長、佐
多直左衛門ニ編入セラレ、同県下

高尾野マテ出発味方九十
六名余、番兵五日余ニシテ官軍五百名位

押寄セ戦争二時間余ニシテ敗軍、直ニ川内河マテ引揚、河

ヲ夾ミ連戦二昼夜、遂ニ河下モ高江郷ノ内ヨリ敗レ来リ、

本隊ヲ失ヒ密カニ其場ヲ脱シ帰区、不日帰順自首自宅謹

慎罷在候処、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸所出張ノ巡

査ヲ捕縛スヘキ段布達セシヲ、副戸長橋口仲二ヨリノ通

告ヲ承リ、同所西方町口へ暫時番兵直ニ引取帰家仕候、

此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

谷口藤次郎

谷口金吉

谷口勇右衛門

谷口萬六

貴島正之進

松下直之進

山元彌兵衛

橋口助太郎

明治十季二月

去十年二月中西郷隆盛等上京ノ途中熊本県下ニ於テ戦争ニ及候処、同季四月頃鹿兒島県内川内向田ニテ、賊本營中山萬五兵衛ノ募兵ニ脅迫サレ、止ムヲ得ス其意ニ応シ勇義七番小隊ニ編入小隊長ハ木場宗兵衛、五月中旬同県出水郷マテ発程、番兵七日余ニシテ官軍ノ兵數分明進撃ヲ拒キシカトモ、直ニ敗走宮ノ城郷ヘ引揚、番兵致シ居候処再ヒ官軍ヨリノ攻撃ヲ拒キ、戦争一時間余ニシテ全隊潰乱ニ及ヒシヨリ密カニ帰区仕、七月中旬ニ至リ帰順仕自宅謹慎罷在候処、隆盛再ヒ鹿兒島ヘ襲来ノ際、同輩ノ者ヨリ談合致シ度

一三 愛甲半助外九名連署上申書

口上覚

中尾 彦 八

石塚末太郎

山元與七郎

山元佐兵衛

永田金之丞

橋口與四郎

私共儀

明治十一年二月

儀有之候ニ付舟場へ可出立旨通告ヲ承知シ、直ニ馳セ出候処、木原武志其余八九名集会致シ居、其由ヲ問フニ、
 巡查捕縛ノ旨趣申聞候ヨリ、無余議其意ニ從ヒ進退木原武志ト同道仕候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

愛甲半助

愛甲仲介

藤田源吾

安田善次

竹山誠介

菱刈隆次郎

曾木仲之丞

橋口太左衛門

曾木茂介

猿渡藤次郎

一四 池田喜左衛門外一四名連署上申書

口上覚

私共儀

明治十季二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際、途中熊本県ニ於砲発ニ及、攻撃數十日ニシテ当県引揚、軍ヲ鹿兒島県城山ニ転シ、在留ノ官軍ヲ撃破セント中島健彦・貴島清等当地上伊敷へ本営ヲ置クヤ、直ニ布達ヲ以テ出兵スベキ旨嚴責シ、止ムヲ得ズ其意ニ応シ、五月中旬宿元出発、翌日右(鹿兒島也)上伊敷へ着シ本営へ届出候処、振武二十九番小隊ニ編入人員百二十名余直ニ当所宇治瀬山上ニ番兵致シ居候処、不日官軍ノ人員分明ナラス進撃ヲ受ケ戦ヒシニ遂ニ敗軍シ、直ニ財部郷へ引揚、台ヲ築キ嚴守セシカトモ各口敗軍ニ及、塹守ノ地日々ニ蹙マルヲ以テ当地モ空ク引揚、転軍ノ途中各自申談シ本隊ヲ脱シ帰区致、其后帰順仕候テ自宅謹慎中、隆盛再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸郡出張ノ巡查ヲ捕縛シ悉ク鹿兒島へ賊本営ノ事可差廻旨布達アリシト、山川郷戸長ヨリ脅迫サレ、且ツ勢ノ止ムヲ得サルヨリ頼娃郷内仙田村マテ数名出会致シ候得共、謹慎中ノ事ニテ直ニ其儘帰家仕居候処、間モナク警察ヨリ御召捕ニ相成申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

池田喜左衛門

有馬利右衛門

明治十季二月

鎌田藤之助
樋渡仲藏
都外川正八郎
池田甚右衛門
紀 藤五郎
西牟田政介
長山健彦
川邊權左衛門
鎌田助右衛門
田中孝太郎
愛甲次右衛門
池田市兵衛
山元善之進

一五 高城吉之進外九名連署上申書

口上覚

私共儀

明治十季二月中西郷隆盛政府へ尋問上京ノ際、区长汾陽光輝ヨリ其意ヲ通告サレ、(篠原國幹隊長)一番大隊六番小隊ニ相良吉之助隊長編

入、同月十五日当地出発同廿三日熊本県下ニ着スルヤ、直ニ城内官兵ト砲発ニ及敗勝モ分ラス、同廿七日頃高瀬(玉名市)へ援軍トシテ出発、滞在一日ニシテ伊倉へ軍ヲ転シ滞陣(玉名市)一日ニシテ吉次峠へ転軍、翌日官兵数分ヲ進軍ニテ攻撃二時間位ニシテ勝利ヲ得、追撃二里余其儘邊田野村へ休足、翌日(玉東町)二俣村へ進軍撃争十時間位勝敗分ラス互ニ引揚、翌日田原坂へ援軍スルヤ一名二十五日間昼夜連戦勝敗決セスシテ熊本建町へ引揚、五六日滞ニテ戸島へ軍ヲ廻ラシ、一日在留ニテ川尻敗報ヲ得川窪(菊陽町)へ引揚ケ、二三日滞在ニテ人吉ヨリ鹿兒島へ転軍、到着ヨリ数々戦争互ニ勝敗アリシカ、五月下旬当地武ノ岡方ヨリ敗レ来リシヲ拒ク事能ハス蒲生郷へ転退ノ途中各自申合セ本隊ヲ脱シ、密カニ山中ニ潜伏シ夜行三日ニシテ帰区ノ上帰順、自宅謹慎罷在候処、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来之際、同輩ヨリ速ニ舟場へ立出ヘキ旨申来候ヨリ從ヒ出シニ、木原武志其外十六七名モ集会ニ付其由ヲ問フニ、巡查捕縛ノ旨趣申聞候ヨリ止ムヲ得ス其レニ同意シ、進退各武志ト同道仕候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

高城吉之進

明治十一年二月

- 道岡彦二
- 和泉周藏
- 園田武右衛門
- 四元平介
- 有馬格介
- 遠矢彦志
- 有馬雄七
- 野村彌太郎
- 愛甲喜介

一六 永田與四郎外二名連署上申書

口上覚

私共儀

明治十年二月中西郷隆盛等上京ノ際、熊本県下ニ於テ戦争ノ段伝聞ノ折、同季三月中旬邊見十郎太ヨリ出軍スヘキ旨申聞候ヨリ、其意ニ從ヒ直ニ発程、鹿兒島大口ニ於テ十番大隊九番小隊ニ加入小隊長ハ黒木龍助翌日熊本県下人吉二味方八十名操出シ、六日間滞ニテ同県八代出軍スルヤ直チニ戦争ニ及官兵十五名候処遂ニ敗走味方三百名夫ヨリ藤本へ引揚二日

滞在ニテ再び八代へ進撃、互ニ引揚守台五六日ニシテ木
瀬ノ球磨村
ノ瀬へ軍ヲ転シ、番兵二十日余ニシテ官軍ヨリ六百五進撃
ヲ受ケ拒戦セシニ敗走シ白石(芦北町)へ引揚ケ、翌日進撃致ス候

処勝利ニテ、其翌々日人吉へ軍ヲ退ケ滞在三四日余ニシ
テ当所敗軍、直ニ鹿兒島県下飯野(えびの市)へ引揚、十八日滞在ニテ
官軍押寄セ激戦三時間位ニシテ遂ニ敗走、高原へ引揚ル
途中足痛或ハ病氣ニテ本隊ニ後レシヨリ、帰区ノ後自首
仕謹慎罷在候処、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸所出張
ノ巡查ヲ捕縛スヘキ旨布達セシヲ、郷々順達ヲ以テ承知
シ、且ツ勢ヒノ止ムヲ得サルヨリ、同郷大山崎(指宿市東南村)マテ出発
致シ候ヘトモ、謹慎中ユへ各自帰家仕居ル処、直ニ警察
ヨリ御召捕ニ相成申候、此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県指宿郷

永田與四郎

明治十一年二月

坂元彦介

瀬戸口猪之助

一七 谷口平右衛門外三名連署上申書

口上覚

私共儀

明治十一年二月中西郷隆盛政府へ尋問ノ由ニテ上京ノ際、
篠原國幹ヨリ随行致スベキ旨承知シ、三番大隊二番小隊
ニ編入(隊長粉崎 光輝ナリ) 同月十六日鹿兒島出発、同廿三日熊本県ニ
到着、三十日間位城外ヲ番兵致シ(味方ニ 百名余) 其後披川(赤川、宮原町)ニ転陣番
兵致居候処、官兵千名余押寄セ戦争ニ及、三時間位ニシ
テ遂ニ敗走、甲佐へ引揚番兵三日余ニシテ進撃(味方四 百名余)セシ
処敗軍ニテ(官兵ニ 千名余) 御船へ退軍セシニ、再三官軍ヨリ進撃ニ
相成遂ニ敗北、夫ヨリ人吉へ転軍廿日余滞在ニテ佐土原
方へ転陣、直ニ戦争ニ及候処敗走ニテ本隊ヲ失シ、直ニ帰
区ノ上帰順仕自宅謹慎中、隆盛等再ヒ鹿兒島へ襲来シ、諸
所出張ノ巡查ヲ捕縛シ鹿兒島へ可差廻旨布達アリシト、
山川戸長ヨリ脅迫サレ、且ツ勢ヒノ止ムヲ得サルヨリ、
顯娃郷内仙田村(開聞町)へ数名出会致シ候得共、謹慎中ノ事ユへ
其儘帰家仕居候処、間モナク警察ヨリ御召捕ニ相成申候、
此段形行奉上申候、以上、

鹿兒島県

谷口平右衛門

松山宮彦

西牟田竹次郎

井上靜利

(年月脱)

(表紙)

西南之役懲役人筆記 十五 群馬県上

一 古屋於菟七上申書

今般鹿兒島逆徒征討始末編輯ニ付右賊徒懲役人ノ内、其事情及戦地之形状等詳悉致候者ハ、上申可仕旨奉拝承左ニ筆記仕候、

客歳二月上旬鹿兒島県内糧ナラサルニヨリ、区长坂田諸深・戸長清水浩平・田中登・日高百馬等区務旁出庁致シ、万緒伺得帰区スベキトノ趣ニ付、有志輩相集彼是評議ノ折柄、西郷陸軍大将等政府エ尋問之筋有之上京ニ付、旧兵隊ノ者共随従之段県令ヨリ布達相成、且ツ中原尚雄等之口供相達シ、諸説紛々之際全月廿日頃坂田等帰区ス、承ルニ、自分儀モ維新以來 朝恩ヲ忝シ国家ノ大事傍觀スル能ハス、区内有志輩申合セ豊後地ヨリ上京シ国家ノ為メ尽力セント県令エ願出許可シ来レリ、ト云ヘリ、追々駈付ケシ者都合百三拾二名、隊伍ヲ編制シ、坂田ハ自

ラ軍長トナリ、小隊長以下押伍・給養方ニ至ル迄投票ニテ相定メ、於菟七ハ分隊長トナリ、全月廿七日出發、(古屋) 肥・高鍋ヲ経テ三月七日美々津ニ至ル、其夜宮崎出張ノ貴島清ヨリ坂田ニ急報アリテ、俄ニ道ヲ替ヘ、全所ヨリ取テ返シ人吉地ヲ経テ全十五日頃熊本二本木町エ着シ、右之趣本管エ通シタルニ、即刻ヨリ安政橋ノ守兵ヲ命セラレタリ、然ルニ四月八日頃弘曉城兵突出防禦スト雖衆寡不敵味方大ニ敗走ス、其日敵ノ死骸ヲ不揚者凡十名計、味方戦死三十五六名・負傷拾五六名、敵ノ生擒トナル者二名、夫ヨリ敵兵九本寺ノ兵糧ヲ取り午後四時頃城内エ引揚タリ、故ニ元ノ固メヲ復シ守禦ス、然ルニ四月十四日頃川尻敗軍ニ付木山ヘ引揚ベキ旨本管ヨリ報知アリト雖、既ニ黄昏ニ及ヒ漸ク新山ニ到リ一泊、翌日木山町ニ到ルニ諸口ノ兵引揚ケ来リテ大ニ混同ス、于時我区ヨリ新兵六十名余采着ス、全十七日武宮ニ到リ全所出張本管ヘ談シ、廣木村ニ壘ヲ築キ之ヲ守ル、全廿日頃黎明ヨリ敵大進撃彈丸雨注百方術ヲ尽シテ防戦スル内、隊長山下謙藏兩足ニ傷ク、其日我隊戦死二名・負傷十名余、明曉ニ及ヒ味方ノ砲声衰ヘタルニヨリ、隣壘ニ到リ見ニ既ニ夜中木山ヘ引揚タル趣始メテ承リ、大ニ驚キ引揚ントスル時敵襲

来、事急ニシテ隊ヲ纏ルコト不能、木山ニテ集会スベキ
旨予メ約ヲ為シ散々ニナリテ其場ヲ退キ、日高義正其外
兵士七八名ト共ニ木山ニ到リ見ルニ、我隊老人ノ来ルナ
シ、夫ヨリ矢部町ニ到ルニ此所ニ給養・兵士共ニ拾名余
着シ居レリ、全所ニテ彼是評議スル内絡繹トシテ引揚來
ル味方之兵市在ニ滿タリ、夜ニ入りテ全所出発馬見原(蘇峰町)
到ル、此所ニ集ル者僅三十名、方向如何決スベキト評議
紛々タル内、軍長坂田諸潔延岡病院ニテ治療之趣相聞へ、
全人ノ指揮ヲ可受議ニ一決シ、松田章外一人ヲ全所ヨリ
差遣シ、隊士八七ツ山ヨリ(西郷村)田代迄引揚滯陣ス、然ルニ我
区ノ三番隊全所迄出張ノ処俄ニ美々津(日向市)ノ様引揚タル段伝
承シ、隊長日高義正外押伍兩人ト共ニ美々津迄差越、全所
ニテ坂田其外三番隊へ出會、形行申述タルニ、是ヨリ二
隊合併シ人吉へ差向へキ旨坂田ヨリノ指揮ヲ受ケ、(南郷村)神門
邑へ引返スト雖數度ノ敗軍ニテ兵勢不振、衆議紛々タル
折柄、總督宮御諭達ノ趣モ在之旨、宮崎支庁詰普浪惟
貞ヨリ承リ、一同帰区帰順可致儀ニ相決シ、同所ニテ解
隊各道ヲ異ニシテ五月上旬帰区セリ、然ルニ此件高鍋在
陣坂田諸潔其外味方ノ各部將へ洩聞シ、再発ノ儀再三促
スト雖決て不応、終ニ味方ノ参軍鮫島元、軼肥士族伊東

朽索其他兵士四五名ヲ引率シ來リ頻ニ脅迫ス、依て勢不
得止五月下旬猶又再発シ、高鍋ニ到リ坂田宿陣ニ着セシ
ニ、全所大坂屋ヲ本営トシ、吾隊着スルヤ否給養方吉松卓
藏ヲ縛セリ是ハ再発ヲ避ヘタルトノ鑿據ナリ、吾隊ハ美々津へ差向候様トノ事
ニ付、翌朝出發美々津ニ到ルニ淺間艦來港シ発砲シテ一
二ノ民屋ヲ壞リタリ、即日全所幸脇へ壘ヲ築キ防守ス、
然ルニ富高(日向市)へ操込ムベキ旨全所本営ヨリ報知ニ付全所へ
転シ、細島ヲ懸ケ守ル、猶又鬼神野・神門ノ様操込ムベ
キトノ事ニ付六月中旬頃ヨリ差越、一隊分割シ上渡川口(南郷村)
及鬼神野口へ壘ヲ築キ防禦ス、然ルニ鎌擡十四番隊及宮
崎隊操込ミ、上渡川口ハ右兩隊へ引渡シ我隊ハ鬼神野口
ニ纏メ、蟠龍一番隊ト共ニ防禦ス、八月七日米良口ノ敵上
渡川へ攻撃シ味方直チニ引揚タルトノ報知アリ、然レハ
鬼神野口ハ敵ノ中央ニナル而已ナラス鑿道ヲ絶タル、ノ
憂モアレハ全所ヲ引揚、(東郷町)坪屋邑(釜柄)釜江峠下人家迄至リ一泊
シ、翌朝出發セントスルトキ敵ノ大軍襲來ルニヨリ、釜
江峠へ引退キ蟠龍隊ト戮力防戦數刻ニ亘リ、漸ク敵ヲ追
返スト雖寡勢殊ニ問道多ク守ルニ利ナク、不得止夜ニ入
リテ山蔭村(東郷町)へ引揚ケタリ、最早敵美々津ニ迫リ日夜攻撃
不止、吾隊ハ蟠龍隊ト山蔭渡シ場ヨリ上河岸菅里余ニ僅

百有余ノ兵ヲ配リ守衛ス、全十一日米良口ノ敵大挙シテ一時ニ攻撃、暫時防戦スルト雖竟ニ敗散、隊長日高義正其外兵士四五名ト共ニ延岡差シテ行キ、全所本營へ着セントセシニ街口ニ番兵アリテ入ヲ不許、故ニ加草(河川町)ニ到ル、敵已ニ門川ニ迫ル、味方手ヲ尽シテ防戦ニ三日ニ及、全十四日終ニ味方敗レ、延岡へ引揚ケントスルニ全所ハ既ニ山手ノ敵ニ取囲マレ、詮方ナク一ツノ山中ニ潜伏シ暮ルヲ待ツテ其所ヲ奔出テ、夜白間道ヲ經テ翌十五日門川ノ川上ナルツ(津々良、門川町)、ラ村エ出テ、全所在陣ノ第三旅団糧食課へ降伏ス、

右之通上申仕候也、

鹿兒島県第百三大区一小区

日向国那珂郡西方村(串間市)

四百十七番地居住

当時群馬県徴役人

明治十一年二月

古屋於菟七

二 米良一穂外二名連署上申書

(朱)第二号
去ル明治十年二月鹿兒島県士中原尚雄等、陸軍大将西

郷隆盛ヲ暗殺ノ隠謀発覚シ、西郷ヲ始メ桐野利秋・篠原國幹等政府へ尋問トシテ上京、就テハ旧兵隊途中護衛ノ為メ隨行致シ候段鹿兒島県庁ヨリ布達有之候ニ付、全県下日向国鉄肥ノ士五百余名ヲ募リ、三小隊ニ編制シ、川崎新五郎・伊東直記ナル者ヲ総軍ノ長トシ、一穂儀ハ三番隊ノ小隊長ニ依頼ヲ受、昌儀ハ同隊ノ給養方、田爪鴻三押伍ト成リ、二月十七日鉄肥出発、延岡ノ高千穂口ヨリ肥後国保多窪ニ二月廿五日着陣ス、翌廿六日熊本ニ出テ薩ノ本營へ鉄肥ヨリ三小隊凡五百余名本日參着致セシ旨申出タル処、合符指揮旗等相渡シ、即日ヨリ三小隊トモ川尻駅并二丁川口村海ヲ守衛スヘシト令セリ、因テ直ニ該地ニ出張、海岸ヲ一小隊ツ、交番シテ守衛ス、外二小隊ハ川尻駅市中ヲ警衛ス、無事ナリ、

一二月廿八日本營ヨリ鉄肥三小隊トモ山鹿駅へ出張致スヘシト令セリ、故ニ三月一日川尻駅ヲ三小隊トモ出発山鹿駅ニ午後五時頃到着シ、早速出張本營へ其旨申出タル処、三小隊トモ即刻ヨリ吉田村(山鹿市)へ出張番兵スヘシト桐野利秋ヨリ令セリ、夜ニ入り該地ニ至リ一夜守衛ス、無事ナリ、

一三月一日曉天飢肥隊改正、三小隊ヲ分チ四小隊トス、我隊ハ三番小隊ナリ、一・四ノ二小隊ハ今午前七時ヨリ南ノ關進撃トシテ出發ス、途中岩村ニテ官軍ニ出逢

(三加和町)

互ニ開戦ス、味方利アラス其夜山鹿へ引退ク、死傷五名ナリ、二・三番小隊ハ山鹿出張本管ノ護衛タリ、

一三月三日午前四時比官軍近傍へ襲来ノ模様ナリト俄然ト報知ス、因テ我隊ト二番小隊ハ払曉ヨリ山鹿駅出口ノ田畝へ兵ヲ繰出シ配兵シテ守衛ス、然ルニ味方薩ノ各隊ヨリ早多数繰出シテ、襲来セシ官軍ヲ追散ラセシト見ヘテ遙向ノ村里ニ火ノ手上リテ火焰ヲ燎ス、我隊守ル所ハ無事、薩軍追々兵ヲ纏メテ山鹿ヲサシ引取リケル、同日午前十字比本管ヨリ令シテ、我カ隊ト二番隊ハ鍋田村^{山鹿ヨリ}凡十五^{山鹿ヨリ}本道要地ニ守ルヘシト、因テ直ニ該地ニ出張シテ薩ノ各隊ト共ニ本道或ハ左右ノ要所へ壘ヲ築キ溝ヲ深クシ守リヲ付ク、

一三月四日午前八字比岩村へ官軍斥候兵数十名来テ発砲ス、我隊ヨリモ応砲シ凡二字間余ニシテ官軍引取ル、味方死傷ナシ、

一三月六日払曉ヨリ官軍襲来大小砲車坂ノ上ヨリ打掛進ミ来リ戦撃ス、味方モ油断セス応戦シ互ニ勝敗ヲ分タ

ズ、薄暮ニ及テ官軍兵ヲ纏メテ引上ル、此日モ我隊死傷無シ、

一三月十二日払曉ニ官軍岩村台ヨリ合図ノ一砲響スヤ否ヤ、左右ノ小高キ所ヨリ大小砲烈敷發砲ス、味方モ応砲シ互ニ爰ヲ^先専途ト数十字間劇戦ス、我カ隊左翼守壁間近ク官軍進入シ味方防戦殆ント危キ処、我半隊左翼ノ壘ヨリ十四五名抜刀シテ切入、敵五六名瞬ク間ニ討取テ頻ニ味方ヲ励シケレハ、此ニ氣ヲ得テ味方ノ各隊皆抜刀シ唸ト叫テ数百名駈入りケレハ、官軍叶ハス銃器ヲ捨テ敗走ス、黄昏ニ及ヒ不殘岩村台ヲサシ引退ク、此戦ニ我半隊長郡司稔手負外ニ六名死傷アリ、半隊長負傷ニ付給養方谷口元ヲ半隊長トス、

一三月十五日未明ニ官軍岩村台ヨリ大砲一発ヲ合図ニテ襲撃シ、各方面へモ多数ノ官軍大小砲ヲ打テ次第ニ進入ス、味方ノ各隊モ術ヲ尽シテ応戦シ、数字間互ニ奮戦ス、然ルニ敵モ亦是非衝破ラント追々間近ク進ムヤ否ヤ、味方各隊ヨリ皆抜刀シテ壘ヲ飛越切込ミ、敵ヲ数十名切倒ス、故ニ官軍叶ハスシテ敗走シ午后三字比不殘引退ク、此日我カ隊ニ元込銃廿二挺其他彈藥・銃器等多数分捕ス、我カ隊ノ死傷数名アリ、

一三月十七日払睨ニ官軍大砲一声合図ヲ響カシ左右ノ高キ丘ヨリ大小砲ヲ頻ニ打掛ケ進ミ寄ル、此方ニ各隊ヨリモ敵シク応砲シ互ニ憤戦數刻ニ及ヘリ、午后四字比迄双方勝負ヲ分タス、日モ黄昏ニ及ヒシカバ互ニ兵ヲ纏メテ休戦ス、此日我隊死傷數名アリ、

一三月廿二日未明ヨリ又々大砲一発ヲ合図ニテ左右ヨリ襲来シ頻ニ砲撃ス、味方各隊モ激シク戦ヒ居タル処、正午ノ比山鹿出張本営ヨリ使来リ、(植木町) (全七)木留・田原口ノ味方難戦シテ終ニ相敗レ植木ノ方ヘ引取リタル報知有ル故ニ爰ヲ此儘ニ守リ居テハ自然後日味方ノ難渋ト成ルヘシ、敵ニ此氣ヲ悟ラレサル様ニ各隊ノ壘ヨリ二三名或ハ四五名ツ、次第二山鹿ヘ引取ルヘシト令アリ、因テ壘ヲ打捨退クハ甚タ遺憾ニハ候ヘトモ、我カ壘ノ數ヶ所ヘ斯クト告テ五六名ツ、引取リ山鹿ヘ参集ス、幸ナル哉官軍ハ烈敷逐討セス遠隔ノ場所ヨリ大小砲ヲ発シ、鍋田村迄静ニ進入ノミナリ、我カ隊此日負傷者一名ナリ、無程山鹿駅ニハ各隊不残引纏メ、午后二字比ヨリ総軍該地ヲ引払(西合志町)鳥ノ栖サシテ引退ク、我カ隊ト二番小隊其他高岡隊ハ石川村ヘ直ニ出勢致シ守リヲ付クヘシト本営ヨリ令アルユヘ、其夜直ニ石川村ヘ到着ス、

翌朝要所ニ壘ヲ築キ防禦ノ守備ヲナス、薩ノ各隊モ来着ス、二三日変事ナシ、

一三月三十一日比日ハ確ト植木口守兵ノ薩隊第五ノ二番小队ト交代シ相守ルヘキ旨本営ヨリ令アリ、夜ニ入該隊ノ守壘ヘ交代ス、敵味方ノ距離凡二三丁ヲ隔テ、三十一日ヨリ四月十九日比迄昼夜連戦ス、我隊負傷二名アル、

一四月十四日比日ハ確ト夜中鹿ノ子木出張本営ヨリ、大至急示談ノ儀有之ニ付各隊ヨリ隊長一名ツ、出營スヘキ旨回達アル、因テ一穂モ出頭ス、本営ニハ貴島清始各隊之中隊長數名出頭ス、貴島云、今宵各位ヲ参集セシ故ハ本日熊本方面ノ本営ヨリ急報アル、其事タルヤ川尻ヘ官軍劇敷襲来味方利アラス悉ク敗走セリ、熊本城攻ノ各隊モ亦敗ラル、故ニ敗兵木山方面ヘ引退キタルノ報知アルニヨリ、当方面モ総軍引払ヒ、總テ彼ノ地ヘ一ト先集合セヨトノ事ユヘ、遺憾ナカラ直ニ各隊混乱セサル様順序ヲ立テ、成ルヘク敵ニ悟ラレサルヨウ静ニ引上クヘシト達セラレ、各隊長承諾シテ我カ守壘ニ帰り用意ヲナシ、各隊順ヲ立テ、植木口ノ守壘ヲ打捨テ都合好ク引払ヒ、鹿ノ子木ニ総軍ヲ纏メ木山ヲサシ

テ退軍ス、夜十二時比ニ木山ノ駅ニ着陣ス、我カ隊ハ
兩三日間当所本營ノ護衛ナリ、無事、

一 四月十七日比飯田山(益城町)へ官軍籠居ノ模様アルニ付、同所

進撃スヘキト本營ヨリ令セリ、薩ノ各隊ト共ニ我隊モ

其日午前七時比ヨリ飯田山へ進撃ス、然ルニ官軍ハ早

前日当地引払ヒ、熊本城へ引取タル由土民ノ告ニヨリ、

各隊直ニ下山シ麓ノ土山村(益城町)へ各隊屯集シ事矣木山本營

へ報ス、各隊長協議シテ我隊ト四番小隊ハ戸川村并ニ

小池(益城町)・飯田山ノ三ヶ所へ配兵守ルヘキニ一決セリ、故

ニ我カ一小隊ヲ二ツニ分チ、右翼半隊ハ土山・小池ノ

二ヶ所ヲ守リ、左翼ノ半隊ハ戸川村ヲ守リ、四番小隊

ハ飯田山ヲ守レリ、

一 四月廿日午前七時比小池へ官軍凡二小隊余襲來撃進ス、

味方モ応戦シ進モ衆寡敵シ難キユヘ、戸川ヲ守ルノ半

隊へ其地無事ナレハ至急応援スヘキ旨達シケルニ、彼

ノ半隊直ニ兵ヲ飯田山ノ閑道(岡)ヲ廻シ応援ス、凡一時間

余互ニ劇戦最中飯田山ヨリ使ヲ飛シテ報スルニ、御船

方出張ノ味方総敗レニ及ヒ、矢部サシテ散々ニ引退キ

タルト、故ニ議スルニ当方面偵戦固守シテ益ナシ、若

シ御船ノ官軍勝ニ乗テ総軍此所ニ押寄せナハ、味方殆

ント難儀ナラン、故ニ我カ一小隊ハ繰引ニシテ兵ヲ飯

田山へ引上ケ、ル、尤敵ハ勝ニ乗シテ追打チケル故味

方大ニ難儀ト成リ、押伍兵士負傷三名アル、漸ク飯田

山へ引取りタリ、然ルニ当山ニハ肥後隊モ二小隊余引

揚居ル、我隊長川崎新五郎共ニ熊本隊長ト協議シテ、

御船方面ノ味方総敗ニ及ヒシ由我カ隊ハ共ニ此地ヲ固

守シ本營ノ令アル迄ハ互ニ憤戦シ、若叶ハサル時ハ爰

ヲ墳墓ノ地トナサン、用意スヘシト議スル内、矢部方

面ノ本營ヨリ報有テ、該地ニ総軍ヲ纏メ軍議ニ及フヘ

シ、迅速引払ヒ參集スヘシト、此令アル上ハ当地ヲ固

守シテ何ノ益アラン、早々引退クヘシトテ不殘矢部ヲ

サシテ引揚タリ、途中飢肥ヨリ小倉處平ナル者二小隊

ヲ凡二百募リテ応援トシテ參着セリ、是モ詮方ナク共ニ

矢部へ夜白兼行シテ午前二時比着セリ、

一 四月廿二日矢部ニテ我カ隊中隊ニ編制ス、因テ一穂中

隊長ト成リ、谷口元・伊東祐啓左右小隊長トシ、青山嶺・

高山眞平半隊長ト成セリ、米良雲暉・柳田重周ヲ分隊

長トシ、隊伍全ク調ヒ即日ヨリ飢肥ノ三中隊ニテ(龍峰、矢部

へ凡一里守ルヘキト本營ヨリ令セリ、因テ直ニ該地ニ

繰出シ要所ニ塁ヲ築キ守ル、無事ナリ、二三日ヲ過ル

内本営ヨリ指令アリテ日向地へ纏シ事ヲ謀ルユヘ矢部
へ引上ヘキノ報知アルニヨリ、我隊モ引払出発ス、

一 四月廿五日矢部ニテ各大隊ヲ改制シテ、振武・奇兵・

正義・干城・行進隊也、我隊ハ奇兵十九番隊也、然ル

トキニ飢肥三中队共(雑栗村)須越ノ嶮ヲ經テ肥後人吉ノ内湯(湯前町)

ノ前村ニ着陣ス、依テ此旨本営へ届出タル処、軍議一

決迄当地へ滞陣スヘシト令セリ、日数十余日ヲ過キ奇

兵ノ各隊ハ豊後地へ進撃ニ決定ス、我中队ハ日向地へ

出テ海岸ヲ守ルヘキ指令アル、

一 五月十一日比日ハ籠ト 覚ヘス湯ノ前ヲ飢肥三中队共出発ス、椎

葉米良山ヲ經テ五月十五日比日向国美々津ニ着陣ス、

十八番中队ハ直ニ宮崎本営ノ護兵ヲ令セラレテ出発ス、

我中队ト廿番中队ハ当地ノ海岸要地ニ壘ヲ築キ守備セ

リ、交事ナシ、二三日ヲ過テ我カ十九番中队ハ(日向市)細島并

富高(日向市)新町ニケ所ヲ守ルヘシト本営ヨリ達セリ、故ニ五

月十八日比美々津駅ヲ出発シ新町へ転陣ス、然ル処奇

兵七番中队・同十七番中队ハ前日ヨリ此地ヲ守レリ、三

中队協議ノ上交番ニテ細島港ヲ二中队ニテ守リ新町ヲ

一中隊ニ守ルヘキニ一決セリ、我十九番隊ハ直ニ細島

港へ行守リヲ付、以後交番ニテ両所ヲ守ル事日数凡五

六日、其内廿番中队美々津海岸ノ守リヲ高鍋ノ隊ニ交
代シ新町へ着ス、因テ我中队ハ延岡へ転陣スベキニ決
議セリ、

一 五月ハ廿三日比日ハ籠ト 覚ヘス我中队ハ新町駅ヲ出発シ延岡へ

着ス、此地ニ奇兵本営ヲ据ヘタリ、野村忍介ナル者奇兵

ノ大隊長ニテ総軍ヲ指揮ス、本人ヨリ令シテ我カ中队

ハ明廿四日ヨリ一小隊ツ、交番ニテ本営ノ護兵トシ、

一小隊ハ寶財(方財、延岡町 凡一里)ノ海岸ヲ守ルベシトノ事故直ニ

配兵、日数廿二日余両所ヲ一中隊ニテ交番守衛ス、無事

ナリ、豊後方面へ出軍シタル奇兵各隊ハ臼杵或ハ竹田

迄モ衝出シカ、尤臼杵ニテハ大勝利ヲ得雷管五十万発

余・小銃数百挺・大砲二門其他雜品多数分捕リ有テ、

始ハ十分ノ勝利有ルト雖モ、追々敗ヲ取テ次第ニ引退

キ、六月十七日比日ハ籠ト 覚ヘス味方利アラスシテ豊後重岡(宇日町)迄

引退キ、同所へ守リヲ付ケタルノ確報アル、故ニ我カ

一中隊モ応援トシテ彼ノ地へ出張スベキヲ本営ヨリ令

セリ、我カ右翼小队ノ分隊長柳田重周ナル者奇兵十八

番ノ半隊長負傷ニ付彼ノ隊へ転シ半隊長トナル、故ニ

日高昌ヲ我カ右小队ノ分隊長トナス、

一 六月十八日比日ハ籠ト 覚ヘス响午ヨリ我カ一中隊ハ延岡ヲ出発

シテ熊田(北川町)ニ一泊シ、翌十九日重岡へ着陣ス、同所ニ奇兵各隊ト共ニ築壘シテ固守ス、

一六月廿日比日ハ籠ト、弘暎ヨリ官軍大小砲打掛ケ襲来セリ、味方モ砲防戦ス、尤官軍敢テ急撃セス遠隔ノ場所ヨリ唯砲戦ノミニテ、午後三字比勝敗ナク休戦ス、我隊死傷無シ、午后五字比急報アリテ佐伯口出張ノ味方利アラス引退キ、日豊ノ境ナル陸地カチ越ノ嶮ニ守リヨ付ルトノ報知故ニ各隊長協議シテ云ク、佐伯ノ閑道敗レナバ敵勝ニ乗テ急ニ押寄せ、当地ト延岡ノ中腹ニ衝出テハ味方ノ通路ヲ断レテ大患ナラン、遺憾ナガラ敵ノ悟ラス内迅速此地ヲ引払テ、一ト先延岡地方ヘ勢ヲ纏メ野村ニ談シテ熊田ヲ根拠トシ、(北川町)同上嶮ヲ守ルベシト一決シテ、各隊ヘ令シテ今夜中混乱セサル様物静ニ当地ヲ各隊引払熊田ヘ総軍ヲ纏メン事ヲ達セリ、因テ重岡ヲ捨テ午后八字比不残出発、通宵熊田ヲサシテ(宇目町)引退ク、同廿二日午前七字比熊田村ニ総軍ヲ纏ム、此地ニ奇兵本営ヲ据ヘ野村忍介出張シテ指揮ヲナシ、奇兵各隊ヲ分配シ葛葉并矢カ内(北川町)ヘ迅速築壘シテ固守スヘシト各隊夫々令ヲ受テ各方面ヘ出発セリ、十八番ト我カ十九番中隊ハ熊田ヨリ凡一里計リノ村村名ヲ失ス川向ニテ、

佐伯ヨリ海辺統キノ閑道有頗ル大事ノ要所ユヘ、此地へ出張シテ守ルヘシトノ事故ニ即日出発、彼ノ村左右ノ要害ヲ見タテ守ヲ付ケ、十八番中隊ト交番シテ相守ル、

一六月廿四日比日ハ籠ト、各隊長ヲ本営ニ参集セシメ、野村ヨリ令シテ、明廿五日ハ未明ヨリ豊後路惣進撃セン事ヲ謀ル、奇兵ノ総軍ヲ五ツニ分チ、一手ハ切込谷ヨリ、(宇目町)一手ハ水ヶ谷ヨリ道ナキ嶮山ヲ経テ重岡へ突出スベシ、一手ハ名ヲ經テ本道ヨリ重岡へ進入スベシ、又一手ハ宗太郎(宇目町)越テ山野尾統キニ道ヲ開キ陸地越ノ敵ヲ衝ベシ、一手ハ陸地ノ本道ヨリ進ムベシ、何レモ今夜十二字ヨリ総軍進発スヘシト令ス、各隊長承諾シテ夫々持場ニ帰ル、我カ隊ト十八番中隊ハ守壘ヲ午后五字過ニ出発湯ヶ内(矢カ内カ)ニ午後七字ニ着ス、此地ニテ陸地進撃ノ各隊ハ兵ヲ揃ヘ兵糧・彈藥等用意ス、奇兵三番中隊・十八番中隊・我カ十九番中隊ハ陸地越ノ敵壘ノ横ヲ衝カントテ、案内者ヲ列テ出発シ後ノ山絶頂ヨリ尾統キ山野道ヲ開キ方角ヲ求メテ通宵行進ス、其夜霧深クシテ案内ノ者方角ヲ失シテ曉天近クナルト雖モ陸地越ノ近傍ニ出ルヲ得ス、漸ク宗太郎越ニ出ルヲ得タリ、案

内者当惑ノ体也、然ト雖モ今更最早如何トモ詮方ナク、
 彼是ト協議シテ遙カ山下ニ二三軒ノ人家有リ、彼所ニ
 人ヲ遣シ別ニ一人案内者ヲ雇テ吉次越ニ出ル、此地ハ
 眼下ニ陸地越ヲ見ル間近クナレトモ、既ニ翌朝廿五日
 午前八字比ニ及フ、敵モ堅塁固守シテ、本道正面ヨリ
 衝ク、味方モ矢カ内ヘ兵ヲ控ヘタリト見ユ、因テ進撃ヲ
 止メ空シク下山シ矢カ内ニ至リケレハ、味方問テ云ク、
 何等ノ訳ニテ斯ハ遅延シタルヤ合点行カズト、答テ曰、
 尤ノ難問也、案内者途中ニテ方角ヲ失シ斯々ノ訳ニテ
 大ニ時限ヲ過リ実ニ申分ナク残念至極也、此代リ明日
 ハ払暁ヨリ進撃シ死力ヲ尽シテ敵ヲ衝ヘシト約シ其日
 ハ止ミス、

一六月廿六日未明ヨリ約ノ如ク昨日ノ恥ヲス、カント、
 各隊ト共ニ陸地ノ敵ヲ進撃ス、正面ヨリ烈敷衝入ケレ
 ハ、官軍モ爰ヲ専途ト防戦ス、此時味方一手ノ兵ヲ左
 翼ノ高キ嶺ニ回シ、敵ノ横ヲ衝キケレハ官軍辟易シ終
 ニ壘ヲ捨テ敗走セリ、味方ハ是ヲ追駈々々凡十五六丁
 程モ抜刀ニテ逐討ス、此日大勝利ニテ銃器又ハ彈藥雜
 品等各隊ヘ多数分捕セリ、午后四字比各隊兵ヲ纏メ陸
 地峠并ニ吉次越ニ壘ヲ築キ、左右ノ要地ニ守リヲ付タ

リ、此日味方ノ負傷四五名ナリ、

一七月二日比日ハ薩ト葛葉方面出張ノ守兵手薄ニ付、陸地
 方面各隊ノ内ヨリ繰合セ一中隊彼ノ地ヘ出張スヘシト
 令アリ、依テ我カ一中隊陸地ヲ出発葛葉ヘ着陣シ、同所
 守壘ノ廿番中隊ト交番シテ其壘ヲ守ル事二日、無事也、
 一七月四日比日ハ薩ト明五日又々重岡方面ヘ進撃ノ令アリ

テ、各方面ヨリ三中隊ツ、絞リ隊ニテ進撃スベシト、我
 カ中隊ハ陸地守衛タルベシトノ令アル故、本日晌午比
 ヨリ葛葉出発陸地ヘ趣ントスル途中、湯ケ内ナル觀音
 山頂上ヘ高鍋鎌攘隊ノ守壘ヘ官軍ヨリ未明ニ襲撃ス、
 鎌攘隊守ル能ハス壘ヲ捨テ右往左往ニ敗走スル折節、
 奇兵ノ九番中隊嶺半左衛門ノ隊也通リ掛リ、急ニ配兵シテ応援シ
 官軍ヲ追ヒ払ヒ鎌攘隊ノ守壘ヲ取戻シタル景況ニテ、
 懸念ハナケレトモ尚我カ隊モ幸ヒ応セントテ、兵ヲ二
 手ニ分チ觀音山ヘ駈上リ見ルニ、九番中隊ヨリ早追ヒ
 退ケテ敵ハ遙ノ向ナル宗太郎越ノ山上ヨリ敗兵少シ残
 リ居テ稀ニ発砲スルノミ也、九番中隊ハ本日計ラサル
 戦争ニテ敵数名ヲ討取其上ヘ元込銃并彈藥其他雜品等
 多数分捕タリ、此隊ハ明日ノ進撃隊ニ付直ニ兵ヲ纏メ
 テ下山シ熊田方面ヘ出発セリ、因テ我カ隊ハ鎌攘隊ニ

代り其塁ヲ守ル、翌日右翼ノ一小隊ハ袖ケ内(北川町)へ引取休兵ス、

一七月十三四日比日ハ確ト陸地越右翼ノ山上ヨリ官軍一中隊此日霧深ク兵ノ多少分ラズ程未明ニ俄然ト襲来シ、給養方宿陣ヲ目当ニシテ頻ニ発砲シ、不意ヲ打レ味方危キ折柄、出張本管ヨリ令アリテ我一小隊ヲ以テ左側嶺上ヨリ横ヲ衝テ此敵ヲ追払フベシトノ事ユヘ、小隊長谷口元ヲ始メ兵士ヲ忽チ用意セシメ、急ケ々々ト下知シケレハ皆我ヲ先ニト勇ミ進ンテ駈出し、敵ノ左側ナル嶺ノ頂上ニ我兵ヲ出シ関ヲ作テ一声ニ発砲ス、敵ハ此勇威ニ辟易シ次第ニ引色見ヘシカハ、味方一同ニ抜刀シ同音ニ吶ト叫テ駈入ケレハ、敵ハ叶ハスシテ敗走ス、味方ハ短兵急ニ追駈々々敵ノ守塁三ヶ所ヲ乗取り、打捨タル土工具并ニ糧食等若十分捕シ、尚進テ敵敷攻撃シ敵五六名討取シカハ、全軍散々ニ逃走シケレハ要所ノ數塁ヲ乗取り、日モ黄昏ニ及ハントス、故ニ兵ヲ止メ同所へ築塁シテ固守ス、此戦ニ我カ隊ノ戦死三名、負傷者半隊長青山競外六名ナリ、元込銃五挺・彈藥數箱分捕ス、翌七月十五日奇兵三番中隊へ塁ヲ譲リ交代シ、我カ一小隊ハ袖ケ内へ引取休兵ス、嘯音ノ戦ニ半隊長青山負傷ニ付

分隊長米良雲暉ヲ半隊長トシ、押伍田爪鴻三ヲ分隊長トス、

一七月十八日比日ハ確ト三河内口(三川内、北浦町)へ官軍襲来セシ趣未明ニ袖ケ内出張本管へ急報アリ、此地ハ宮崎ノ和銃隊少々守兵シ実ニ懸念ノ地タル故、我カ一小隊ヲ以テ大斥候トシテ急ニ繰出スベシト令アルニ因リ、左翼ノ小隊長伊東祐啓一小隊ヲ率ヒテ彼ノ地へ進発ス、其夜伊東ハ袖ケ内出張本管へ立戻リ告テ云ク、本日三河内口へ行進ノ途中梅(北浦町)ノ木村ニテ官軍ト出逢、直ニ兵ヲ散開シテ左右ヨリ突出セシカバ、敵モ小勢ト見ヘテ間モナク敗走ス、逃ルヲ逐フ事拾五六丁ニシテ其所ニ仮リニ守ヲ付ケ置キタリ、敵ハ同所ノ味方手薄キヲ知テ再ヒ襲来シ、同所敗レナハ熊田本管ハ勿論延岡ノ根拠モ近クナリ、実ニ味方ノ大患ナラン、速ニ今少シ兵ヲ増シ玉ヘト云、故ニ指揮シテ又我カ右小隊ノ半隊ヲ出シ、外ニ二中隊余繰出スベシト約ス、伊東ハ其夜又我隊ニ帰ル、一七月十九日比日ハ確ト我カ十九番ノ右一小隊ハ未明ニ陸地ノ守塁ヲ三番中隊ノ一小隊へ譲リテ、袖ケ内ニ引取り糧食・彈藥等乏シカラサル様總テ用意シ、直ニ三河口へ援兵トシテ進発ス、然ルニ三河内方面ハ又此日モ

午前八字比ヨリ官軍凡二中隊余ヲ三手ニ分チ、左右ノ
 山手并ニ本道正面ヨリ襲来シ、鉛丸雨ノ如ク飛シテ頻
 ニ進入ス、味方ハ僅ニ一小隊ノミ外ニ救フ兵モ未タ来
 着セス、小勢ナレトモ爰ヲ敗ラレテハ昨日ノ困苦水ノ
 泡ト成ルノミナラス熊田本営モ危カラン、大事ノ場所
 ナリ皆死ヲ決シテ防クベシト、分隊長日高昌ハ駈回り
 テ隊ヲ励マシ、爰ヲ一寸モ引スシテ墳墓ノ地ト定メヨ、
 引クナ進メタタト下知ヲナシ応戦スレトモ彈藥ハ次第
 ニ乏シク成リ、其上援隊モ未タ来ラス衆寡敵シ難ク、味
 方一人引ケハ又二人退キ終ニ繰引ニシテ引取ル途中、
 午前十字比漸ク我カ右翼ノ一小隊ハ応援トシテ来着致
 シ、味方ヲ救フテ暫時防戦スト雖モ官兵ハ勝ニ乗テ敵
 シク追打ケルユヘ又堪ヘス、吐ノ水流迄引退キシニ、
 漸ク此地ニテ追々ノ応援隊来着セシカハ、敗兵ヲ纏メ
 吐ノ水流・本道兩翼ノ山手へ兵ヲ分配シ待ト雖モ、敵
 ハ永追セス引取リタル故幸ニ防禦ノ用意調ヒケル、此
 戦ニ我隊死傷四名也、

一七月廿一日比日ハ籠ト (大分県浦江町) 對馬方頭へ進撃セン事ヲ約シ、味

方四中隊ヲ前後二手ニ分チ、午前第三字ヨリ吐ノ水流
 ヲ出発ス、我中隊ハ後軍トナリ、払曉ニ前軍ハ敵壘ヲ不

意ニ襲撃セシカバ、官兵ハ大ニ周章シ支ル事能ハズ銃
 器ヲ投シテ逃ケ走ル、味方ハ此レニ氣ヲ得テ皆同音ニ
 鯨波ヲ作テ我ヲ先ニト急撃セシカハ、瞬ク隙ニ數壘ヲ
 乘取り敵兵廿二名ヲ討取ル、一ツノ壘ニ敵七八名ツ、
 枕ヲ並ヘテ倒レタリ、内ニ士官体モ斃レケル、敵ノ殘
 兵ハ皆右往左往ニ散乱シテ敗走セリ、此日霧深クシテ
 左右ノ地形少モ見分ケ難キユヘ永追セズ兵ヲ纏メテ歌
 糸村へ引取リケル、此戦ニ味方ノ中隊長竹添節・守永
 守ヲ始メ兵士數十名手負ス、戦死モ十余名アリ、敵ノ
 捨タル元込銃廿七八挺・刀一本・彈藥七箱・雜品多數
 分捕ス、我カ隊ハ直ニ兵ヲ烏帽子ガ頭ツクへ殘シテ十八番
 中隊ト共ニ此地ニ築壘シテ相守ル、此日ハ大勝利ノ快
 戦ナリ、此地ヲ守ル事八月二日迄日數凡十二日余也、

一七月卅日比日ハ籠ト (北浦町) 官軍ヨリ我カ守壘ナル烏帽子ケ頭へ
 山ノ神ノ兩翼ヨリ明日ハ敵進撃スルノ探偵ヲ得タル由
 ニテ、出張ノ奇兵本営ヨリ令シテ、味方ノ各壘油断ス
 ベカラズトノ達シアルユヘ、彈藥等ヲ多數用意シ壘々
 ヲ堅クシテ待ト雖モ、翌日ハ變ル事ナシ、

一八月二日比日ハ籠ト (野々水流) 未明ニ對馬方頭ヨリ敵大砲ヲ一発、
 本道ノ方ニテ又一発合図ヲ響スヤ否ヤ、烏帽子ケ頭一

手ノ敵兵凡二中隊余、山ノ神井ニ本道へ一手ノ兵、陣(豊日)ヶ嶺へモ又一手、何レモ多数ノ官軍一同ニ襲来シ激シク發砲ス、鉛丸雨ノ如ク飛ンテ各方面共味方ハ大ニ困苦ス、早ヤ陣ヶ嶺ノ味方ハ打敗ラレ熊ノ江ヲサシテ散乱セシ模様ナリ、我守壘ノ烏帽子(北浦町)ガ頭ハ未明ヨリ午后四字比迄官軍寄セ来リ、新手ヲ入レ代へく手強ク攻撃スト雖モ、兼テ彈藥・糧食等用意ヲナシ相持チシユへ少シモ屈スル事ナク、半隊長米良雲暉・高山眞平、分隊長日高昌等各壘ヲ駈回リテ、左右へ兵ヲ配リ防戦術ヲ尽シ烈シク応戦セシカハ、目ニ余ル大軍ト雖モ我カ壘ハ抜ク事能ハス、午后四字比兵ヲ纏メテ對馬ヶ頭(津島、蒲江町)へ引取リタリ、此日本道ヲ守ル味方ノ各壘へモ官軍押寄せ大小砲ヲ以テ急撃シ、宮崎和銃隊ノ持場(本道ノ左リ山手ノ壘也)敗シカハ応援兵モ差出スト雖モ止ル事能ハス敗走ス、故ニ本道モ危ク成リ出張本営小荷駄方宿陣(野々水、北浦町)ノ吐ノ水流へ砲彈ヲ打込破裂スル事数発ナリ、其上一手敗レ敵兵間近ニ襲来セシカハ、本営モ止ヲ得ス引上ケテ午后五字比熊ノ江ヲサシテ退キ軋營ス、尤前件ノ始末ヲ各方面ノ守壘へモ告ケ知ラセ、各隊モ兵ヲ揃へテ飛ヶ頭へ引上ケ守ルベシト令アル故、我隊モ彼ノ嶺上へ引取テ

各隊ト共ニ壘ヲ築キ柵ヲ結ヒ守兵ス、此日我カ隊ノ戦死二名・負傷四名ナリ、敵ノ死傷数十名アル、飛ヶ頭ヲ守ル事ハ八月二日ヨリ同十三四日比迄凡日數十余日、官軍ヨリモ其後ハ敢テ急撃モセズシテ、(北浦町)歌糸山上・陣ヶ嶺・烏帽子ヶ頭・吐ノ水流ヨリ東南ノ海岸マテ連絡シテ、守備嚴重ニ築壘シ柵ヲ設ケテ遠隔ヨリ唯軍威ヲ示スノミニテ更ニ動カス、(北浦町)古江ノ海湾ニハ軍艦一二艘ツ、浮ヘテ味方ノ景況ヲ窺ヒ、又或時ハ折々拔鎗シテ大砲ノ破裂彈ヲ味方ノ壘へ飛シテ軍威ヲ示ス、一八月十四日比(日ハ籠ト覚ヘス)熊田在陣奇兵本営ヨリ報アリテ、延岡方面味方利ナク熊田へ総軍ヲ纏メ、各將校協議ノ上再ヒ延岡ノ敵ヲ衝カント軍議一決セシユへ、大至急熊ノ江方面ノ各隊ヲモ夜中引上ケ參集スヘシトノ報アリ、因テ我壘ヲ守ル兵隊へモ斯ト知ラセテ速ニ用意セシメ、午后八字比ニ熊ノ江及ヒ飛ヶ頭ノ守壘ヲ引払テ、暗夜ニ各隊道ヲ求メテ引退キ、(北浦町)市棚ニ出タルハ早曉ニ及ヒヌ、兵ヲ爰ニ暫時休足セシメ熊田へ着陣セリ、此地ニ將校一兩名アリテ何故遅延セシヤ、報知ノ誤聞カ合点ユカズト問フ、答テ、深山ニ燈火ナク案内ノ者途ニ迷ヒ方角ヲ失シ險ヲ經テ大ニ混乱シ、漸ク兵ヲ纏メテ即

刻着スルヲ得タリ、実ニ不調法ノ次第ト謝ス、将校又云、本日ハ未明ヨリ延岡ヲ総軍ニテ衝ノ策アリ、昨夕ノ報知ノ誤聞カ御承知ナキカ、延岡方面甚タ懸念ナリ片時モ早く着陣急カレヨト令セリ、因テ我中隊路ヲ早メテ何村迄村名ヲ失ス、延岡ヨリ凡二里繰出シテ承リシニ、残念ナル哉連ナル哉延岡進撃成ラス味方利ナク総軍敗シテ引退キタリト聞ク、死傷等モ数十名アル由ナリ、程ナク本營ニ着シテ夜前途ニ案内ノ者方角ヲ失シ深山ニ踏ミ入斯ク遅參セシ罪ヲ謝ス、本營ニハ西郷ヲ始メ桐野・村田・貴島等アリテ、桐野ヨリ令シテ云ク、前夜ノ過ハ今更詮方無シ、君ノ隊ハ此向ノ山上要地ニ築壘シテ守ラルベシ、若シ變事アラハ速ニ報知スベシ、協議ノ筋一決セハ追々指揮スヘシ、片時モ早く嶺上へ兵ヲ引上玉ヘト申ケルユヘ、我一承諾シテ直ニ隊ヲ引率シテ彼ノ要地へ登リ、地形ヲ見分シ壘ヲ築キ甘番中隊ト共ニ守衛ス、同十五日ヨリ十六日迄變ナシ、官軍ニハ最早四方ノ山峯へ追々大軍ヲ分配シ、大砲數門ヲ備へ四方ヨリ頻ニ破裂彈ヲ飛シ軍威ヲ張り、又山上ハ大軍連々トシテ兵アラサルハナク、堅壘ヲ數ヶ所ニ築キ、夜ハ篝火焚列ネ寸ノ透間モナク、十重廿重ニ取囲ム、我カ隊ノ

抑伍兵士等モ是ヲ見テ勇氣モ大ニ屈シ勢ヒ弱リテ、爰ニ三人彼所ニ五六人寄集リテハ何ヤラン私語合テ、更ニ防戦スル体ハ無ク成リヌ、因テ甘番中隊長・三官・我カ隊ノ士官ヲ集会シ協議シテ、斯ノ如ク四方ヲ取囲マレシ上ハ逃ル、二道ナク戦ニ術無シ、其上兵隊ノ人氣屈シ勢ヒ衰微シタル上ハ所詮最早戦テ利ナク論テ益ナシ、是迄官軍ニ抵抗シタル罪ハ我々各自首シテ嚴科ヲ受ケ、衆ニ代リテ數多ノ命ヲ救フニ如スト、協議決心シテ隊中へモ斯ト談シテ、其夜私ニ兵ヲ引テ下山シ、翌十七日曉天ニ十九番・甘番ノ二中隊ハ兵士・給養方・醫師・夫卒迄百余名共、(延岡市彌樂崎)小梓峠ナル官ノ軍門ニ一同兵器ヲ差出シ、先非ヲ悔悟自首シテ帰順ス、右ハ今般太政官第四号ヲ以テ戦地ノ景況見聞ノ次第筆記可差出旨承知仕候ニ付詳細上申可仕筈之処、手薄等遺失仕以後年ヲ經月ヲ亘リ多ク忘失イタシ、唯胸間ニ浮ヒ候而已録上仕格別御採用之廉モ有之間敷、近比恐縮之至ニ候得共此段可然御執達被下度奉願候也、

鹿兒島県下日向国鉄肥居住

當時群馬県懲役人

米良一穗

明治十一年二月

日高 昌

田爪 鴻三

三 榊 六輔上申書

(宋)第三号
今般鹿兒島逆徒御征討始末御編輯ニ付戦地ノ事情見聞且
(宋)二名分
実行詳細可申上旨御達ニ因リ左ニ上申候、

六輔儀

兼て私学校へハ入校不仕候処、明治十年四月二十一日人
吉本宮別府管介ノ令ヲ以テ、区长山元九介ヨリノ達シニ
曰ク、此節国難ニ付テハ、郷内壮士ノ者共狼狽致候儀更
ニ之レナシト出兵ノ旨ヲ以テ招募ニ相成、因テ郷内壮士
七拾式名同廿三日出発、人吉ヲ指シテ栗野迄差越候処、
鹿兒島沖へ軍艦相見得、就テハ敷根郷(國分市)へ引返ス可ク旨、
大小荷駄上原善藏ヨリ承知致シ、五月三日敷根郷へ着シ
本宮伊藤昌吉方へ届出候処、七拾式名ヲシテ切込ミ隊七
番小隊ニ編制、六輔分隊長へ右人員ノ入札ヲ以テ決議イ
タシ、再三辞退スレトモ相叶ハス止ム事ヲ得ス拜命イタ
シ、当所ニ番兵仕居候、然レトモ同九日國分郷小濱村(華人町)へ
出張命セラレ、依之番兵仕居候処、又同六月廿九日福山

郷ニ引揚番兵ス、七月三日末吉郷ニ方村ニ引揚、同廿四
日ニ戦争仕終ニ敗軍ニ付吾カ隊モ散乱シ、其レヨリ帰郷
仕候処、巡查派出ニ相成居候ニ付、先非ヲ悔悟シ直ニ自
首歸順仕候、此段形行申上候、以上、
右之通取寛申候間上申仕候、以上、

鹿兒島県管下

第十七大区小九区

穎娃郡穎娃郷別府村

明治十一年第二月

榊 六輔

四 坂本友藏上申書

今般御達シノ赴キ謹テ左ニ上申ス、

友藏儀

昨拾年五月勇義隊本管中山甚五兵衛郷内へ差入、我カ輩
へ申諭スニ、此節ノ国難ニ当リ尽サ、ルハ人臣ニアラス、
早々出兵可致旨相募リ、六拾余名相成リ、友藏ニハ半隊
長申付ラレ候処、再三辞退ニ及ヒ候得共其儀相済マス達
シニ従ヒ、隊目勇義拾四番小隊ト称シ、止ヲ得ス全廿九
日出立鹿兒島ノ内下伊敷村へ出張、滞陣致シ居候処、病

気相煩ヒ遂ニ歩行相成ラス上伊敷村病院へ入室致シ居候
処、快氣相見得ヘス、本営へ形行申出全六月六日帰宅仕
養生中、官兵御差入相成其際帰順自首仕候、以上、

鹿兒島県薩摩国

日置郡伊集院郷

第廿二大区八小区卅三番地居住

明治拾一年二月

坂本友藏

五 阪梨惟修上申書

(朱)第四号

今般太政官第四号御達之趣奉敬承候、明治十年二月鹿

兒島県人多勢東上ノ挙有之トノ風聞熊本ニ流伝シ、鎮

台ハ市街ヲ一炬シテ城ニ抛テ固守セントシ、県士ハ方

向区々ニシテ群議衆談巷ニ満チ、人心恟々トシ四民業

ニ安ンセス、之レニ依テ惟修儀第一大区区长中路新之

ト議リ、二月十五日権令富岡敬明ノ宿所ニ詣リ、市街焼

失無ラン事ヲ請フ、権令素ヨリ同憂ニテ談話数刻ニ及

ヒ、中原尚雄等西郷隆盛始メ二三ノ私学校ノ巨魁暗殺

一条ハ全ク彈藥掠奪ノ罪名ヲ蔽ハン為ノ詭策ニテ、如

何ニ陸軍大将ナレハ 私ニ兵ヲ弄スルニ於テハ何レノ

処カ名分ヲ問ンヤ、西郷来テハ大義ヲ説キ鹿兒島へ帰
ラシメン、若シ聞カスンハ熊本県士ヲ募ツテ捍クヘシ
ト、惟修等之レヲ聞テ、今権令ハ着県日浅シテ県士ノ
情ヲ得サルカ如シ、抑故安岡県令ノ本県士族ヲ御スル
ヤ始メ寛ニシテ終リ猛ニ大ニ人心ヲ失ヘリ、明治九年
七月区戸長学区取締中小学校教員ニ散髪ヲ令シテ、率
先シテ少年輩ニ及ホサントス、是ニ於テ区戸長学区取
締中小学校教員ノ職ヲ辞スル者半ハニ過ク、如斯压制
セシ故ヲ以竟ニ十月之變ヲモ醸セシ也、今権令其職ヲ
履ミ此不平士族ヲ驅テ難ニ赴カン事惟修等ノ会セサル
所也、因テ故ヲ以テ権令ニ告ケ、先ツ士族郷党ノ名望
アル者ヲ撰ンテ県庁ノ処置ヲ示シ方向ヲ定メン事ヲ請
フ、是ニ於テ権令士族ヲ拔萃シテ姓名ヲ手書ス、此時
十二時辞シテ帰ル、

一二月十八日権令ヨリ、鹿兒島県人多人数通行ニ付テハ
県官差出応接ニ及フ筈ニ付、人民動搖致サ、ル様布達、
又応接ノ都合ニ依リテハ鎮台ノ処置振モ可有之ニ付老
弱男女ハ市外ニ立除候様布達、続テ右立除ニ付テハ忽
チ困窮難渋ニ可立至ニ付戸長手許ニ於テ適宜方法ヲ設
ケ取救置キ、入費ハ追テ精算之上県庁へ可申出ト布達

アリ、之レヨリ先キ県庁ノ命ヲ以テ惟修任区第二大区
出京町ナル二百余戸ニ蓄積スル処ノ有米ヲ調へ、縦令
兵火ニ焼失スル共鎮台県庁ニテ追テ処分可有之ニ付、
少シモ他所へ移ス事無ラン事ヲ談シ、又本妙寺ニ県庁
并ニ裁判所ヲ移サン事ヲ議リ、諸官員以下五百余人ノ
賄焚出ヲ命ス、

一同十九日朝鎮台本城ニ火ヲ発シ、広間・座敷・天守等
(頭目)此時追討被仰出タル電報之趣キ想不ニ糊セシテ貼セントス、県庁ノ
建物大略灰燼ト成ル、其火延ヒテ熊本市街ニ及ヒ数千
難題ヒヤル可シ
戸焼失ス、此時惟修県庁ニ至レハ本妙寺移転ノ議ヲ止
(御船町)
メテ御舟ニ移ル、惟修御舟ハ遠隔往復不便ニ付任区ニ
尽力セン事ヲ演へ県庁ヲ辞シテ帰ル、

一同二十日籠城用ノ塩・贈買入ノ儀ニ付県庁ニ至リ一等
属近藤幸止ニ会テ帰ル、

一同二十一日惟修任区郷備金二千二百円外ニ管内郷備金
九百円ヲ三分シ、筆生中村永保・小今井豊龜ト之レヲ
保護シ各所ニ閉フ、之レハ事務扱所戦地ノ要衝タルヲ
以テ也、而シテ惟修家族ヲ携へテ第三大区一小区砂原
(龜田町)
村ニ難ヲ避ケタリ、昨夜ヨリ熊本兵火今日迄焼クル、
一同二十二日払曉ヨリ鹿児島県人一万四千ヲ分ケ鎮台ノ
周閉ヲ取巻キ攻撃ス、台兵ハ出丸ニ砲臺ヲ設ケテ防戦

ス、扱熊本県下ノ地形タルヤ第一大区ハ市街八小区一
万余戸ニテ、第二大区ハ其西北ニ盤桓シ、第三大区ハ
其東南ニ縈回ス、惟修カ任区ハ第二大区ニテ連山西ニ
繞テ鎮台ヨリ概程一里許リヲ隔テ、又花岡山ハ直經ノ
距離十五丁ニ足ラス、其他金峯山・三ノ嶽・野出嶽等
(河内町)
(同七)
都テ此区内ニテ、木留・田原ハ北ニ隣リ、最モ戦地ノ
(熊本町)
(同七)
要衝而已ニテ、就中春日村・二本樹町等賊ノ本管モ亦
(全上)
此区内ニ在リ、如斯戦地ト成レハ四民ノ困窮実ニ言語
ニ絶ヘタリ、此際ニ当リ悪徒賊ノ威ヲ借り官員村吏ヲ
脅カシ妨害ヲ成ス事屢々ニテ、区戸長モ身ヲ安ンスル
事能ハス、惟修微服潜行シテ区内ヲ巡回スルニ、第一
大区ノ人民難ヲ避ケ区内ニ寄宿スル者一戸ニ四五戸ヲ
合シ、行住坐臥ノ混雜言方ナク、所柄固有ノ穀物ハ
忽チ払底ニ及ヒ、殊ニ急遽之際ニ立除キタル事ナレハ
無資ノ貧人而已ニシテ、食糧頓ニ尽果購求ノ道モ絶ヘ
必至ト困窮ノ形勢ナレハ、同廿四日御舟ノ仮庁ニ至リ
救助ノ法ヲ請ント川尻ニ至リシニ、此所ニテ御舟モ已
ニ立退キ木山又隈府ニ移転アリシトノ事故、其夕下江
(益城町)
(海津市)
(熊本)
津村三泊、尚隈府モ退散之由ヲ知ル、爰ニ至テ仮庁ノ所
在ヲ求ムルニ由ナク救助之術計尽キ殆ント困却セリ、

一同二十五日(くわみず、熊本市)神水村細川興増ノ邸ニ到リ、旧知事ヨリ士

族一般ヘ示ス処ノ直書ヲ見ル、九年ノ暴動ヨリシテ朝廷ニ対シ奉リ恐懼ニ堪ヘス、今般又々大義名分ヲ誤ルニ至テハ只今君臣ノ名ハ無シト雖トモ、実ニ処スルニ道ナシ、夫レ之レヲ了セヨト、懇々ノ書意紙表ニ溢レ感泣シテ去ル、

一同二十六日ノ朝上田休ヲ訪ヒ其見ヲ問ヒシニ、独り川尻ニ赴キ人民ヲ保護セントスト川尻ニハ賊ノ本宮アリ因テ辞シテ寓

ニ歸リテ見レハ、十小区副戸長上村平太カ書ヲ致シテ、賊ノ惟修ヲ求ムル事急也ト、行テ故ヲ問ヘハ、受持処ノ郷備金ノ縁故ヲ問フ、答フルニ区内人民ノ共有物タルヲ以テセシカハ惟修ヲ歸ス、又熊本県士ノ此金ヲ借ラン事ヲ談スル者アリ、是亦縁故ヲ説ヒテ辞ス、而シテ現今ノ形勢ヲ熟考スルニ、熊本県士ノ賊ニ応スル者數百人、尤金穀・兵器乏敷ク一度ヒ官兵ノ鎮台ニ来リ援フニ至ラハ忽チ術計ノ施ス処ナカラン、今若干金ヲ守リ脅迫ニ遇ヒ之レヲ失ハ、職掌ヲ誤ル而已ナラス人民ニ対シ義務立難シト、因テ其金ヲ区内ノ十小区ニ分チ、戸長ニテ保護セン事ヲ計リ、各小区巡回シテ之ヲ配賦シ併セテ救助ノ用ニ充ン事ヲ談シ、三月四日寓

ニ歸レハ旧知事内家ノ家扶ヨリ來書アリテ惟修ニ面セン事ヲ示ス、

(熊本市)

一三月五日砂取ナル旧知事内家ニ致レハ、先キニ第一大区々長中路新之并ニ同四小区戸長大木淑慎ノ懇談ニ依テ、救助ノ為メ金円ヲ差出サン事ヲ計リ置ケリ、右兩人ニ就テ尽力セン事ヲ要スト、是ニ於テ兩人ヲ尋ネ熊本

市街立除キニ付テハ自他所
在ヲ失シ初メテ出會セリ

新之ノ寓ニ到レハ未タ帰ラス、待ツ

事久フシテ淑慎ト共ニ歸レリ、其話スルヲ聞クニ、人民ノ困窮見ルニ忍ヒス種々苦慮スレ共金穀ヲ得ル能ハス、依テ旧知事内家ニ至リ懇談セシニ家扶モ同シク焦心シテ、兼テ民ヲ恤ムハ旧知事ノ本意ナレハ、今金五千円ヲ出シテ救助ニ充ン、然レ共内家ヨリ直ニ分配シテハ私ノ惠ニ当リ、県庁ニ差出サントスレハ所在ヲ知ラス、区戸長ハ其職卑シト雖共、同ク之レ政府一部分ノ末流ナレハ、地方官ニ差出ス処ノ訳柄ヲ以テ区戸長ニ託スヘシト、新之等大ニ歎喜シテ又慮ラク、今此患劇ノ際ニ当リ僅々区戸長輩ヲ以テ數千金ヲ左右セハ、或ハ不虞ノ殃アラン、如何シテ之ヲ保護センヤト百万計画スレトモ妙案ヲ得ス、依テ今県士池邊吉十郎鹿兒島縣人ニ合体シテ衆ヲ集メ鎮台ト戰ヲ交ヘ、本陣ヲ春日村

ニ据ヘタリ、官兵ニ抗スル者ニ依テ事ヲ議ルハ名分ニ於テ不相濟儀ニハアレ共、池邊ニ救助之仔細ヲ告ケ、金穀掠奪等ノ憂ナカラン事ヲ議シ併セテ戦地通行ノ為メ印鑑ヲ乞ント、兩人決議シテ池邊ニ至リ云々セシニ、同人モ此際人民ノ困苦ヲ愁ヘ大ニ救助ノ事ヲ嘉ミシ、印鑑ヲ与ヘ又救助受取方不正ノ儀アラハ嚴科ニ処スヘシ、熊本々陣ト書シタル張紙ヲ渡シタリ、爰ニ於テ兩人ハ救助可相渡場所ヲ定メ、第二大区一小区立田村(熊本市北部)、同十小区二本樹町(熊本市南部)、第三大区九小区國府村ノ三ヶ所ニ取究メ、又護衛ノ為メ池邊ニ議リ、鎮撫建部七八ヲシテ二本樹ニ在ラシメ、又新之(中略)ノ依頼ニ依テ甲斐一衛・山東清武ヲ國府ニ、永野金十郎ヲ立田村ニ在ラシメタリ、此件々確定シテ新之寓ニ歸リ、惟修ニ面会シ詳細ヲ告ク、惟修聞終テ思惟スルニ、我今職ヲ地方ノ一部ニ奉シ官ニ抗スルノ者ニ依テ救助ノ方ヲ尽スハ、実ニ曖昧模糊之処置タルヲ免カレス、不如告ルニ故ヲ以テシ辞シテ歸ランカト、又一辺ヲ回顧スレハ、數万ノ人民餓餓ノ泥中ニ息キスル如キ危急見ルニ忍ヒス、断然賊ニ拒絶スレハ救助行ハレス、賊ニ依レハ名分ヲ如何セント、進退惟谷リシカ、死ヲ致シテ節ヲ守ルハ一身ノ潔

白也、遁逃シテ難ヲ避クルハ志ニ非ラス、今此數万ノ人民ハ朝廷ノ赤子視玉フ無辜ノ人民也、一身ノ輕キヲ捨テ万人ノ重キニ換ヘ寧ロ他日如何ナル嚴譴ヲ蒙ムル共、一身ヲ瀆シテ賊ニ依リ救助ノ道ヲ尽ント、爰ニ至テ始テ志ヲ決シ、新之等ト方法ヲ議シ、二本樹ハ我任区ナレハ此所ニ在テ救助分賦ニ従事シタリ、其他区内人民戦地ニ驅役セラル、事日夜ヲ分タス、家業ヲ棄テ、東西ニ奔走シ、始ノ程ハ賃金ヲモ得タレ共數日ノ後ニ至テハ容易ク得ル事能ハス、海辺漁夫ハ船留ニテ業ヲ止メ漁具ヲ売テ食ニ充テ、或ハ軍艦ノ砲撃ヲ受テ家ヲ燒キ、山中ニ遁テハ夫役ニ使ハレ彈丸雨注ノ中ヲ匍匐シテ食ヲ送ル、中チニ八九ニ中リ非命ノ死ヲ致シ負傷スル者少ナカラス、憫然タル事言語ノ及フ処ニ非ラス、依テ外大区ニ助成ヲ乞ヒ区内人民ノ苦患ヲ救ヒ、又或ハ地租延納ノ金穀賊ノ為メ封印セシヨ池邊ニ依テ取返シ、其外村用掛ヲ熊本隊ヨリ捕縛シタルヲ解キシナト種々尽力セシニ、救助モ已ニ尽シカハ國府村ニ合併シテ弥救助ニ従事シタリ、

一同九日大木淑慎、池邊ニ至リシニ、国体可懼云々ノ書付ヲ所々ニ張出呉候様依頼ヲ受國府ニ歸リ、如此書面

ヲ区内ヘ示スハ不容易事ニテ心痛ノ次第ナレ共、辞スルニ於テハ断然拒絕以往救助保護ノ道モ無覚束、不得止儀ニ付張出スヘクト申談シタリ、其文ノ略ニ、国体懼ルヘク痛歎スヘキモノアリ、今衆庶ヲシテ愁苦セシムル所以ノモノハ、独リ権姦 天皇陛下ノ聡明ヲ雍蔽シ奉リ云々、今我輩義兵ヲ挙ケ姦ヲ除カント欲ス云々ト、此文少シク名分アルニ似タリト雖共所謂非義之義大人ハ不為ト亡父惟貞カ庭訓耳底ニ在リ、乍然君側ノ姦ヲ除クトハ古来反人ノ口実トスル常套ニテ、此文ニ依テ志ヲ動かス者蓋シ幾クカアルト、断乎トシテ決心シ淑慎ト同意シタリ、

一 同十五日五千円ノ金全ク尽キ、累日ノ戦争ニテ窮民弥増加シケレハ、又内家ニ談シテ尚三千円ヲ得、都合八千円ヲ分配シタリ、最早外ニ術計尽キタレハ貢租延納ノ抵当米ヲ収メテ救助ニ充テ、追テ県庁ニ上申セント議シ或ハ豪農商ニ談セン事ヲ議レ共、此際所在モ不詳空シク日ヲ送リケルカ、追々有志輩有テ旧知事一門ヲ始メ金六百円・米二百俵余ニ及ヒケルカ、此分ニテハ迎モ分配成シ難ク詮方無ク又々内家ヘ談セシニ、四月九日米三千五百俵ヲ出シ又外ニ壹万俵ハ区戸長ニ貸シ

与ヘ追テ県庁ヘ上申シテ返入ノ約定ニテ証書差入ル、此米ハ迎町松田甚十郎ノ倉廩ニ在テ賊ノ固メタル要路鎮台接近ノ所柄也、然ルニ過ル八日九品寺村ノ穀物七百俵台兵ヨリ取入レタルニヨリ、此米モ急ニ他所ニ移サ、レハ之レニ火セント屢賊ヨリ迫リケレハ、十日ノ朝ヨリ近傍ノ村落ヘ運輸セシニ、折節風雨烈シク僅々ニシテ止メタリシニ、其夜賊此米七百俵余ヲ彼カ陣所ニ移セリ、

一 同十一日昨夜ノ報アリケレハ新之、淑慎ト共ニ、池邊ニ依リテ右ノ米取戻サン事ヲ議リジニ、賊ハ米ノ縁故ヲ誤聞シテ此挙動ニ及ヒシ由ニテ悉ク返シタリ、依テ今日ヨリ夜白ニ掛ケ右ノ米ヲ運輸シ、十二日ヨリ神水村ニテ救助ヲ施シ、十四日ニ至テ川尻ノ賊敗レ官軍連絡ヲ鎮台ヘ通シ神水村ハ戦地ト成リシカハ八反田村ニ(群馬町)避ケ、十五日ハ同所ニ滞リ、十六日県庁開設ノ由ヲ伝ヘ出頭セント赴ク途中、立田村ヘ県庁ヨリ呼出シノ書状来リ、出頭シテ開戦以後ノ形状ヲ申述シニ、救助所設立ノ命ヲ奉シ所々周旋シ、同十七日尚又出頭セシニ、前件檄文一条ニ付戦争中ノ履歴書ヲ差出候処、長官ノ命ヲ以テ入檻シ、第二大区々長并学区取締兼務免職シ、

熊本并長崎九州臨時裁判所ニ於テ追々御取調之上、賊ノ褒ヲ受クル存意ニモ無之救助ノ一点ヨリ起リタル儀ニハ候ヘ共、右件々之内賊ノ助成ヲ受又彼ノ頼ニ応シタル科ハ全ク遁ルヘカラス、謹テ服罪致スヘクトノ趣、判官ヨリ御申聞ニ付、是迄申立タル情実サヘ御酌上アラハ素ヨリ罪科ハ覚悟ノ前ニ候ト答置拇印致候処、九月十四日於同所熊本県區長在役中池邊吉十郎ノ逆意ニ与シ、其檄文ニ添書シ各小区ヘ回達揭示セシムル科ニ依リ懲役三年被申付筈之処、情状酌量セラレ、除族之上懲役一年之宣告ニ相成、群馬県岩鼻已決檻ニ就役仕候、此段客年熊本戦地之形状記臆仕候次第録上仕候也、

熊本県第二大区十小区

古町村住

明治十一年二月

阪梨惟修

六 長 連四郎上申書

(案)第五号
今般鹿兒島逆徒征討始末御編輯ニ付其事情及戦地ノ形状筆記上申可仕旨御達ノ趣、謹テ奉拝承概知左ニ奉_レ上申候、
明治十年二月中原尚雄外数名帰省中、西郷隆盛ヲ暗殺シ

私学校生徒ヲ解散セントノ謀計發覚シ、政府ヘ尋問ノ為メ陸軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・全少将篠原國幹上京ニ就キ、途中護衛ノ為メ旧兵隊随行致旨區長森岡昌武ヨリ誘ニ応シ、且ツ私学校ノ儀ハ西郷隆盛設立セシモノニシテ、其規則タルハ第一王ヲ尊ビ民ヲ憐レミ、国家ニ危難アル時ハ各自ノ義務ヲ尽ス等ノ大意ニシテ、中原・野村等ノ口供明分判然タル者ト思慮シ、第四番大隊八番小隊ニ編入セラレ、同月十六日鹿兒島ヲ発足兼行シテ、同廿日熊本県下小川駅ニ着セシニ、我隊長峯崎半左衛門ヨリ達シニ云ク、谷少将熊本城中ニ在ツテ此城ト俱ニ斃ル、ノ見込ニテ我行道ヲ遮防セント已ニ防禦ノ用意ナリト、是ニ於テ戦端ヲ開クヤト始テ知レリ、同廿一日同所ヲ発足午後五時頃松橋駅ニ着ス、同所ニ於テ味方ノ目印トシテ白布ヲ左手ニ纏フ、同廿二日未明同所ヲ発足午前七時頃川尻ニ着ス、先鋒ノ我が六番大隊同所ニ着ルヤ鎮石ノ斥候一小隊位ヲ以テ我軍ニ発砲シタリ、我軍之ニ応ス、暫時戦フテ引退キタリト、是ニ於テ我軍憤激シテ大ニ熊本城ニ逼ル、敵城中ニ引キ籠テ大小砲ヲ連発シテ防戦ス、我軍城ノ四方ヲ囲ム、我が八番小隊ハ同地ニ一泊シ同廿三日外隊ト俱ニ山鹿ニ趨カント道ヲイソヒテ赴ク途中、

左側ノ谿間ニ砲声烈ク聞ヘケレバ、之ニ応援セント我が小隊外一小隊ト俱ニ高岳ヲ超ヘ、漸ク午后三時頃木ノ葉(玉東町)ノ山上ニ出ツ、戦地ヲ窺ヒ見レハ戦ヒ酣ナリ、即チ山ヲ下ツテ敵ノ横ヲ撃ツ、敵周章シテ潰ヘ走ル、正面ノ我軍モ進ミ来リ俱ニ追撃シテ伊倉ニ至ル、此時敵ノ銃器式百挺・弾薬若干ヲ捨テ去ル、我軍此夜ハ植木ニ引揚ゲテ休ス、同廿五日同所ヲ発シ山鹿ニ趣ク、全軍ヲ二道ニ分チ一軍ハ本道ヨリ進ミ、一軍ハ新町街道ヲ進ンデ難ナク山鹿ニ達ス、同所ノ人民語テ云、前夜小倉ノ鎮台当駅ヘ三百人位モ候ヤ宿陣セラレシガ、植木ノ戦ヒニ敗軍セシ兵卒四
 五名逃来リ、薩ノ猛兵実ニ肝ヲツブセリ、長官ヲ始メ兵卒残り少ク打死シ漸々落ち来リタリト、是ニ於テ牧宿陣ノ兵隊モ夜中俱々当駅ヲ発足セリト、此夜我が軍即チ各所ニ哨兵ヲ張ル、明ル廿六日未明哨兵ヨリ敵兵襲ヒ来ルト報ス、直チニ各隊ト供ニ操出シテ戦鬪ス、我カ第五ノ七番小隊一分隊ヲ率ヒテ敵ノ後ヲ衝ク、敵潰ヘ乱レテ敗走ス、此戦ヒ敵ノ死傷甚タ多シ、概算セシニ将校三四名・兵卒百余名ト云、味方ノ死傷僅十五六名、此日未明ヨリ午前十一時頃ニ至ツテ止ム、同廿八九日頃桐野利秋此地ニ来リ我小隊外一小隊ヲ率ヒテ諸所ノ地形ヲ巡回ス、鍋山

田原鹿也ニ到レバ守塁ヲ此地ニ移セト令ス、是ニ於テ各隊ノ守塁ヲ定メテ固守ス、同三月上旬敵襲ヒ来ルト雖トモ暫時ニシテ敵敗退ス、同ク中旬敵亦大軍ヲ以テ各塁ニ襲ヒ来ル、我軍塁ニ抛リ固守シテ防戦ス、敵ハ援兵ヲ入替ヘ倍々進ンテ我が塁ニ逼ル、已デニ第四ノ二番小隊ノ守壁防キアタハズ塁ヲ捨テ畑畦ニ伏セ抜刀シテ敵ノ追ヒ来ルヲ待チ受ケ、一声ニ斬テ入ル、敵斃ル、モノ多シ、終ニ敗走ス、各所ノ塁ニ逼ル敵兵モ同ク敗走ス、我軍勝ニ乗ジテ追撃ス、敵弾薬若干ヲ捨テ去ル、其后尚胸壁ヲ固フシテ守ル、実ニ此地タルヤ攻ムルニ利ナクシテ守ルニ利アリ、同廿一日植木ヨリ援兵ヲ乞フニ依リ、吾八番中隊左小隊外拾余小隊ト供ニ彼地ノ援兵ニ赴ク、同所エ到レバ田原ノ我が軍敗シテ同所ノ向坂(植木町)ニテ防キ留メ、已ニ植木ノ市中ハ敵ノ有トナリ我が軍其四方ヲ困ンデ防戦ス、此際ノ向坂ノ戦鬪タルヤ実ニ両軍激戦ト云ツベシ、敵ハ田原ニ勝ヲ取リ此勢ヒニ乗シテ熊本ニ連絡ヲ通セント、我が軍ハ此地ニ防キ留メズンバ艱難一ナラズト僅カ一中隊位ヲ以テ敵ノ大軍ヲ防キ大ヒニ苦戦ノ折柄、熊本ヨリ援兵ノ二小隊ヲ以テ、逼り来ル敵ニ斬込ミ式百八拾余名ヲ斃シ、尚田原ノ敗軍ニ散乱シタル我兵集り来ルニ依リ尾撃シテ

植木ノ四方ヲ漸ク囲ムニ至リタリト、同廿三日吾小隊ハ二本木ノ本営ヨリ此地ヘ可來旨ヲ達セリ、依テ直チニ同所ヲ發足シテ二本木ニ到ル、同廿四日熊本午橋ノ守兵遊撃ニ番小隊ニ代ツテ同地ヲ守レト、直チニ赴キ交代シテ守ル、居ルコト数日四月十四日ニ至リ川尻ノ砲声連リニ烈ク、依テ斥候ニ赴キ呉レト隊長伊勢次左衛門ヨリ達シニヨリ、即チ川尻ニ向ツテ發行ス、途中川尻ヨリ來ル者告テ云、彼地既ニ味方敗レテ敵進入シ最早先鋒程近ク進ミ來ルト、暫ク止ツテ窺フウチ果シテ敵兵見ユ、直チニ引返シテ右ノ旨ヲ隊長ニ告ク、則チ兵ヲ賦リ墨ニ抛ツテ守ル、午后一時頃ニ至レハ川尻ノ敵兵ト城中ニ連絡ヲ通ジ、城兵勢ヒヲ得テ城中ヨリ打テ出デ我軍ニ当ル、我が守ル処ノ明午橋モ敵ノ背後トナリ守ルコトアタハズシテ、同所ノ千反畑ニ引ヒテ防戦ス、此時連四郎銃創ヲウケ川原ノ病室ニ入テ療治ス、夫レヨリ馬見原ニ転ス、(熊本市)同所ヨリ那須超ヘヲ經テ四月廿五日故郷ニ帰ル、療養スル中チ中山盛高各区ノ戸長ニ達シテ募兵ヲ促ス、然レトモ連四郎儀ハ銃創未ダ癒ヘス入來ニアル温泉ニ赴キ療治ス、暫アツテ良々快方ニ赴キシニ、同五月廿五日勇義第一番中隊右小隊ノ半隊長ニ編入セラレ、出水表へ上陸ノ

敵防禦ノ為メ阿久根へ出張シテ同所ヲ守ル、同六月十七日味方敗シテ向田ニ退キ、川内川ヲ隔テ、防戦スト雖トモ衆寡敵セス終ニ敵川ノ末流ヲ渡ツテ進入セシニ依リ、防クコトアタハズ墨ヲ捨テ荒川村ニ引揚ク、左スル中鹿兒島武村其他ノ諸所モ味方敗シテ、向田表ノ兵ト連絡ヲ通スルニ至リ、我が勇義一番中隊ハ同所ニ於テ解隊シ各自宅ニ帰ル、同月下旬第三旅団加藤中尉へ相付キ元ノ一中隊一同前非ヲ悔後シ自首帰順仕候、

右ハ今般太政官第四号ヲ以テ御達ノ赴キ奉拜承依之胸間ニ浮ヒ候儘筆記仕、奉上申候ニ付可然様御執成シ奉願候、

鹿兒島県第廿四大区式小区

串木野居住

當時群馬県懲役人

明治十一年二月十五日 長 連四郎謹白

七 河野徳太郎上申書

(米「第六号」)

徳太郎儀

老年已前ヨリ都於郡学校へ罷在候処、客年二月上旬頃ニ

至り中原尚雄以下、西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セントノ企発覚シタルニ付、陸軍大将西郷隆盛・陸軍少將桐野利秋・全篠原國幹等旧兵隊ヲ率ヒ不日上京ノ由仄カ佐土原ノ河南ニ聞ヘケルニ、町田啓次郎等一番・二番小隊ヲ編整シテ一月下旬日ハ不詳鹿兒島ニ出発セリ、然ルニ壁邑寒村ニ至ル迄騒擾ス、爰ニ於テ郷里ニ帰り見ルニ最早朋友等悉ク河南ニ至リケル、徳太郎全月廿八日ノ晩景ヨリ河南ニ出テ三番小隊ヘ入ントスレト入ルコト能ハス、如何セント案スルニ更ニ四番小隊ヲ編整スル由聞キ及ヒ、急ヒテ其場ニ至リ尽力シケレハ稍々ニシテ名簿ニ記載セラレタリ、然ル内日モ没シタレハ此所ハ一先ツ帰りテ当夜(佐土原町)上田島学校ヘ再ヒ集会セントノ事ナルニ、又夜ニ入テ其校ニ出テ衆議ノ上ニテ四十名ヲ以テ一隊ト決ス、投票シテ三官以下押伍・輜重方ニ至ル迄選挙ス、於茲徳太郎押伍トナリ此隊全ク整編シタリ、然レトモ名義ノ確乎タルヲモ審判セサレハ未発兵セス、時ニ大山県令ノ布達達セリ、夫ヲ見ルニ中原以下ノ口供モアリ、名分ノ正シキ事ナレハ天下ノ一大事件ト思察シ、國家ノタメ尽力スルハ此ノ時ニ有リト信シ、(三)一月十五日該地出發鹿兒島ヘ行ントスル途中都城駅ニテ貴島清宮崎ヘ募兵スルト聞キ、去レ

ハ此隊ニ編入セラレント思シ折柄貴島ノ報来レリ、迅速兵ヲ帰シテ宮崎ヘ屯集スヘシトアリケレハ、即日引帰シテ宮崎ニ至リ、我四番小隊ヲ六番小隊ト改称セリ此時我分隊付屬トナル、茲ニ滯陣スル四五日シテ該地出發、高岡・小林ヲ経テ飯野ノ駅ニ到ル、小隊長石井曰、己ニ明日ヨリハ肥後ノ境ニ到レハイツ戦ハンモ難凶、就テハ我隊分隊長ナシ、故ニ衆議ノ上徳太郎分隊長トナリ、全廿一日熊本出京町ニ到着シテ一泊ス、翌廿二日夜ノ五更ニ至リテ田原坂本營ノ報来リ、田原坂ノ激戦味方甚タ寡兵ニ候得ハ速ニ来リテ応援スヘシトノ事ニ付、即日兵ヲ整ヘ田原坂ニ到ル、トキニ廿三日ノ黎明ナリ、暫時本道ニ休息シテ本營ノ指揮ニ依リ壘ヲ守ル、然ルニ久敷防禦スル要地ニ非スト雖トモ本營ノ指揮已ヲ得スシテ相守ル、然ルニ昼頃ニ鹿兒島ノ小隊長姓名ヲ失ス来リ曰、当日味方総進撃ニ決シタレハ勝声挙ルヲ合図ニ切り込ム可シ、殊ニ此所ハ正面險要ノ地故一番ニ御辺ノ隊切込サレハ、余ハ如何トモスル事能ハサレハ必時刻ヲ過ル事無レ、応援ハ我隊致スヘシ、併シ敵壘ヲ奪ヒタリト雖御互ニ曳帰シテ又々此地ヲ守ルニ如クハ無レハ是非曳帰サルヘシト、然レハ今哉ト待程ニ最早日輪殆ント西山ニ没セントスレトモ未其形色

モナシ、稍アリテ俄ニ勝声齊シク起リケレハ吾兵四十名、外三番小隊四十名一時ニ抜刀シテ進撃スルニ、敵狼狽シ死傷モ不顧遁逃スルヲ我兵是ヲ尾撃ス、此時銃器・玉薬ヲ得タリ、我兵死傷凡十名アリ、翌廿四日終日終夜互ニ発砲、明ル廿五日十時頃ニ至リ敵百余名突然トシテ我壘ニ迫ル、我兵、外三番小隊合テ五十名一時ニ一発スルヤ銃ヲ投捨テ抜刀ニテ切り込ム、敵周章シテ退ントスルニ応援ノ巡查ト覺シキ兵退ク味方ヲ切りテ指揮ヲナスニ至リ、又取リテ帰シテ累リニ砲発又襲来ス、此戦我隊長並兵士五六名斃ル、今ハ事急ナリト残兵僅カ三十名ニ不足、殊更后ニハ竹谷ヲ負ヒタレハ退事モカナワス進ム事亦難シ、防戦ノ術茲ニ尽タレハ徳太郎ニモ一先本道ニ行キテ鹿兒島隊ヘ応援ヲ乞シニ、己ニ味方散乱シテ本道ニ退ク、此日ノ戦ヒ敵數人ヲ倒ス、味方ノ死傷モ亦多シ、全廿五日・全廿六日本道ニ壘ヲ築キ終日終夜防戦ス、死傷二人、全廿七日夜曳揚クヘキ旨貴島ヨリ報知アリ、故ニ全廿八日ノ未明ヨリ植木ヘ曳揚ケ兵糧ヲ炊ントスル内、敵田原坂ノ本道ヨリ敗リ追撃シテ不意ニ植木ニ迫リケレハ、我隊兵ヲ整ル暇ナク散々ニ敗走シテ川尻ニ集ル者僅カ十余人、踪跡分ラサル者三四名アリ、夫ヨリハ残兵ヲ以テ所々ハ

哨兵ヲ張り二本木大敗ノ際(益城町)木山迄曳揚ケ候処、兵寡キ而已ナラス彈藥尽キ果タルニ依リ、一応我兵悉ク郷里迄曳揚ケ、然ル処桐野ヨリ宮崎ノ堅メヲ命セラレタルニ依リ、五月中旬日ハ取覺ヘ不申宮崎ニ哨兵ヲ張ル、時ニ福山本營ヨリ応援ヲ乞シニ付我隊半隊ヲ操出ス(總)日ハ、該地ヘ壘ヲ築キ二週間余相固ム、然ルニ鋪根ノ味方敗軍ノ報アルニ依リ我隊モ通山(財部町)ヘ曳揚ル、全廿一日頃敵ノ斥候兵新山ヘ相見ヘ候ニ付行進隊ト共ニ進撃、敵遁走スルヲ一里余尾撃ス、翌日未明ヨリ又進撃スルニ、徳太郎ニモ右手ニ銃丸ヲ受ケ、隊士ニ救ハレテ佐土原ヘ帰区ス、入院療養中官軍進入ニ付自首帰順仕候也、

右形行上申候也、

鹿兒島県下日向国

第九十六大区三小区佐土原

當時群馬県役人

明治十一年二月十日

河野徳太郎

八 龍岡資時上申書

(朱二第七号)
今般太政官第四号ヲ以テ、鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ

付、右賊徒ノ内其事情及戦地形状等詳悉致候者ハ該事之
顛末云々御達ノ趣巨細承知、形行左ニ筆記仕候、

客年二月上旬鹿兒島県内穩ナラサルノ際、県令ヨリ今般

陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・全篠原国幹政府

へ尋問ノ筋有之上京ニ付、旧兵隊ノ者共随從之段布達有

リ、随て中原尚雄等ノ口供布達相成リ、一大変事ト思慮

シ、殊ニ西郷・桐野・篠原ハ何レモ維新之偉業ヲ翼賛セ

シ人々ニ付、何様ノ儀ナルヤヲ尋問ノ意ニテ壮士輩共々

私学校へ駆付ケシニ 惣合二百四五
十名ニ及フ、最早該校ニハ番兵致シ出

入ヲ禁ス、其儘県庁へ出頭シ、今般ノ事件如何相心得可然

哉ト大山県令へ伺シニ、旨趣ハ先般布達ノ通確乎タル名

分モアルニ付、国家ノ為メ尽力スルノ志操アラハ西郷等

へ随從致ス可ク返答ニヨリ、私学校ハ出入嚴禁ノ旨ヲ陳

述ス、然ルニ西郷宛ノ一封ヲ渡シ是ヲ持参スヘシトノ達

ニ随ヒ私学校へ行キシニ、番兵ノ者共書翰ノミ請取り校

門ニ入ル事ヲ許サス、暫時アリテ書翰ノ返事ハ後刻邊見

某直ニ可参トノ儀ニ付、県庁へ立戻リ其意ヲ県令へ通シ

置シニ、稍有テ西郷へ随從今更不相出来トノ返答故、自

ラ余カ見込モ有之ニ付旅宿へ滞留スヘキ旨ヲ了承ス、其

中二月十五日ヨリ私学校人員モ追々操出シ、其后日數十

五六日相過キ県令ヨリ一先帰区イタシ居候ハ、追て何分

可相達トノ趣ニ付一同帰区ス、然ルニ貴島清・折田某豐

後表出兵之内命県令ヨリ受ケシニ依リ共々出發セン事ヲ

促スト雖トモ、何分県令ノ指揮無之中ハ狼リニ出發出来

サル旨ヲ演舌ス、三月四日頃淵邊軍平熊本ヨリ帰路、承ル

ニ先頃出庁セシ人員ハ未タ当区ニ有リ哉、今般ノ一挙ハ

名分大義判然タル事ナレハ若シ是ヲ傍觀スル者アラハ、

国家ノ為メ打果テモ可ナリト云ヘリ、併シ当区ハ県令ノ

指揮ヲ受ケ斯ノ如シト答フ、最早今日ニ至リ坐シテ命ヲ

待ツハ因循ノ至ナラス哉、早速出庁シ県令ノ指揮ヲ受ク

ヘシト云ヘリ、就テ出庁セシニ過般出庁ノ人員此節熊本

表へ差遣スニヨリ至急出發スベキ旨口達ノ末、西郷宛ノ

封書ヲ与フ、命ヲ受ケ迅速帰区シ、二百五十名同月八日

発足全十二日熊本春日本營へ着シ、県令ヨリ口達ノ趣申

述彼封書ヲ差出ス、然ルニ三十名ヲ砲隊ニ編入シ、二百

二十名ヲ二小队ニ分チ遊撃壹番・二番隊ト称号シ一番遊

撃隊小隊長ヲ命セラレ、即刻ヨリ安政橋ニ守兵ス、全廿三

日頃八代へ敵兵進入ノ報知アリ各隊追々操出ス、就テ諸

隊へ打合せ防戦スヘキ旨西郷ヨリ直ニ命ス、安政橋ノ守

リヲ外隊へ譲リ全廿四日小川迄操出ス、時ニ戦争央ナリ、

(東陽町)

依テ種山ノ敵營へ壹番・二番遊撃隊外ニ半隊進撃ス、敵防戦シテ正午過ヨリ日没迄戦フ内敵陣營ヲ焼キテ去ル、夜ニ入り種山ノ人家へ宿陣シテ守ル、其日敵兵死傷アリ、味方ニ戦死一名・手負一名アリ、全廿五日朝高岡隊ト交代シ曳揚クヘキ旨本營ノ指揮ニヨリ小川迄曳揚ケ、其夜鳥越へ哨兵ヲ張ル、全廿六日午前第八時比敵進撃砲戦時ニシテ小川本道戦ヒ敗レ敵兵襲撃スルニ依リ、加治木隊ト共ニ要所ニ伏セ待受ケシニ、山間ヨリ敵七八名突出ス、射テ是ヲ倒ス、其間僅ニ一町余、夫ヨリ敵襲ヒ来サル故難ナク松橋迄曳揚ク、全廿七日萩ノ尾(松橋町)へ哨兵ヲ張ル、全廿八日午前第十時頃敵兵襲ヒ来リ互ニ挑闘スル事数時間、既ニ松橋本道敗レントスルトキ、我隊横合ヨリ声ヲ挙ケ切り入ル、敵頻リニ防戦スト雖トモ忽チ相敗レ一里余追撃ス、然ルニ五六名踏ミ止リ防戦ス、其内士官一名抜刀ニテ打テ掛ル者アリ、我隊福山隆重ナル者討テ其手帳ヲ得タリ、是ヲ見ルニ奥田中尉ト記載アリ、其日敵ノ死傷尤多シ、味方モ死傷アリ、此日資時二ヶ所負傷スト雖トモ斃ル、程ノ深手ニアラス、我隊針銃並弾薬・時計・シヤペル等ヲ得テ本ノ哨兵線ヲ守ル、全卅日敵襲来ストイヘトモ防戦シテ互ニ勝敗ナシ、全三十一日尚又敵襲撃、諸隊防

戦手ヲ尽ス、時ニ吾隊三分隊ハ正面ニ掛リ一分隊ヲ率ヒテ間道ヲ経嶺ヲ攀チテ敵ノ横合ニ出砲戦スル事数時、終ニ松橋ノ本道ヨリ敗レ甚タ苦戦ス、時ニ重創ヲ負フテ吾隊ノ進退ヲ識ラス、隊士ニ救ハレテ隈ノ庄町迄曳揚ケ、夫ヨリ川尻病院ニテ療養ス、四月一日全所出発、木山ニ移リ、全三日全所ヲ発シ山路ヲ経或ハ急流ニ掉シテ日向国美々津ニ出テ、高鍋・宮崎ヲ経テ全月十五日帰区シ、該病院ニ於テ療養中、七月廿四日官軍進入ニ付、全廿八日川村参軍へ帰順ス、

右者御採用相成程ノ儀モ無之候得共、取覚居候儘記載上申仕候也、

鹿兒島県下日向国

第十二大区一小区都城

当時群馬県憲役人

明治十一年二月十日

龍岡資時

九 重永藤次郎上申書

(本「第八号」)
今般御達シノ旨趣奉畏謹テ左ニ上申ス、

藤次郎儀

昨拾年五月拾七日振武隊本営中島健彦方ヨリ志々目眞
幸ト申者ヲ以テ、兵募リ方トシテ我カ郷内へ差遣ハサ

レ、此節国難ニ当リ狼狽致シ候訳更ニ無之出兵致ス可

キ旨相募リ、六拾余名同廿二日出立致シ、本営中島健

彦へ届出候処、右六拾余名ニテ振武新廿九番小隊ヲ編

制セラレ、藤次郎儀ニハ半隊長命セラレ、辞退ニ及候

得共相済マス止ヲ得ス半隊長トナリ、鹿兒島下伊敷村

ニ滞陣シ、全所宇治瀬之上岡ノ壘ヲ相守リ候様承知イ

タシ相守居候処、全六月廿五日午后二時頃官軍ヨリ砲

発、廿分程抗戦竟ニ相敗レ本営之様引上ケ形行申出候

処、全所之内川上村迄引上ク可ク旨承リ引上ケ、全廿

六日鹿兒島ノ郡吉田郷へ引上ケ、翌廿七日蒲生郷ノ様

引上ケ相成候処、竟ニ病氣相煩ヒ病院へ入室養生仕居

候得共快方相見得ス、帰宅仕居候処巡查派出相成リ前

非ヲ悔ヒ帰順自首仕候也、

鹿兒島県薩摩国穎娃郡穎娃郷

第拾七大区老小区百四拾番地居住

明治拾壹年第二月

重永藤次郎

一〇 渡邊敬孝外二名連署上申書

(本)第九号

鹿兒島逆徒御征討事情及ヒ戦地形状書

(本)三名連署

明治十年二月下旬薩兵熊本表へ乱入ニ依テ、県官吏御

退散且区戸長・巡查等詰所へ出仕無之ニ付、此機会ニ

乘シ強窃盜或放火或官山伐採或博奕等之悪業不少候ニ

付、所柄取締ノタメ近村士族中申談、鎮撫結社仕交番

ヲ以テ廻方仕居候中、三月二十三日薩兵大小荷駄上下

十三人參シ当所へ在陣致シ度、依テ搗米或焚出・人馬

下宿等之周旋致シ呉候様依頼致シ候処、勿論不宜事柄

故再応相断候へ共不聞入、周旋致シ不申ハ訖ト存寄有

之抔ト暴言ヲ発シ候ニ付、多勢之猛威ニ恐懼、社中ハ

勿論所柄如何様之災難ニ係リ候儀モ難計奉存、難黙止

右等之周旋致シ居候中、同廿五六日比ニ至リ薩兵段々

ト參集五百名余ニ相充、何分周旋届兼且敢テ心ニ不快

事柄故、四月一日右周旋大小荷駄へ押テ相断解社仕、

社中之者共家内共ニ方々之知音へ立退キ罷在、同月四

日第九大区九小区堅志田町御本陣へ右之次第具ニ自首

仕候処、掛副戸長池上十郎保証人ニテ御帰シニ相成謹
心ニ罷在候へハ、戦場ニハ一切携リ不申候へ共概略伝

聞之次第一書ヲ以テ左ニ申上候事、

一三月廿八日比第九大区十小区中山郷方(宝満越、小川町、(安慶神、小川町)越且サバガミ

兩所之戦争、逆徒敗軍ニテ戦死凡廿名内外、手負凡十

四名ニシテ同郷(中央村)堅志田町且第九大区一小区甲佐郷岩下

町兩処へ退軍致シ候由之事、

但官軍戦死并手負不分明、

一三月卅一日官軍堅志田町へ御進軍之処、四月三日曉逆

徒甲佐郷岩下町ヨリ第九大区九小区中山郷小薙村(中央村)へ汾

陽光照ヲ隊長トシテ凡三百名内外出兵致シ散々ニ切入

リ、官軍戦死凡九十名内外・手負七八十名ニシテ、御

本陣間近ク押寄候由之事、

但逆徒戦死凡五六十名、手負十五六名、

一四月三日午後四時比逆徒甲佐郷上揚(甲佐町)・豊内(全上)・仁田子(全上)・

有安四ヶ村之川岸ニ台場ヲ築キ相待居候処、官軍堅志

田町御本陣ヨリ御進軍戦争ニ相成、暫時之中ニ逆徒敗

走致シ、逆徒戦死凡十名内外、手負不分明、官軍隊長一

名甲佐郷豊内村ニ於テ戦死、此外不分明手負右同断、

然ル処甲佐郷岩下町并近村都合十ヶ村之家蔵等四百四

十五戸兵火ニ罹リ焼失仕候事、

一薩賊兵糧九百九十八俵并砲器・器械十駄、中山郷堅志

田町御本陣へ私共ヨリ差出置候事、

右之通ニ候事、

熊本県益城郡第九大区一小区

甲佐郷岩下町

渡邊敬孝

明治十一年二月七日

赤星 清

右同所

一一 三原直記上申書

今般鹿兒島逆徒御征討顛末御編輯ニ付可申上旨御達シニ

基キ左ニ上申ス、

西郷隆盛以下鹿兒島ヲ発スル際ニ至ツテ更ラニ關係セサ

リシカ、明治拾年ノ春三月邊見十郎太・淵邊群平・別府

晉助等鹿兒島へ再ヒ帰県シ、熊本危キヲ以テ応援兵ヲ募

ル際、三月廿五日邊見等ノ在ル庁下雇英人ノ居タル館

跡ヨリ、用談ノ書翰ヲ送ルニ因リ出会スル処、今般四方

ニ兵ヲ募リ熊本ヲ救援セントス、既ニ諸方ノ兵大口ニ集

会スルヲ以テ、直記ニ小隊長ヲ任シ募兵ヲ指令ス可キ旨

申付ルニ依リ、辞シテ更ラニ承諾セスト雖トモ之ヲ採用

セス、屢説諭シ止ヲ得ス全廿六日警部河野半藏ト偕ニ大口ニ至リ、宮之城・東郷・入來ノ兵ヲ以テ第九番大隊四番小隊ヲ編制シ、全卅日黎明大口ヲ発シ午後三時人吉ニ至ル、全四月一日午前八時大野清章ノ壹番小隊・田實吉之丞三番小隊・我四番小隊偕ニ人吉ヲ発シ、(深澤町)一勝地邑ニ至リ銘々守備ヲ頒ツ、大野ハ告邑ニ、(西北町)田實ハ大野邑ヲ守リ、直記ハ嶽元邑ニ次ル、全三日別府管介ヨリ神之瀨邑(嶽本、味善村)ニ操込ム可シト達ス、全四日ノ午前六時嶽元邑ヲ発シ神之瀨邑ニ至ル、告邑・大野邑ノ兩隊モ神之瀨邑ニ到着シ、先キニ守ル小倉雄之助隊ニ代ツテ八代ノ方面ニ哨兵ヲ張ル、午后三時各隊長本營ヘ会スヘキニ依リ小倉ト偕ニ至レハ、即日釜瀨邑ニ進軍ヲ達ス、即チ整列シ壹番・五番ハ右側、三番・四番ハ左側川ヲ挾ンテ、(中津、坂本村)午後八時釜瀨ニ至リ哨兵ヲ張ル、壹番・五番ハ中手邑ヲ守ル、而シテ官兵坂元邑ニアルノ報アレハ之ヲ襲撃セント、翌五日午前六時釜瀨ヲ発シ坂元ニ至ルニ、(頭地、五木村)邊見湯地口ノ一手ヲ以テ坂元ヲ拔キ取ル、官兵戰ハスシテ小川ニ走ル、湯地・中手・釜瀨三道ノ兵該所ヘ集會シ、八代・日奈久ノ官兵ヲ討タント、壹手ハ邊見指揮シ小川邑ヲ襲フ、壹手ノ壹番・五番ハ日奈久ヲ襲ハント二手ニ進撃スレハ、小川邑ノ官

(八代郡坂本村)兵深見谷ニ哨兵ヲ張りシニ之ヲ敗ツテ該所ヘ兵ヲ纏メ、(八代市官地)妙見山・小川ノ二所ヲ抜カント二小隊ト砲二門ヲ以テ小川ニ迫ル、旧砲二門ト三小隊ヲ以テ妙見山ヲ進撃スルニ、我兵ハ既ニ小川ニ迫レハ官兵防戦奮撃スル事甚タ敗レ難キヲ、我兵拔刀シテ突込ニ半隊長有川直治・愛甲清之進分隊偕ニ奮戦、敵瞬間ニ倒ル、ヨ見ルニ衆目ヲ驚カス、此ノ勢ヒニ乘シテ我兵一声之ヲ撃テ突然官兵敗レテ狼狽潰走スルヲ、尾撃シテ迫ルニ、先キニ切込シ有川・愛甲勇戦シテ即死ス、我兵長驅シテ迫撃スレハ古田邑ノ要地ヲ(八代市高田)指テ尚走ル、(八代市官地)竟ヒニ櫻馬場ノ要地ニ抛リテ頗ル劇戦スルニ、我カ兵古田邑ノ方面ヲ所有シ互ヒニ邀戦スレハ、邊見古田ニ有ツテ之ヲ指揮ス、妙見山ノ官兵モ妙見山ヲ損テ敗走スレハ該所ニ至ツテ守ル、日奈久ノ味方八代街道ノ正面ヨリ哨兵ヲ古田邑ニ張ル、翌六日我兵櫻馬場ニ迫レハ官兵防戦スレトモ遂ヒニ敗レテ八代ニ引ク、四方ニ放火シテ防戦ス、妙見ノ味方猫谷ヲ敗リ日奈久ノ兵モ全ク八代ニ迫ラントスルニ、官兵奮戦八代既ニ陥ラントスルノトキニ至リ味方彈藥尽キテ進ム事能ハサルニ、午後三時比ニ至リ官兵奮戦我カ正面ト側面ヨリ進撃スルニ、玉葉尽キテ愈苦戦シ立処ニ廿余名倒レ、時ニ邊見・別府

モ八代近ク兵ヲ進メ指揮スレトモ之レモ玉葉尽キテ苦戦ス、既ニ黄昏ニ至レハ櫻馬場ニ抛リ之ヲ保ツニ、妙見ノ一手ハ該所ヲ守有スレハ、日奈久ノ兵モ借ニ櫻馬場ヲ守ル、翌七日昧明ヨリ官兵櫻馬場ヲ襲撃スル事愈烈シト雖トモ之ヲ邀戦スレハ、我隊監軍兵士数名手負ナリシニ八時比ニ至リ守ル事能ハス、古田邑ニ引キ官兵ヲ遮戦セント暫時ク其地ヲ守ル、各隊神^(球磨村)之瀨ニ引上ケ評議ヲ相決シ全拾一日神之瀨ヲ発シ藤元ニ至ル、全拾二日午后四時本營ニ出会スルニ、官兵小川ニ有ル探報ヲ得タルニ因リ昧明ヨリ進撃スルニ決シ、全拾三日ノ午前四時進軍既ニ深^(坂本村)見谷ニ至リ、該所ヨリ妙見・小川ノ両所ヘ進撃、淵邊ハ妙見ニ迫ル、邊見ハ小川ニ迫ルニ朝霧煙々四方ヲ見徹セサルニ、官兵ノ哨兵霧煙ヨリ狙撃スルニ我兵大小砲ヲ以テ進撃、左右ヲ挟ンテ奮戦頻リナレハ大ヒニ官兵敗走スルニ、雷鳴一声之レヲ尾撃スレハ小川ニ抛リ防戦スレトモ、我兵急迫スル事熾カンナリシニ小川ヲ損テ亦走ルニ踴躍シテ小川ニ至レハ、狼狽スル台兵五名ヲ擒ス、尚モ進ンテ兵氣勇悍尾撃スルニ、古田ノ要地ニ抛ルヲ失ヒ櫻馬場ヲ守テ防戦頻リナリ、邊見・淵邊等モ小隊ヲ率ヒ四方ニ配リ応援スレハ愈奮戦、竟ヒニ櫻馬場ヲ敗リ萩原邑ニ^(八代市)

迫ルニ壘堅フシテ進ム事能ハス、爰ニ於ヒテ妙見口ハ猫谷ヲ敗リテ該所ヲ守ル、日奈久ノ兵ハ萩原ノ渡シニ次リテ発撃稍絶間ナシ、全拾七日各隊長古田ノ本營ニ会ス、進撃ヲ議スレトモ玉葉乏敷ヲ以テ萩原ヲ取ルノ而已却テ敗ヲ取ルノ外ナキヲ以テ進撃ヲ延引スルニ、全拾八日官兵雲霞ノ如ク襲来リ、防戦スレハ官兵四方ニ散隊シ狙撃スル事強大ナリ、爰ニ至リテ猫谷竟ヒニ敗レ櫻馬場苦戦ス、諸隊散乱纏マル兵少シト雖トモ古田ヲ守リ大小砲ヲ以テ防戦数刻ニ及処、官兵小川ニ廻リテ後ヲ卷キ、防戦スルニ術ナシ、藤元ニ引ク、時ニ溺死スル者少ラス、死傷スルモノ数拾名アリ、全拾九日神之瀨ニ至リ集合スルヲ以テ哨兵ヲ張ル、該所ノ諸道ニ壘壁ヲ堅フシテ守有ス、全卅日諸隊ヲ編制シテ中隊トナス、爰ニ於ヒテ破竹三番中隊改号右小隊長トナル、矢野藤太左小隊長ニ任セラル、時ニ邊見十郎太左小隊等ヲ率ヒ大口ヘ赴ク、第五月拾日午前第八時^(戸北町)熊瀬邑ニ官兵復襲フテ我哨兵台ヲ拔ル、ニ当ツテ熊瀬ニ迫撃急ナレハ、既ニ破レントスル勢鋒ナルニ我カモ小隊ヲ以テ応援ヲナス、時ニ官兵迫ル事烈シク諸兵挫カル、雷撃憤戦乃チ抜刀猛烈突然官兵ノ中ニ迫レハ之レニ臆シテ四方ニ散乱スルニ一声唳ト撃テ之ヲ退ケ

守壘ヲ復ス、時ニ屍ヲ撤テアル事数名ニシテ玉葉數発ヲ取ルト雖トモ、我カ壘ヲ去ル事遠カラス寒柵ヲ設ケ壘ヲ堅フシテ大小砲ヲ以テ撃戦スル、我軍モ同シク之ヲ邀ヘテ対発スル事数日ナリ、而シテ全廿日大野邑ニ応援ヲ乞フニ因リ午後七時雷撃ト我壘小隊ト該所ヲ発シテ、翌味明大野邑ニ至リ諸寨ノ哨兵台ヲ援フ、全廿二日邊見ノ隊ヲ以テ水俣之官兵ヲ進撃スルヲ以テ応援ニ至ル、時ニ廿三日也、既ニ官軍所有ヲ抜き、守ルニ及テ淵邊等ト大野ニ帰ル、此時偕ニ至リシ雷撃・干城ノ二隊ハ邊見ノ手ニ加ハル、翌廿四日札松ニ当ツテ砲声烈シキヲ以テ応援ニ驅走スレハ、味方官兵ヲ進撃ス、故ニ我隊モ同ク之ニ応シテ側面ヨリ夾撃スレハ、成尾カ隊ヲ以テ官兵ノ壘壁ヘ迫リ礮ヲ飛シテ抜刀奮撃セントスルニ、官兵ノ応援夥敷シクシテ抜ク事能ハス竟ヒニ之ヲ引ク、我隊モ蹙壁ニ進ミシカ之ヲ引ク事能ハサルニ、宵ルヲ待チテ引キ防壁ヲ守ル、翌廿六日岩井・札松へ官兵大挙シ襲撃スル事益銳戦ナレハ我守兵之ヲ激烈防戦スト雖トモ、防劫スル力ヲナク敗潰スレハ我隊モ之ヲ引キ(球磨村)勝地邑ニ去リ渡リ邑ニ退ク、全廿七日糸原邑ニ至リ守兵ヲ置ク、同卅日ニ程角(照南)道敗レ、人吉へ引上クヘキノ報告アルヲ以テ宵ル中神邑(人吉市西)

ニ次ル、全六月一日人吉へ引キ大柿邑ヲ保ツ、時ニ官兵人吉ニ迫ル事酷タ強ク四方ニ発スル大小砲ノ音ハ恰モ雷鳴ノ轟クニ伴シ、嗚呼人吉ヲ防禦スルノ微ナルヲ察ス、時ニ午前拾一時ニ至レハ市中ニ火ノ揚ルヲ見レハ黒煙天ニ漲リ幾ト我兵ノ敗潰スルヲト思慮セシニ、午後ニ至リテ大敗軍トナル、大畑邑ニ引揚ケタルノ急報アレハ、川ヲ隔テ官軍ヲ対守スルニ遽カニ尾撃セン事ヲ恐レ黄昏ニ至リテ人吉ニ出ルヲ絶塞セラレ、宵ル間道ヲ經テ曉ニ大畑邑ニ遁レ退ク、翌二日田代邑ヲ以テ哨兵ヲ張り壘ヲ設ケ守有スル事数日ナリ、全拾一日黎明官兵大畑・田代等ノ諸寨ニ迫撃スレハ防戦、諸壁守ル事愈堅シ故、官軍諸方ニ台壁ヲ築キ午后四時ニ至ツテ吉田ノ街道塞絶シテ官兵四方ノ山ニ迎ヒ諸台ニ大砲ヲ据ヘ砲撃スルニ至ル、全拾二日ニ至リ大小砲ヲ以テ撃発スル事繁烈ニシテ、官兵応援兵ヲ田代・黒邊田等ノ諸寨へ迫ル事頻ナリ、爰ニ於ヒテ我軍竟ヒニ大敗潰トナリ加久藤或ハ飯野ノ街道ヲ經テ右往左往散乱スレハ、飯野越山脈へ退キ防禦ヲ設ケ哨兵ヲ張ルト雖トモ微力ナルニ、翌拾三日官兵潮ノ湧クカ如ク襲フ、竟ヒニ衆寡敵セス小林郷ニ去ル、全拾七日洲(浦、小林市)之浦ニ至リテ之ヲ守有スレハ、三四日間ヲ經テ飯野ノ官

兵ヲ撃戦シ、敗ル事能ハスト雖トモ川ヲ夾ンテ台壁ヲ堅
フシ、是ヨリ対迎シテ昼夜断間ナク邀戦スル事数拾日也、
時ニ七月上旬加久藤ノ我軍敗レ潰走スルニ逢ヒシニ我隊
飯野ヲ保ツ事能ハス高原郷ニ引ク、全拾日官軍長ク驅ツ
テ高原ヲ襲フ、爰ニ於ヒテ諸隊奮戦スト雖トモ一口竟ニ
敗レ高城郷ニ走ル、全拾三日高原ノ官兵ヲ進撃スト雖ト
モ黎明ヨリ撃戦既ニ高原ヲ陥レントスルニ玉葉尽キテ午
后ニ至リ高城ヘ引ク、全拾六日再ヒ高原ヲ襲フ、時ニ都
之城ノ諸隊ヲ加倍シ拾八中隊ヲ以テ午前七時ヨリ奮勇切
齒シ進撃スト雖トモ、官兵ノ寒柵甚タ堅キヲ以テ諸方面
進ム事能ハス、復タ利アラス午後高城ヘ引上ル、全廿四
日都之城敗レ高岡郷ヘ引キクス(櫛見)ミノ渡ヲ守ル、全廿八日
高岡本道敗レ該所ヘ潜伏シ、庁下ニ至リ降伏自首ヲ決シ、
八月拾七日庁下ニ於ヒテ降伏自首仕候、右形行上申奉リ
候也、

鹿兒島県薩摩国鹿兒島

第二大区二小区金之進長男

明治拾壹年第二月

三原直記

一一 是枝吉藏上申書

(卷)第十一册一

今般鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付右賊徒懲役人ノ内其
事情及戦地ノ形状等詳悉致候者ハ該事ノ顛末ヲ上申可仕
旨奉拜承左ニ筆記仕候、

明治十年二月中原尚雄等暗殺ヲ謀ラントノ議発覚シ、政
府ヘ尋問ノ為メ陸軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・全
少将篠原國幹旧兵隊ヲ率ヒ上京ノ際、不図モ途中熊本県
下ニ於テ台兵ニ支ヘラレ、終ニ戦争ニ及ヒ候段追々報知
之赴承リ居候折柄、五月下旬勇義隊本管中山盛高十三小
隊位ヲ引率シ吾伊集院郷ニ着シ、本管ヲ据ヘ兵ヲ募リ、
吉藏モ同人ノ達ニ依リ同廿九日勇義十四番隊ノ小隊長ニ
被命、同日同所発足鹿兒島伊敷村ニ着ス、然ル後本管ヨ
リ差函ニ從ヒ六月五日吾十四番小隊ト振武廿六番小隊同
所発足、大口ノ内旧山野郷ニ着ス、則同月九日ナリ、同
所ノ本管邊見十郎太ノ指揮ニヨリ、翌十日同所石川村ノ
口市(石井内)大
壘ヲ守ル干城一番小隊ヘ、応援トシテ進軍、同所ヘ滞陣
スル中同十三日午前八時頃惣軍進撃ノ報ニ依リ直ニ操出
シ、午后一時頃迄兩陣互ニ発砲ニ及ヒタレハ、味方已ニ
敗軍ノ勢ヒニナリ右干城一番小隊モ引揚シニ依リ、吾十

四番小隊モ同シク引ク、其際ニケ所ニ負傷ヲ受ケ歩行自由ナラス、傍ノ木陰ニ臥居ケレバ忽チ敵兵寄せ来リ、其儘降伏ス、依之敵ノ本營ヘ護送セラレ、同十五日八代ヘ移サル、夫ヨリ官軍ノ病院ニ入テ療養ヲ蒙ムル、同廿七日頃熊本病院ヘ移サル、

右戦地ノ形状概文筆記上呈仕候、

鹿兒島県下第廿二大区小四区

伊集院居住

当時群馬県已決監囚

明治十一年二月十一日

是枝吉藏

一三 西川如雲上申書

(全七第十二号)
私儀城下ヨリ十里程離宇土郡那浦舟津村エ住居仕申候処、
(三角町)

明治十年二月七八日比西郷隆盛暗殺一条為尋問大勢引連上京之風聞有之候ニ付、熊本旧主三淵永次郎方エ二月十日ニ罷越段々承リ候処、西郷隆盛尋問之筋尤ト存、旧主三淵永次郎エ応援之儀申進メ候内、旧臣共安否為尋問追々罷越候者共エ応援之儀申談、彈薬等製造致セ候内強盜有之候由風聞仕候間、居屋敷内外夜廻等致居候内、四番小

隊鎮撫兵隊長林政八ト申者罷越、番兵不足ニ付人数両三名替番ヲ以借呉候様相談ニ付、右人数借申候、二月廿三日比猶又林政八罷越、川尻ト申所エ鎮撫所ヲ移申度、為見籍罷越申筈、然処小人数ニテハ見惡敷候間、人数少々借呉候様申候間十二三名借申候、旧知事ヨリ官兵エ抗敵致候てハ不相成候段説諭御座候由にて、旧主三淵永次郎ヨリ三月十日比旧臣共エ堅申聞候ニ付謹慎仕、住所々々エ引取申筈之処、居宅ハ焼失且官兵ヨリ放火有之候由之風聞御座候ニ付、其儘三淵永次郎宅エ相滞居申候処、四月十六日官兵ヨリ本陣ニ致度候間、右三淵永次郎居宅借渡可申旨ニ付御用ニ相立申候、然処旧臣共多人数集合仕居候間、御不審にて捕縛ニ相成熊本囚獄エ入檻被仰付、六月一日長崎檻倉エ護送ニ相成、同所於裁判所九月十四日懲役壹年被仰付、上州群馬県岩鼻已決檻エ被差置候事、
右之通にて高橋町三淵永次郎宅エ滞留仕格別外出等不仕、戦地之形状存知不申候、差て書上候事件無之候、

熊本県肥後国宇土郡那浦郷舟津村

第十大区八小区三百式拾三番地

居住士族西川泉次郎父隠居

明治十一年二月

西川如雲

一四 肥田景敏上申書

(朱)第十三号

昨十年二月上旬県内穩ナラサル際県令ノ布達ニ、今般陸軍大將西郷隆盛・陸軍少將桐野利秋・全篠原國幹政府へ尋問ノ為メ旧兵隊ノ者共随從トアリシ故、國家ノ大事件ト思慮シ、五六名ト共ニ出県シ県令ノ命ニテ二十余日滞在、三月上旬県令ノ指揮ニテ帰区ス、全月四日頃淵邊軍^(群)平熊本ヨリ帰路ノ折聞クニ、先般該区ヨリ出庁セシ人員ハ未タ当区ニアリヤ、今般ノ一挙ハ名分モ判然タリ、若シ傍觀スル者アラハ國家ノ為メ打果シテモ可ナリト云ヘリ、因テ当区ハ県令ノ指揮ヲ受ケ斯ノ如シト答フルニ、坐シテ命ヲ待ツハ姑息ノ至リト速ニ出庁シ県令ノ指揮ヲ受クルニ如スト云ヘリ、就テ翌日出庁ス、然ルニ該区二百五十名ヲ熊本表へ出発スヘキ旨口達ノ末、西郷宛ノ封書ヲ与フ、是ヲ以テ全月八日一同出発翌九日人吉ニ達ス、其レヨリ日夜兼行シ全十二日熊本へ着、即チ三十名ヲ砲隊ニ編入シ二百二十名ヲ二小隊トシ、遊撃一番小隊押伍ヲ命セラレ安政橋ヲ守兵ス、全廿四日頃命ヲ受ケ小川へ^(東陽村)操出シ種山ヲ進撃ス、敵防戦日没迄戦フ中敵營ヲ自燼シテ去ル、其夜種山ヲ哨兵ス、全廿五日小川へ引揚其夜鳥

越へ哨兵ヲ張ル、全廿六日午前第八時頃敵襲來、防戦スト雖モ小川本道敗レテ松橋迄引揚、全廿七日小川ノ内^(松橋町)敵尾へ哨兵ヲ張ル、全廿八日午前第十時頃敵襲來互ニ戦闘スル事数時間、已ニ松橋本道敗レントスル際、吾隊横合ヨリ切込敵防戦スト雖トモ忽チ敗レ、尾撃スル事尙里余、敵死骸ヲ捨テ去リ本ノ哨兵線ヲ守ル、全三十日敵襲來スト雖トモ互ニ勝敗ナシ、全卅一日午前十時敵襲撃各隊防戦手ヲ尽ス折、隊長ノ指揮ヲ以テ吾一分隊間道ヲ經山ヲ攀チ敵ノ横合ヲ衝クト雖何分少人数故防クニ利アラスシテ、^(城南町)各隊限ノ庄町ニ引揚、其夜川尻へ退キ三十町橋ニ至ルニ、松橋敵營へ夜襲ノ命ヲ受、吾一番・二番十二時頃当地ヲ発セシニ、凶カラスモ途中伏兵アリ苦戦ス、時ニ天明ケ始メテ敵中ニ有ル事ヲ知ル折、吾隊七八名ヲ見依テ共ニ其場ヲ通レ溝ヲ伝ヒ山ヲ志シ走ルトキ、敵ニ発砲セラレ漸ク^(ひらばり、實合町)平原村へ出テ吾三十町橋ノ哨兵線ニ達ス、時ニ午后三時頃、此地味方防クニ利アラサル故川尻へ引揚、余日モナク吾一番・二番ノ隊ヲ御船ニ転シ甲佐道ヲ守ル、四月十一日頃曉天ニ敵軍襲撃シ防戦スト雖、山手ト哨兵線ノ兩端同時ニ敗レ吾隊取囲マレシニ、壘ヲ捨テ走ルトキ敵ノ彈丸雨注ノ如シ、味方ノ死傷頗ル多シ、尤此御船ヲ守

リシ各隊僅ニ三百余名ナリ、夫ヨリ木山(益城町)・矢部ノ間ニ離散ス、全十三日頃吾ニ小隊外ニ四小隊南田代ニ転シ、翌日敵進軍暫時戦ヒ死骸ヲ捨テ去ル、吾隊銃器・時計其他手帳ヲ得閱スニ警視隊進軍ストアリ、当夜南田代ヲ引揚木山ニ達セシ処、川尻敗レテ敵熊本城ト連絡ヲ通シ、因テ諸口ノ各隊木山へ混同ス故、吾隊外ニ小隊金内(天部町)へ転シ両日間滞陣ス、時ニ御船ハ再ヒ我有ト成リシ事ヲ報ス、依テ四月中旬尚進ンテ御船ヲ討ツ、利アラスシテ矢部ヘ引揚、御船間道猿渡村(矢部町)へ哨兵ノ際防クニ利アラサル故一同肥後地ヲ可引揚旨報知アリ、夜ニ入当地発足日向ノ内尾(雑)前村(兼)へ転ス、此地ニ止ル事已ニ一週間、時ニ吾ニ番・一番ヲ干城八番中隊ト改称シ、右小隊ノ分隊長ニ命セラル、夫ヨリ人吉ニ出張ノ命アリ、吾隊彼ノ地へ達シ二日間在陣シテ、尚求麻川筋大野村(高北町)へ操出旨ヲ受ケ、五月上旬彼ノ地へ着ス、五六日滞陣中大口本営ヨリ応援ヲ乞フニ、当地ニ有ル干城二番・四番吾八番ト共ニ久木野(水俣市)ノ敵壘ヲ襲フ、吾隊先鋒ノ日ニ当ルヲ以テ山中ヨリ突然砲撃セシニ敵狼狽シ壘ヲ捨テ走ル、進ンテ営ヲ衝キ銃器并両眼鏡其他物品ヲ得敵営ヲ放火シテ、午后四時頃各隊大野村へ帰陣ス、五月十八日大口ヨリ尚援兵ヲ乞ヒシニ、干城二番・四番・

八番外ニ一小隊当夜出発、間道山神越ヲ経テ全十九日早天大口久木野ノ内上木場味方ノ哨兵線ニ達シ、軍議ノ上午前十一時頃ヨリ進撃セシ所、敵不意ヲ襲ハレ砲壘ヲ捨ツルト雖トモ尚亦防禦ノ術ヲ尽クシ、五ニ七八間ノ距離ニ戦フ事数時間、尤此地ハ近衛台兵ニテ守シ故容易ニ抜キ難シ、戦耐ナルトキ銃丸右肩ノ骨ヲ貫キシ故、大野村へ退ク、里程三里余、夫ヨリ人吉病院ニテ三日間療養シ日向国飯野へ着、全廿五日都城ニ帰り自宅ニテ療養中七月廿四日官軍進入ニ付、全月廿九日川村參軍へ帰順仕候也、

前書之通戦地之事情具サニ上申仕候也、

鹿兒島県下日向国第十二大区

一小区都城

當時群馬県岩鼻已決檻囚

明治十一年二月十日

肥田景敏

一五 知識友次郎上申書

(朱「第十四号」)
今般太政官第四号御達之趣奉敬承候、明治十年二月上旬陸軍大将西郷隆盛・同少将桐野利秋・同少将篠原國幹私

学校党ヲ引率シ、政府へ尋問之筋有之ニヨリ、鹿兒島県
下ヲ出発シ熊本県川尻ニ於テ鎮台ヨリ通行ヲ支エ砲発ニ
及ヒ、夫ヨリ薩兵止ムヲ得ス進軍ニ及ヒシニ、三月上旬
熊本戦地ヨリ鹿兒島士族淵邊群平・別府晋介・逸見十郎
太三名帰県致シ、新タニ募兵ヲ引率シ、友次郎儀三月中
旬県下出発、大口ト申処ニ於テ第九大隊二番小隊ニ編入
セラレ、大口ヲ発足シ熊本県下人吉表へ進軍ス、同所ニ
淵邊等本営ヲ据ヘタリ、此時八代ニハ敵兵繰込ミ人吉ヨ
リ五里余ノ藤本村ト申処ヘモ亦敵兵二百五十名余繰込ミ
タルニ付、我一小隊藤本ノ間道へ番兵ヲ命セラレ直ニ繰
出藤本近辺へ番兵ヲ張りニ泊宿陣ス、此時本営ヨリ我隊
引揚ノ報知来ルニ付又人吉へ引揚本営へ答ヘケレハ、熊
本表へ差回ス彈藥警衛ヲ命セラレ護送致セシニ、此時已
ニ川尻ノ固メ敗レ敵兵熊本へ連絡ヲ通セシニ付、味方砂
取ト申処ニ引上、同所ニ於テ戦争ニ及ヒ利アラステ竹
宮ト申処ニ引上、同所本営河野主一郎ノ指揮ニ從ヒ右竹
宮本道ヨリ右翼へ守リヲ付ケ居候処、探偵ヲ以テ敵ヨリ
大進撃アルヘシトノ令ニ依テ其用意ヲナセシニ、果シテ
同十九日・廿日新南部・長峯・竹宮・保田窪・砂取ト申
処ニ掛ケ非常ノ大戦争ニテ、一旦味方ノ遊撃七番隊ヨリ

敗レ五六丁引退キ尚又応援ヲ得テ進撃シ元ノ砲臺ヲモ取
返シ二三時間砲戦ス、此時敵ハ軍曹一名・兵卒二名ノ死
骸ヲ捨テ、走ル、我隊モ亦戦死二名・負傷者三名アリ、此
戦争竟ニ味方敗レテ二十日ノ夜十二時頃本営ヨリノ指揮
ニ依テ木山ト申処へ引上、桐野ノ本営へ相答へ候処、右
木山ヨリ七合程引返シ竹宮本道ノ哨兵ヲ被命、我隊外二
小隊ト共ニ哨兵ヲ張ル、カ、ル処ニ北ノ方ヨリ砲声劇シ
ク近付来リケレハ、兒玉軍治ノ隊ヨリ応援ヲ乞ヒ来リ直
ニ繰出シ援ヒ戦ヒ、二三時間ニシテ味方竟ニ敗レテ木山
へ引上シニ、本営ヨリ各隊矢部ト申処ニ引上ヨトノ令ニ
付其儘木山ヲ出発シ矢部へ引上ル、是ニ於テ各隊名唱ヲ
改メ、我隊モ干城九番中隊ト成、中隊長長崎彦七也、同二
十五日矢部ヲ去テ人吉ニ引上ヨト本営ヨリ令ス、依テ各
隊総テ人吉ニ移ル、此間雨頻ニ降り谿間又ハ切所々々ハ
雪消ヘス八里ノ行程峻坂險路行進ノ難艱筆紙舌頭ニ述ヘ
難シ、辛フシテ尾前ト申処ニ着キ此処ニ七八日滞陣シ、
又去テ五月五日人吉旧城下ニ到リニ泊シタルニ、鹿兒島
県下大口ト申処ニ水俣ト申処ノ敵襲来シ、山野ト申処へ
本営ヲ据ヘタル処ヲ、我干城二中隊・行進一中隊・熊本協
同隊一中隊都合四中隊ニテ襲撃セシニ、敵強クシテ味方

敗走シ、人吉ノ内田(田野、人吉市商標)ノ尾ト申処ニ引上ル由報知ニ依テ、我隊并外四中隊ト熊本一番小隊ヨリ五番小隊マテヲ加ヘテ共二人吉ヲ立テ大口ニ進ミ、山野ノ敵砲壘ヲ襲撃シ、逸見十郎太ハ往昔新納武藏ノ佩ヒシ大太刀ヲ抜キ持テ先登シテ大ニ勝ヲ奏シ、敵ヲ駆テ水俣口ニ追出ス、此時敵ノ死骸ヲ捨テ走ル其跡ニスナイトル銃數十挺・彈藥・器械等分捕ス、味方死傷ナシ、尔後水俣口(水俣市)深川ト申処ニ持堪ヘ対戦スル事七八日互ニ勝敗アリ、此時ノ敵ハ警視隊ト覺フ、カクテ五月十一日友次郎右ノ下腹ニ銃丸ヲ受ケ進退自由ヲ得ス、病院ニ入テ治ヲ施スウチ追々味方敗軍シテ所々転遷シ、小林ナル病院ニ在リシニ六月下旬逸見十郎太ヨリ負傷者ハ医員ノ診察ヲ受ケ少シ快キ者ハ從軍スヘシト申来ル、友次郎傷所モ大方ニ快ケレハ、六月二十六日我隊(兼刈町)ノ本莊ト申処ニ居タルニ帰隊セシニ、隊長長崎彦七ハ先ニ大口(大口市山野)ノ小木原ト申処ノ戦争ニ陣歿シ、樺山嘉之助之レニ代ル、此時我隊ハ本莊ノ川越シヲ固メシニ廿九日ノ夜敵筏ニ乗テ潛カニ我砲壘ノ下ヘ来リ、不意ヲ襲ヒシカハ暫時防戦スト雖トモ我兵竟ニ利アラスシテ横川ト申処ヘ引上、該地町口ヲ固メシニ敵ハ益々尾撃シテ四方ヨリ攻来、此時当所ハ桂久武・椎原與右衛門本營ヲ据ヘ、彈藥・硝石

等夥シク貯ヘ有リケレハ爰ヲ奪ハレテハ味方ノ存亡ニ係レハ、死力ヲ尽シテ防クヘシト、敵シク本營ヨリ各隊ヘ令シタリ、之レニ依テ町口ニハ白砲ヲ備、左右ノ丘ヘハ隊ヲ配リテ襲撃ノ敵ト戦鬪半日許ノ中ニ、我分隊長養田久左衛門・押伍鮫島仙太郎并ニ兵士一名負傷シタリ、然レトモ彈藥等ハ悉ク踊ト申処ニ移シタリ、然ルニ右ノ山手ヨリ敗レ味方潰走スルヲ敵ハ透間モナク尾撃シテ味方ノ死傷ヲ引取ル間モナク這々踊ヘ引上タリ、同所ニ三四日滯陣ス、此時國府(國分市)ニハ鹿兒島口ノ敵線込ムニ付振武隊ヨリ進撃スルトノ報知来リ、我隊并外三中隊國府ノ背ヲ撃ント七月六日各隊ヲ繰出シ、敵ノ形状ヲ伺ヘハ早くモ引払ヒタル由ニ付我隊ハ大久保ト申処ヘ引上ル、同七日午前六時頃踊リ口ノ敵襲来シ尽日戦鬪勝敗ヲ分タス、翌八日未明ニ我ヨリ敵ヲ襲ヒシカハ敵五六丁引退クウチ、敵ノ応援来リテ盛り返シ劇シク戦鬪ス、味方又利アラスシテ漸ク防戦スルウチ敵又國府ノ本道ヨリ攻来ル、其ウチヘ切入リタル者ハ常山二番小隊長有屋田利成ニテ竟ニ此敵中ニ戦歿セリ、此死骸ヲ引取ル間モナク味方敗レ夫卒一名討レ兵士五名負傷シタリ、此死傷ヲ引取テ莊内(郡城)ノ西武村ト申処ヘ引上ケ爰ニ本營ヲ据ヘ所々ニ砲壘ヲ築キ哨

兵ヲ張り滞陣ス、同十四日午前六時揃ヒニテ逸見^(初)十郎太ハ八中隊并ニ四斤砲一門ヲ以テ霧島山ノ敵ヲ進撃スル、又別府九郎ハ三中隊ヲ率ヒ之レニ応援ス、此日終日戦闘スト雖トモ互ニ勝敗ナクシテ又西武村^(西岳、郡城市)へ引上ル、同十五日ハ滞陣二日ヲ暮シ、翌十六日行進隊本営相良郷左衛門財部ト申処ニ敵ノ見ヘタルニ付進撃スルトノ報知来ル、之レニ依テ逸見十郎太ノ指揮トシテ我隊ト外ニ二中隊ト合セテ三中隊ヲ繰出シ、財部ノ左翼ニ掛リシニ敵モ不意ヲ撃レ大ニ敗軍シテ戦死七八名死骸ヲ捨テ、走ル、此時スナイトル数十挺其外弾薬多ク分捕ス、然レトモ敵ハ遠ク退カス終日戦撃シ竟ニ互ニ休戦シテ西武へ引上ケ、翌十七日外口ノ固メ敗レシニ付莊内町へ引上ケ、我隊外ニ一中隊ハ逸見十郎太ノ指揮ニ依テ財部ニ繰込ミ所々哨兵ヲ張り居シニ、同廿四日敵ノ大進撃ヲ受ケ各所ノ味方悉ク敗レ散々ニ成テ都城へ引上タリシニ統テ又同所モ敵ニ乗取ラレ、山ノ口マテ引上ケ尾撃ヲ防カン為ニ都ノ城ノ本道ニ哨兵ヲ張りシニ、廿五日ノ早天ニ案ノ如ク敵又襲ヒ来リシカハ、哨兵ニテ小時間砲撃シタレトモ又敗軍シテ宮崎^(宇ノ木、田野町)ノ内學貫ト申処ニ兵ヲ集メテ、清武ト申大川筋ニ守リヲ付ケタリ、二十六日午前九時頃ヨリ敵ハ川ヲ渡シ

テ襲来シ午后三時頃マテ劇戦シ、宮崎本道口へ進ミ来ル敵ヲ味方砲壘ノ内ヨリ射倒ス事数知レス、斯ル処ニ三時過キ川上ノ味方ヨリ敗レケレハ我持場ノミ支ヘ難ク同シク引上タリ、此時熊本協同隊中根某足ニ負傷シタリ、扱大川ヲ舟ニテ渡シ味方一人モ残ラス宮崎町へ引上ケ舟ヲ此方へ引付ケ、本営ヨリ敵ヲ偽引ンカ為メ中村ト申町家ヲ焼払ヒ大川筋ニ守リヲ付ケ、当町中ノ疊ヲ取テ砲壘ヲ築キ二十七日八日ト滞陣ス、同廿九日午前七時頃川上へ劇シク砲声聞ヘ、各隊へ斥候ヲ出シ候様本営ヨリノ命ニ依テ各隊繰出セシニ、早ヤ川上モ敗レ砲声味方ノ背ニ廻リ宮崎旧県庁ヨリ七八丁モ西へ敵兵繰込、人家ニ火ヲ放チ味方引上ル間モ無ク佐土原ノ本道ヲ敵ニ取切ラレ、詮方ナク浜手ニ下リ海辺ヲ伝ヒ三里ニ余ル道ヲ経テ佐土原^(佐土原町)ナル廣瀬町ニ引上ケ此処ニ一泊シ、翌卅日同所発足高鍋ニ引上ル、同所ノ川筋ニ一時敵ヲ防カント守リヲ付シニ、早クモ敵襲ヒ来リ午后四時頃ヨリ砲戦シテ其夜ハ戦ヒ通シ、八月一日午前五時頃ニ至リ敵川上ノ浅瀬ヲ渡シ味方ノ背ニ廻リケレハ、竟ニ又敗軍シ美々津^(日向市)へ引上ケ、同三日大川ニ舟橋ヲ架シ味方数万ノ兵ヲ一人モ残サス渡シ果テ、舟ハ又此方ニ引付タリ、我隊川筋ノ中央ニ砲壘ヲ築キ固

メタル処、翌四日午前九時頃ヨリ敵ハ川向ノ丘へ砲臺ヲ築キ川下ニハ又大砲臺ヲ据へ、此方ノ人家ヲ焼カント砲発スル事間断ナク竟ニ人家焼失ス、之レニ因テ互ニ川ヲ隔テ、砲撃シ我小隊長和田軍吉負傷シタリ、斯クテ勝敗未タ分ラサル処ニ、敵(日向市)細島へ軍艦ヲ廻シケレハ此時細島ニハ縊ニ一小隊ノ守リニテ此地ニ上陸セラレテハ大事也ト逸見持口ノ隊ヲ繰出セト桐野ヨリ報知来レリ、之レニ依リ梅田郷八郎隊ヲ一中隊繰出シケルカ、兎角スルウチ我隊ノ持場ヨリ三里程ノ川上ニ砲声烈シク聞ヘ斥候ヲ出シ見レハ、山毛村ノ固メ已ニ敗レ敵ハ(日向市)富高新町ニ押出シ来リ我跡ヲ取切り美々津通行ノ本道ナル大橋ヲ焼落シ、正面ニ砲臺ヲ築キ所々哨兵ヲ張り籐リヲ焚キ、守リ最厳重ナレハ、午前四時頃貴島・中島・逸見ヲ始トシ兵士三百人許ヲ率ヒ(日向市)鹽見村ノ川ノ浅瀬ヲ求メテ敵ノ形勢ヲ伺ヒケルニ、此処ハ警備少シ薄カリケレハ直ニ右ノ人数ニテ匪ヲ衝ヒテ撃チ破リ延岡へ脱シタリ、此時我中隊長樺山嘉之助ハ所用有テ本営ニ在リシカ、右貴島等ト共ニ延岡へ行キタリシヲ我隊ニハ知ラスシテ引上ル事ヲ遅クセリ、其ウチ先ニ脱シタル貴島等ヨリ敵ノ背ヲ衝キ道ヲ開クヘシ、其時困ミヲ破ツテ出テ来レト報知来リシニ付、待テ共

音モ無ク竟ニ四面敵ニ逼ラレ沖モ対戦成リ難シト、思ヒ々々ニ散乱シテ山中へ遁レ入りタリ、同夕刻ニ至リ友次郎ハ本道ニ出テ見レハ、先ニ散乱シタル同隊井外隊ノ者四五十人ニ出逢ヒテ、路傍ノ明キ家ニ集リ評議シケルカ、彈藥ハ尽キ果テ兵士ハ疲ル、何分此小勢ニテハ迎モ戦争出来間敷ク、之レヨリ夜ニ紛レ敵ノ困ミヲ遁レ出テ延岡ノ地へ引上ント評議決セシ折柄農夫二人出来レリ、依テ此辺へ敵ハ居スヤト尋シニ、居サル由答ヘテ直ニ引返シ、我形勢ヲ通セシト見ヘテ敵一小隊許潜カニ此人家ヲ取巻キタリ、之レニ依テ集合シタル者ノ中ニハ直ニ逃出シタル者モ有リタレトモ、我同隊ノ者十四五人ト干城中隊長原田某ナル者有テ、此敵ノ為サン様ヲ見居タルニ、敵ノ中ヨリ婦順セヨト申候ニ付、其儘立出降伏仕候、此敵ト記セシハ新撰旅団・第二旅団、(東郷町)福瀬村ノ本営ニテ同所へ護送セラレタリ、右戦地ノ形状記憶仕候丈録上仕候也、

鹿兒島県鹿兒島西田村住

即今群馬県懲役人

明治十一年二月

知識友次郎

一六 松元直之丞上申書

(米)第十五号
今般鹿兒島逆徒御征討始末編輯相成候ニ付、事情且戦地ノ形状等詳悉筆記シ可申上段御達之趣奉承知、左ニ録上仕候、

直之丞儀

兼テ私学校へ入校致居候処、中原尚雄等口供云々ノ事件ニ付、客年二月西郷隆盛政府へ尋問ノ筋有之上京ニ付、西郷ハ陸軍大将ヲ以テ私学校生徒旧兵隊途中保護ノ為随行致度協議シ、二月十五日^(村田新八隊)二番大隊十番小隊分隊長ニテ鹿兒島県下出発、同廿一日熊本県下川尻へ着候処、先隊ノ者へ鎮台兵狼ニ発砲致候ニ付、不得止開戦致遂ニ台兵逃去り当日^(熊本)高橋ノ川筋ヲ相固ム、翌廿二日未明ヨリ熊本城攻戦相始リ、吾隊午前十時比花岡山ヨリ八幡山へ攻戦一昼夜ニシテ外隊ト交代シ、花岡山下ノ春日村へ引上ケ翌日午後六時同所ヲ出発シ翌未明ヨリ^(五名市)高瀬へ進撃、終日相戦ヒ勝敗ヲ分タス山鹿へ引上ケ、翌日本営ヨリノ指揮ニ從ヒ南ノ關街道ヲ相守リ、道ヨリ右ノ山上ニ砲臺ヲ築キ相固メタリ、諸隊ハ鍋田井^(山鹿市)ニ吉田村辺へ壘ヲ築キ守ヲ付ク、其比諸隊ヲ編制シテ中隊トナシ、直之丞儀小

隊長ヲ被申付タリ、右吉田村・鍋田辺へハ敵追々襲來イタシタレトモ要所ノ地ニテ抜ク事能ハス毎モ味方勝利ナリ、三月十八日比田原坂ノ味方敗軍報知アリテ、田原坂ノ敵押出タルトノ事ニ付、山鹿ヨリ植木ノ間ヲ可相守ノ命令ニ依リ、吾左小隊外ニ中隊ヲ以テ進發植木ニ到ルニ、最早^(熊本町)向坂辺ニテ劇戦之有リ味方勝利ニテ、敵ノ死骸二百余名道路ニ斃レ居候由、味方ノ死傷数十名アリ、夫ヨリ敵ハ植木ノ本道ニ砲臺ヲ築キ相固メタリ、同日又候植木へ進撃シケルニ、敵ハ町ノ裏手学校ノ石塀ヨリ銃ヲ打出シケルニ味方闕ヲ作り拔刀ニテ無二無三ニ切込シニ、敵散々ニナツテ逃ケ走ル、遂ニ石塀ヲ乗取リ此所ニテ烈シク相戦フ、終日終夜ノ戦ニ味方大ニ劣レ、翌朝交代シ此所ヲ引上ク、午後四時比砲声壮シニ聞ヘシニ吾隊直ニ進軍候処、最早石塀ヲ敵ニ乗取ラレ三四丁引退キ防キタリ、吾隊モ持場ヲ定相固メケルニ、本隊ハ鳥ノ巢^(西合志町)へ引上タル由ニ付、直ニ鳥ノ巢へ到リ本営ニ差越候処、中隊長別府九郎ヨリ國分隊ト交代スヘキ旨相達シ、吾隊ハ鳥ノ巢へ引上ケタリ、翌未明本営ヨリ左ノ方ニ当テ大小砲烈シク相聞ヘ候ニ付、直ニ吾隊ヲ操出シ馳付タルニ戦ヒ酣ナリ、其時吾隊右國分隊ノ砲臺へ駈付相戦フ、敵ハ山上ニ砲臺

ヲ築キ大砲類ニ連発ス、味方殆ント拒キ兼タル躰ナリケルニ、外將校等ト衆ヲ励マシ奮戦、敵進ム能ハス午後五時比敵遂ニ引退ク、此時持場ヲ替ヘ台場ヲ築キ固メタリ、三月廿九日朝六時比敵襲来ス、此時霧深くシテ咫尺モ分タス、暫時ニシテ吾壘ノ下迄押寄せ開テ作テ銃砲烈シク打出シケルニ味方モ是ニ応シ防キ戦ヒシカ遂ニ支ル能ハス引退キシニ、最早敵後ニ廻リ漸ク植木ノ街道ニ兵ヲ伏セ戦フタリ、此時二中隊ヲ以テ横撃シケルニ敵是ニ辟易シ動キ立タル所ヲ発砲或ハ抜刀ニテ切込ケルニ、敵散々逃ケ走ル、味方はニ氣ヲ得進撃シテ又本ノ壘味方ノ有トナル、於此砲壘ヲ築キ固ク相守ル、此戦吾隊手負僅ニ二三名諸隊ハ相分ラス、敵ノ死骸三四十名道路ニ斃レ居候、四月上旬比吾持場ヨリ左ノ方ニ当テ砲声壮シニ聞ヘシニ斥候ヲ出セシニ、敵襲来烈シク戦フトノ報告アリシニ、吾壘益固ク守リ今ヤ遅シト待カケタルニ敵来ラス、此戦須臾ニシテ休ヌ、其後四方ヨリ敵襲来セシニ衆ヲ励マシ烈シク戦フ、午後二時比ニ至テ敵引退ク、此戦ヤ吾隊死傷十五名、敵士官一名・兵卒ニ拾四五名計斃レ居候、同十三四日比川尻ノ味方敗レシ報告アリシニ本営ヨリ大津ヘ引上クヘキトノ指揮ニ従ヒ、翌未明各隊相纏メ引退キシ

ニ、此朝霧深くシテ難ナク大津ヲ差テ操出ス、途ニシテ後ヲ顧レハ最早敵打入タリト見エ黒煙壮シニ相見エタリ、四月十四日比大津ニ着陣ス、同十六日朝八時比町ノ背面(合志町)竹迫街道ニ当テ砲声壮シニ聞ヘシニ、吾隊直ニ操出シ進ミシニ、鉄肥隊ノ持口ニ強ク掛リケルニ共ニ力ヲ尽シ奮戦須臾ニシテ敵危ク見エケルニ、味方開テ作抜刀縦横ニ切込シニ敵大ニ敗走、味方隊ヲ進メ逃ルヲ追テ進撃スル事一里半計銃器等分捕アリ、午後五時比大津町ヘ引上ケタルニ、本営ヨリ熊本街道ヲ相守ルヘキノ指揮ニ従ヒ台場ヲ築キ固ク相守ル、同十八日比敵襲来シ竹迫ノ方強ク懸リタリト見エ砲声烈ク相聞ヘ、吾持場ヘハ敵懸リ来ラス、其夜本営ヨリ諸隊ヲ纏メ引上クヘキトノ事ニ付、午後十時比本営前迄引上ケ届出候処、矢部ニ引上ヘキノ指揮ニ従ヒ、即チ出発ス、同月廿日矢部ニ着陣ス、諸道ニ哨兵ヲ出シ防禦ノ用意ヲナス、此時ニ当テ諸隊名称ヲ替ヘ、吾隊奇兵隊ト改号、同廿五日同所出発馬見原ニ着陣ス、夫ヨリ江代(水上村)ニ着、奇兵二十四中队ヲ以テ豊後地ニ突出ノ議ニ決シ、四月二日比富高新町(日向市)ヘ着陣ス、同所ヨリ三中队ヲ以テ細島(日向市)ニ操込シニ、同港ヘ猛春艦定泊ス、即チ海岸ノ山上ニ要所ヲ見定哨兵ヲ出シ置キ、午後五時比

右猛春艦出艦ス、翌日峯崎半左衛門外三中隊ト交代シ亦細島ニ退キ、同所ヨリ延岡へ操込^練ミ宿陣ス、此日本營ニ到リシニ、是ヨリ先江代ヨリ中隊長別府九郎・神宮司助左衛門ノ兩名鹿兒島ノ事情且戦地ノ形状等探偵トシテ差越居候処、此時帰隊シテ、鹿兒島ノ形状ヲ見ルニ実ニ難忍、是非此節ハ五中隊計モ操出シ敵兵ヲ追除シ且万民ノ苦ヲ救ハン、若シ五中隊ナラスンハ吾等二中隊計ニテモ操出サント、野村忍助外中隊長等ト激論數刻ニ及ヒ遂ニ二中隊ニ決シ、吾六番中隊并十四番中隊ナリ、翌日延岡ヲ発シ、五月廿六七日比鹿兒島催馬^{セバル}樂ニ着陣ス、即チ本營ヲ吉野村實方^{サネカク}ニ構へ、尤伊敷村ニモ本營ヲ据へ中島健彦・貴島清等在陣タリ、翌日本營ヨリノ指揮ニ從ヒ催馬樂前馬ノ背ト云所ニ砲台ヲ築キ相固ム、敵兵ノ様ヲ見ルニ城山諸所ニ砲臺ヲ築キ祇園洲・上ノ岡或祇園橋・西田橋・高麗橋・武之橋諸所ニ壘ヲ築キ皆柵ヲ結ヒ廻シ防禦ノ備ヲナシ、味方ハ武岡・唐湊岡・郡元村・涙橋辺或ハ桂山ニ砲台ヲ築キ、敵ノ本營或ハ屯集ノ所ヲ見テ打下ス、六月廿四日黎明涙橋ノ方ニ当テ大小砲壯ニ聞ヘシニ、吾隊斥候ヲ出セシニ最早涙橋并ニ唐湊岡ハ攻取ラレタリトノ報告ニヨリ、吾左小隊・十四番中隊一小隊外二中隊

計ヲテ援兵トシ催馬樂ヲ發シ、薩摩迫ヲ下リ田上村へ出候処、敵ハ唐湊岡・二本松辺ニ充滿セリ、暫時アツテ岡ヲ下リ武岡ニ駈上リ砲声烈シク聞シカ、味方引退ク鉢ニ見エケルニ吾隊并十四番中隊応援セント直ニ岡ニ駈上リシニ、敵最早十二斤砲台前迄攻付候ニ付、吾隊ハ右翼ニ小高丸岡ノアリシニ伏セ烈シク戦フ、敵援兵続ケハ味方援兵続ク、互ニ勇ヲ振ヒ衆ヲ励マシ奮戦ス、午后五時比吾右傍五六間ノ処ニ巡查兵ニ拾名計突出シケルニ味方狙撃シ四五名撃斃シタレトモ此時味方彈藥乏シク且銃器モ損シ如何トモスル能ハス、遂ニ散々ニナツテ大ニ敗走セリ、此時頻ニ大雨降り來リ諸隊ハ水上坂上或ハ薩摩迫辺ニ守ヲ置キ相固メタリ、吾隊并二十四番中隊ハ催馬樂ニ引上ケ候、此戦ヤ吾隊戦死四名・負傷八九名・行衛不知者二名アリ、同廿五日午前十時比敵兵華野村ヨリ催馬樂ノ吾宿陣セシ背面ノ岡ニ突出シ頭上ヨリ彈丸ヲ打下セシニ拒戦スルニ違アラス、遂ニ是ヲ打捨テ實方差シテ引退ク、敵兵催馬樂辺ニ充滿シ且雀ヶ宮辺ヨリモ進ミ來リ、同所ヲ放火ス、此夜吉田郷ニ引上一宿、翌廿七日帖佐^{（帖長町）}ニ宿シ加治木ニ引上ケ、本營ヨリノ指揮ニ從ヒ帖佐川筋ヲ固メタリ、廿九日比國分郷迄引退キ、七月三日比敷根^{（國分市）}ニ

着陣ス、夫ヨリ末吉ニ転シ恒吉(大隅町)ニ移リ、七月十三日比大崎郷ニ敵兵屯集シタルトノ報告ニ依リ、翌日午前五時比恒吉発程大崎ニ到リ候処、町ノ背面或ハ町口ニ柵ヲ結ヒ、吾隊町ノ背面ニ懸リ烈シク戦ヒケレトモ敵塁堅フシテ拔事能ハス、互ニ防戦午後八時比遂ニ相引ニ引退ク、又恒吉ニ引上ケ宿陣ス、翌未明ヨリ進撃ノ処途中ニ敵兵伏セ不意ニ打掛候ニ付一旦其場ヲ引退キ諸所ニ軍配シ攻撃セシ処、午前十時比敵兵追々引退キケレハ味方闕ヲ作りテ追撃、敵散々逃ケ走ル、頻リニ追撃海辺迄到リシニ敵ハ高山指テ逃行ケリ、夫ヨリ惣隊恒吉ニ引上候、同所ヨリ(御北町)市成郷ニ進撃シケルニ敵ハ小高キ岡ニ塁ヲ築キ、味方攻上ントスレトモ敵眼下ニ見下シ発射シケルニヨリ進ム能ハス、遂ニ勝敗ヲ分タス午後八時比末吉ニ引上ケ、七月廿三日(大隅町)岩川郷ニ敵兵操込タルトノ報告アリケレハ、同所ヨリ直ニ諸隊ヲ操出シ押寄せタルニ、敵ハ福山街道諸所ニ塁ヲ築キ要害ニ構ヘテ固メケルニ攻抜ントスレトモ術ナク勝敗決セス、夜ニ乘シ亦々末吉ニ引上ケ、岩川(大谷原、大隅町)大殿原辺ニ哨兵ヲ出置キ候処、翌廿四日未明大殿原ノ方ニ当テ砲声烈シク聞ヘケルニ、吾隊斥候ヲ出セシニ最早大殿原ノ守モ敗レ敵兵間近ク押寄せ候トノ報告、直ニ吾隊ヲ操出

シケルニ敵雲霞ノ如ク充滿シ、直チニ四方ニ分レ闕ヲ作テ押寄せケルニ、味方モ大ニ奮戦シ力ヲ尽シテ拒ケトモ衆寡不敵遂ニ防ク能ハス、且戦且退末吉町ニテ喰止ント戦ヒタルトモ、敵四方八面ヨリ攻立ケルニ味方遂ニ敗走ス、吾隊残ル者三四名逃ル、路ナク於此決心シ、第一旅団ノ軍門ニ降伏セリ、夫ヨリ鹿兒島九州臨時裁判所へ相廻サレ、御糺ノ上旧城内ニ拘留ニ相成謹慎罷在候処、八月十三日臨時裁判所ニ御呼出ニ相成、長崎へ御差廻ニ相成段奉承知同日鹿兒島出帆、同十五日長崎へ着第二艦倉へ入艦被仰付罷在候処、同廿四日九州臨時裁判所ニ於テ懲役三年被申付候事、

今般太政官第四号御布達ノ趣奉拜承戦地ノ形状大概右之通取覚申候間上申仕候、以上、

鹿兒島県下武村之内

上之蘭居住

群馬県岩鼻懲役人

寅二月

松元直之丞

一七 佐藤一弘上申書

(朱)第十六号

太政官第四号御布達之云々奉敬承則左ニ録上仕候、

佐藤一弘

客年二月薩兵肥後国境ニ至ル乎熊本之人民疑懼恟々穩ナラス、同月十八日県庁巡查ヲシテ府下一同退避ノ令ヲ下ス、此日ヨリ翌十九日ニ到ル、熊本ノ雜沓一方ナラス、同十九日鎮台該城ニ火ヲ放ツ、同廿日薩兵川尻ニ到ル、官軍是夜斥候一小隊ヲ川尻ニ出ス、此地ニ兵端ヲ開ケリ、官軍戦ヒ利アラスシテ兵ヲ城中ニ引ク、同廿二日薩兵進撃城ヲ閉ム、統テ諸道軍ヲ進ム、是日小倉鎮台ノ先鋒ニ中隊植木ニ到ル、後軍ハ山鹿・高瀬ニ陣ス、是夕両軍植木ニ会戦ス、官軍利アラスシテ高瀬ニ退ク、山鹿ノ官軍戦ハスシテ南關ニ退ク、我軍替テ山鹿ニ陣ス、是ヨリ山鹿・高瀬連戦アリ、山鹿ノ戦ヒ吾軍常ニ利アリ、高瀬ノ戦ヒ互ニ勝敗アリト雖トモ終ニ我軍利アラスシテ退キ、田原ノ嶮ニヨリ皆ヲ築キ之ヲ守ル乎官軍屢攻撃互ニ勝敗アリ、終ニ三月十九日ノ戦ヒ吾軍大ニ敗レ植木ニ退、官軍追兵統テ至ル、此ニ於テ吾応援モ復タ交モ来リ左右ニ伏ヲ設ケ正面ノ兵佯リ走ル、敵兵復タ追進シテ伏ニ陥ル、伏左右ヨリ起リ刃ヲ接テ鬪フ、敵軍大ニ利アラスシテ退ク、此戦也吾軍死傷僅ニ数十名敵兵ノ死骸我地ニ有ルニ

百八十余名、是日田原ノ敗ル乎吾山鹿ノ軍背後ニ敵ヲ受

ルヲ以テ、本營ノ令ヲ待タスシテ退ク元山鹿ノ大将ハ桐野ナリ、

死スルヤ西郷大将本營ヨリ桐野ヲ呼返セリ、當時、此ニ於テ一弘儀ハ三

月下句鳥ノ巢ニ於テ斥候トナリ、此地戦争頻リナリト雖

トモ互ニ勝敗ナシ、同十九日一弘儀ハ菊池・竹迫諸方斥候

ニ出ス、既ニ菊池ニ到ル乎砲声頻ニ聞エケレハ直ニ走帰

スル乎戦既ニ止ム、是日ノ戦争ハ我軍数日ノ連戦兵寡ニ

シテ交番ナシ兵皆疲労ス、敵我哨兵ノ惰ヲ偵直ニ吾本營

ニ突進ス、吾軍少ク退ク、諸壘皆ナ敵有トナル、須臾ニ

シテ我軍奮闘進撃シテ接戦ニ及フ、是ニ於テ諸壘又タ吾

有トナル、是戦也吾軍死傷八九名ニシテ、敵ノ死骸我地

ニ有ル者二十余名、尔来四月十五日ニ至ル、屢戦フト雖ト

モ互ニ勝敗ナシ、曩日川尻ノ敗ル乎是日ヲ以テ植木・木

留・鳥ノ巢ノ諸軍皆木山ニ引揚タリ、一弘儀ハ此敗ニ引、後

同月廿四日県庁ニ自首仕候、

熊本県第六大区四小区菊池清水邑

居住 当時群馬県懲役人

明治十一年

佐藤一弘

一八 篠原源次郎上申書

(朱)第十七号一
口上

篠原源次郎

鹿兒島県逆徒征討之始末編輯候ニ付、右賊徒懲役人之内
其事情等詳悉致シ候者ハ、該事之顛末筆記仕差上候様被
達仰趣謹て奉畏左ニ申上候、

私事

(三月廿六日)
旧二月十二日宿元兇足任、大口郷ト申処迄差越申候処、右
大口ニテ第九大隊七番小隊隊長被申付、肥後国八代エ出
発仕、其以後戰場之始末数度ニ相及混雜中之事ニテ手帳
等モ紛失仕、今更熟考申候得共、地名ハ勿論月日等確ト
取覚不申、就てハ形状等モ前後仕申候ニ付、別段申上程
之慥成儀存付不申候、

右之通御座候間此段形行申上候、

鹿兒島県第八大区

小峯区田布施郷

明治十一年寅二月八日

篠原源次郎

一九 竹下盛隆上申書

(朱)第十八号一

盛隆儀

明治七年比ヨリ私学校へ入校致シ其后自己勉学ノ為メ学
校へハ当直ノ節迄出席罷在候、偕テ私学校ハ西郷隆盛・
桐野利秋・篠原國幹等共ニ是ヲ設立シ、其趣意タル哉尊
王憐民ノ大体ヨリ修身ノ研究等主ニ教育スルニ依リ、
大ニ士族タル者ノ勤ム可キ儀ト思込ミ從事致シ居候処、
客歳二月上旬日ハ取忘
申候学校へ出席セヨトノ事ニ付即チ出席
致シ候処、今般東京警視庁ヨリ警部中原尚雄以下数名帰
県致シ、私学校党ニ離間ノ策ヲ行フノ而已ナラス、剩へ
西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セント計リシ事発覚シ、悉ク
捕縛糺問ノ処已ニ白上ニ及ビ候ニ付、陸軍大将西郷・陸
軍少将桐野・陸軍少将篠原等右不正ノ件々政府へ尋問ノ
為メ、不日東上ノ挙之レ有ルニ付、私学校生徒モ警衛ノ為
メ随従スヘクト決議シタルニ付、各右様相心得尚明朝旧
練兵場へ出頭可致段伊地知彌兵衛ヨリ達セラレ、翌朝出
頭致シ候処、盛隆ニモ兵隊ノ内第三大隊七番小隊岩切喜
次郎隊へ編入セラレ(永山弥一郎隊長
二百名ヲ以テ二小隊トシ、
十小隊ヲ以テ一大隊トス)、同十六日ヲ以テ
鹿兒島県下ヲ出発シ、夜白兼行同二十二日午後一時比熊
本県下川尻へ到着致シ候処、已ニ同所ニ於テ台兵我カ先
鋒ノ前途ヲ遮リ発砲ニ及ヒ、竟ニ鎮台攻撃ニ相成リ戦ヒ

酣ナル由ニ付、即チ我カ七番小隊モ向江町(河内町)へ操込ム、然ル

処翌二十三日ノ未明河内ハ高瀬通行要衝ノ地タルニ付同

所へ出張相固ム可キ様西郷ヨリ岩切(七番小隊長)へ命セラレ、即チ河

内へ発向同所船津村へ滞在セシニ、同二十五日ノ早朝熊

本県人(姓名)来テ、高瀬ノ方へ敵ノ大勢来着ノ報知ニ依リ、

即チ我カ七番小隊并ニ外二小隊ト高瀬へ赴キ候処、敵ノ

斥候兵相見へ行成り砲撃ニ及ヒシニ敵ハ其儘逃走ス、其

跡ニ敵ノ死骸二ツヲ見ル、尤敵逃走ニ付高瀬ノ市街ニ滞

陣セシ処、午後四時比ニ至リ山手川手ノ両方ヨリ敵ノ大

勢高瀬ヲ取り包ム勢ヒニ付、同所町家ノ脇出島ノ際へ出

テ砲撃ニ及ヒタル処、敵ハ山ノ中央ヨリ対撃セリ、然レ

トモ敵味方ノ距離遠クシテ各別勝敗ナクシテ戦ヲ止ム、

此時熊本隊ノ我ニ応スル者二小隊ナリ、同八時過キ地理

不案内ニ付各隊町内へ曳揚ケ滞陣ス、右高瀬ハ四達ノ地

ニシテ寡兵ニテハ防禦届キ兼ルニ付同十時比伊倉(五名市)へ曳揚

ル、此戦ニテ我隊僅ニ負傷二名アリ、同二十六日朝敵襲

来ルニ付直ニ隊ヲ整ヘ寺田(五名市)ニ劇戦ス、敵味方ノ距離纔ニ

シテ我隊ヨリ或ハ抜刀ニテ切り込ムアリ、然ル処ニ敵我

隊ノ背面ヲ襲フニ付、一旦曳揚ケ敵ノ横合ニ出テ砲撃ス、

メ元ノ船津(河内町)へ曳揚ル、此戦ニ我カ隊戦死七名、負傷十名ア

リ、日数十四五日ヲ経過シテ後、船津ハ外隊へ譲リ野出(河内町)

村へ移リ壘ヲ築キテ廿四日相固ム、是亦高瀬ノ別路要

衝タルヲ以テナリ、四月上旬ニ至リ木留(樺木町)へ移リ壘ヲ守ル、

然ルニ盛隆儀同十二三日比ヨリ疾病ニ罹リ病院ニ入り療

養ヲ加ヘ空シク日ヲ弥リ、所々転遷ノ末漸々快方ニ赴キ

候処、振武六番中隊ニ帰隊ス、是ヨリ先キ鹿兒島兵各隊

悉ク名称ヲ改メタリ、六月二十四日ノ未明鹿兒島郡元村

浜橋へ敵襲来ノ報知有之ニ付応援ノ為メ進軍ノ処、既ニ

味方敗ニ及フニ付、唐湊ノ紫原ニ出テ敵ノ背ヲ衝ントセ

シニ、敵早ク哨兵ヲ張り其策成ラズ、然ル処ニ又武岡ナ

ル十二斤砲台ニ敵ノ襲撃最劇シク、直ニ応援ニ赴キ非常

ノ劇戦数刻ニ及フ、此時敵ノ距離甚々間近ク、礮・草鞋ナ

ド投打ツ程ニテ、味方既ニ彈藥モ尽キ果タルニ依リ、十二

斤ノ空砲ヲ相固ニ発シ切り入ントセシニ、敵ノ砲撃益々

劇シク彈丸雨注ノ如クナレハ容易ク切込ミ得サリシニ、

忽チ見ル我カ左側ヨリ警視隊直線ニ劇発シ抜刀隊モ亦切

り込ミ来リ頗ル苦戦、竟ニ味方敗ニ及ヒ、水上坂ニ兵ヲ

纏メ壘ヲ築キ相守ル、此日我カ隊死傷頗ル多シ、翌二十

五日宮ノ城口ノ敵処々打破リ吉野ノ背ヲ衝キ来リ、水上

坂ハ無用ニ属スルニ付本營ノ指揮ニ依リ下田へ引上ル、
 同二十六日午前九時比敵襲来リ互ニ砲撃シ勝敗未タ分ラ
 サル中、報知ノ誤聞ニテ隊ヲ曳揚ケ重富ニ操込ム、同二
 十七日加治木へ移リ夜ニ入テ蒲生エ軋シ滯陣ノ処、同二
 十九日吉田ノ涼松ト云ル処へ敵襲来ノ報知アリ、直ニ応
 援ニ赴ントセシニ、味方既ニ敗レ兵ヲ曳揚ケ来ルニ逢フ、
 爰ニ於テ兵ヲ伏セ相待ツ処ニ敵続テ襲来リ互ニ発砲、竟
 ニ敗ヲ取り兵ヲ溝邊ノ麓へ曳揚ケ、又加治木へ転ス、此
 戦ニ我カ六番中隊長毛利權平出テ来ラス（后開クニ味方ノ敗ヲ憤
 リ在家ニ入テ腹腹セシ
 申）、然ル処志布志・高隈辺へ敵屯集セル由報知アリ、是
 ニ依テ中島健彦・貴島清振武全隊ヲ引率シ攻撃セントテ
 押シ出シ、松山ト云フ所へ着セシニ、敵ハ早クモ引上タル
 由ニ付所々打廻リ恒吉ニ本營ヲ据タル処、百引ニ敵ノ本
 營有之ノ報知アリ（大隅町）、午後八時比ヨリ中島・貴島ノ両
 人振武十二中隊ヲ以テ（人員總テ殆
 ド五百名）進軍、翌朝午前八時比敵ノ
 不意ヲ討タル処、敵モ一支ハ支ヘタレトモ竟ニ敗軍、逃走
 スルヲ尾撃シテ手輕ク引上ル、此時四斤砲二門・スナイ
 トル銃数十挺其外金若干円・彈藥・什器等分捕シ、會計
 吏老名並ニ医員老名生捕リ（何レモ姓、
 名ヲ失ス）、兵卒・夫卒ノ降ル者五
 十人ニ余レリ、同所敵營近傍へハ近衛鎮台ノ死骸百ニ余

レリ、偕テ我隊ハ其夜恒吉へ曳揚ケ、又日ヲ換ヘテ大崎
 麓ノ敵ヲ進撃セン為メ出発セシ処、教導ノ為メニ荒佐ナ
 ル敵ノ砲台前ニ偽引入レラレ、劇戰數刻竟ニ味方敗ニ及
 ヒ、人家ニ放火シテ曳揚ル、此戦ニ味方ノ死傷多シ、又
 翌日大崎麓ニ進撃セシニ敵敗軍シテ死骸ヲ棄テ、走ル、
 此時敵ノ軍曹老名（姓名ヲ
 失ス）引後レ銃ヲ肩ニシテ彈丸雨注ノ中
 ニ立居タリ、我レニ降レト呼ヒシニ、帽ヲ脱シ銃器ヲ伏
 セ跪テ礼ヲ成セリ、進テ是ヲ見レハ負傷者ナリ、直ニ病
 院ニ入レ療養ヲ加ヘタリ、夫ヨリ志布志へ移リ二泊シテ
 又莊内へ移リ山田へ軋セシ処、高崎へ敵屯集セル由報知
 ニ付、中島・貴島振武隊並ニ千城隊・雷撃隊ヲ引率シ進
 撃ノ処、初戦味方勝利ニテ敵老名（姓名ヲ
 失ス）生擒リ沓里余リモ
 追崩セシニ、敵又々盛返シ来リケレハ、我隊ハ元ノ山田
 へ曳揚ケ、日ヲ替ヘテ又々進撃セシニ、道路ニ虎落ヲ構ヘ
 要害頗ル嚴ナル故竟ニ討入ルコト不能又山田へ引上ル、
 是ハ之レ七月中旬ナリ、偕テ不日ニ敵ノ総進撃アル由村
 田新ハヨリ報知アリ、因テ（財部町）通山へ在ル処ノ行進隊ハ未吉
 へ移リ、其跡へ我振武隊ヲ移ス、七月二十四日ノ早朝果
 シテ敵ノ総進撃ニ遭ヒ、全隊衆寡敵セス我軍敗レ、且戰
 ヒ且走り遂ニ四方へ散乱セリ、茲ニ因テ盛隆ニモ処々潜

伏ノ末、同二十六日ニ至リ、(日南市西端)内白木俣村ニ於テ別働

隊第三旅団第壹大隊迫田少警視ノ軍門ニ自首帰順セリ、

右ハ今般御達ノ趣ニ付戦地ノ形状等詳悉仕候次第筆記可

差上ノ処、戰場劇ノ際手帳等遺失イタシ、尔来年ヲ超

ヘ日ヲ弥リ何分記憶シ得ス、胸間ニ浮ビ候丈ハ録上仕候

得共月日等多ク忘却仕各別御採用ノ件モ有之間敷、近頃

恐怖仕候、此段可然御執達被下度奉願候也、

鹿兒島県下鹿兒島第壹大区式小区

百九番地居住

当時群馬県已決檻囚

(明治)
十一年二月

竹下盛隆

二〇 加藤彦十郎上申書

(余)第十九号
鹿兒島逆徒御征討始末編輯ニ付事情及戦地ノ形勢等可奉

上申旨御達之赴奉謹承見聞之次第録上仕候、

明治十年二月西郷陸軍大將政府へ尋問ノ為旧兵隊ヲ率ヒ

上京ノ挙アルニ因リ可致随行旨、区長森岡昌武ヨリ達シ

ニ依リ、(篠原國幹隊長)第一番大隊七番小隊ニ編入セラレ、同月鹿兒島

ヲ発シ川尻駅ニ到レバ、早先鋒ノ斥候ハ台兵ノ為ニ砲撃

セラレ既ニ開戦スルニ至ル、因テ本夜四時本駅ヲ発シ大

挙シテ熊本ニ赴キ、大隊ヲ以テ城ノ四面ヲ囲ム、我が小

隊ハ花岡山ノ左側ヨリ進ミ、午前七時ヨリ午後二時迄攻

撃スレトモ、城郭ノ守堅固ニシテ手易抜ク不能、一時兵

ヲ春日ノ市街ニ引揚ゲ、翌廿四日ノ早天整理シ、段山口

ヨリ進デ既ニ八幡山ヲ陥レ、數ヶ所ニ胸壁壘ヲ築キ交戦

スル事三日間ニシテ、(玉名市)淺合某ノ小隊ト交替シ我が七番小

隊ハ本道ヨリ進ンデ高瀬ニ至リ、六番大隊ノ二小隊モ此

ニ継キ破竹ノ勢ヒヲナシ川ヲ隔テ烈戦ス、相良吉之助半

隊ヲ以テ船ヨリ川ヲ渡シ敵壘ノ横ヲ突ク、桐野利秋ハ西

郷小平ト左側ノ山手ニ有リ諸小隊ニ下知ヲ下シ終日戦ヘ

トモ勝敗不決、昏ニ及ンデ各隊ヲ植木ニ引揚ク、翌払曉

本駅(總)ヲ操出シ木ノ葉村ニ進ミ哨兵ヲ左右ノ高岳ニ置キ、

中央ノ要地ニハ胸壁ヲ築キ、官兵ノ寄スルヲ今ヤ遲シト

待ケルニ、未ダ東雲ニ至ラザル内大勢果シテ田畝ニ散兵

シ、齊シク我が正面ノ壘ニ進來ルヲ、小隊長森岡昌武下

知ヲナシ右半隊ヲ以テ正面ノ壘ニ置キ、一分隊ハ則右ノ

陵岳ニ登ラシ一分隊ヲ左側ニアル加治木隊ノ応援トシ、

午前六時ヨリ午后五時過キ迄連戦シ、或ハ追討ヲ追ヒウ

タレ兩陣互ニ死傷アリ、官兵進ンデ民家ニ火ヲ放チ正面

ヨリ大砲ヲ烈発シ右側ノ山手ニハ大勢ヲ引廻シ左翼ヨリハ背後ヲ射撃ス、因テ山中ニ有ル二番隊大ノ第九番小隊伊集院某ノ持口敗レテ、我が正面ノ壘モ次第二官兵ノ有トナリケレバ、四小隊ハ狼狽敗走シテ漸ク田原坂ノ嶮ニ抛リ、中央へ壘ヲ築キ守兵ヲナス、此時分隊長長濹谷精一・押伍池田兼光戦死ス、傷ク者ハ数十名各植木ノ本陣ニ送ル、明レバ応援ノ隊モ走セケテ六七小隊ニナリ味方ノ兵勢頗ル振ヒ、各要地ニ壘壁ヲ構ヘントスル間モナク、官軍本道ニ逼リ両面ノ田ノ中ニハ大勢ヲ散開シ大砲數門ヲ山上ニ双ベテ連発ス、我が小隊モ各所ノ胸壁ニ伏セ互ニ交戦スル事凡八九日ケ間、昼夜トナク或ハ切込ミ斬込マレ、大小ノ砲声ハ天ニ喧シク地ヲ動シ劍ノ光リ天ヲ輝ス、兩陣ノ屍山ニ滿チ血ハ草野ヲ膏ス、一日官軍群リテ我が守ル壘ヲ拔キ糧道ヲ絶ント、三名ノ將校拔劍シテ真先ニ進ミ来ルヲ、我が半隊長大河原隆實勇ヲ奮ヒ赤旗ヲ振りテ衆ヲ励マシ一足モ退ク勿レト下知スル内、一ツノ銃丸隆實ガ左ノ股ヲ打通シ斃シガ少シモ屈セス、尚モ憤激シテ指揮スルニ砲弾腫ヲ打抜キケレバ二言トモナク即死セリ、此時押伍國分次郎兵衛・畠山孫之丞・石原源吾・兒玉一郎左衛門戦フテ之ニ死ス、翌日中島健彦一小隊ヲ以

テ此旁ニ代ル、因テ我が一小隊ハ出京町ニ引揚ゲ常盤口ヲ守ル、程ナク田原坂モ敗レ木留^(繪木町)・吉次^(玉葉町)ノ三道ヨリ官兵大ニ進撃シ、植木ニ有ル各隊モ殆ンド敗軍シ散々ニナリテ兵纏ラス、既ニ敵兵向坂ニ進メバ本營ノ長貴島清ヨリ応援式中隊ヲ操出スベシト報アリ、直チニ千反畑ニアル三番大隊ノ七番小隊及ビ我が一小隊午前十時ヨリ向坂へ進軍ス、最早官兵ハ本道ノ中央へ壘ヲ築キ傍ニ哨兵ヲ張ル、応援ノ二小隊ハ左右ノ麦畑ハ散開シ挾ンデ之ヲ撃ツ、敵兵潰ヘ乱レテ走ントス、味方ノ兵愈々勢ヒニ乘シ踊躍シテ斬込ミケレバ立所ニ式百八拾余名ヲ殲ス、我が中隊長森岡昌武・同小隊長谷川次郎左衛門・半隊長山本武治戦死ス、本營中島健彦左ニ鎗ヲ提ケ右ニ太刀ヲ揮リ各隊ヲ進メ、敵ヲ植木ニ退ク、我半隊ハ夜ニ入りテ京町ニ班シ常盤口ヲ守ル、此夜午后三時頃城中ヨリ兵ヲ操リ出シ我が壘ヲ襲ヒ互ニ戦鬪ス、曉ニ至リ見レバ官兵我が壘壁下ニ死骸枕ヲ双ブ、于時城内ヨリ大兵ヲ操出シ我が數ヶ所ノ壘ニ進ンデ大ニ射撃ス、如何セン我が小隊ハ宵ヨリノ戦ヒニ弾薬尽キ果テケレバ、抜刀シ斬込マントセシガ掩ヒ茂リタル竹山ナレバ屈伸自由ナラズ、壘中ニ伏セテ応援ノ来ルヲ待ツ、官兵ハ愈々林藪ニ身ヲ匿シ竹鎗ヲ以テ

我が壘壁ヲ衝キ通シ、双方互ニ打合シガ、午后四時過キニ至リ城中ヨリ一声揚ケテ突出シ我が壘ヲ困ンデ射撃ス、砲台ヨリハ榴散弾ヲ雨ノ如ク発シケレバ味方禦ク不能シテ、兵ヲ町口ニ退キケル、此時右小隊長野崎矢七・左小隊長松元仲之丞戦死ス、彦十郎此ニテ銃創ヲ負ヒ同隊ノ兵士古河某ニ扶ケラレテ川尻ニ至リ、九十八番ナル病院ニ有リテ疵口ヲ養フ中、八代口敗レ小川駅ニ火ノ手ヲ揚ケ、間モナク味方ノ兵川尻ノ橋向ニ退キ守ル、因テ病院ヲ御舟ニ移サント数百名ノ患者川尻ヲ発シ御舟ニ赴ク、翌朝ニ至レバ堅志田口殆ンド危シトテ、又病院ヲ木山ニ(中夫村)転ス、已ニシテ甲佐ノ諸所モ官軍ノ有トナリケレバ、池田正義・宮地貞明・大浦・武田ノ数名ト同行シ、馬見原(惟葉村)ヨリ那須ヲ越ヘ玖摩路ヲ経テ漸ク郷里ニ帰り療治ヲナス内、官ノ軍艦鹿兒島ノ湊ニ碇シ大兵上陸ニ付、各区ノ士族ハ山崎方面ヘ出兵スヘキ旨、本営中山盛高ヨリ各区ノ戸長ニ回達ス、因テ五月上旬出發シ山崎ニ到リ、勇義第一番中隊左半隊長ニ編制セラレ、出水・阿久根・野田・高尾野ノ諸所ニ哨兵スル内、米ノ津口ノ官軍進ンテ出水ニ逼、本営伊藤四郎左衛門ガ率ヒシ勇義五小隊ト戦ヒ、伊藤敗レテ兵ヲ紫尾山ニ引揚ケタレバ、我一中隊モ阿久

根ヲ退キ、高城ノ西方ニアル(川内市高城)一條坂ニ官兵ノ斥候ト戦ヒ遂ニ敗レテ川内川ニ退キ、胸壁ヲ川ノ流レニ築キ防戦セシガ、敵兵川ノ浅瀬ヲ渡シ我カ背後ニアル(川内市)猫ヶ嶽ニ抛ル、因テ兵ヲ荒川邑ニ引揚タリ、本道ニハ貴島清振武一中隊(串本野市)ヲ率ヒテ隈ノ城ニアル仏生橋ニ伏セ防戦スト雖トモ、遂ニ敗シテ本道ニ趨ル、官兵ハ本営ヲ向田駅ヘ据ヘ山崎・入來ノ両街道ニ兵ヲ配リ、或ハ薩摩山ノ辺リヲ探偵スル内伊集院ノ本道モ敗レ、鹿兒島ニアル官兵大挙シテ進入シケレバ、振武及ヒ勇義ノ各隊ハ四方ニ散乱シ、貴島清・中山盛高ノ兩名ハ市來川上村ヨリ入來原ノ間道ニ出テ、都城ニアル邊見十郎太ノ方ニ趨ケル、我一中隊ハ荒川邑ニ解隊シ、各自宅ニ帰り、前非ヲ悔後シ謹慎スル事数日、于時陸軍中尉加藤某第三旅団兵一中隊ヲ率ヒ御通行アリ、依之彦十郎始メ百余名加藤中尉ヘ相就キ自首シテ帰順仕候也、

鹿兒島県第廿四大区串本野居住

群馬県徴役人

明治十一年二月十二日

加藤彦十郎

(中表紙)

肥後国并
日向地
戦争之景況顛末記

二 米良雲暉上申書

(米良第二十号)
今般太政官第四号御布告之御趣意戦地之事情顛末ヲ筆記
シ上申可仕旨謹て奉拜受候、依之概略見分之次第左ニ奉
具状上候、

私儀

去ル明治十年鹿兒島県士中原尚雄等陸軍大将西郷隆盛・
同少将桐野利秋・同少将篠原國幹ノ三名ヲ暗殺ノ隱謀発
覚シタルニヨリ、陸軍大将外両名政府エ尋問トシテ上京
ニ就キ、旧兵隊ノ者共随行ニテ出発之段鹿兒島県庁ヨリ
布達有之候間、全県下日向国那珂郡餧肥士族五百余名ヲ
募リ三小隊トナシ、川崎新五郎・伊東直記ナル者ヲ総長
トシ各隊共隊長ハ別ニアル、即老番小隊ノ隊長佐土原藤
吾・半隊長阿萬南八郎・分隊長山ノ城軌ウチ、二番小隊ノ隊
長高橋藤九郎・半隊長阿萬格次郎・分隊長平島隆藏、三
番小隊ノ隊長米良一穂・半隊長郡司稔作・分隊長伊藤祐

啓ト相定メ、二月十七日餧肥出發延岡通行高千穂口ヨリ
(蘇陽町)
馬見原駅・高森駅ヲ経テ、肥後国保多津エ着陣、同廿六日
熊本エ出張薩ノ本営ヘ餧肥ヨリ三小隊五百名余即日参着
ノ旨届ケ出タル処、今回陸軍大将以下上京之通路ヲ遮リ
熊本県下ニ於テ猥リニ彼ヨリ砲発イタシ候者有之ニ付、
不得止開戦ニ及ヒシ形行ヲ始テ承リ驚キ入り候処、直ニ
肩章・指揮旗等渡サレ、即刻同国川尻駅并ニ二丁川口海岸
ヲ守衛スベキ旨指令アル、依テ直ニ該地エ出張一小隊ツ
、交番ニテ川口海岸ヲ守衛ス、外二小隊ハ川尻市中ヲ警
衛ス、同月廿八日三隊共山鹿駅ヘ着陣、(山鹿市)吉田村ヘ出張番
兵スベキ旨令アル、依テ同所エ一夜守衛ス、三月一日餧
肥隊改正四小隊トナル、即チ二番小隊・三番小隊ハ同所
本営ヲ護衛シ、壹番小隊・四番小隊ハ薩ノ各隊ト共二南
ノ關間道ヨリ進撃、途中平山村エ敵軍ノ番兵アリ同所ニ
テ先鋒隊ト相戦フ、敵兵暫時ニシテ敗走ス、此ノ戦ヒニ
討取四五名味方ニ負傷者兩名アル、其夜中十町村エ宿陣
翌二日未明出發岩村進撃、餧肥隊先鋒トナル、吾ハ壹番
小隊ノ兵士ニテ小頭助役相勤メ今日斥候致ス、然ル処岩
村入口山影ニ敵ノ番兵アルヲ不知シテ進ムヲ、右番兵ヨ
リ吾斥候兵エ小銃五六炮連発ス、ユヘニ本隊エツゲ俄ニ

配兵シテ直ニ山ニツヲ攻落シ廿丁程攻詰メ大ニ勝利ヲ得ル処、本道ヨリ進撃ノ味方本營ヨリノ報知ヲ誤聞シテ引揚ケ候ユエ、本道ノ敵モ一手ニ成リ大砲等ヲ以テ防戦ナスユエ味方苦戦トナリ、午後四時過キ頃元合戦相始メ候処迄退キ、乱レシ兵ヲ同所ニテ纏メ夫ヨリ山鹿駅迄引揚ル、此日ノ戦ニ鉄肥ニ小隊ニテ戦死者名・負傷者二名也、(山鹿市)翌三日鍋田味方ノ壘所へ合戦相始リ候ユへ同所坂ノ下迄吾カ一小隊応援ノ為出発ス、然レトモ敵兵早引取り合戦無之マ、守衛所へ引取ル、同所守衛日数凡三四日、其后(姫井、鹿央町)姫居村へ輾陣同所ヲ守衛スベキ旨指令ニ随ヒ其日出張翌日着、即チ要所ヲ見立壘ヲ築キ守衛ス、尤薩ノ兵一中隊・鉄肥兵ニ小隊同所守衛凡七八日(日数確トセス)然ル処田原ノ味方敗レ引キ退リゾキ植木ノ方ニテ防戦ノ報アル、依テ同所ノ守リ打捨テ引揚ケ、味取村ヨリ植木ノ方五丁計リノ処へ薩ノ兵モ共ニ一夜守衛、其後鳥ノ巢村へ引揚ケ候様令アル、依テ同所へ引揚ケ同所ニテ兩日戦争勝敗ナシ、負傷者兩名アル、然ルニ或夜俄ニ薩ノ兵ト我一小隊廣尾村へ輾陣スベキ令アル、依テ直ニ同所ヲ出発シ其夜ハ廣尾村ノ下川端ニ兵ヲ伏セ置キ、翌日地形要所ヲ見立壘ヲ築キ守衛スルニ又々(菊池市)隈府駅迄縁込ミ候様指令ニ随ヒ同駅ニ輾陣

ス、同駅へ本營ヲ据へ薩ノ伊東某ナル人本營ニアリテ諸隊ヲ指揮ス、依テ我小隊ハ(菊池市)袈裟尾原へ守衛、薩ノ兵ト交番一日ツ、隈府市中ヲ守衛ス、三月下旬本道薩ノ番兵所先へ山鹿ノ方ヨリ敵兩名騎馬ニテ駈ケ来ルヲ、番兵ヨリ砲発シ馬壹疋ヲ分捕ル、兩名共山鹿ヲ向ケ逃ケ走ルヲ吾モ四五名ニテ追掛レトモ討取ル事能ズ、薩兵ノアル処ニ行キ見レハ馬ハ右足ヲ討チヌキアル、四月二日頃(日ハ確トセス)我隊袈裟尾受持ノ時未明敵壘中隊程本道薩兵ノ向十四五丁ノ処へ散隊ニ開クヲ、吾隊ノ半隊長ト吾両眼鏡ニテ持場ヨリ眺メ居ル処、吾隊右翼へ敵兵攻来リ、不意ヲウツ、味方必死トナリ防戦スル中敵ハ大軍味方寡少遂ニ取り囲マレ、スベキヤウナク一方ヲ切り破リ引キ退ク故、吾モ左翼ノ配下へ指揮シ漸ク引揚ルヲ得タリ、依テ川端ニ兵ヲ伏セ防戦中応援ノ兵モ来リ又盛り返シ、敵軍ヲ追払ヒ死体等ヲ引揚ルヲ得也、此戦ヒニ小隊長佐土原藤吾・半隊長阿萬南八郎・小頭沼津小彌太戦死其外負傷者数名、貴島某ノ隊ニ戦死・戦傷多シ、是日ノ戦也実ニ苦戦也、黄昏ニ及ヒ吾一小隊ハ(二の宮町)梨ノ木坂ニ引揚ケ守衛スベキ旨指令、僅三四十名ニテ同所ニ引揚ケ守衛ス、隊長等討レシ故衆議ノ上石川駿ヲ隊長トナシ、守永守ヲ半隊長ト相定メテ

守衛ス、日数凡十一日程其中ニ敵三度マテ襲攻スレトモ
 応援等能ク続キ吾兵強クシテ敵敗ル事能ズシテ引退ク、
 同月十一二日頃再ヒ隈府合戦、敵大軍ニテ攻撃大砲等ニ
 テ手強ク攻メ打ツヲ、梨ノ木坂ヨリ見物スレハ、味方モ
 必死ニ成テ防戦スル事終日、敵兵鯨波ノ声上ル事雷ノ如
 シ、夜ニ入り同駅諸方ヘ火ノ手揚リ本営ヲモ遂ニ大砲ニ
 テ焼キウチセシユヘ、曉頃終ニ敗レテ味方（箱池市）班坂迄引揚ケ
 来リ地ノ理ヲ見、悪キトテ遂ニ竹迫迄引取ル、故ニ我隊
 モ梨ノ木坂ヲ捨テ竹迫エ引取り二日守衛スルニ、又々大
 津駅ニ引揚ケ候様令アル、依テ夜中引揚ケ同駅ニ着陣ス
 ル処諸方ノ味方同所ニ引揚ケ大軍トナリ、敵重ニ壘ヲ築
 キ守衛ス、此所ヘ本営ヲ据ヘ野村忍助アツテ諸隊ヲ指揮
 ス、我一小队ハ同駅西入口本道ヨリ北竹迫街道ヲ守ル、
 四月十四日頃（阿野町編）二重峠ノ方手薄ニ付諸隊ヨリ五六名ツ、絞
 リ隊ヲ作り援兵出張候様令アリ、吾モ外四名ヲ率テ黄昏
 ヨリ出発ス、其夜深更ニ着陣ス、直ニ薩ノ壘ヘ行キ守衛
 ス、然ルニ翌々早朝大津駅ニテ戦争相始リ候模様ニテ炮
 声聞ヘシマ、吾外四名ト共ニ本隊エ駆ケ帰リシ処最早
 味方大勝利ヲ得テ、敵兵ヲ追事一里余、討取分取若干、
 其後二日過キ夜中（アケ）明未明敵ヨリ攻撃ノ段本営ヘ相知レ、

我カ一小隊ハ午前三時ヨリ同町ノ西南ヘ七八丁出張、兵
 ヲ伏セ敵ヲ待ツベキ旨令アルニヨリ、同字頃一小隊潛ニ
 出張麦田ヘ兵ヲ伏置今ヤ遲シト敵ノ来ルヲ待チ居タリシ
 カトモ敵兵来ラス、然ルヲ遙南ノ方ニテ合戦相始リ、吾
 待ツ西ナル村エ敵来テ放火ス、故ニ吾六七名ト共ニ駆行
 キ追払、隊中進テ防戦ス、大津駅北諸隊ノ持場ニモ敵大
 軍ニテ攻撃スル事終日、味方モ防戦勝敗ナシ、互ヒ二砲
 戦最中御舟方面ノ味方敗走ノ旨本営ヘ報知アリ、依テ諸
 隊矢部駅迄引揚候ヤウ令アル間、戦最中衆議シ指揮ニ随
 ヒ午後十字頃ニ漸ク引揚ルヲ得タリ、夫ヨリ夜行矢部駅
 ニ引取ル、四月廿日頃也、此処ヘ諸隊引揚ケ大隊ヲ改正
 シテ振武隊・正義隊・干城隊・行進隊・雷撃隊ト編制ス、
 我鈺肥隊モ改正、奇兵十八番・十九番・廿番ト三中隊ト
 ナリ、十九番中隊長ハ米良一穂・右小队ノ小隊長長谷口元・
 半隊長青山競・分隊長米良雲暉ト相定、左小队ノ小隊長
 伊藤祐啓・半隊長高山眞平・分隊長柳田重周、外中隊モ
 夫々隊長相定メ隊伍全ク調ヒ、即日鈺肥三中隊ニテ（箱池、矢部）
 へ（里程ノ処）出張守ルベキ旨本営ヨリ令セリ、依テ直ニ該地
 エ繰出シ要所ニ壘ヲ築キ相守ル事三四日、然ルヲ本営ヨ
 リ令アリテ総軍ヲ日向地エ纏メン事ヲ謀ルユヘ、我隊モ

右守所ヲ引払ヒ出発ス、三中隊共椎葉山・那須越之嶮(椎葉村)ヲ

經テ肥後人吉ノ内湯(湯前町)ノ前村ニ着陣ス、依テ此旨本營ヘ届

ケ出テタル処、軍議一決迄滞陣スベキ旨令セリ、日数九

日余過キ奇兵隊ハ豊後口ヘ進撃ニ決定ス、我中隊ハ日向

地ヘ出テ海岸ヲ守ルベク旨指令アル、依テ五月上旬頃(宇目町)ハ

ズ、三中隊共出發、椎葉山米良越ヲ經テ日向国美々津(日向市)駅

ニ着陣ス、十八番中隊ハ直ニ是ヨリ宮崎本營ノ護衛ヲ令

セラレ出發ス、十九番中隊・廿番中隊ハ共ニ当所海岸之

要地ヘ築壘守衛ス、三日ヲ過キテ十九番中隊ハ細島港(日向市)ヨ

リ富高新町ヲ守ルベキ旨本營ヨリ達セリ、故ニ二十八日美

々津ヲ出發シ富高ヘ転陣ス、然ル処奇兵七番中隊ト十七

番ハ前日ヨリ該地ヲ守レリ、依テ三中隊評議ノ上交番ニ

テ細島港ヲ二中隊ニテ守衛シ新町ヲ一中隊ニテ守ルベキ

ニ一決セリ、我十九番隊モ細島港ヘ直ニ出張守リヨツク、

以後交番ニテ兩所ヲ守ル事日数凡五六日、其内廿番中隊

ハ美々津ノ守衛所ヲ高鍋ノ隊ト交代シ新町ヘ着陣ス、依

テ我十九番中隊ハ延岡ヘ転陣スベキニ決スル故ニ、同月

廿三日頃(日籠ト、観エズ)細島出發延岡ヘ着陣ス、此地ニ奇兵本營ヲ、

据ヘ野村忍介ナル者奇兵隊ノ大隊長ニテ総軍ヲ指揮セリ

本人令シテ、我中隊ハ明廿四日ヨリ一小隊ツ、交番ニテ

本營ヲ護衛シ、一小隊ハ同所川尻方財村海岸(ホウサイ、延岡也)ヲ守ルベキ

令アル故直ニ配兵、兩所守衛日数凡廿三日、然ルニ豊

後方面ヘ出軍シタル奇兵各隊ヨリ、六月十七日頃味方利

アラズ敗軍シテ豊後国重岡(宇目町)迄引退キ同所ヘ守リヨ付ケタ

ルトノ報アリ、依テ我十九番中隊応援ノ為該地ヘ出張ス

ベキヲ本營ヨリ令ス、同十八日頃カ我右翼小队ノ分隊長

柳田重周十八番中隊ノ半隊長欠員ニ付彼ノ隊エ転シ、日

高昌ナル者右ニ代リ分隊長トナル、同日午後ヨリ我隊延

岡ヲ出發シテ熊田村(北川町)ヘ一泊シ、翌日重岡ヘ着陣奇兵各隊

ト共ニ築壘シテ守衛ス、同廿日頃払曉ヨリ敵軍大小砲打

立襲来セリ、味方モ砲防戦ス、尤敵軍急ニ進入セス遠

隔ノ場所ヨリ砲戦而已ニテ午後三字頃ニ至リ勝敗ナク休

戦、同午後五字頃急報アリテ豊後佐伯エ出張ノ味方利ア

ラズシテ引退キ、豊後ト日向ノ境ナル陸地カチ越ノ嶮ニ守リ

ヨ付ケタルトノ報ナル故ニ各隊長議シテ云ク、佐伯ノ間

道敗レナバ敵勝ニ乗シテ急ニ押寄せ当地ト延岡ノ運路糧

道ヲ塞カレナバ味方大患ナラン、遺憾ナガラ敵ノ悟ラヌ

内迅速此所ヲ引払テ、一ト先延岡地方エ勢ヲ纏メ、野村

氏エ談シテ熊田村ヲ根居トシテ(北川町)・葛葉(全上)ノ嶮ヲ守ルニシ

カズト一決シテ、各隊ヘ令アリ、今夜中混乱セザルヤウ

物静ニ当所ヨリ各隊引払ヒ熊田へ総軍ヲ纏メヨトノ事故、
 重岡ヲ捨テ午後八字頃不残引払ヒ、翌日熊田村ニ惣軍ヲ
 纏ム、此地ニ奇兵本營ヲ据ヘ野村出張シ令ヲ下シテ奇兵
 各隊ヲ分配セラル、葛葉井ニ(北川町)矢ケ内へ迅速築壘シテ固守
 スベシト、各隊夫々令ヲ受テ各方面へ出発セリ、十八番
 ト十九番中隊ハ熊田ヨリ凡一里計リノ村名ヲ川向ニテ佐
 伯ヨリ海辺続キノ間道アリ頗ル大事ノ要所ユヘ、地形ヲ
 見立テ守ルベシト令アル故ニ、即日出发彼ノ村左右ノ川
 上要地へ壘ヲ築キ、十八番中隊ト交番ニテ守衛ス、同月
 廿四日頃日ハ何レモ各隊ノ長ヲ本營ニ参集セシメ野村令シ
 テ、明廿五日未明ヨリ豊後路惣進撃セン事ヲ謀ル、奇兵
 ノ惣軍ヲ五ツニ分ツテ、一手ハ切込谷ヨリ、一手ハ水谷スイガタ
(宇目町)ヨリ道ナキ嶮山ヲ経テ重岡へ突出ベシ、一手ハ鏡ミタマ地チヲ經
 テ本道ヨリ重岡へ進入スベシ、又一手ハ宗太郎越(宇目町)ヲ經山
 野ノ尾続キニ道ヲ開キ陸地越ノ敵ヲ突クベシ、一手ハ陸チ
(川町)地ノ本道ヨリ進ムベシ、何レモ今夜十二字ヨリ総軍進発
 スベシト令アル、各隊長諾シテ夫々持場々々ニ帰ル、我中
 隊ト十八番中隊ハ該村ヲ午後五字頃出発湯ケ内ニ夜六字
 過ニ着、此地ニテ陸地進撃ノ各隊ハ兵糧・弾丸等用意シ、
 同夜十二字過キヨリ奇兵三番中隊・十八番中隊・十九番中

隊ハ同所出発、陸地越ノ敵ヲ突カント湯ケ内ニテ案内者
 ヲ列レテ後ノ山絶頂ヨリ尾続キ山野道ヲ開キ方角ヲ求メ
 テ終夜行進ス、其夜霧深クシテ案内ノ者方角ヲ失シテ曉
 天ノ頃ニ及ベトモ、陸地越ノ近傍ニ出ヲ得ズ、漸ク曉ニハ
 宗太郎越へ出ルヲ得タリ、案内者モ当惑ノ体也、然レト
 モ最早今更詮方ナク彼是ト議シテ、遙ノ山下ニ二三軒ノ
 人家アルユヘ彼ノ所へ人ヲ遣シ別ニ案内者ヲ雇テ吉次越
 へ出ル、陸地越モ間近ク成レトモ早翌日朝八字頃ニ及ヒ
 時刻モ後レ、敵築壘堅固且ツ此氣ヲ悟リ益々敵重守ルユ
 へ進撃スル事能ハス、空シク下山シ(北川町)矢ケ内へ引取タルニ、
 本道ヨリ進ミシ隊モ矢ケ内ニ見合セ居タリ、依テ問テ云
 フ、何等ノ誤ニテ斯クハ遅刻シタルヤ合点行カズト、答テ
 案内者途中斯々ノ事ニテ大ニ隙取り実ニ残念至極也、此
 代リニ明日払曉ヨリ進撃シテ敵ヲ追払フベシト約シテ、
 翌廿六日未明ヨリ約ノ如ク各隊ト共ニ陸地へ進撃、三手
 ニ分チ十八番隊ハ吉次越へ進撃右ノ山手ヨリ進ミ不意ヲ
 討テ大ニ利ヲ得暫時ニシテ敵ヲ追事一里程、討取り分捕
 リ多シ、三番中隊ハ本道ヨリ陸地越ノ敵ヲ攻撃ス、十九
 番中隊ハ本道ノ左手ヨリ進ミ左小隊ハ此ノ山ノ絶頂ヨリ
 砲戦ワザト鯨波ノ声ヲ揚テ進マス、右翼小隊ハ其間ニ山

ヲク、リヌケテ敵ノ壘下エ出テ鯨波ノ声ヲ上テ連発スレハ、敵兵アハテ敗走ス、逃ヲ追掛ケ々々廿丁程追退ケ然ルヲ味方ノ兵ツ、カズ、故ニ敵ノ壘所跡迄引揚ル、此戦ヒニ我小隊ハ手負等老人ナク小銃六七八挺・彈丸其他雜品分捕多シ、外二中隊モ分捕若干大勝利、午後四字頃各隊兵ヲ纏メ陸地峠并ニ吉次越等ニ壘ヲ築キ左右ノ要所エ守リヲツケテ、我隊ハ陸地越ノ左手ヲ守衛ス、七月二日(北山地)頃葛葉方面出張ノ隊手薄ニ付陸地方面ノ各隊ノ内ヨリ一中隊繰合セ彼ノ地エ出張スベシト令アリ、依テ十九番中隊陸地出發葛葉へ着、同所守衛ノ廿番中隊ト交番シテ其壘ヲ守ル事二日、同月四日コロ明五日又々進撃ノ令アリテ、各方面ヨリ三中隊ツ、絞リ隊ニテ進撃スベシト、我十九番中隊ハ陸地越守衛タルベシト令アル、故ニ本日晌午ノ頃ヨリ葛葉出發陸地へ趣ク、途中湯ケ内ナル觀音山頂上ナル高鍋鎌讓隊ノ守壘ハ敵軍不意ニ襲撃シ、鎌讓隊壘ヲ捨テ敗走ノ由、奇兵九番中隊(嶺崎某隊)通リ掛リ急ニ応援シテ敵軍ヲ追返シテ又數壘ヲ取戻ス景況ニテ、懸念ハナケレトモ猶我十九番中隊モ辛ノ事ユヘ応援セヨト出張本營ヨリ令アル故、兵ヲ二手ニ分チ我右翼小隊ハ右山ノ後ロヨリ左小隊ハ右ヨリ駈登リ見ルニ、九番中隊ヨリ早速

払テ敵ハ遙向ノ宗太郎越ナル山上ヨリ敗兵所々ヨリ稀レニ發砲スルノミ、九番中隊ハ本日計ラサル戦争ニテ敵數名討取り且元込銃并ニ彈丸其他雜品等分捕アル、該隊ハ明日ノ進撃隊ニ付兵ヲ纏メテ下山シ熊田方面へ出軍也、我十九番中隊ハ同所へ兩日守衛シ、右翼ノ我小隊ハ同七日頃下山シテ湯ケ内村へ休兵、左翼伊東祐啓ガ隊守衛ス、同月十二三日頃陸地越ノ味方危キ模様ニ付即刻援兵イタシ候旨本營ヨリ指令アル、依テ即刻出發候處敵兵早陸地エ向フ右手ノ山ヲ抜ケ出、味方炊事方宿陣ヲ目掛ケ砲発スルユへ、小高キ処ヨリ眺望スルニ、霧深キヲ幸ヒ敵キノ左側ニ出テ大勢ニテ攻撃スル模様ヲナサント隊長元ト(谷口)議シ、山野ヲ駈ケ登リ山ヲク、ツテ敵ノ左側面ニ俄然ト(脱カ)顯レ、喇叭ヲ吹カセ鯨波ノ声ヲ上ケテ連発セカハ、不意ノ事ユヘ此ノ猛威ニ畏レシヤ敵直ニ引キ退ク、味方氣ヲ得テ猶モハケシク追ヒ掛ケ進ム、吾モ抜刀ニテ進メ々々ト声ヲ上ケ士卒ヲ励マシ進ム処ニ、敵ノ中ニ勇猛ナルカナ若者兩名松ノ木ヲ小楯ニ取り踏ミ止リ、間合四五間マデ進ミシ吾レヨ目懸ケ兩名共殉発スレトモ、幸ニシテアタラズ吾ガ帽子ヲ打抜キタリ、然ルヲ我傍ニアル荒武仙齊ナル者先生ヲ打タル敵ヲ我討チ取ラント、声ヲ掛ケ發

砲スレバアヤマタズ討チタヲスヲ、吾直ニ駈ケ込ミ首ヲ
 打落シ見レバ手帳ニ廣島鎮台某ト記シアレ共名ハ失念ス、
 外壘名ハ豊島浪治ナル者討取ル故ニ短兵急ニ追ヒ退リソ
 ケ、敵ノ守要所三ヶ乗取ル、所ゴトニ土工道具・兵糧・
 餅・肴等焼キタルマ、打捨コレ有ユヘ分捕ス、敵三ノ守
 リ所ニハ水沢山汲置キ有ル故兵士水ヲ吞テ息ヲツキ居候
 間、吾行テ延引セハ敵要所エ踏止リ防カバ味方難儀ナル
 ゴ、此勢ヒニ乗シテ早進メタ々ト士卒ヲ励マシ追ヒ行ケ
 トモ、少シ隙マアリシユヘ案ノ如ク最モ要所四ノ守リヘ
 踏ミ止リ防戦スル敵ヲ、吾士卒ノ銃ヲ取揚ケ兩名ヲ討チ
 タヲシ日高兵四郎ナル者敵壘名ヲ討チタヲスト雖トモ、
 敵ハ猶退ク色ナク益々防戦ス、故ニ谷口元ト共ニ指揮シ
 テ兵ヲ左右ヘ廻シ、三四間ニ成ル迄攻詰メ敵敷攻撃スレ
 トモ、敵ハ必死トナリ戦フユヘ味方負傷者有而已ニテ利
 ナキユヘ、吾谷口ト議シ一先壘丁余兵ヲ引揚ケ敵ノ様子
 ヲ伺フニ、敵ハ味方引揚ケシヲ幸ニ死体等引揚ケ退キタ
 リ、依テ吾隊モ緩々トシテ右要所ヲ乗取、兵士ハ是レニ
 氣ヲ得猶モ敵ヲ追ント進ムヲ、早黄昏近キユヘ兵ヲ止テ
 同所ニ築壘守衛ス、是ノ戦ニ青山競始戦傷七名・戦死三
 名ナリ、分捕小銃五六挺・弾丸・雜品若干、翌日薩ノ兵

ト交代シテ袖(北川町)内ヘ引揚ケ休兵ス、時ニ競ニ代リテ吾半
 隊長、吾ニ代テ田爪鴻三分隊長相勤メ候様本營ヨリ令ア
 ル、尤隊中人撰ノ上也、此日敵軍大挙シテ薩ノ兵ヲ三方
 ヲリ取巻キ攻撃ス、薩兵人数モ寡少弾丸乏シケレトモ此
 要地ヲ敵ニ渡シテハ鉄肥勢エ面目ナシト、義ヲ顧ミ勇ヲ
 振フテ礮等ヲ打チ掛ケ防戦スル中、日モ早黄昏ニ及ヒシ
 カバ敵兵抜ク能スシテ引揚ケ候趣、又其次日吾隊交番ト
 シテ来リ見レハ、森々ト有リケル近林ノ樹木残リナク中
 程ヨリ打折レ有、実ニ昨日ノ大激戦想像イタシ候、同月十
 七八日頃同國(三川内、北浦町)参河内辺エ敵軍相廻シト本營ヘ報知アリ、
 依テ十九番中隊左翼小隊ヘ大斥候イタシ候ヤウ指令ニテ、
 伊東祐啓隊ヲ引率シテ直ニ同所ヲ出発シ参河内梅(北浦町)ノ木村
 へ出張ノ処同所ニテ一戦、敵ヲ廿丁余追払ヒ同所へ守兵
 備置キ、其夜祐啓駈歸テ本營ヘ報知、最早彼地諸方ヘ敵軍
 守備アルニ依リ、早々援兵出シタマハルベキ旨相述候ニ
 付、右翼ノ半小隊非番ニテ同所エ休兵イタシ居候間幸ノ
 事ユヘ祐啓同道ニテ彼ノ地へ出発スベキ旨、猶後トヨリ
 応援ノ兵出スベシト指令アル、依テ即刻兵ヲ揃ヘ谷口ト
 共ニ半隊ヲ引率シ道ヲイソキ彼ノ地へ出張シ見レハ、敵
 ハ大軍ニテ攻撃味方引色見ヘケルユヘ、吾隊ハ本道ヨリ

左ノ山頂上ヘ引揚ケ防戦スレトモ、本道敗レ引退キシユ
ヘ吾隊モ山ヲ引ヲロシ終ニ萩ノ水流迄引退キ、同所衆議
中応援兵来レトモ其日早黄昏近ク成ルユヘ、共ニ本道ノ
左右要所々々ヘ築壘守衛ス、敵ハ梅ノ木村ヘ来リ放火ス、
此日飢部隊負傷者四五名、萩ノ水流ヘ出張本營据ヘ各隊
ノ中隊長アツメテ指令ス、七月廿一日頃對馬ヶ頭^(津島)ヘ進撃
ヲ約シ、味方四中隊ヲ前後二手ニ分チ午前三字ヨリ同所
ヲ出発、我十九番中隊ハ後軍トナリ進ムニ、前軍ハ払曉ニ
敵ノ數壘ヘ押シ寄セ不意ニ襲撃セシカハ敵兵大ニ周章シ
支ル事能ハス、銃器ヲ投シテ逃ケ走ル、味方此ニ氣ヲ得
テ皆一同ニ鯨波ノ声ヲ揚ケ我先ニト急撃セシカバ、瞬ク
隙ニ數壘ヲ乘取り敵兵廿二名ヲ討取ル、一ツノ壘ニ敵七
八名ツ、枕ヲ並ヘテ倒レ居タリ、内ニ士官体モ見ユ、敵
ノ殘兵皆右往左往ニ散乱シテ敗亡スレトモ大霧起テ尺寸
ノ地モ見分ケ難クユヘ、永追セスシテ烏帽子ヶ頭ヘ引揚
ケ、十九番中隊ハ同所ヲ守衛ス、此夜大雨ニテ一統困苦
ス、是日ノ戦也味方中隊長長竹添節・守永守ヲ始兵士數十
名負傷、戦死モ數多シ、敵ノ打捨置キタル元込廿七八挺・
刀一本・彈丸數箱・雜品數多各隊ニテ分捕ル、此日実ニ
大勝利也、同月卅一日頃我守壘ナル烏帽子ヶ頭ヲ、山ノ神

ノ兩翼ヨリ明日敵ヨリ進撃スル段探偵ヲ得タルニヨリ、
油断スベカラズト出張本營ヨリ報告アルユヘ、彈藥等ヲ
用意シ壘ヲ堅シテ相待ツ処其日ハ敵来ラズ、翌八月二日
未明ニ對馬ヶ頭^(延岡市北端)ヨリ大砲一発、本道ノ方ニテ又一発響
ヤ否ヤ、合図ト見ヘテ烏帽子ヶ頭ヘ一手凡ニ中隊余、山
ノ神并ニ本道ヘ一手、陣ヶ嶺ヘモ又一手何レモ大軍ニテ
一時ニ襲来シ、烈シク発砲シ鉛丸雨ノ如ク飛ヒケレハ各
方面ノ味方大ニ困苦ス、然ルニ陣ヶ嶺ノ味方ハ暫時ニ打
敗ラレ熊ノ江^(延岡市北端)サシテ散乱シ退キシ模様ナリ、我壘ノ烏帽
子ヶ頭ハ未明ヨリ午後四字頃迄敵軍新手ヲ入レ代ヘク
手強ク攻ルト雖モ、兼テ彈藥・糧食モ用意シテ相待シ事
ユヘ更ニ屈セス、吾ト高山眞平・分隊長日高昌三名ニテ
各壘ヲ駈廻リ左右ヘ兵ヲ配リ防戦術ヲ尽シ烈シク応戦セ
シカハ、目ニアマル大敵ナレトモ我壘ヲ拔事能ハス、午
后四字遂ニ對馬ヶ頭ヘ引取リタリ、尤モ終日對馬ヶ頭ヨ
リモ大砲ヲ以テ我壘ヲハ手強ク攻撃ス、左翼ノ小隊長ハ
彈丸ノ世話ヘ本營出テ、右小隊長谷口ハ湯ヶ内半隊ニア
ル、敵兵引退キユヘ息ヲツキアル処ニ、本道ノ味方敗レ
テ本營モ熊ノ江ヘ引揚ケ候ユヘ、我隊モ殘ラス何ニトソ
シテ無事ニ飛ケ頭ヘ引候様報知アル、依テ敵ノ退ゾキシ

ヲ幸ヒ同所迄引揚ケタリ、然ル処各中隊長地形ヲ見立、我十九番中隊ハ同所ヲ守衛スベキ旨令ス、依テ塁ヲ築キ柵ヲ結ヒ守衛ス、此日ノ戦ニ我半小隊ヘ負傷壹名、左小隊ヘ戦死兩名・負傷四名ナリ、敵ノ死傷ハ数十名アル、飛ケ頭ヲ守ル事八月二日頃ヨリ凡日数十日余、敵軍ヨリモ其後ハ敢テ進撃モセス、陣ヶ嶺ヨリ烏帽子ヶ頭・吐ノ水流迄海岸ハ云フニ及バス、守備嚴重ニ築塁シ柵ヲ設ケテ遠隔ヨリ軍威ヲ示シ更ニ動カス、右江ノ海湾ニハ軍艦二三艘ツ、錨ヲ入レテ味方景況ヲ窺ヒ折々細島ノ方向ケ、又來リテ大砲ノ破烈彈ヲ味方ノ塁ヘ飛シテ是又軍威ヲ示ス、八月十四日比熊田本陣(北川町)ヨリ使來テ、延岡方面味方敗レテ熊田ヘ総軍ヲ纏メ、各將校協議ノ上再ヒ延岡ノ敵ヲ衝カント軍議一決セシユヘ、大至急熊ノ江方面ノ各隊殘ラス夜中引上ケ參集スベキ報アル、依テ我隊ニモ引揚ケ候ヤウ令アル、故ニ速ニ同所ヲ引上ケ熊ノ江ニ引取り、暗夜ニ各隊遁ヲ求テ静ニ引退キ市棚村(北川町)ニ出テケルニ、早東明ニ及ヒ爰ニ暫時休足シ熊田村ヘ漸々午後九字比ニ着陣セリ、故ニ我中隊長米良一穂本營ヘ出テ候処、此地ニ將校一兩名アツテ、何故遲參セシヤト問ヒ、アリシ由答ヘテ、暗夜嶮山ヲ經テ灯火ナク案内ノ者途ニ迷ヒ方角ヲ

失シテ大ニ混乱漸ク即刻着スルヲ得実ニ相濟サル旨ヲ答ヘリト、將校又云、本日ハ未明ヨリ延岡ヲ総軍ニテ衝ノ策アリ、昨夜報知通り彼ノ方面甚タ懸念ナリ片時モ早ク急カレトノ令アリシニ依テ、十九番中隊路ヲ早メテ長井村迄出張、聞ケハ早延岡進撃ノ味方利ナクシテ引退キタリト、時運ナル哉残念ナリト皆默ス、此日ノ戦ヒニ死傷数十名アル由ナリ、程ナク一穂本營ヘ出テ前夜ノ罪ヲ謝セシヨシ、本營ニハ西郷ヲ始桐野・村田等ノ諸將アツテ、桐野ヨリ前夜ノ過ハ今更詮方ナシ、御辺ノ隊ハ此ノ向ノ山上要地ニ築塁シテ守ラルベシ、若變事アラバ速ニ報知セヨ、協議ノ筋一決セハ追々指揮スベシ、片時モ早く嶺上エ兵ヲ引上ケ玉ヘト令アリシ由、依テ彼地エ隊ヲ引上ケ地形ヲ見立テ塁ヲ築キ廿番中隊ト守衛ス、此日小梓峠(岡市)ノ戦争ニ小倉處平、我隊ノ小隊長谷口元、廿番ノ小隊長大岩根又藏、其外分隊長伊東祐純兵士等鉄肥隊ノ内ニ段々負傷者アル、守衛中敵ハ追々大軍トナリ各方面ヘ大砲數門ヲ備ヘ砲發シ、益々塁ヲ堅クシテ進撃ノ色見ヘサルユエ、微行シテ小梓峠ノ方ヘ行キシニ張札アリ、ヨク見始テ驚愕、官卜賊ノ分明ヲ知覺シ高山眞平ニ談シ、鉄肥三隊三官中評議シ、是迄官軍ヘ抵抗シタル罪我々自首

シテ敵科ヲ受テ衆人ニ代リ、兵士ノ命ヲ救フニシカシト衆議一決シテ、佐土原米作・比江島重嶂ナル者ヲ小梓峠ノ御陣エ使節トシテ差立、降伏ノ儀願入候処御聞濟、比江島壹名御返シニ付、翌朝小梓峠ノ下へ兵ヲ纏メ隊ヲ解キ、小梓峠ナル官軍ノ陣門へ兵器等差出シ先非ヲ悔ヒ自首帰順仕候、然ル処直ニ宮崎表檻倉へ護送、同所ニテ口供相濟又長崎檻倉エ護送相成リ、同所九州臨時御裁判所ニ於テ二年懲役仰付ラレ、当時群馬県岩鼻懲役所エ罷在候、

鹿兒島県下日向国那珂郡

鉄板敷敷村居住

当時群馬県岩鼻懲役人

明治十一年二月

米良雲暉

二二 兒玉八次上申書

(朱)第二十一号
今般鹿兒島逆徒御征討顛末御編輯付、戦地形情可申上旨御達相成詳細左ニ上申ス、

私儀

兼テ私学校へ入校仕居候処、明治十年一月中旬中原尚雄

以下ノ人員鹿兒島へ帰県、西郷隆盛ヲ計ラントノ事件粗発覚シ、訖リニ捕縛ノ上糺問ニ相成候処、全ク西郷ヲ暗殺シ私学校党ヲ離間シ、若私学校徒ヲシテ事アルニ至テハ熊本鎮台ヲ以テ之ヲ麤シニセントノ口供ニヨヒタルニ付、西郷・桐野・篠原等政府へ尋問ノ筋有之上京ノ布達ニ付、私学校へ會議ヲ設ケ、私学校徒壹万余名ヲ五大隊ニ編製シ、私ニハ^(村田新八隊長)第二番大隊五番小隊分隊長トナリ、明治十年春二月十五日ヲ以テ西郷出発、之ニ各大隊随従シ、東・西二道へ出発、私ハ東街道大口筋へ午前第七時比斤下ヲ出発、大隅国加治木郷へ着泊ス、同十六日横川郷へ着、同十七日大口郷へ着、同十八日肥後国津奈木駅へ着、同十九日同国宮原へ着、同廿日小川へ着、同廿一日川尻駅へ着スレハ、之レヨリ先キ別府引率スルノ加治木二大隊川尻駅へ着泊スルニ、官軍別府ノ隊ヲ遮リ砲発スレ共、別府隊敢テ抗発セス唯声ヲ揚ケテ進ミ迫レハ、官軍銃器ヲ捐テ潰走ス、此ノ日官兵伍長壹名ヲ擒ニスルノ報告ヲ得ル、同廿二日各大隊熊本庁下へ到着スレハ、先ニ到着セシ隊開戦セシニ庁下煙焰熾ナリ、速ニ熊本城ニ迫ルニ第五番大隊ハ安政橋、第二番大隊ハ花岡山・段山口ヨリ進撃ス、我壹小队モ同シク花岡山・^(池)四方地・田畑ヨリ城近ク四

五十間迫リテ奮戦スト雖モ未タ勝敗ヲ分タス、黄昏ニ至リ第三大隊来リテ之ト交代シ空ク春日村ニ引揚ケテ此村ニ次ル、此日死傷四五名アリ、又四五日ヲ経テ、豊後口鶴崎街道并八代・高瀬ノ三道ヨリ襲ヒ来ルトノ報告アルノ段本営ヨリ達シアリテ、中島健彦(五名市)小隊ト我壱小隊ト二小隊ヲ以テ松橋へ繰出シテ該地ヲ守有スルニ、三角ノ瀬戸・八代沖へ軍艦漂灘スル事度々ナレ共未タ上陸セス、二十余日間該地ヲ守レハ佐土原ノ壱小隊ト代リテ、中島隊ハ田原坂へ、我壱小隊ハ鶴崎街道大津駅へ繰出シ進(蘇陽町)テ黒川邑へ次レハ、此時佐藤三次壱小隊モ鶴崎街道二重峠ヲ保ツ、而テ樋垣權少刑視ノ本営坂梨駅へアルヲ聞ク、官兵ハ坂梨営ヨリ派出シテ新町ヲ有テハ我壱小隊ト邀対シテ未タ戦ハス、同シク坂梨派出ノ兵内ノ牧ヲ有テハ佐藤ノ隊ハ之ト同シク邀対シテ戦ハサルニ、三月十八日曉新町ノ兵二小隊半ヲ以テ我守ル黒川村へ襲ヒ来レハ、之ヲ邀戦シテ終ヒニ官兵ヲ一時位ニシテ擊敗リ、敗走スル名ヲ捨テアルニ、刑部三名余ハ東京巡查ナリ、味方死傷四名内即死三名ナリ、而テ同日佐藤ノ持口へモ同シク内野牧ノ官兵襲ヒ来レ共之モ同シク追散ス、敵味方ノ死傷不

審、此日手旗壱本・針打銃二十七八挺・袂時計八ツ・「シャアーヘル」一腰・手帖二十八冊ヲ分捕ル、数日アツテ小隊ヲ編製シテ中隊トス、初メ小隊長タリシ鎌田雄市郎中隊長トナル、半隊長タリシ米良市之助ハ右小隊長トナル、我八分隊長ナリシカ左小隊長トナル、四五日ヲ経テ坂梨ノ官軍ヲ撃タント坂梨ニ迫レハ兵ナキニヨリ該地ニ次ル、四月四日ノ未明官軍復タ坂梨ヲ襲ヒ来レハ、之ヲ迎ヘテ劇戦頗ル熾ンナリシニ、暫時ニシテ我レハ右足ニ傷ヲ負フテ、大津駅へ退キ該所ニ於テ療治ヲナス、之ヨリ二本木・木山其外諸所ノ病院へ通送セラレシニ、日州高原郷温泉ニ至ツテ療治スレトモ未タ癒ヘサルニ、転シテ大隅(牧園町)国踊郷鹽浸温泉ニ赴キシカ追日平癒、七月上旬コロ宮崎大本営ニ至ルニ中隊長ニ任用セラル、姑クアツテ豊後口へ赴キ至タレハ奇兵四番中隊ヲ指揮シテ同国矢カ内ヲ守ツテ防戦スル事数十日ナリシニ、都ノ城方面諸口太タ兵微ニシテ危報アレハ、応援トシテ我壱中隊ト牧彦八壱中隊外壱小隊トヲ以テ借ニ夜白兼行既ニ佐土原ニ至レハ、佐土原陥リ夥シク官軍佐土原ニ突進スレハ、該地ノ要所ヲ防戦スル事烈シキニ、米良口既ニ敗レ味方諸寨ヲ撤テ潰散スル事愈甚シキニ至レハ、官軍雲霞ノ如ク四方ヲ取

卷キ延岡ノ帰路ヲ絶テ進退途ヲ失ヒ、是ニ至ツテ一路ヲ
突敗リ耳津ニ馳セテ該地ノ川ヲ隔テ、守ルニ、八月七日

(日向市)

ニ至リ山陰口ノ守リ官軍長驅シテ突キ込ミ勢ヒ強大ナリ

シ、急ヲ告ケテ応援ヲ乞フニ頼リ遽ニ馳セテ山陰ノ半途

ニ至タレハ、山陰口モ敗レ官軍富高(日向市)新町ヘ追跡シタルヲ

聞キ、諸万ノ隊散乱シ、官軍四方ヲ取巻キ諸口ノ帰路ヲ絶

レ、時ニ夜モ入り風雨烈敷ヲ以テ暗黒一步モ弁セス、宵ル

延岡ヘ突出セント決シ一方ヲ夜襲セントスルニ、我隊モ

狼狽歩向ヲ迷ヒ諸方ヘ散乱スレハ夜モ既ニ明行ケハ延岡

ヘ行クヘキノ道ヲ失ヒ、僅ニ身ヲ以テ山中ニ潜伏スレハ、

四日間ヲ経テ旅団ノ軍門ニ降伏スルニ依リ、戦争等ノ顛

末如是御座候間、此段上申仕候也、

鹿兒島県

第二大区五小区

明治十一年二月

兒玉八次

二三 三宅時宗上申書

(卷二十一)

今般太政官第四号御達之趣奉敬承候、時宗儀客年二月二

十一日熊本県下第三大区八小区春竹村屯集ノ熊本四番小

隊長林政八ノ脅迫ニ依リ、同廿一日壹番小隊ヨリ五番小

(薩摩)

隊迄竹宮村ヘ集會シ、大江村ヘ繰出シ、此夜十二時頃熊

本隊ハ鎮台城ノ北大手口ニ番兵致シ、薩兵段山・花岡・

田畑・山崎ノ四方ヨリ取囲ミ攻撃スレトモ、城壁堅固ニ

シ落テス、夫レヨリ出京町ヘ引上同所ヲ固ム、翌廿二日

午后十時頃石坂ニ繰出シ番兵ス、同廿三日朝七時頃薩ノ

壹小隊ヲ以交代ス、我同隊ハ又春竹村ヘ宿陣ス、時ニ薩

ノ本営熊本々管ヲ二本木ニ取り、城ノ四面ヲ囲ミ、又土

俵ヲ以テ小川ノ流ヲ壅キ塞キシカハ、城東南西三方忽湖

水ト成リ、陸地通路ノ要衝タル出京町并安政橋ニ哨兵ヲ

張り兵糧攻ニ決シタリ、又所々戦地ニハ本営ノ出張ヲ設

ケ、薩兵ハ桐野・村田等指揮シテ田原・木留・山鹿所々

ニ於テ防戦ス、此時我半隊ヲシテ薩兵応援トシ三月中旬

木留ヘ繰出シ、残り半隊ハ春竹ニ在リシニ、我隊長ノ指

揮ニ依テ同隊塘居保・持田鹿藏并時宗三名ニテ八王寺村

ニ到リ、県庁等外吏古藤秀唯カ所持セシ金百五十円証書

ヲ添ヘテ差出セシヲ受取、秀唯カ我四番小隊ニ加入セン

事ヲ乞シヨ、時宗拒テ不許其金ヲ持帰テ我隊ノ内今村宅

右衛門ニ渡シタリ、時ニ敵ノ軍艦日奈久沖ニ碇泊シタリ

トノ報知アリ、依テ斥候ヲ時宗ニ命ス、則松橋・松合ニ到

テ候フニ、松合ニハ敵ノ本艦ヨリ端舟ヲ以テ上陸シ酒肴ノ類ヲ購求シテ本艦ニ帰リタル由ヲ聞キ、馳帰テ報告セントスル処ニ、早クモ薩兵一小隊熊本一小隊松合(三角町)郡ノ浦線込ミ来レリ、此時敵ノ軍艦ハ日奈久沖ニ碇泊シ、夜ニ入り八代ニ運転シ端舟ヨリ上陸シ砂川(松橋町)へ押寄せ来ルトノ聞ヘアリ、斥候ヲ出シ候ヒミレハ五六千ノ敵兵雲霞ノ如ク群リタリ、味方五六百人ニテ防戦ス、始メ勝利ヲ得シカトモ終ヒニ敗軍シテ、久具(松橋町)・松橋ノ要害ニ引上ケ、所々軍配シ要地々々ニ塁ヲ築キ固ク守リ、今ヤ遅シト待掛シニ、敵ノ大軍寄せ来リ激戦スル事而日ニテ味方勝利ニテ銃器・彈藥分捕若干ナリ、此時敵ノ戦死二百余名、死骸ヲ捨テ、北走ス、夫レヨリ兩三日休戦滞陣セシニ、敵軍所々ニ軍配シ、一手ハ甲佐口ヨリ、一手ハ久具口ヨリ押寄セ大襲来セシニ、味方ノ応援田原(榑木町)・吉次(玉東町)・山鹿(山鹿市)ノ遠路ヲ隔テ容易ク続ク能ハス衆寡敵セス終ニ敗走シテ、後ロヲ顧レハ民家ニ放火シ炎焰天ニ漲ル、夫ヨリ味方ハ川尻ニ退キ此所ニ防禦セント用意スルウチ、追々田原・吉次・山鹿ノ所々ヨリ援兵モ来リケレハ、桐野利秋下知ヲナシ(富合町)所々軍配シ川筋ノ橋ヲ落シ渡シノ舟ヲ引上ケ、杉島・大渡(天明町美登里)・密柑ノ通路ニハ胸壁ヲ築キ番兵ヲ張り、爰ヲ墳墓ノ

地ト定メ待掛タルニ廻江(富合町)ノ村中塘へ敵ノ寄せ来ルトノ報知ニヨリ味方ヲ繰出シ、急ニ板橋ヲ掛ケ川ヲ渡シテ軍配シテ、此方ヨリ砲撃スレハ、敵モ大小砲ヲ放シ而三日劇戦スルニ、敵ハ川尻ノ人家ヲ焼ント頻ニ大砲ヲ打掛ケ妙禪寺ニ打込ミ破裂スレトモ焼ク事能ハス、味方応援引続キ益々氣ヲ得テ防戦スレハ、敵ハ破ル事能ハス背ニ廻リ密柑ノ渡リニ大襲来スレハ、此処ノ守リ支フル事能ハス終ニ敗績シタル由報知ニヨリ、薩兵ハ木山(益城町)ヲ指シテ引揚クル、此時ニ当リ時宗ハ足痛シテ歩行スル能ハス、宿許ニテ療治セシ処、薩兵モ宮崎又豊後路ヲ指シテ引揚タルニヨリ、前条件々篤ト回顧仕候へハ、一旦方向ヲ誤チ天兵ニ抗敵仕候次第誠ニ以大辟不赦ノ大罪ヲ犯シ候段千方後悔仕、初テ夢ノ覚タル如ク五月十二日ニ至リ謹テ県庁へ自首仕候、此段戦争中経歴仕候次第録上仕候也、

熊本県第十大区四小区

杉島村住

現今群馬県已決囚徒

明治十一年二月

三宅時宗

二四 青崎彦六上申書

(卷)第二十三号

鹿兒島逆徒征討始末編輯ニ付、右賊徒懲役人ノ内其事情及戦地ノ形状等詳悉致者ハ該事ノ顛末ヲ筆記シ可上申仕旨奉拝承、細事ハ覚知不仕候得共概知丈左ニ上申仕候、私儀私学校生徒ニハアラスト雖トモ、明治十年二月初旬元陸軍大将西郷隆盛政府へ尋問ノ筋有之上京スルニ付、旧兵隊ニモ途中保護トシテ隨行イタシ、其趣意タルハ警視庁奉職ノ警部巡查帰省中、私学校生徒ニ離間ノ策ヲ廻シ、西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セントノ謀計発覚シ、兼テ私学校ノ趣意タルヲ伝聞スルニ、王ヲ尊ビ民ヲ憐ムハ学文ノ本旨実ニ士タル者ノ望ム所ナラント、憤起シテ三月十日頃宿所発足、吾県下大口ニ至ルニ、第九番大隊八番小队ノ半隊長ニ編入セラレ、同十四日大口ヲ発シ球磨人吉へ至ルニ、大塚村^(大塚、球磨村)へ敵兵来ルトノ報知ニヨリ、為防禦式小隊同所ヲ発シ松元^(球磨村)迄迄進ミ敵軍ヲ伺フニ、敵ハ早佐敷^(北町)ニ引タリト、依テ同所へ両日滯陣シ、夫ヨリ神ノ瀬^(球磨村)へ操出シ敵ヲ伺フニ、敵ハ坂元^(坂本村)ヲ守ルト、依之吾軍六小队ヲ以テ同所ヲ進撃セント、三小队ハ湯治間道ヨリ外三小队^(頭地、五木村)ハ川筋ヲ進ミ、三月十九日神ノ瀬ヲ操出ス、中津道迄至

リ坂元ヲ伺ヒ見ルニ湯治口ノ味方已ニ坂元ニ進ミ込ム、敵兵ハ不戦シテ逃去リタルト、川筋ノ味方モ同廿日坂元ニ来ル、爰ニ於テ二手ニ分レ、日奈久・八代エ進ム、一手ハ球磨川ヲ下リ、川筋ハ其日午后四時頃ヨリ戦ヲ始メ、日奈久味方ハ其夜ノ十二時頃八代ノ川上^(八代市古郷)櫻馬場川向ニ至ル、川筋ヨリ進ム味方明建山^(明建山、八代市旧地)ノ敵ヲ破リテ櫻馬場迄追撃セシカドモ、敵味方トモ不明ニテ同十二日未明ヨリ両方ヨリ進撃セシニ、敵敗走シテ引退ク、吾隊川ヲ越シ八代城近辺迄追撃ス、此時兵士二名戦死ス、午后三時頃ニ至リ味方ノ裏手破レテ櫻馬場迄引揚ク、道ニテ小隊長谷村助七負傷ヲ受ケ病院ニ入ル、敵尚進ンテ追来ル、吾軍憤フテ防戦ス、同十三日八時頃味方利アラズシテ神ノ瀬ニ引テ同所ヲ守ル、敵小川路ト袈裟度越ヲ守ルト、四月十二日神ノ瀬ヲ発シ明ル十三日未明ヨリ進撃ス、敵敗走シテ去ル、此戦ヒニ台兵五六名降ル、其日ハ地ノ利分ラズシテ明建山ニ滯陣シ、明ル十四日櫻馬場其外諸所大戦争トナリ、六昼夜ノ戦ヒナリ、同十九日未明吾軍敗レテ神ノ瀬迄引揚ク、於同所ニ鵬翼四番中隊ト改名ス、神ノ瀬ヨリ一里半位ノ才木村^(才木村)へ哨兵ヲ張り守ル、敵数度襲来ルトイヘドモ吾壘ヲ抜ク事アタハズ、唯大砲ヲ以テ吾砲

台ヲ撃ノミ、同所ヲ廿日程モ守リ居シニ敵攻来リ、如何
 セン吾軍敗レテ少シク引ク、援兵来ツテ又敵ヲ払フテ元
 ノ砲台ヲ守ル、亦其日ノ八時頃ニ至敵襲来ルトイヘドモ
 敗走シテ逃去ル、其夜吾軍ヲ毎床迄引揚シニ敵統ヒテ襲
 来ル、暫ク戦フテ敵退ク、明ル未明敵大軍ヲ以テ襲来ル、
 味方小勢ニテ守ル事アタハス潰ヘテ(一勝地、球磨村、
 二勝地、球磨村、
 三勝地、球磨村)人吉
 危シトノ報ニ依テ応援トシテ人吉ニ趣ク、田代へ守ヲ付
 ケ居シニ五月卅日ノ未明ヨリ大戦トナリ、敵其日ノ十二
 時頃ニ至ツテ引退ク、六月一日亦敵大軍ヲ以テ人吉ヲ襲
 フ、味方敗レテ大木場迄引退ク、守ヲ付ケテ固守ス、同
 十二時頃ヨリ明ル十三日九時頃迄戦フ、味方敗シテ吾県
 飯野(えびの市)上江村迄引揚ク、同十四日同所へ守ヲ付ケ、敵ハ飯
 野麓ヲ守ルトノ報知アリ、同廿三日頃大進撃其ヨリ十日
 計リ同所ヲ防戦ス、此地ニ於テ銃創ヲ受ケ、道ヲ経テ帰
 区ス、夫ヨリ三旅団ニ自首帰順ス、

右ノ通覚ヘノ儘筆記奉上海候、

鹿兒島県下第廿六大区

二小区高江郷居住

当時群馬県徴役人

明治十一歳二月十一日

青崎彦六

二五 金田 徴上申書

(朱)第二十四号
 今般太政官第四号御布告之趣謹て奉拜承候、依之左三筆
 記仕候、

昨明治十年二月中原尚雄外数名之輩帰省中、陸軍大将西
 郷隆盛等ヲ暗殺セントノ密謀発覚シ、陸軍大将西郷隆盛・
 同少将桐野利秋・同篠原國幹政府エ尋問之筋有之上京ス
 ルニ依テ、旧兵隊随行李出発之段鹿兒島県庁ヨリ布達有
 之候ニ付、同県管下日向国鉄肥士族有志之輩協議シ、此
 時ニ当テ傍觀坐視スルノ秋ニ非スト、終ニ随行ト決定シ、
 同志五百余名ヲ三小队トナシ、川崎新五郎・伊東直記ナ
 ル者ヲ総長トシ、佐土原藤吾・米良一穂・高橋藤九郎小
 隊長トナリ、徴儀一小隊ノ監軍トナル、同月十七日鉄肥
 出兵、同国延岡・高千穂口ヨリ肥後国馬見原駅(蘇陽町)・高森駅(高森町)
 ヲ経テ、同廿六日保田窪エ着陣、翌廿七日薩本営ノ指揮
 ヲ受ケ川尻駅并ニ二丁川口ヲ守兵ス、三日ヲ過山鹿ニ転
 ス、此日鉄肥ノ三小队ヲ編製シテ四小队トス、即チ一番・
 三番小队ハ薩ノ各隊ト当所ノ本営ヲ護衛ス、一番・四番ノ
 小队ハ薩ノ各隊ト南關ノ間道ヨリ進撃ス、山鹿ヲ距ル尅
 里余平山邑ニ官軍ノ番兵防戦スト雖トモ拒ム事能ハス終

ニ敗走ス、故ニ我軍進テ十丁村ニ宿陣ス、三月二日南關
間道岩村(三加和町)ニテ敵兵ニ出合ヒ終日交戦ス、我軍利ヲ得ル、

是夜山鹿ノ婦陣ス、翌日ヨリ此地ヲ守ル、同廿日晝ヨリ
八代方面エ応援トシテ同所ヲ発ス、途中大ニ雨降ル、見
鳥村(植木町)ニ至リ雨止ム、植木駅ニ当リ火手揚ル、依テ斥候ヲ出

スニ敵ノ先鋒植木ニ進入スト報アリ、其内田原坂方面敗
軍ノ薩兵追々集合ス、此兵ト共ニ植木ノ敵ニ当ル、終日
激戦五ニ死傷アリ、此夜熊本ニ引取ル、同廿三日熊本城
外筒口ノ守兵薩人某ノ隊ニ交代ス、此所城兵ノ壘ヲ距ル
三四丁、昼夜発砲狙撃止ム時ナシ、或日二本木ノ河水ヲ
堰キ、二日ヲ待タスシテ城外ノ三方皆水トナル、于時我
將桐野利秋護衛ノ士ヲ率ヒ巡視ノ為メ当所出張ス、折節
城内ヨリ三騎段山ノ岳上ニ登リ水面ヲ眺望スルヲ見、薩
ノ伊東新八指揮シテ彼ノ三騎ヲ狙撃セヨト言フ、因テ我
分隊ヲ壘ニ伏セ一声連発スレハ、銃ノ響ク乎否ヤ本城ヲ
向ケ駈入ル、右随従ノ兵ハ地ニ伏テ見ヘス、嚮日木ノ葉(五重町)
ノ戦ヒニテ神宮司某手エ分取スル敵ノ聯隊旗ヲ日々此壘
上ノ竿頭ニ揚ケ置ケリ、次日既ニ同所モ水溢レ故ニ守ヲ
解ク、即日川尻ノ海岸新地ニ守ヲ転シ配兵ス、陸ヲ離ル
壹里程沖ニ官ノ軍艦數艘ヲ繫ナケリ、四月十二日官兵住

吉浦(土市西岸)ヨリ小舟百余艘ヲ浮ヘ列ヲナシ我守ル海岸エ漕寄ス
ルヲ三四丁ニシテ我小隊発砲ス、船兵進ム事ヲ得ス直ニ
漕返シ住吉浦ニ再入ス、同十三日晝(天明町)二丁川口ノ向地ヨリ

敵兵頻リニ砲ヲ発シ、薩兵本田某ノ守潰ヘ敵兵進入シ川
尻ヲ焼ク、為ニ我兵途ヲ絶タレ小島ヲ指シ引揚ケ同所ニ
テ各隊ニ会シ二本木ニ退ク、当所ノ本營ハ既ニ木山ニ移

ルト聞ク、故ニ敵軍ノ連絡シタル路ヲ遮キリ木山ニ趣ク
途中、砂取町近キ民家ノ藪中ニ敵兵一小隊許リヲ伏セ我
總軍ノ過ヲ待チ、左右ノ路傍ヨリ頻ニ発砲ス、然ルヲ中
軍ヨリ數十名声ヲ発シ拔刀シテ駈入り追散ス、其虚ニ総
軍道ヲ過ク、木山ニ到ル深更此夜直ニ同所ノ間道ヲ守ル、
次日薩肥ノ各隊ト飯田山進撃ス、途ニ先鋒隊ヨリ敵兵既
ニ御船ニ引揚タル後ナリト諾ク、依テ我鉄肥二小隊ハ麓
ノ土山・戸川ノ両所ヲ守ル、翌日敵来リテ我胸壁ニ当ル
ヲ防戦ス、半ハニシテ御船ノ敗軍スルヲ聞キ、我隊ヲ繰引
シテ飯田山ニ登リ間道ヨリ矢部街道ニ出ル、此ニテ鉄肥
ノ新募兵二小隊ニ会フ、川崎薨・高山新平之ヲ率ヒ夜矢
部ニ着陣ス、翌日同所中山ニ壘ヲ築キ守ヲ付ク、同日総
軍ヲ改称シ、正義・奇兵・振武・干城・行進外數号ノ大
隊ヲ改ム、予也奇兵廿番中隊右小隊長トナル、翌日總軍矢

部ヲ引揚ケ椎葉山ノ嶮路ヲ越ヘ人吉湯(務前町)ノ前村エ着陣ス、
 兵士疲劣セリ、數日滯陣ス、此ヨリ日向路ニ趣キ美々津(白向町)
 駅ニ出テ同所ヲ守ル五六日、高鍋隊ト交隣シテ又々細島(日向町)
 港ニ守兵ス、当所ニ佐土原ノ砲隊出張スルヲ待テ、代テ延
 岡ニ揆込ミ四五日間宿陣ス、時ニ豊後地ニ突出シタル我
 奇兵ノ先鋒敗軍ノ報ヲ聞キ、延岡ニ在ル奇兵ノ本營ヲ熊
 出(北川町)田(北川町)駅ニ移シ、是夜総軍ヲ水ヶ谷(宇目町)・切込谷(宇目町)・赤松峠(北川町)・矢ヶ
 内(北川町)・三河内ノ諸口ニ分テ、重岡ヲ進撃ス、我二十番中隊
 ハ中津ノ一小隊ト切込谷ノ先鋒トナル、暗夜ニ乘シ二里
 余ノ嶮シキ山路ヲ経テ、未明ニ敵兵ノ守壘ニ近ク進ミ、
 明ヲ待チ襲撃発砲ス、敵モ亦タ諸壘ヨリ防戦ス、午前九時
 頃ロニ及ヒ敵ノ一ノ壘潰ヘ、其機ニ乘シ我兵倍々勇ミ進
 テ一時ニ六七箇所ノ壘ヲ陥ル、敵兵敗走高岳ニ登リ遠矢
 ニ防戦ス、正午頃ロヨリ大雨終ニ我軍進ム能ハス、兵ヲ
 纏メ葛葉(北川町)ニ引取ル、此日ノ戦ヒ分捕多クアリタリ、翌日
 燈ノ山野ニ數箇所ノ壘ヲ堅ク築キ守ヲ敵ニス、敵モ亦タ
 赤松峠所々ノ壘ヲ堅持ス、同所ノ地形ハ深山嶮路ニシテ
 両軍進ニ利ナク休戦シテ空ク數日ヲ送ル、七月中旬葛葉・
 水ヶ谷両所ノ我軍再ヒ重岡ニ進撃ス、夜ニ紛レ又タ切込
 谷ヨリ敵ノ壘ニ寄り配兵シ相図ノ砲声ヲ待チ開戦ス、敵

壘堅ク援兵続キ終日戦フト雖トモ破ル事能ハス、昏ニ及
 ヒ復タ葛葉ニ退ク、是日苦戦甚タ死傷多シ、同下旬三河
 内津島峠(北川町)ノ敵陣ニ夜襲ヲ懸ケ、我左小隊先鋒トナリ敵壘
 近ク進ミ未明ニ発砲劇戦ス、敵兵支ユル能ハス一時ニ敗
 走ス、此時敵死傷多シ、即地ニ斃ル者數十名、我中隊長
 守永守重傷ヲ負フ、半隊長大田原弘・分隊長郡司和平太
 外數名負傷ス、此日分捕多ク亦タ敵ノ諸壘ヲ取ルト雖ト
 モ、霧深ク地形知ラサルヲ以テ空ク兵ヲ引揚ケ三河内古
 江(北川町)ノ峠ニ守ヲ付ル、此日中隊長守永守負傷シタルヲ以テ、
 徵代テ中隊長代理トナル、八月上旬敵軍日向路ニ進入シ
 美々津川ヲ渡リ既ニ門川ニ至ル頃ロ、西郷大將熊田(北川町)ノ
 民家ニ在リテ護衛ノ兵數名ト犬ヲ率ヒ山ニ狩シテ遊フヲ
 見タリ、同十二日敵我延岡ノ壘ニ迫リ、因小梓峠(延岡市川島)ニ守ヲ
 付ケ総軍ハ長井邑以北熊田ニ到民家ニ宿陣ス、此時奇兵
 総軍ハ豊後口ヲ堅ク守リシガ、同十二日延岡ニ在ル敵陣
 ヲ撃碎カント軍議一決シ、故ニ豊後口ノ我軍夜ニ及ヒ篝
 火ヲ焚キステ熊田ニ引揚ク、途中炬火ヲ禁ス、此夜熊田
 駅大ニ雜沓ス、曉ニ及ヒ稍ク長井邑ニ至ル、我諸將西郷
 大將ヲ始メ桐野・村田・邊見・別府其外悉ク本營ニ軍議
 ス、先鋒ノ各隊ハ小梓峠ニ激戦ス、時ニ我將野村忍介ヲ

始、小倉處平・重久勇七死ヲ決シ敵ノ銃丸如雨キヲ厭ハ
ス刀ヲ拔テ衆ヲ勵マス、此時野村忍介右足ニ負傷ス、小
倉處平モ同左足ニ重傷ス、重久雄七八戦死ス、小倉處平ナ
ル者ハ我飢肥ノ士ナルガ此日ノ深手ニ進退スル能ハス之
ニ依テ翌日同所ノ民家ニ入り屠腹シテ死セリ、同十四日
敵軍長井邑ノ四方ヲ囲ミ頻ニ砲ヲ發ス、彈丸雨ノ如ク我
本營ノ近キニ破裂ス、我軍モ亦タ四方ニ散兵ヲ布キ拒テ
決戦スル事三日ヲ過ク、兵士疲勞シ彈藥・兵糧等之シ、
同十七日我隊ノ斥候敵地近キニ行キ路傍ニ揭示シタル一
書ヲ得テ歸ル、是ヲ見ニ官軍先鋒本營ノ告諭書ナリ、此
ニ始テ逆賊追討ノ御趣意ヲ奉敬承、之ニ因テ吾飢肥ノ各
隊ト集会シ、先非悔後シ帰順降伏ノ議一決シ、速ニ佐土
原来作・肥江島重嶂ナル者ヲ小梓峠(延岡市)ノ軍門ニ遣シ、降伏
ノ趣ヲ嘆願シ、翌十八日隊ヲ解キ兵機ヲ廢シ小梓峠ノ軍
門ニ降伏帰順仕候、

鹿兒島県管下日向国第九大区

一小区板敷村居住

当時群馬県懲役人

明治十一年二月

金田 徴

二六 山下覺矢上申書

(卷「第二十五号」)
今般太政官御布達第四号ニヨリ乍恐取覚候次第取敢ス
左ニ筆記上申仕候、

自分儀

私学校徒ニテモ無是、西郷隆盛等政府へ為尋問鹿兒島
出発ノ節モ隨行致サス、其后県地ニ於テ兵卒等相集メ
候際モ關係仕ス在宿罷居候得共、已ニ昨明治十年三月
初旬比ヨリニテモ候ヤ、右隆盛以下へ隨行シ熊本県ニ
於テ交戦セシ者共追々馳セ歸リ、鹿兒島ノ内伊鋪村及
ヒ芳野村其他本營ト称シ宿陣ヲ構へ、諸隊諸方エ屯集
シ山谷山郷西南ヲ以テ味方ノ地ト占メ、尚各郷等ヨリモ
兵隊等相集メ候際、郷内ノ者共ヨリ右伊鋪村本營へ差
越事情篤ト尋問致シ與候ヨフトノ儀ヲ依頼サレ、四月
中旬比ニテモ候ワン、吾郷里ヲ発シ右本營エ赴キ候処、
同所ニハ中島健彦・貴島清等宿陣シタリ、彼等ノ説ニ云
ク、吾等人民ノ苦ヲ救ンカ為メニ県地へ再ヒ帰来ス、始
メハ政府西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セント計リ、夫レ
ガ為メニ尋問上京スル途中一応接モナク暴ニ砲發シ、
已ム事ヲ得ス戦ヲ啓ケリ、然ルニ又県下エ襲来リ人民

ノ妨害ヲ為ス、是何ソ政府ト云ワン、憤慨ノ至リニ堪ス、是クノ如キ時ニ当テ因循座視スルニ忍ヒンヤ、ト云フニヨリ、其議ニ從ヒ候処、振武廿四番分隊長ヲ協議ナリトシテ自分エ申付、此議ハ断リナリト再三辞退スレトモ、是非ト云フニヨリ其議ニ從ヒ候事、

一 六月初旬比ニテモ候ヤ、鹿兒島ノ内武村防守ス可キ旨ヲ申付ラレ、指揮ニ從ヒ守居候処、全廿四日ノ未明ヨリ敵兵浜橋川涯ヨリ攻メ来リ、味方防戦數十合ニ及フト雖トモ衆寡敵セス、遂ニ味方大敗走ニ及ヘリ、此戦ヤ未明ヨリ起リ夜半マテ炮声不止、

一 同廿五日吾伊鋪村本営モ下田辺^{鹿兒島内}エ、^{鹿兒島内} 転營ノ由ニテ、諸隊一同本營方エ引揚ベキ報知アレトモ、吾隊ノミ諸隊ノ変制ニ関セス、帰順ノ見込ミヲ以テ鹿兒島県ノ内伊集院郷石^(松元町)谷村ト云所エ引退キ、隊中エモ此ノ上ハ進退各自自由タル可キ旨ヲ申述置、直ニ帰宅候事、

一 其后前非悔悟謹慎罷在候処、鹿兒島逆徒御征討被仰出、反正帰順ノ道ヲ啓レ候トノ由承リ、深ク奉恐入、七月初旬比ニテモ候ヤ郷里ヲ発シ、鹿兒島県大隅郡櫻島警視出張所分署へ帰順自首仕、夫ヨリ鹿兒島警察所エ護送セラレ御尋問ノ上又九州臨時裁判出張所エ御送

リ相成御調ノ上、旧城内へ拘留相成、八月十三日長崎九州臨時裁判エ御指廻ノ段承知仕即日出帆イタシ、全十五日着港直ニ第二檻倉へ入檻セラレ、九月十四日御宣告、懲役壹年被申付候事、

鹿兒島第十五大区小壠ノ区
揖宿郡指宿郷居住

群馬県岩鼻已決檻一年懲役

(年月日誌)

山下覺矢

(表紙)

西南之役懲役人筆記十六 群馬県下

(中表紙)

群馬県

一 建部七八上申書

(宋二十六号)

今般太政官第四号御達之趣奉敬承候、明治十年二月鹿兒島県人多人数兵器ヲ携へ上京ニ付、同十九日以来熊本市街無残兵燹ニ罹リ、同二十二日鎮台ト開戦以來熊本県第一大区并ニ第二・第三ノ兩大区熊本接近ノ人民四方へ離散シ、所縁々々ハ申ニ不及寺院・村落・無縁ノ人家へ家族ヲ携へ寄宿致シ、勿論俄頃ノ変動ニテ家財什器ハ大方ニ打捨置キ、手廻緊要ノ品マテ持除候向キ多ク、累日ノ戦争日夜砲声ノ絶間ナク、金穀ノ融通必至

度差支へ、纒一村落下テモ夥敷キ人口ヲ増殖シ、所柄固有ノ穀物ハ忽地ニ払底シ、外々ヨリ購求スヘキ術計モ容易ニ難施、多クハ無資ノ貧人而已ニテ飢餓ニモ逼ル程ノ形状ニ候処、県庁ハ已ニ立退キ人民保護ノ道絶へ、強盜押込或ハ無辜ノ人民ヲ切害スルナト、実ニ惨酷窮り候ニ付、悪徒鎮撫致候様池邊吉十郎ヨリ申談候ニ付、相門ヲ倡ヒ八小区・九小区・十小区中ノ村町ヲ巡邏鎮撫致候中チ、区戸長ニテ方法ヲ設ケ、金穀ノ救助取計候処、是又悪徒ノ奪掠モ難計由ニテ、右之趣池邊吉十郎承リ、一般人民ノ救助筋ナレハ右金穀ノ保護ヲモ致與候様申談ニ付、救助所三ヶ所ノ内二本木ハ近傍ニ付同所川上熊次宅へ三月七日ヨリ交代ヲ以相詰申候、

一三月十三・四日頃ト覚申候同県下第十二大区へ党民起リ、数千入宮原町へ押寄せ、区长詰所ヲ取巻キ、同大区郷備金八千円余紛失シタルヲ区长成田清九郎ノ所為ト申掛数日脅迫、終ニ暴殺ニモ可立至形状ニ付、池邊吉十郎ヨリ鎮撫ノ人員四五名差越取鎮メ候様申談ヲ受、野々口常人・西春適・花田岩平・中根光則・粟津九郎・井上有隣ノ六人ニ池邊ヨリ差越ス処ノ野上文九郎ト同伴シ宮原町へ到着、右ノ面々ヨリ暴民ヲ取糺候処、郷

備金ハ外ニ盜賊露顕イタシ候ニ付、右暴民ノ巨魁何某并ニ郷備金ノ盜賊何某此兩人姓名ヲ失ス兩人ヲ、区長并所柄人民

ヨリ、以來取締ノ為メ嚴重ノ処置ニ及ヒ呉候様依頼ヲ

受ケ、暴民ハ野々口常人、盜賊ハ花田岩平ニテ刎首仕

候、其後ハ同所モ党民ハ大ニ鎮靜ニ及ヒ候由ニテ、四五

日ヲ過キ右七名帰着ノ上詳細事情承リ申候、

一同二十日頃ト覚申候、鎮台城内ヨリ出テ来リタル七瀧

村ノ者姓名ヲ失ス何某ヲ薩兵ヨリ捕縛シテ熊本本陣ヘ引渡、

同所ニ於テ糺明ノ上刎首候様書面ヲ以申来リ、此節七

八儀ハ他行シ居合不申内、右書面ノ趣ヲ以相門ノ中岩

橋彦作刎首仕候由、帰候テ承リ申候、

一四月上旬頃ト覚申候、熊本西津村近津村ノ者姓名ヲ失ス何某儀過ル二月

廿一日熊本小島沖ヘ軍艦着港イタシ、海兵十名端舟ヨリ百

貫石本西津ヘ上陸ノ処、折節薩兵同所ヘ着ノ砌ニテ直ニ砲撃

シテ八名ハ負傷ニテ生擒ト成リ、残二名逃走セシ内尅

名近津村ヘ潜伏、追テ右何某ヘ依頼シ軍艦ヘ送り届ケ

謝礼金拾円貰受候由、跡達テ小島鎮撫方ヨリ探知イタ

シ熊本本陣ヘ連越候ヲ、同所ニ於テ糺明ノ上刎首候様

申来候ニ付、七八ヨリ再三相宥候ヘトモ、本陣ヨリ兼テ

差留置候船留ノ令ヲ犯シ候ニ付、他日取締ノ為是非斬

殺候様トノ事ニテ、不得止七八塲建部眞八郎ヘ申付近津村ニテ刎首仕候、

一同月十四日川尻ノ固メ敗レ、薩兵・熊本隊総テ木山益城町ヘ

引上、官軍鎮台連絡相通シ、最早鎮撫モ不用ニ付、戸熊本

坂村ヘ引移リ、此処ニテ鎮撫解放シ池上村熊本ヘ一泊又野

出村内町ヘ二泊仕、同所ニテ承リ候ヘハ已ニ県庁モ相立候

由ニ付、同十七日帰宅仕、相門申談同十八日右之次第

自首ノ書付持参、掛リ戸長ヘ差出置候処、同二十日警

視出張ヨリ御呼出ニ相成リ、其儘入檻被申付、追々御調

之上長崎九州臨時裁判所ニ於テ、右稜々之内熊本近津村何

某ヲ池邊吉十郎ノ差図ヲ受ケ塲建部眞八郎ヘ申付被害

致サセ候科ニ依リ、懲役三年被申付筈ノ処、情状ヲ酌

量セラレ除族ノ上懲役一年被申付旨、九月十四日宣告、

群馬岩鼻已決檻ヘ就役仕候事、

熊本県第二大区十小区

春日村土族建部眞八郎叔父

明治十一年二月

建部七八

二 神崎周平上申書

(卷)第二十七号

口上

神崎周平

私事

仰達趣謹て奉畏、熟考仕申候得共正ニ取算不申候ニ付、
存付候アラマシ筆記仕差上申候、

鹿兒島県日向国諸県郡

九十五大区高岡郷

明治十一年寅二月十日

神崎周平

三月三十日故郷ヲ発足仕人吉ト申処迄差越、十番大隊四
番小隊給養へ加入仕、四月十二日八代エ出発、同十七日
迄昼夜之戦ニて敗軍ニ相及、神之瀬(津嘉戸)へ引揚候処、告口村(音北町)
之様差越候様承、告口エ差越此処ニて十日位番兵、五月

七日大野エ差越候様承、右大野エ差越申候処、此処ニて

各隊変制有之、鷗翼二番中隊右小隊ノ分隊長被申付、祝(音北)
坂ト申処番兵被申付、同十二日佐敷エ進撃、暫戦争ニ相及

候処、敵方ヨリ背面ヲ取切ラレ敗軍ニて右祝坂堅場へ引

揚申候、同廿三日カモン(津嘉戸)口ト申処相敗レ告口村エ引揚申

候、此処ヨリ祝ヒタナト申処エ三四日程番兵仕居候処、

神之瀬口相敗レ候ニ付渡瀬村エ引揚申候、此処ヨリ提角(照岳)

ト申処三方境エ番兵、敵方ヨリ進撃ニて暫戦争ニ相及申

候処敗軍ニて、終ニマソノ村ト申処エ引揚、其後何方ト

モ地名不存処ニて戦争、此処モ利アラスして人吉エ引揚、

此処ニて手負仕、夫ヨリ故郷エ罷帰居候処、八月三日高

岡ニて帰順仕申候、

右ハ鹿兒島県逆徒征討之始末編輯候ニ付賊徒懲役人之内

其事情等詳悉致シ候者ハ、該事之顛末筆記仕差上候様被

仰達趣謹て奉畏、熟考仕申候得共正ニ取算不申候ニ付、
存付候アラマシ筆記仕差上申候、

鹿兒島県日向国諸県郡

九十五大区高岡郷

明治十一年寅二月十日

神崎周平

三月三十日故郷ヲ発足仕人吉ト申処迄差越、十番大隊四
番小隊給養へ加入仕、四月十二日八代エ出発、同十七日
迄昼夜之戦ニて敗軍ニ相及、神之瀬(津嘉戸)へ引揚候処、告口村(音北町)
之様差越候様承、告口エ差越此処ニて十日位番兵、五月

七日大野エ差越候様承、右大野エ差越申候処、此処ニて

各隊変制有之、鷗翼二番中隊右小隊ノ分隊長被申付、祝(音北)
坂ト申処番兵被申付、同十二日佐敷エ進撃、暫戦争ニ相及

候処、敵方ヨリ背面ヲ取切ラレ敗軍ニて右祝坂堅場へ引

揚申候、同廿三日カモン(津嘉戸)口ト申処相敗レ告口村エ引揚申

候、此処ヨリ祝ヒタナト申処エ三四日程番兵仕居候処、

神之瀬口相敗レ候ニ付渡瀬村エ引揚申候、此処ヨリ提角(照岳)

ト申処三方境エ番兵、敵方ヨリ進撃ニて暫戦争ニ相及申

候処敗軍ニて、終ニマソノ村ト申処エ引揚、其後何方ト

モ地名不存処ニて戦争、此処モ利アラスして人吉エ引揚、

此処ニて手負仕、夫ヨリ故郷エ罷帰居候処、八月三日高

岡ニて帰順仕申候、

右ハ鹿兒島県逆徒征討之始末編輯候ニ付賊徒懲役人之内

其事情等詳悉致シ候者ハ、該事之顛末筆記仕差上候様被

三 田中豊彦上申書

兼て私学校へハ入校不仕候処、昨明治十年二月初旬頃中
原尚雄以下数名鹿兒島へ帰県シ、西郷隆盛ヲ計ラントノ
事件粗発覚シ、捕縛ノ上糺問ニ相成リ候処、全ク西郷ヲ
暗殺シ私学校党ヲ離間セントノ口供ニ及ヒタルニ付、陸
軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・全少将篠原國幹等 政
府へ尋問ノ筋有之、旧兵隊ノ者共随行上京ノ布達ニ付西
郷へ随行仕、同二月十五日第二番大隊九番小隊長伊
集院權右衛門、半隊長重久敬一、分隊長村田平介、押伍
相良東隊兵士ニ編入セラレ、路ヲ東ニトリ発足シ加治木

豊彦儀

兼て私学校へハ入校不仕候処、昨明治十年二月初旬頃中
原尚雄以下数名鹿兒島へ帰県シ、西郷隆盛ヲ計ラントノ
事件粗発覚シ、捕縛ノ上糺問ニ相成リ候処、全ク西郷ヲ
暗殺シ私学校党ヲ離間セントノ口供ニ及ヒタルニ付、陸
軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・全少将篠原國幹等 政
府へ尋問ノ筋有之、旧兵隊ノ者共随行上京ノ布達ニ付西
郷へ随行仕、同二月十五日第二番大隊九番小隊長伊
集院權右衛門、半隊長重久敬一、分隊長村田平介、押伍
相良東隊兵士ニ編入セラレ、路ヲ東ニトリ発足シ加治木

郷へ着陣、同十六日横川郷へ着シ、同十七日大口郷へ着シ、同十八日熊本県下肥後国津奈木駅へ着シ、同十九日宮原ニ着シ、同廿日川尻駅ニ着シ、時ニ昨夜熊本台兵我前途ヲ遮絶シ一ノ応接モコレナク暴リニ砲発ニ及ヒ、止ヲ得ス開戦ニ及ヒシトノ報知アリ、依テ初テ接戦ノ用意ヲナシ午餐喫シ暫時休足ニテ発足シ、(熊本市)高橋へ着シ終夜番兵固守シ、同廿二日彦番大隊・五番大隊ヲ以テ川尻駅ヨリ進撃シ砲戦最中、午前九時比式番大隊ヲ以テ城ノ背面花岡・田畑・段山口ヨリ進撃シ、勝敗不分夜ニ及ヒ、午後九時比ヨリ砲台ヲ花岡山ニ据へ放出スレハ味方益氣ヲ得テ、(熊本)昼夜砲声絶へス、同廿三日木葉戦争応援トシテ植木町へ操出シ候処、最早味方勝利ニテ其日ハ空シク植木町へ滞陣シ、同廿四日熊本迎町へ引揚ケケ休息シ、同廿五日高瀬(玉名市)へ操出シ既ニ着セントスル処ニ敵兵兼テ川向ニ兵ヲ伏セ置不意ニ砲発ス、依テ後ニアル堤ニ楯ヲトリ川ヲ境ニシ双方銃戦ニ及ヒ、其日ハ勝敗相決セス、翌曉ニ及ヒ当地ヲ引揚ケ植木ニ宿陣シ、同廿七日植木ヲ発シ木葉迄操出シ、当所町ノ上ニ台場ヲ築キ二晝夜番兵致シ候処、同三十日午前八時比ヨリ高瀬ノ敵軍二手ニ別レ、一手ハ吉次(玉名町)、彦手ハ此方へ押寄スルノ報知アリ、依テ各隊ヲシテ台場へ構

へシメタルニ、敵兵凡ソ二百間程ノ近キ処ヨリ散隊ヲ開キ砲発シ戦処ニ、味方ノ右翼弾丸尽キテ退ケハ敵兵其跡ニ入り代リ我左翼ニ横撃シ、我左翼ノ下市中ニ火ヲ放チ煙リノ中ヨリ俄然ト顯レ出テ正面三方ヨリ押寄せ来リ、暫時戦テ終ニ味方敗走シ十四町程モ退キ敵モ引揚ル、夫ヨリ田原坂ヲ保チ台場ヲ築キ堅ク守リヲ付居候処、三月一日午前八時比ヨリ敵木葉ノ丘ヨリ砲発シ、我隊小銃ヲ以テ相對ス、勝敗ナシ、同二日敵軍吾後ニ廻リ本路ニ出テ砲発スルニ如何トモスルノ策ナシ、進退爰ニ決シタリト我隊長伊集院權右衛門衆ヲ指揮シ抜刀ニテ切込ミシニ、敵軍ハ銃ヲ捨或ハ劍ヲ捨テ散々ニ逃ケ走ル、是戦ヤ勝利アリ、此日味方戦死二三名・傷者四五名ナリ、時ニ豊彦ノ押伍相良東即死イタセシニ付人夫ヲ購求スレトモ得ス、詮方ナクモ自身ニ負ヒ荷テ植木迄漸ク着シ、人夫ヲ雇フテ熊本二本樹マテ着シ大小荷駄へ託シ葬リケル、敵兵ハ士官三名・兵士七八名死骸ヲ捨置キ、我隊ハ直ニ堤ニ楯ヲトリ伏シ居リシニ、後又敵兵ヨリ寄せ来リ暫ク銃戦スルニ、既ニ味方ノ弾丸乏キニ依リ二度抜刀ニテ切込ミ味方大勝利アリ、此日手負・戦死十四五名位ナリ、敵兵ノ死骸ハ三四十名ナリ、此日敵軍モ死骸ヲ引揚ケル事能ハス双

方伏セ居ノミニテ其夜一発モ砲声ナシ、同四日未明ヨリ
双方戦争ニ及ヒ候処、壹番大隊ト更代シ熊本萬日村^(熊本市)へ引
揚ケ休息シ、同五日段山口ヲ衛リシニ、同六日敵兵城ヨリ
出テ兵士凡式拾名・士官壹名ヲシテ吾番兵小屋ヲ襲ヒ、
後ニ廻リ不意ニ砲発ス、非番ノモノ大ニ混雜シ、各小屋口
ヨリ砲発スルニ敵ノ士官壹名弾丸ニ当リ即座ニ倒レハ余
兵士ハ散タニ逃ケ失タリ、然ルニ正面ヨリ寄セ来ル敵ト
四時間余モ劇戦セシカトモ衆寡不敵終ヒニ敗潰ス、此時
豊彦ニハ右脇ニ銃丸ヲ受ケ負傷者トナリ川尻病院ニ入院
ス、時ニ二十六番病院迄設置コレアリ、其レヨリ川尻敗軍
ノ際病院ヲ木山村ニ転シ、木山敗軍ノ後チ鹿兒島へ帰県
療治シ、平癒セシ処又候五月十七日募兵ノタメ振武隊本
営中島健彦ノ令ヲ以テ、志々目眞幸来リ募兵ヲ促スニ曰
ク、郷内壯士ノ者共何ソ此際ニ当リ狼狽スルニ足ラン、
困難ニ臨ンテ人民ノ義務ヲ尽サスンハアラスト、依之復
々憤発シテ我区ノ壯士六十余名共ニ五月廿二日出発シ、
鹿兒島下伊敷村へ着シ本営中島健彦方へ届出テ候処、直
ニ六十余名ヲシテ振武廿九番小隊ニ編制シ、豊彦へ小隊
長右人員ノ入札ヲ以テ決議ニ相成リ、再三辞退仕候得共
相叶ハス止ヲ得ス小隊長トナリ、因テ同所宇治瀬^(鹿兒島市)ノ上ニ

守リヲ付居候処、六月廿五日敵軍ヨリ砲発セシニ我隊モ
暫時抗撃候処、各所ヨリ敗軍ニ及ヒシニ付本営ヲ指シテ
引揚ケ形行申出候処、川上村迄引揚ケキ指揮ニ随ヒ引揚、
同廿六日鹿兒島郡吉田へ引揚ケ、同廿七日蒲生郷へ引揚
候処、三官ノ内壹名出頭致ス可ノ報知アリ、依テ本営へ
出頭ノ処、同所高牧^(蒲生町)ト云処ニ番兵致ス可キトノ指令ニ随
ヒ、我隊ト振武五番中隊ト共ニ高牧ニ到リ一昼夜番兵固
守セシ処、同廿八日吉田街路ニ当リ砲声烈敷聞ヘシカ暫
ラクアツテ吉田街路敗走シ、敵軍最早蒲生町^(練)へ操込ミタ
ルニヨリ溝邊郷へ引揚ケ可キトノ急報アリ、即チ我隊振
武五番中隊ト共ニ溝邊郷へ引揚ケ宿陣ス、同廿九日我隊
ト振武六番中隊ト同所荷付村^(丹生附村)溝邊町^(溝邊町)
五時比ノ報ニ曰ク、人吉方ノ敵兵^(えびの市)吉田ヲ敗リ既ニ横川へ
押寄せ後ヨリ攻メラレントスルノ勢ナリ、速ニ兵ヲ加治
木ノ十文字坂へ引揚ケ宿陣ス、同三十日未明ヨリ中島健彦
ノ十文字坂へ引揚ケ宿陣ス、同三十日未明ヨリ中島健彦
・貴島清等振武十五六中隊ヲ引率シ志布志郷ヲ指シテ発足
スルニ、途中國分郷ニ休足シ其時ニ当リ中島健彦衆ニ廻
文シテ曰ク、志布志・高隈等ノ奸賊ヲ払ハシカタメ彼
地ニ赴キ諸君身命ヲ投シテ尽セヨト、各隊命ヲ受ケ又國

分ヲ発ス、此時也我隊ハ同所宮内村ニ番兵セシ行進隊応援トシテ残シ置カレ、即チ行進本管相良郷左衛門ニ対面シ、彼ノ趣申述宮内へ応援トシテ滞陣シ、同七月一日未明ニ敵軍ヨリ進撃スルニ、味方未タ応援達セスシテ敗走シ、其レヨリ福山ニ引揚ケ居リシニ敵兵上下ヨリ寄せ、軍艦モ海岸ヨリ劇シク寄せ来リ竟ニ衆寡敵セスシテ敗走シ、其レヨリ財部へ引揚ケ、同廿四日財部ノ内宮原ト云処ニ番兵イタシ居リ候処、敵軍未明ヨリ大進撃シ終ニ敗走シ、此日都之城ニ引揚ケ同日都之城敗軍ニ付我隊モ散乱シ、依テ帰区仕候処、巡查派出ニ相成居候ニ付、先非ヲ悔悟シ綿貫小警視へ帰順自首仕候ナリ、

右之通取覚申候間上申仕候、以上、

鹿兒島県第十七大区小荖区

穎娃郡穎娃郷郡村

明治十一年寅二月

田中豊彦

四 東 九郎次上申書

〔朱〕^{第二十九号}
今般鹿兒島賊徒征討始末御編輯ニ付、其事情及戦地ノ形状ヲ筆記シ上申可仕旨、客月廿八日太政官第四号ヲ以テ

御布達ノ趣奉謹承見聞ノ次第左ニ奉上申候、

昨明治十年二月上旬陸軍大将西郷隆盛等大兵ヲ引率シ上京ノ趣巷話アリ、依之人吉士族田代醇ナル者其事実探偵トシテ鹿兒島へ向ケ相越ス途中、同県下横川宿ニ至レハ、陸軍少将桐野利秋兵ヲ率ヒ来ルニ会シ、中原尚雄及野村綱其他数名ノ口供書ヲ得区務所へ持参セシヨ一読シ、初テ其事実ヲ知ル、於是同志ノ者数輩会議スト雖辺陲ノ地殊ニ道路梗塞シ、

朝意通セス大義ノ向フ所ヲ不知頗ル論議アリ、然ルニ同月下旬人吉士族中熊本陣ト記タル書翰到来、披キ見レハ、三日不出出兵可致、若シ遅延於有之ハ後患不可測トノ事ニ付、区长神瀬鹿三探索ノ為同ク下旬熊本へ向ケ出発シ八代ニ至リ、不料熊本県士池邊吉十郎ノ使同県士齋藤勝太ナル者ニ会語スルニ、曩キニ到来セシ書翰即チ同人遣ス所ナリト、依之神瀬ハ直チニ馳歸リ云、各所義兵ノ起ル蜂巣ヲ破ルカ如ク且熊本ノ落城近キニアリト聞ケリ、実ニ 皇国ノ安危此秋ナリ、臣子タル者傍觀坐視スルニ不忍身命ヲ擲チ国家ニ不可不報ト、於是同志輩不期シテ蟻集シ、論議一決ス、自分儀ハ那須拙速・犬童治成ノ頼談ニ依リ小隊長トナリ、三月四日人吉ヲ発シ八代ニ至リ、

齋藤勝太ノ教導ニテ同六日川尻宿ニ至レハ、薩本營ヨリ同所警衛可致旨達シ有之、同所ニ止ル事十二日ニシテ同十九日木留(植木町)ニ出兵、翌二十日午前八時植木口応援トシテ薩兵一小隊ニ随從シ沖迫村(荻迫、植木町)ニ至ルヤ、藪陰ヨリ銃丸頻ニ達セシカハ兵ヲ伏セ少シク発放シ寄せ來ルヲ相待ト雖終ニ迫リ不來、午後四時頃銃声止ム、此日我總長神瀨鹿三戰死、本日植木ノ戦味方大ニ勝利ナリト、翌廿一日午前三時頃薩兵ト共ニ木留ニ退キ、同廿三日吉次山(玉東町)ニ転シ胸壁ヲ築キ守之、翌廿四日午前七時官軍耳取山ヨリ進テ我正面ヲ衝ク、我兵烈シク防戦スルヲ以テ我左側ノ半腹ニ備タル薩兵ノ胸壁ニ向ヒ進ミ迫ル、其距離六七步、此時我兵其左翼ヲ射撃ス、薩兵モ烈戦スルヲ以テ午後五時頃ニ至リ官軍終ニ敗走ス、此日我隊輕傷ヲ受ル者一名官軍死傷多シト聞ケリ、其後少戦アリ僅ニ死傷アレトモ可記ノ勝敗ナシ、同三十日我隊ハ薩兵ニ替リ、新宮嘉善隊ハ熊本兵ト交替シテ休兵ス、四月一日早天官軍進撃アリ味方不能支シテ三ノ嶽ノ麓ノ山口村ニ引揚、小松山ニ胸壁ヲ連築シ薩肥ノ兵ト之レニ拠ル、或日早天官軍寄來リ、少戦アレトモ互ニ勝敗ナシ、同十四日川尻ノ兵敗ル、ニ依リ、翌十五日午前八時總兵木山ニ退キ、同十八日熊本ノ

兵四小隊ト合併(御船町)ニ至リ同所東北ノ田畝ヲ守、同廿日弘峯木山ニ當リ砲声烈シク聞ケレハ、兵ヲ布クヤ果シテ西南ニ備タル薩肥ノ隊ニ攻懸リ我正面モ亦寄せ來ル、此ノ時薩ノ応援進ミ來リ之ニ加ルト雖敵ノ十字火ヲ受ルヲ以テ、我兵ハ右側ノ丘陵ニ攀チ登リ狙撃ス、然レトモ官軍砲銃ヲ烈発シテ攻立、西南ノ丘上ニ備タル熊本兵敗レ官軍疾風ノ如ク既ニ市外ニ衝入セシニ依リ、兵ヲ纏メ鐘打村(天部町)ニ引揚矢部ニ退ク、此日味方死傷多シ、予亦輕傷ヲ受ク、於是總兵人吉ハ揚ルニ一決セシニ因リ、馬見原(藤原町)ヲ經椎葉山ヲ越同月下旬人吉ニ至リ、五月二日五木村ニ出兵新宮某ノ隊ト交替ス、八重及宮園・頭地等ニテ戰爭互ニ勝敗死傷アレトモ終ニ不利シテ、同月三十日西ノ村ヘ引揚、六月一日人吉ニ在ル薩兵敗レ市在兵火ニ罹ルニ付又大畑村ヘ退ク、時ニ渡リ村路傍ニ官軍先鋒御本營ノ告諭書掲示シアルヲ我兵持參ス、之レヲ肅読シ前非悔悟シ棄兵器、同四日隊ヲ率ヒ木上村御出張ノ撰拔隊ニ就キ、人吉御出張第二旅団山田陸軍少將ノ御本營ニ自首帰順仕候事、

熊本県第十四大区四小区南町居住
平民

当今群馬県懲役人

明治十一年戊寅二月十日

東 九郎次

五 横山賢二郎上申書

(卷「第三十号」)

賢二郎儀兼テ私学校へ入校致シ、其趣意タルヤ西郷隆盛

ノ倡導ニテ桐野利秋・篠原國幹等ト共ニ是ヲ設立シ、尊王

恤民国難ノ際ニハ共ニ踴躍シテ人民ノ義務ヲ尽スノ大体

ヨリ、修身ノ研究等ニ至ル迄主一ニ教育致シ、大ニ男子

タル者ノ勤ム可キ職分ナリト思慮シテ從事致シ居候処、

客年二月初旬比内務卿大久保利通・大警視川路利良等東

京警部ヲ勤ムル中原尚雄等ヲ帰省致サセ、私学校党ニ離

間ノ策ヲ行ナヒ、陸軍大將西郷隆盛・同少將桐野利秋・同

少將篠原國幹等ヲ暗殺セントノ陰謀ヲ企テ、事発覚ニ及

ヒ県庁警察ヲ以テ鞫問シ拇印ノ捺押シタル口供ト共ニ、

県令ノ布達ノ趣キヲ承知イタシ、実ニ不容易事柄ニテ、

政府ノ処置如斯不正ノ儀アリテハ往々 皇国ノ為メ如何

ナル患難ヲ醸発センモ難計ト、西郷始メ大ニ之ニ憂慮シ

テ、政府ヘ右不正ノ件々尋問ノ為メ上東ノ挙止アルニ付、

私学校生徒一同協議スルニ、西郷ハ陸軍大將タルヲ以テ

途中保護ノ為メ随行セン事ヲ約ス、因テ賢二郎儀ハ第一

大隊十番小隊阪元仲平隊ノ押伍ニ編入セラレ、明治十年

二月十五日ヲ以テ鹿兒島県下ヲ出発シ、昼夜兼行同廿一

日ニ肥後ノ川尻へ到着シ、先着ノ者ヨリ触聞スルニ、熊

本鎮台ヨリ為何応接モナク前途ヲ遮拒シ、台兵ノ斥候隊

ト見ヘシカ無理ニ砲発ニ及ヒ、止ム事ヲ得ス兵端ヲ開キ

応砲ニ及ヒシニ、台兵倉皇シテ楽器ヲ打チ棄テ銃器ヲ投

ケ廃テ急ニ飛テ遁レ走ル、台兵籠城ノ用意ヲナシテ城下

市街民家ヘ火ヲ放チ、焰烟天ニ漲テ恰モ白昼ノ如シ、火

勢頗ル熾ナリ、依之同所本營篠原等^{池上四郎・永山弥一郎・協}

シテ、初テ明早天ヨリ攻撃ノ用意ヲ為スニ、各隊我合符ト

シテ白布一条ヲ左肩^{后チ右ニ}懸ヘタリニ纏ヒタリ、然シテ賢二郎ハ

我隊ノ斥候ト命セラレケル、同廿二日午前二時頃ニ同所

出発幾シカ、賢二郎ハ我隊ニ段山ノ形状ヲ窺フテ報知セ

ント待チ居リタレトモ其処辺ニハ見ヘサル故ヘ、構ハス

第一大隊壹番小隊西郷小兵衛共ニ段山口ヘ駈ケ込ミ、急

ニ攻メテ瞬時ニ段山ヲ乘リ取り続ヒテ八幡山ヲ攻撃スレ

トモ、台兵無双ノ要地ニ壘ヲ高シ溝ヲ深シ固守シテ防戦

スルニ、篠原國幹・別府晋介等賢二郎等^{外ニ名アリ}ニ向ツテ曰

十六 群馬県下

ク、銃ヲ以テ攻ムルニ利ナシ、砲ヲ以テ破ルニ如カス、君等直チニ川尻マテ馳セ行テ大砲隊ハ疾ク来レト報知イタシ呉レト、三名共ニ諾シテ正午時分ニ同所出發途中ヨリ人力車ニテ疾行セシニ、幸ヒニ半途ニテ砲隊ト遭ヒ、右形状ヲ告ケ共ニ又段山へ午后六時過キニ帰着ス、味方総テノ死傷七拾余名ナリ、晝夜連戦同廿三日ニ劇シク進ミ刀ヲ抜テ切り入ントスレトモ壘壁砲々累々然トシテ急ニ抜ク事能ハス、味方ノ死傷二拾余名アリケル、其儘同所ヲ固ム、同廿四日モ連戦砲声無間断防禦ス、午後六時頃ニ外隊ト交代シテ二本樹町へ引揚ク、同廿五日ヨリ同廿七八日頃日ハ籠ト 覚ヘスマテ休兵、同廿六日頃日ハ籠ト 覚ヘスニ安政橋ノ堅メ場ヲ受取り固ム、同廿七日ヨリ同三月七八日頃日ハ籠ト 覚ヘスマテ変ル事ナシ、同九日頃日ハ籠ト 覚ヘス段山へ台兵團ミヲ突テ襲来スルニ、我兵竟ニ支フ事能ハスシテ敗軍ニ及ヒシ報知アリ、我隊ノ半隊ヲ応援トシテ出テ救フ、然レトモ逐ヒ退クル事能ハサルニ依リ要地ヲ取ツテ守ヲ付ク、味方ノ死傷五十名ナリ、我半隊ハ持場へ引揚ク、同十日頃日ハ籠ト 覚ヘスニ中隊編制アリ、賢二郎分隊長命セラレケル、同十二日ニ本妙寺ノ下ハ四方へ分達要衝ノ地タルヲ以テ相ヒ固ムヘシト命セラレ、安政橋ノ持場ハ外隊へ譲リ渡シ、

午后六時頃ニ繰出シ同十時頃ニ本妙寺へ着シ、直チニ手賦リシテ固守ス、同廿一日頃日ハ籠ト 覚ヘスマテ変事ナシ、同廿二日頃日ハ籠ト 覚ヘスニ台兵払曉ニ開ミヲ突テ襲来セシカ、我隊迎へ討チ力メ戦フテ動カス、彈丸雨ノ如ク下ル、台兵抜ク事能ハス午后六時頃ニ空シク死骸五六名ヲ投ケ棄テ引キ退ク、我隊ノ戦死五六名・負傷拾五六名アリ、同廿七日頃日ハ籠ト 覚ヘスマテ変事ナシ、同廿八日頃日ハ籠ト 覚ヘスニ賢二郎半隊長命セラレケル、同四月七日マテ変事ナク固ム、同八日出京町口ヨリ安政橋へ台兵襲ヒ来リシ報知アリ、我隊ノ持場無事ナルヲ以テ出京町ニ応援ス、然レトモ格別平日ニ異ナラサルヲ以テ持場へ引キ帰ルニ、本營ヨリ書翰到来披見スルニ、台兵安政橋へ寄せ来リ我軍敗走セシニ付、早々壱小隊ニテモ一分隊ニテモ応援ノ為メ指シ出シ呉レヨト、夫レヲ見ルヤ否ヤ、右小隊ハ当地エト左小隊ハ応援ト中隊長阪元仲平ヨリ取究メ、賢二郎ハ則チ左小隊ナリ、忽チ用意シテ急ニ駈ケ付ケ午前十時、比ナリ本營ニ到ツテ桐野利秋・村田新八・池上四郎ニ面謁シテ彼ノ形状ヲ聞クニ、今朝殆ント払曉ニ台兵襲来セシカ我軍ノ番兵怠リシナラシ、遂ニ敗レテ台兵凡三百余人彈藥拾五六箇ヲ担ヒ砂鳥(砂取、熊本市)・木山ヲ指シテ馳セ脱ケタリシ由シ、君等ノ隊ハ先ツ戦地

ノ景況次第ニ動かヘシト命セラレシカトモ、戦地危急切
 迫ノ勢ニテ傍觀スルニ忍ヒサル故ニ出テ援フ、台兵ハ旧
 知事ノ米蔵ヘ乱入シテ雜穀七百余俵ヲ掠奪シ城内ヘ運送
 スル処ナリシカ、急ニ撃チテ攻メ戦フニ、午后五時頃ニ
 城内ヘ逐ヒ込ミ、復タ元ノ如ク各隊ヲシテ頒布シ塞障固
 守セシム、敵ノ捨テ置キタル死骸二三十名程ナリ、味方
 モ相当ナリ、我隊ハ二本樹町ヘ引キ揚クヘシトノ報知ニ
 依リ、本宮マテ引上ケ、ルニ、先ツ君等ノ隊ハ本宮護兵
 ノ為メ爰ニ止マレヨト命セラレ、同十一日マテ休兵、同十
 二日御舟敗軍ノ報知アリ我隊応援ト命セラレ翌十三日ノ
 未明ニ木山ヲ指シテ出發セシニ、沼津村（沼津、熊本市）木山ノ隣ニ
 ノ御舟残兵群集シ居リシカ、昨日ノ戦況ヲ聞クニ、本宮
 ハ永山彌一郎・税所左一郎ナリシニ行衛相ヒ分ラス敵左
 右ノ翼ヨリ横撃シ、衆寡敵セスシテ竟ニ敗走セリト（此時正午時分）
 ナ、夫ヨリ繫線ヲ川尻ヘ通シ各所ヘ兵ヲ配リテ固守ス、又
 御舟残兵ヲシテ南田代（御船町）ヘ繰出シ固守セシム、而シテ各隊
 ノ將校ト共ニ議シテ明日飯田山進撃ヲ約スルニ、我小隊
 ハ左翼山手ヨリ、一中隊ハ正面中央ヨリ、一中隊ハ右翼
（東無山、益原町）
 東牟田村ヨリ、翌黎明ヲ以テ期ス、同十四日ノ払曉ニ我隊
 ハ飯田山ノ腰部マテ攻メ登リシカ敵迎ヘ討ツテ力戦ス、

我兵勇ヲ奮フテ戦ヒケル処ニ麓ノ土山村ヨリ正面ヘ敵劇
（益原町）
 シク撃チ入ントスルヲ以テ、我隊ノ半隊ヲ下シ不意ニ左
 翼ヨリ屹々然トシテ吶ト関テ作ツテ横撃スルニ、間モナ
 ク敵辟易シテ逃ケ走ル、我軍勝ニ乗シ亡クルヲ逐フテ進
 撃スルニ敵ハ狼狽シテ左方右方ト遁レ走ルトキニ、東京
 巡查一名生擒リ銃器拾余挺・彈丸三千余発分捕リケル、敵
 ノ打テ捨テタル死骸二拾名位ナリ、我軍モ八九名ノ死傷
 アリシカ我隊ノ小隊長緒方惟治モ手ヲ負ヒケル、然ル処
 右翼ノ東牟田村ヘ敵劇シク押シ寄せタルニ我兵遂ニ敗走
 ニ及ヒ、敵找隊ノ背路ヲ絶ントスルニ依リ、止ムヲ得ス又
 手輕ク曳キ退キ、午后一時頃ニ木山ヘ轉移シ本宮ヘ到ツ
 テ進撃ノ形状ヲ告ケ生擒ヲ引キ渡ス、然ルトキニ川尻ノ
 固メ敗レ敵鎮台ヘ連絡ヲ通シタル故ヘ、根拠ノ本宮モ転
 遷シテ爰ニ据ヘタリ、頓テ桐野モ来ルナラント河野四郎
 左衛門ヨリ聞タリケル処、午后三時比桐野着シテ繫線モ
 相ヒ究リ、聞クニ木山ヨリ竹宮・永峯・出京町・鹿古木・
（馬、鹿、西合志町）
 植木・鳥ノ棲マテ釋如トシテ相連ル事恰モ珠ヲ貫クカ如
（鹿、熊本市）
 キナリ、時ニ賢二郎小隊長ニ命セラレ其儘陣屋ヘ休兵イ
（鹿古木、北部）
 タシ居リ、斯ル処午后四時頃ニ我隊ノ右小隊出京町ヨリ
 引キ上ケ来リシカ、賢二郎向ツテ何ソ引キ上ケ来ルヤト

問ヒケルニ曰ク、鳥栖ヨリ出京町マテ総テ引キ揚クヘク
トノ報知アリテ、各隊皆ナ引キ揚ケ来ラント答ヘケルニ、
復々本營ニ到テ斯ク告ケ問ヒケレハ、桐野嘯然トシテ嘆
シテ曰ク、報知ノ誤聞ニカ候ハン、君隊ヲ引率シテ各隊
ノ將校ヘ右繫線ノ如ク守ヲ付クヘシト報告イタシ呉レヨ
ト云ヒケル中ニ、各地ノ將校兵ヲ纏メ絡繹トシテ曳キ揚
ケ来リシカ、桐野誤聞ノ廉ヲ演舌シ各隊復々路ヲ返シテ
守ヲ布クニ、僅ニ竹宮・永峯ナリ、賢二郎也志小隊ハ本營護
衛ナリ、同十六日マテ休兵、同十七日黎明ニ飯田山・土山
村・御舟マテ進撃スルニ、二中隊ハ左翼山手ヨリ、三中隊
ハ中央ヨリ、二中隊ハ右翼東牟田村ヨリ、賢二郎隊ハ中央
ノ応援トシテ鳴リヲ潜メテ進ミケルカ敵兵全ク見ヘス、
土民ニ聞クニ昨日総テ城内ヘ曳キ上ケタリト、又御舟ヲ
指シテ赴クニ各隊ヨリ斥候ヲ出シ窺フニ敵一人モ見ヘス
戦ハスシテ磔々然タル要衝ノ御舟ヲ乗り取り、午后一時
頃ニ全軍共ニ雷着シケル矣ニ大勝利ヲ得タリ、因テ敵ノ
貯ヘ置キシ米式百余俵・起炭百余俵・錫拾余俵ヲ我隊ノ
斥候ヨリ分捕リケル、斯リケル処ニ午后三時頃ニ至リ堅
メ場ヲ定メンカ為メ、各隊將校ト共ニ郊郭ヲ歩行セシニ
敵襲ヒ来リ、全軍迎ヘ討ツテ戦フ事瞬時ニシテ撃チ退ケ、

後ロヨリ逐ツ駆ケ、進ミ行ク事一里許、薄暮ニ到ツテ
兵ヲ纏メテ又御舟ヘ曳キ揚ク、敵ノ死骸二十余名・銃器
三十余挺打チ取り、味方ノ死傷十余名ナリ、翌十八日ニ各
所ニ固メ場ヲ設ケ守ヲ付ク、然ルトキニ我隊ノ兵士数名
ヲシテ嚮昔逐ヒ討チタル所々ヲ搜索セシムルニ、路傍ニ
仆レタル者アルヲ見ルニ、腰部ニ深手ヲ負ヒ心ハ慥カナ
レトモ歩行叶ハス、委シク鞠問セシニ東京三等巡查ヲ勤
ムル鹿兒島土族有田藤七郎ナルカ、両掌ヲ合セテ命丈ケ
ハ助ケ玉ヘト拜ミケルニ依リ、戸板ノ上ニ乗セ昇ヒテ各
隊本營ヘ列レ来リシニ、將校ノ内ニ鹿兒島ニテ朋友ノ者
アリケルカ某ノ名ヲ呼ンテ、何卒命丈ケハ助ケ玉ハレヨ
トト大キナ声ニテ叫ヒケル、因テ各隊長ト協議シテ木
山本營桐野ヘ一翰ヲ認メ我隊ノ兵士五六名ヲ付ケ副ヘ差
シ送レリ、其后如何相ヒ成リシカ存意ナシ、去程ニ一週
間以前ノ事ナルカ本營永山彌一郎・税所左一郎外一名熊
分人姓名相ラ分ス、等ノ始末ヲ聞キ糺スニ、嘗テ御舟出張ノ將校等共
ニ約スラク、当地ハ四達要衝ノ地タルヲ以テ爰ヲ引キ扨
フ日ハ鹿兒島ヘノ通路モ絶チ塞カルニ付、是非死ニ尽ス
トモ防禦セン事ヲ、斯ル処ニ敵襲来シテ衆寡敵セサル故
各隊引キ揚ケシカ、本營永山・税所等外一名本ノ人アリアリ、先約ヲ重ン

シテ町傍民家ノ紙漉小屋へ投シテ家主へ償金四拾円ヲ与へ彼ノ小屋ヲ貰ヒ受ケ、右三名共ニ屠腹シテ下僕へ火ヲ放タセタリト、嗚呼惜哉壯士可哀時運ナル哉天命、同十九日變ル事ナク固ム、同廿日午前七時頃四方八面ヨリ敵寄セ来リ劇戦数刻ニ及ヒシカ、右翼川下ノ方へ砲声劇烈、賢二郎赴キ窺フニ疾クニ我兵不利シテ砲壘乘リ取ラレケルニ、直ニ持場へ返ツテ我隊ヲ以テ切り入ントセシカトモ、敵ハ大勢味方ハ小勢衆寡敵セサルヲ以テ町マテ引キ上ケシニ、左翼モ敗レテ最早敵ハ町下へ押シ入り両傍ノ橋ヲ取り絶チ、退クニ路ナク進ムニ路ナキニ当惑シ回顧スレハ敵ハ石ヲ千似ノ下ニ転ロカスカ如キノ勢ヲナシ、雷ノ如クニ閃ヲ作り蟻ノ如クニ群リ銃丸雨注ノ如ク下リ、詮方ナク御舟川ヲ渡リ水乳部マテ浸溺シテ漸ク游キ渡リ辛キ命ヲ遁レテ敗走セシカ、敵ハ勝ニ乗ツテ劇シク逐ヒ討ツ事十七八余町ナリ、我兵ノ死傷数知レス大抵二百余人モアリケンニヤ、我隊ノ中隊長阪元仲平モ戦死セリ、我軍兵ヲ纏メテ金打^(金内、矢部町)矢部ヲ指シテソ引キ揚ケ、ル、我全軍凡千五百人位ナラン、我隊ハ直チニ矢部ヲ指シテ引キ上ケ午后十時頃ニ着シ、本営仁禮新左衛門へ形行報知ス、同廿一日本営ニ到ルニ木山モ敗レテ桐野モ着シ居リケル

カ、直チニ^(矢部町)萬阪口ヲ固ムヘシト命セラレ、忽チ用意シテ午前七時ニ出発午后一時頃ニ萬阪へ着シ固守ス、同廿四日マテ變ル事ナク固ム、同廿五日午后三時頃矢部ヨリ報知アルニ、今夕各自米一升ニ合宛ヲ用意シ矢部へ曳キ揚クヘシト、依テ薄暮ニ斯クシテ萬阪ヲ出発午後十時頃ニ矢部へ着、本営ニ到ルニ、今夜午前二時ヨリ^(惟業村)那須越^(此山ハトシテ九州無双ノ険、峠ノ地板ナリ)越へ球磨人吉へ曳キ揚クヘシト命セラレ、然シテ隊号改制シテ我隊ハ干城七番中隊ト変号ス、午前二時ニ発足翌廿六日午后六時頃ニ日州椎葉山尾前村へ着本営ニ到ルニ桐野着シ居リケルカ、君等ノ隊ハ暫ク当地へ滞陣スヘシト命セラレ、同三十日頃^(日ハ確ト)マテ滞陣ス、五月一日頃^(日ハ確ト)二人吉へ引キ揚クヘキノ報知アリケレハ翌二日ノ早天ニ発足午后四時頃ニ古屋敷^(球磨郡水上村)へ着、又同三日頃^(日ハ確ト)マテ同所へ滞陣ス、同四日頃^(日ハ確ト)払曉ニ同所発足午后五時頃人吉へ着スレハ、則チ明日ハ大口へ進軍スヘシト命セラレ、我隊外三中隊^(内一中隊ハ)協同隊ナリ共ニ翌五日頃^(日ハ確ト)黎明ニ人吉発足午后六時過キニ大口へ着シ、敵ノ景況ヲ窺ヒ見ルニ、^(大口市)山野郷ニ在リテ明日ハ大口へ寄セ来ルナラント、翌六日頃^(日ハ確ト)早天ニ山野郷ノ小木原村へ伏セ居リシカ果シテ襲来劇戦数刻、然ル処ニ我中隊長日

ク、兵ハ寡少ニシテ彈藥ハ殆ント尽キントス、君等外ニ人吉本管マテ疾行シテ報知イタシ呉レヨト云ヒケルニ、
速ニ即チ午後三時比ナリ早籠ニ乘リ球磨越ヲコヘ夜白兼行午後十二時頃二人吉へ着、本管へ到リ村日新八へ面謁シテ戦地ノ景況ヲ告ケ、応援彈藥ヲ乞ヒシニ村田答ヘテ曰ク、明日ハ直チニ仁禮新左衛門へ引率致サセ差シ送ラン、君等積ミ返シニ苦勞ナガラ今夜復帰隊イタシ呉レヨ、戰尊神速ト賢二郎等外ニ承諾セシニ酒ヲ酌ンテ慰勞シケル、依之徑ニ早籠ニ乘リ大口ヲ指シテ発足即午前二時比ナリ、翌七日午前八時頃二田之尾村田野村、人吉市南端ニ出求隊山ノ出ヘ着セシニ、嚙昔ハ遂ニ彈藥尽キ衆寡敵セス敗軍ニ及ヒ我隊ハ吉田へ引キ退キタリト聞キシニ、又々路ヲ返ヘシテ吉田ヲ向ツテ赴クニ、人吉ノ手前ノ村ニテ日没スルニ依リ此ノ村ニ一泊、翌八日未明ニ発足午後四時頃ロニ吉田へ着本管ニ至ルニ、邊見十郎太在リテ明日ハ大口へ繰出サント達シケルカ、翌九日午前七時頃吉田ヲ発足午後四時頃ニ大口へ雷着、其夜本管ニテ各隊將校等ト共ニ早農山野郷進撃ノ軍議ニ干与スルニ、三中隊ハ右翼山手ヨリ、四中隊ト砲一門ハ正面ヨリ、三中隊ハ左翼山手ヲ取ツテ敵ノ背ヲ突カントス、我隊ハ則チ左翼山手ナリ、翌十日曉天ニ大口ヲ出発枚ヲ含ンテ潜行

シ敵ノ壘下ニ関ヲ咄ト作リテ押シ掛ルニ胸瞬ノ間モナク山野郷ヲ乘リ取り、敵民家へ火ヲ放チテ遁レ趨ル、我軍勝ニ乘シテ追ツ斷ケ、亡クルヲ逐フテ進撃スル事三里余天口市山野許小河内大塚マテ追ヒ括ル、日既ニ暮ル、ニ及ンテ小河内へ兵ヲ纏メテ怠ラス守ヲ付ク、敵ノ死骸數拾余名・彈丸數万発・銃器拾余挺分捕リ、我軍ノ死傷僅ニ二三名ナリ、本管へ勝ヲ奏シテ同所へ一泊、翌十一日ニ又陸続シテ八中隊ハ水俣口へ、二中隊ハ出水口へ、我隊ハ則チ出水口ナリ、午前七時頃ニ辺路番所ヲ指シテ発足、午后二時頃ニ着シテ同所へ一泊、翌十二日午前七時頃ニ出水へ発足セシカ、先ツ斥候ヲ出シ窺フニ敵昨昏逃走シテ見ヘス、午後三時過キニ出水へ着シテ宿陣ス、又水俣口ハ深川此地ハ水俣ヨリ三位ノ地ナリマテ追ヒ括ルカ、敵モ必死ヲ極メテ防禦スルノ報知アリ、続ヒテ邊見十郎太モ深川ヨリ来リテ云フニ、当地ハ先ツ曳キ揚テ深川ヲ守ラント、因テ翌十三日午前七時頃ニ出発午後五時頃ニ深川へ着、翌十四日街道ノ要地ヲ取ツテ堅固ニ壘ヲ築テ防禦ス、同十八日頃日ハ確トマ覺ヘステ變ル事ナク固守ス、同十九日頃日ハ確トマ覺ヘス左翼ノ山手へ敵兵劇シク押シ寄セ横撃スルニ、我兵持スル事能ハスシテ二町余引キ退キシニ敵敢テ迫マラス、故ニ守ヲ付ケ固ム、

然リト雖トモ地位ニ利ナキヲ以テ翌廿日午前十二時頃ニ大塚マテ退軍ス、翌廿一日曉天ニ猪ノ嶽(水俣市)ノ險ヲ固メンカメメ進軍セシニ、敵モ此ノ地ヲ取ントスル所ニ出逢フテ戦フコト終日、薄暮ニ及ンテ敵遁レ趨ル、我兵亡クルヲ逐フテ進撃スル事七八丁許リナリ、然シテ密カニ斥候ヲ出シテ窺フニ、敵崖下ニ火ヲ焚テ群集シケル処ヲ、式拾余名各隊ヨリ壮士ヲ撰ンテ不意ニ夜襲セシニ、敵狼狽シテ遁走ス、該地固守スルニ利ナキヲ以テ又猪ノ嶽ノ要衝ヲ取テ固守ス、同廿五日マテ変ルコトナク固守ス、当所ハ要害ノ地タルニ因テ險ヲ恃ンテ唯ニ中隊ヲ以テ固守シ、外隊ヲシテ久木野村ノ急ニ応援セシメタリ、斯リケル処ニ(水俣市)外隊中隊長兒玉軍治ト共ニ本營ニ至リ仁禮新左衛門ト明(正義) 番中隊長日進撃セン事ヲ議シ、翌廿六日早天ニニ中隊ヲ以テ我隊ハ左翼ヨリ、一中隊ハ右翼ヨリ急ニ進ンテ戦撃スレトモ、敵大勢出テ来リ固守シテ動かカス戦鬪数刻ニ及ヒケル処ニ賢二郎横撃センカ為メ兵ヲ頒布スル、トキニ腹部ニ銃創ヲ受ケ歩行ニ悩ミテ止ム事ヲ得ス午前十時頃ニ(牧瀨町)踊病院マテ送ラレケル、此ノ日ノ戦争ハ味方利アラス再ヒ猪ノ嶽ノ要地マテ引上、死傷三十余名アリタル由、従是後日ノ戦地景況ハ判然ト承知不仕候也、

右ハ今般御達ノ趣ニ付戦地ノ事情形状等詳悉仕候次第筆記差出候筈ノ処、手帳等遺失イタシ、尔来年ヲ経月ヲ弥リ巨細ニ記憶シ得ス、唯胸中ニ浮ヒ候而已録上仕候ヘトモ、月日等多ク忘失仕別段御採用ノ件モ有之間敷、近頃恐縮ノ至ニ候得共此段可然御執達被下度奉願候也、

鹿兒島県下西田居住

当群馬県懲役人

明治十一年二月

横山賢二郎

六 佐藤良輔上申書

(余) 第三十二号
鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付、右賊徒懲役人ノ内其事情及戦地ノ形状等筆記シ上申可仕旨、御達之赴奉拜承概略左ニ筆記仕候、

明治十年二月中原尚雄等暗殺ヲ謀ラントノ旨発覚シ、政府へ尋問ノ為メ、陸軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・全少将篠原國幹等上京之際、私学校生徒徒随行出発セシガ、熊本鎮台兵ニ道ヲ遮ラレ終ニ戦争ニ及候段ハ兼テ報知ノ趣伝聞ス、然ルニ鹿兒島へ上陸セシ敵ヲ払ハント中島健彦・貴島清等振武隊ヲ率ヒテ鹿兒島伊敷村ニ来ル、依之

堤甲介外三名我区ニ来ツテ募兵ヲ促スニ、国難ニ臨ンテ
人民ノ義務ヲ尽サスンハアルヘカラスト、因テ憤発シテ
我区八拾五名共ニ伊敷村ノ本営ヘ至ルニ直チニ振武廿八
番小隊ニ編制、良輔半隊長ニ命セラレケル、依之同所小
野村島市ヲ宿陣トシ玉江橋ノ墨ヲ守ル、凡三十余日ニ及フト
雖トモ唯防戦ノミ、同六月廿一日出水表ヘ上陸ノ敵兵進
入シテ既ニ川内迄来レリト報知アリケルカ、忽チ彼地ニ
援兵トシテ各隊ヨリ拾一名宛ヲ出シテ一中隊トナシ、貴
島清之ヲ率ヒテ彼地ノ援兵ヘゾ赴キケル、同日ニ官ノ城
表モ敵兵進入シテ危急切迫ナリト、又々援兵ヲ我本営ヘ
乞ヒシニ、我隊援兵ト被命至見レハ則入來表前田、入來町ノ蘇井田原
ナリ、砲台モ薄シテ守ルニ難シ、同廿二日曉天ニ敵兵襲來
ルト斥候ヨリ報シ、乍チ用意シテ待チ伏セ居リケルカ果
シテ寄せ來リ、劇戦數刻ニ及フトキ良輔横撃セントシテ
手賦リスル造次ノ間ニ、敵兵大勢ニテ我隊ヲ囲ミシカ、
我隊衝テ出ツヘキ様ナク一方ヲ漸々切抜ケテ囲ミヲ出ツ、
然ルトキ我隊ノ分隊長新保平次郎・兵士二名戦死ス、各
隊ノ守壁モ敗レテ我軍散乱ニ及ヒ、四方ニ我兵ヲ求レト
モ得ス、土民ニ聞クニ樋脇ヲ指シテ引キ揚ケシナラント、
故ニ我隊ヲ引率シテ彼地ニ赴キシニ、已ニ同所モ敵ノ所

有トナリ居リシカ、此上ハ我区ニ歸リ自首スルニ如カス
ト思慮シテ山野ヲ越ヘテ、八月一日頃歸区シ、直チニ第
三旅団第三大隊へ前非ヲ悔ヒ自首帰順ス、

右ノ通覚知文筆記上申仕候、

鹿兒島県給黎郡喜入居住

当群馬県徵役人

佐藤良輔

明治十一年二月

七 和田治左衛門上申書

(米「第三十二号」)
鹿兒島逆徒征討始末編輯ニ付、其事情顛末ヲ筆記シ上申
可仕旨、奉拝承左ニ筆記仕候、

明治十年六月上旬勇義隊本営中山盛高ヨリ戸長和田四郎
兵衛工募兵可致云々達セシニ付、同人ヨリ出兵可致旨相
達シ、直ニ向田表(川内市)エ出張セシ処、勇義拾七番小隊ニ編制
セラレ其隊ノ半隊長被申付、同八日同所ヲ守ル、居ルコ
ト凡一週間ニシテ敵兵出水ヨリ進入シテ、高城(川内市高城)一重阪(家)迄
來ルトノ報ニヨリ吾十七番小隊為援兵彼地ニ赴ク、途中
ニテ味方敗レテ引退クニ逢フ、共ニ退ヒテ川内川ヲ守ル、
同所ニ防戦スル事三日ニ及ブ、敵川尻ヲ涉ツテ襲來ル、

終ニ潰走シテ市來郷ニ引揚ク、其折鹿兒島モ味方敗レテ
 両方ニ敵ヲ受ケ前後相顧ル事アタハス山手ニ引揚ク、同
 月下旬第三旅団之中尉加藤某へ相付自首帰順ス、
 右形状之概略筆記上申仕候、

鹿兒島県市來居住

当時群馬県懲役人

明治十一年二月十日

和田治左衛門

八 川上親平上申書

(案)第三十三号
 今般御征討之始末編輯被為在候ニ付、事情且戦地之形
 状等詳悉致候者ハ筆記可差上旨、蒙 仰奉畏記憶之儘
 左ニ録上仕候、

親平儀

陸軍省出仕ニて砲兵支廠へ奉職中、去ル明治九年六月
 鹿兒島砲兵属廠火巧所^在勤被命、同七月下着奉職罷在
 候処、同九月比ニ至同廠出来之小銃彈藥百五拾万発余
 有之、其比私学校徒上京相企、右彈藥目的いたし居候
 者も有之哉ニ相聞候ニ付、火巧所同僚一両輩ト申談之
 末課長陸軍大尉新納軍八へ、前件之風説も有之候ニ付

彈藥ハ從前通砲兵支廠へ急速差登セ可然旨申聞候処、
 同人承引不致、其后モ度々及示談、今形打過万一掠奪ニ
 逢候ハ、不相濟旨申述候処、決て右等之儀ハ有之間數、
 万一右件ニ差迫候節ハ夫迄と決心いたし可然旨同人相
 答候ニ付、無致方右同意罷在候、

一同十一月初比ニても候哉、私学校徒之内ヨリ西郷隆盛
 え彈藥掠奪之策申聞候処、同人儀大ニ驚愕、官物掠奪等
 之儀ハ決て致間敷旨謹責し、且私学校之主意ニ不悖様
 懇々説諭候由伝承之形行を以新納大尉へ詳細申聞候処、
 同人ニモ初て相驚キ早速砲兵支廠へ情実を以彈藥積船
 御差廻し相成度旨申送候処、該地ヨリハ鹿兒島ニて積
 船相雇候様申来り、則船雇入方取計候得共最早私学校
 党ノ勢ニ恐縮候哉請負人無之、亦候砲兵支廠へ形行申
 送候処十年一月初旬ニて候哉蒸氣船御差廻シニ相成、
 尤陸軍七等出仕星山貞吉右事件ニ罷下り候砌、砲兵支
 廠ヨリ書面相達鹿兒島砲兵属廠火巧所被為廢候ニ付、
 右機械等ハ此節差廻候蒸氣船ニて急速差送り候様申来
 り、同時ニ太政官御布達院省使府庁諸寮出仕被為廢候
 御達書拜承、私共出仕之者ハ即日御用筋次第退廠仕候、
 一右火巧所被為廢候て三四日モ過候哉、私学校党之内火

巧所管轄鹿兒島草牟田村隆盛院迫火薬庫之小銃彈菓百

五拾万発余掠奪候由伝承イタシ候学校党彈菓掠奪之初ニテ御座候

一其翌晚火巧所并火薬所之彈菓并小銃等掠奪候由伝承候事、

一兩三日過候て海軍省管轄礮製造所之彈菓モ掠奪イタシ候由、

一右彈菓掠奪之時分ハ、西郷隆盛儀ハ垂水郷ト申所へ差越居、私学校党之者兩人差越右事件申聞候由鹿兒島ヨリ海、上凡十里位

一是ヨリ先キ桐野利秋エモ彈菓掠奪之議協議ニ及候者有之候処、同人不肯官庫ヲ敗るハ不正ノ極なり、ケ様ノ

所業有ては 朝廷エ対シ不相濟、西郷氏モ万一政府ニ非あらは之を正さんとする素志なれハ、己不正にして

何そ人を正ふする事を得へけんやと、切に論破したりと、然二前条掠奪之者有しと聞キ大ニ歎息せしと伝承候事、

一親平ニハ廃官後在宿罷居候処、四五日も過候て陸軍大尉新納軍八・同火巧下長竹山盛隆来り、火巧所彈菓掠

奪ニ逢ヒ候始末申聞、前以決心申合置候儀モ有之候得共、此節陸軍大将西郷隆盛ヨリ政府へ尋問之趣有之、

旧兵隊召列れ上京候ニ付、火巧所機械等ハ元通取立彈

菓製造可致、尤出仕廃官之者も從前通出廠可致旨直達

有之候ニ付、早速出廠候様申聞候得共、其時分老母難

病ニ付少々快方相成候ハ、出廠可致旨返答申置候処、

其後兩人ヨリ書面并等外雇勝部吉雄等ヲ以頻ニ出廠相

促候ニ付熟考候処、西郷隆盛ニハ陸軍大将之事故火巧

所等之儀ハ指揮ニ従ヒ可然ト存出廠、新納・竹山等同

様彈菓製造致させ申候、

一其后時日失念仕候勅使鹿兒島へ御下向ニ付、彈菓製造取止候様

県庁ヨリ違有之、在宿老母看病罷在候事、

一三月中旬比ニても候哉県庁ヨリ御用申来出頭候処、大

属松元良藏ヨリ熊本県下肥後国人吉へ出張彈菓製造所

設置候様、尤彼地ニハ本営も有之候間万端指揮を可受

旨相達、草道泉同様工人召列れ差越候処、人吉本営ニ

ハ淵邊群平罷在、新町学校と申所製造場ニ借受置候段

申聞、同人指揮ニて昼夜彈菓并雷管等製造致させ、尤

諸科料ハ本営大小荷駄方ヨリ相渡申候、

一其后時日失念仕候用向有之掃俵いたし居拾日位過候て、又候人

吉へ出張候処、其時分熊本県下諸方之味方相敗れ、西郷

隆盛并村田新八等も人吉へ致滞陣居、新八ヨリ同僚草

道泉召呼、鹿兒島県下出水郷之内へ鉛山之場所所有之候

間、親平帰旅次第申談兩人之内一人差越、鉛山可取設

旨為相達由申聞候ニ付、鉛山底之折柄にて直様承諾、村

田新八エモ申聞工人召列れ出水郷鉛山エ差越、専ラ鉞

業ニ従事、人吉製造所其他諸所へ製鉛差送り申候事、

一六月十一日官軍出水郷を攻抜キ鉛山えも打入相成候ニ

付、私ニハ宮之城迄引退キ、其時分足痛有之歩行不自

由ニ付同所にて治養相加へ候内、前非を悔悟し同所警

視出張所へ帰順之願面差出、鹿兒島へ罷歸九州臨時裁

判御出張所にて御取調之上旧城内へ拘留相成、長崎県

へ被差廻、九月十四日九州臨時裁判所にて宣告懲役二

年被申付候、

右之通記憶仕居候ニ付此段上申仕候也、

鹿兒島県下第三大区小五区

後迫居住当時群馬県下岩鼻

已決檻懲役人

明治十一年二月

川上親平

九 貴島要之助上申書

〔采〕第三十四号
鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付、右懲役人ノ内其事情及

ヒ戦地ノ形状等詳悉致候者ハ、該事之顛末筆記シ上申可
仕旨、太政官第四号ヲ以テ御達ノ趣謹て奉上申候、

私儀兼て私学校生徒ニテ無御座候処、明治十年一月中旬

ノ頃東京警視署ヨリ警部巡查追々帰島イタシ、私学校覚

エ離間ノ策ヲ廻シ、西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セントノ

謀計発覚シ、同二月初陸軍大将西郷隆盛・全少将桐野利

秋・全少将篠原國幹私学校生徒ヲ引率シ、政府エ尋問ノ

云々在之東上ノ処、於熊本ニ台兵ニ支ラレ大戦争有之ト

ノ由承居申候処、三月中旬ノ頃右戦地ヨリ淵邊群平・別

府督介・邊見十郎太尉県仕新兵ヲ募トノ由承リ、要之助

ニモ三月廿四日頃宿許ヲ発足仕、鹿兒島県於大口新兵ニ

与シ第九番大隊ノ五番小隊エ編入シ、隊長小倉勇之助ノ

差図ヲ受ケ押伍相勤、同廿八日大口ヲ発足仕球磨人吉エ

着ス、官軍八津ヶ村エ相見得タルノ報知ニ付、為防禦ノ

人吉ヲ同廿九日発足シ松本迄出張仕候処、官軍ハ佐敷(鹿北町)エ

引取タルノ由、而日滞陣シ夫レヨリ(球磨村)神ノ瀬エ出張仕守兵

ス、官兵ハ坂本ニ出張シ要地ヲ守衛ストノ由、四月四日

頃進撃ノ評議相決シ、六小隊ヲ二手ニ定メ三小隊ハ湯治(頭地、

道ヨリ、跡三小隊ハ川筋ヲ其日十二時頃神ノ瀬ヲ発足シ坂本村)

川筋ノ兵ハ中津道エ着ス、湯治口ノ兵ハ坂本エ操込候処(坂本村)

官兵不戦シテ逃去タル由、同五日坂本ニ合隊シ亦二手ニ分ケ、一手ハ日奈久間道ヲ得テ八代ニ進ミ、一手ハ川筋ヲ下リ、川筋ハ其日七ツ時頃ヨリ戦争ニ相成、日奈久手ハ其夜十二時頃八代川上櫻馬場川向エ着ス、(八代市古蹟)明建山(八代市官地)井川筋ノ官兵敗走シテ櫻馬場エ逃来リ候得共夜中ノ事ニテ敵味方不分明ニシテ不戦、同六日ノ未明ヨリ進軍致候処敵軍ハ此所モ敗走シ人家ヲ放火シテ逃去ヲ、吾軍川ヲ渡リ隊長小倉勇之助刀ヲ抜キ真先ニ進ミ、敵軍ハ八代城近辺ニ留マツテ大ニ防戦ス、其時隊長・兵士式名死ス、暫時攻戦ノ処裏ノ味方敗走シテ官兵横ニ出ルニヨリ急ニ引退ク、道ニテ分隊猿渡万之助(長助)死ス、櫻馬場ニ留マツテ防戦スルト雖敵大兵ヲ以テ襲来ルニヨリ、同七日八時頃味方敗走シ、半隊長黒川幸吉・兵士四五名死ス、夫レヨリ神ノ瀨エ引退キ滞陣ス、日数ヲ経テ敵小川路并袈裟越ノ要地ヲ守衛ストノ由、進軍可致旨本營ノ達シニ付、同十二日神ノ瀨ヲ発足仕藤本エ着、同十三日進軍仕夕方ニ至リ敵敗走ス、其場ニ於テ台兵四五名降伏セリ、夜中ニ相成案内不分ニ付明建山ト申処ニ滞陣シ、同十四日櫻馬場其外諸所ニ於テ大戦争トナリ六昼夜攻戦ス、同十四日猫谷ノ味方敗走シ官兵背面エ廻ルトノ報知ニヨリ急ニ引揚ケ神ノ

瀨エ滞陣ノ処、雷撃一番中隊ト改名ス、其後(芦北町)神ノ瀨ヲ守兵ノ処官兵追々攻来候得共味方要地ニシテ破ルコト不能始終大砲ノ戦ハ有之候、日数廿日間モ相守ル処山手ノ味方敗走シテ(水無山江村)神ノ瀨エ逃来ルニ、応援ヲ加エ切込テ盛返し、官軍ハ散々ニ敗走スルニヨリ、死体十五位・手負老人捨置有之候、亦守兵シテ両日ヲ得候処、(水無山江村)水梨危トノ由各隊ヨリ一分隊ヲ以テ応援可致旨本營ノ達ニ付、一分隊ヲ引率シ水梨へ着ス、敵兵谷ヲ隔テ滞陣シ而軍互ニ不戦夕方ニ至リ中隊長赤塚源太郎外ニ四名敵陣ノ上ノ山エシノヒ見ルニ、要害堅固ニ守リサマテ進軍スルトモ不見得ニヨリ吾守所ニ帰ル、其夜ハ水梨村エ宿陣ス、明ル未明ニ至リ赤塚源太郎半隊長ヲ同道シ、二本松エ用事有ルト出テ其後行衛不分亦(水無山江村)神ノ瀨ニモ蒲生一中隊吾守所ヲ捨テ敵ニ降伏シタル由報知ニ付、神ノ瀨危シトテ水梨ヲ発シ神ノ瀨エ着ス、(芦北町)神ノ瀨ニハ其日十二時頃ヨリ戦争有之夕方ニ至リ敵退ク、翌日未明大野方ニ当リ大ニ砲声ス、亦水梨敗走シテ敵背面エ進軍ストノ報知有之、夜中神ノ瀨ヲ引揚高澤エ守兵ス、官軍襲来テ戦フ、暫時攻戦シテ敵敗走シ明ル未明ニ亦大軍ヲ以テ進軍ス、味方力尽シ防戦スルト雖少勢ニシテ敗走シ(水無山江村)岡村エ退ク、其時分隊長植木源八深手負ニヨリ吾

レ代リテ岡村ヲ守リシ処、官軍人吉ヲ攻ムルトノ報知ヨリ、人吉ハ味方屈強ノ地ナリ、破レテハ薩摩危ト人吉近辺エ引揚川筋ヲ守兵ス、五月卅日ニ至リ敵進軍ニ付防戦スルト雖モ退サルニヨリ、刀ヲ拔テ切込シニ散々ニ逃去ル、吾小隊長官崎貞輔(忠)則死ス、六月一日ニ亦人吉ノ北ニ当リ大小銃大ニハケシクシテ一煙雲ニミナキルヨリ、山ニホリ人吉ヲ見ルニ最早町家諸々ヲ放火スルニヨリ味方敗軍ニ付、二中隊ヲ以テ敵ノ横ニ出、盛返サント本道ヨリ進ム、敵ハ大兵ヲ以テ味方ノ三方ヨリ攻ム、味方防戦スト雖午後二時ニ至リ敗走シ川ヲ渡攻戦ス、其節要之助ニハ手負致帰県シ、七月中旬頃綿貫少警視エ帰順自首ス、吾中隊長西村清之丞ニハ都城ニ於テ自殺ニ相成タル由後ニ承リ候、

明治十一年第二月

貴島要之助

鹿兒島県第三拾三大区水引郷居住

一〇 竹下小平上申書

(朱)「第三十五号」

戦地形状略記

今般太政官第四号ヲ以テ御達之趣謹テ奉拜承、左ニ筆記

仕候、

明治十年二月上旬陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺徒中原尚雄外数名就縛白状ニ及ヒ、西郷隆盛外二名政府へ尋問之筋有之、上京ノ旧兵隊(本山第一部隊)第三番大隊八番小队ニ編入セラレ、二月十六日鹿兒島ヲ発足同十九日熊本県下水俣駅へ着ス、同廿二日熊本城下ニ至ル、同所ノ立町・川原ノ両所ヲ守ル、三月二十日同所ヲ発足八代口小川駅ニ至ル、直チニ同所ノ山手ニアル敵軍ヲ進撃ス、正面ノ味方敗セリト聞キ其夜空シク松橋迄引揚ク、同廿二日又々小川ノ敵ヲ進撃ス、敵敗走ス、吾軍代ツテ小川ヲ守ル、一分隊ヲ分ツテ種子山越ヲ守ラシム、同廿六日敵襲来ル、吾軍利アラスシテ又松橋迄引揚ク、吾隊同所ヲ発シテシヤバ神越ヲ守ル、(蘭神、松原神、小川町)三月三十日頃敵大軍ヲ以テ襲来ル、終ニ味方敗軍セリ、此戦ニ小隊長赤松重之助戦死ス、兵士八名死セリ、夫ヨリ川尻ニ引揚テ守ル、四月八日御舟へ操出ス、同十二日吾軍敗レテ木山ニ引ク、(益城町)南田代ノ敵軍ヲ襲ハント同十三日進軍互ニ発砲敵敗走ス、味方大勝利ヲ得タリ、同所ヲ守ルコト一昼夜ニシテ空ク木山ニ引揚ク、同十八日萬坂(矢野町)ニ出軍、同十九日御舟ノ敵軍ヲ進撃ス、利アラズシテ引返ル、四月廿五日矢部村ニ引揚ク、直チニ同所ヲ発シテ

(惟業村)

同廿六日那須越ヲ經テ尾前ニ至ル、同所ニ於テ干城九番中隊ト改称ス、小平儀左小隊ノ分隊長ヲ命セラル、同三

十日迄尾前へ滞陣、五月五日同所ヲ発シテ古屋敷ニ至ル、

同六日人吉ニ着ス、同七日大口へ操出ス、途中小田之尾ニテ

大口ノ敗報アリ、同所へ滞陣シテ同九日大口ニ至ル、同十

日大口ノ内山野ノ麓へ敵守ルト聞各隊ト議シテ進撃ス、

敵敗走シテ水俣辺迄退キタリト云フ、翌十一日尚進撃シ

テ深川ニ至ル、同所ヲ守ル事二週間ニ至ル、同十八日久

木野へ進撃ス、互ニ勇ヲ振ツテ大ニ戦フ、敵敗走シテ走

ル、六月五日頃線川ノ吾軍敗シテ大口ニ引キタリト、同

十二日ノ戦ニ銃創ヲ受ケ吾区ニ帰ル、七月三十一日鹿兒

島出張警視庁へ自首帰順ス、

右概知筆記奉上申候、以上、

鹿兒島県西田居住

当時群馬県懲役人

明治十一年二月十一日

竹下小平

一一 河野徳之丞上申書

(采第百二十六号) 鹿兒島逆徒御征討始末編輯ニ付、事情及ヒ戦地ノ形状等

可奉申旨御達ノ趣奉拜承、見聞ノ次第録上仕候、

徳之丞儀私学校へ入校致居候処、客年二月西郷隆盛政府

へ尋問ノ筋有之上京ニ付、西郷ハ陸軍大将タルヲ以テ私

学校生徒旧兵隊協議ノ上、途中保護ノ為随行セン事ヲ約

シテ、徳之丞儀モ第一大隊七番小隊長森岡昌武隊ニ

編入セラレ、二月十五日県ヲ発足、同廿一日熊本県川尻へ

着セシニ、先着ノ者共熊本鎮台兵ノ為ニ砲撃セラレ止ム

ヲ不得戦端相聞キタルト聞キ、初テ戦ヒノ用意ヲナシ、同

所ニテ各隊合印トシテ左ノ腕ニ白布一条ヲ纏ヒタリ、其

翌ノ払暁ヨリ熊本城攻撃ノ為メ同所花岡山ヨリ攻掛リ段

山ヲ乗取リ胸壁ヲ築テ連戦ス、同廿四日段山ハ外小隊ト

交代シ、春日村へ我隊ヲ引揚ケ、同廿六日高瀬へ発向、

同廿八日行進シ川ヲ隔テ烈戦ス、小隊長相良吉之助ノ半

隊川ヲ渡リ敵ノ後ロヲ衝キ大ニ射撃スレドモ勝敗分タス

シテ休戦ス、此日死傷ナシ、同廿八日ノ夜三小隊共二植

木へ引揚ケ一泊シテ、翌三月一日木葉へ進ミ数ヶ所ニ壘

ヲ築キ守兵ヲナス、四日ノ暁キ敵多勢ニテ同所ニ襲来ス

ルニ付、我兵迎へ討テ進撃スル内、敵右翼ノ山ヨリ横撃

シ来リ劇戦数刻ニ及ビ、味方分隊長澁谷清一・池田兼光

戦死ス、負傷数名アリ、午后三時比ニ至リ兵ヲ纏メテ田

原坂ノ七本(植木町)ニ進入シ、要地ヘ守リヲ付ケ、明ル五日ノ朝坂上ヨリ木葉ヲ望メハ、敵大勢田原ヲサシテ寄来ル、味方モ防禦ノ用意ヲナシ待チケル内、敵ハ砲壘ヘ攻寄セ大ニ砲撃シケルヲ、此時味方僅ニ二三小隊、対応スヘキ勢ヒニアラサレトモ、我半隊長大河平隆資大ニ憤戦シ真先ニ進ンテ下知シケルニ、左ノ股ニ弾丸ヲ受ケテモ事トモセス、益々兵ヲ指揮シテ戦ヒケル内又頭ニ銃丸一ツヲ受ケテ則死ス、其外味方死傷十余名、午后六時比ニ至リ敵終ニ兵ヲ引揚ケタリ、其翌日亦敵兵未明ヨリ寄来リ砲撃劇シク、此時ハ己ニ味方ノ応援モ追々増加シ、烈戦スレトモ勝敗不決、其后互ニ砲壘胸壁ヲ構ヘ日夜戦争間断ナシ、我隊ハ田原坂ニ有リテ戦フ事八九日バカリ、此間ニ我隊ノ死傷六十余名ニ及ブ、三月上旬比我隊中島健彦ノ隊ト交代シテ出京町ニ引上ケ、同所ヘ番兵ヲ張り居ル内、同十八日田原坂ノ固メ破レタリトテ貴島清馳来リ応援ヲ乞ヒシカハ、我半小隊之レニ趣キ向坂(植木町)ニ有ル敵兵ト大ニ劇戦シテ、竟ニ敵ヲ植木ノ北ヘ追返ス、此時中島健彦・貴島清等抜刀ニテ大ニ憤戦激闘シ敵ヲ斬斃ス事数ヲ知ラス、敵向坂ニ斃ル、者二百八十余名、銃器・弾薬夥數分捕ス、我中隊長森岡昌武深手ヲ負ヒ後チニ死ス、其外死傷七八

名、夫ヨリ植木ハ外隊ヘ譲リ我隊ハ又出京町ニ引揚ケ守ル、三月廿二日比常盤口砲壘ヘ城兵寄来リ砲戦互ニ勝敗アリ、台兵ヨリ長キ竹ニ鈎ヲ付ケ吾カ壘ノ土台ヲ引崩サントス、吾兵是ヲ防キ激戦數刻ニ及フ、此時自銃ニ二ヶ所銃丸ヲ受ケ用ユル事不能弾薬モ既ニ尽キケレハ、壘ノ傍ニ伏セ抜刀シテ斬込ヲ期シタリ、然トモ敵間近ク進来ラス、因テ中隊長北郷久成ノ壘ニ行キ、銃損シ弾薬尽タリ防戦ノ策如何セント問ヒケルニ、三間町ナル第一番大隊六番小隊ニ行ヒテ請ヒ来レト、指揮ニ依テ直ニ馳行キ掛合セシニ、此ノ隊モ同ク尽果テ、百発計漸ク請得テ吾壘ニ帰り来レハ、早クモ常盤口ノ砲壘敵ノ有トナリ味方ハ二丁余引退キ、赤尾口ノ横道ニ兵ヲ伏セ相待テトモ敵来ラス、其后四月十四日ニ至リ川尻ノ固メ敗レ、敵熊本城ヘ連絡ヲ通シ候ニ付、味方ノ各隊都テ木山(益城町)ヘ引揚ト本営ヨリ報知来リ、木留其外各地ノ味方絡繹トシテ引揚ルニ付、行路繋ノ為徳之丞外三名ト共ニ街道ニ出張ス、各隊残ラス木山ヘ引揚ケ我隊ハ長峯ニ陣シ、其翌日ヨリ保田窪(熊本市)ニ守ヲ付ケ、同十九日敵大挙シテ我砲壘ヘ来ル、此時南部(熊本市)・長峯・竹宮各所ノ砲壘同時ニ劇戦數刻ニ及ブ内、我保田窪ノ右小隊ノ砲壘ヲ乗取ラレ、左小隊ヘモ敵兵少ク掛リ

來ルヲ右へ配リ合セ斬込ヲ掛ケタル処、敵引退キ又右ノ
塁モ取返ス、此時我隊ヨリ敵三四名ヲ斬斃ス、味方モ死
傷六名アリ、然ルニ敵又寄來レハ其儘防戦ニ及フ内、我遊
撃七番小隊ヨリ敗レケレハ塁ヲ捨テ十丁程引退キ、兵ヲ
伏セ居タル処ニ味方ノ応援來リ、一同ニ四方ヨリ進撃シ
テ又々砲臺近クマテ追ヒ返ス、其時敵ノ死骸道路或ハ畠
中へ捨タル事十二三名余、我隊負傷スル者四名、戦死ナ
シ、分捕品々アリ、此夜木山へ引揚ケト本営ヨリノ指揮
ニヨリ我隊モ亦引揚ル、此日徳之丞儀ハ左ノ手ニ薄手ヲ
負ヒ木山病院ニ入テ療治ス、其夜矢部ニ引揚ケ、延岡へ
出テ高岡へ移リ都城ニ到ルニ、已ニ我隊ハ振武三番中隊
ト改称シ、鹿兒島ニ有リト聞ク、同所ニ赴キ五月十日帰隊
ス、其後五月中旬比同所内ノ丸へ守ヲ付ケ居タリシニ、
同廿二日吉野村ニ有ル味方苦戦ノ報知ニ付、我隊一分隊
応援ニ赴キシニ已ニ敗後ニテ空シク我隊ニ帰ル、元ノ内
ノ丸ヲ守ル、右吉野村ハ翌日又々味方ヨリ進撃シテ竟ニ
敵ヲ追退ケタリ、然ル処同二十五日宮ノ城口ノ味方敗軍
シ、敵鹿兒島ノ背面ニ出テ四方都テ敵地ト成リシカハ、我
隊内ノ丸ヲ引揚ケ伊敷へ転シ、夫ヨリ川上へ移リシニ翌
廿六日敵襲來ノ報知アレハ、背面ヲ衝ントセシニ途ニ敵

ニ逢テ劇戦シ、此時徳之丞儀ハ本営斥候トシテ中島健彦
ノ陣ニ詰タリ、此処各別勝敗ナシト雖トモ報知ノ誤聞ニ
テ兵ヲ引揚ケ、各隊共ニ重富ニ転シ一泊シテ明ル廿七日
帖佐へ移リ、又一泊シテ翌廿八日蒲生へ赴キ、又二泊シテ
同卅日午前九時比敵ノ襲來ルニ因テ戦ヒ、敗レテ溝邊へ
引揚ケタリ、是ヨリ徳之丞儀ハ病氣ニ付病院ニ入テ療治
ヲ加へ、其後清水ニ転シ財部ニ赴キタルニ、病氣少シ快
方ニ及ンテ恒吉ニ帰隊セリ、其翌日百引ニ敵ノ本営アリ
ト聞キ、中島・貴島ノ兩人、振武十二中隊ヲ引テ午前八
時比敵ノ不意ヲ討タル処、敵モ一支ハ支ヘトモ竟ニ逃走
リ、敵ノ死傷夥數ク會計吏一名・医員一名、其外兵卒・
夫卒ノ降ル者五十余名ナリ、且大砲二門・彈藥・器械等
分捕品々數多シ、我隊負傷三名、戦死ナシ、夫ヨリ恒吉
ニ味方引揚ク、又日ヲ換ヘ荒曾ニ進撃ス、此時教導ノ者
道ヲ誤リ敵ノ前面ニ陥リ頗ル苦戦、我隊死傷七八名竟ニ
勝ツ事能ハス人家ヲ放火シ又恒吉へ引揚ケ、日ヲ替ヘテ
大崎麓ニ進撃敵大ニ敗走ス、夫ヨリ志布志ニ転シ二泊シ
テ上莊内ニ移リ、翌日山田へ転陣シ、其後高崎ニ進撃シ
テ敵ヲ高原迄追撃テ同所ニテ相戦ヒ、味方敗レテ午后五
時比山田迄引揚ケ、夫ヨリ二三日ヲ過キ又高崎へ進撃互

ニ戦鬪ス、終ニ午后四時ニ至リ味方竟ニ敗ヲ取り又々山田へ引揚ケ、其翌日各隊持場ヲ替ルニ付、我隊七月廿三日(財部町)通山へ引揚ケ同所へ守リヲ付、同廿四日敵大挙シテ寄来リ各隊非常ノ苦戦シテ竟ニ味方利ヲ失ヒ、各隊持場悉ク敗レ都城へ赴カント財部ヲ經テ引揚候節、敵ノ尾撃ヲ四方ニ受ケ味方総敗軍トナリ、我隊モ散々ニ相成候ニ付、徳之丞儀ハ都合十名許敵中ニ切込ミ死力ヲ尽シ難ナク一道ノ血道ヲ開キ一旦都城街道へ出候処、又々敵ノ伏兵起リ立チ四方ヨリ砲撃ニ逢ヒ、此時三名ニ打成サレ如何ニモシテ斬抜ント心斗(討)ハ慥カナレトモ、数度ノ戦ヒナレハ身心疲レ腕痿ヘテ終ニ警視隊ノ為ニ縛セラレ、財部本営へ拘引ニ相成リ居リ、然ル処ニ先非ヲ悔悟セシニ付明ル廿五日鹿兒島へ護送セラレ、警視出張所へ帰順仕候也、右ノ通唯胸間ニ浮ヒ居候而已上申仕候ニ付、此段可然御執達被下度奉願候也、

鹿兒島県内ノ丸居住

当時群馬県懲役人

明治十一年二月十三日

河野徳之丞

二 東郷重郷上申書

(第三十七号)
今般鹿兒島逆徒征討始末編輯ニ付其事情及戦地之形状等詳悉致候者ハ上申可仕旨御達之趣奉拝承、左ニ筆記仕候、昨十年二月上旬中原尚雄等暗殺ヲ謀ラントノ儀発覚シ、就テ、陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・全篠原國幹へ旧兵隊等随従、政府へ尋問ノ為メ東上ノ際、不凶モ途中熊本県下ニ於テ台兵ニ支ヘラレ、竟ニ戦争ニ及候段追々報知之趣承リ居候折柄、四月二十九日福山本営伊東昌吉ヨリ戸長貴島政勝へ募兵スヘキ旨相達、惣合七十三名五月二日出発福山へ着シ、形行本営伊東昌吉へ通シ候処、直ニ切隊十一番隊ヲ編成シ其隊ノ分隊長ヲ命シ、全所海岸へ防禦候様命セシニヨリ一週間余全所ヲ守リ、夫ヨリ(佐例川、福山町)嘉例川新堀ヲ守ルヘキ旨本営ノ指揮ニ随ヒ同所ニ壘ヲ築キ守ル、然ルニ全月廿日頃軍艦三艘・丸木舟数十艘ヲ率ヒ来リ、発砲候段我隊ノ斥候大迫平立帰リ報知ニ付、至急福山坂ノ上迄駆付シニ火ノ手見ユルニ付、本営心基ナシト談シ坂ヲ下リ候折伊東昌吉へ行逢ヒ候処、今日ノ大雨ニテハモ砲戦出来兼ルニ付都合ヨキ場所へ待伏セ切込ヨリ外ナシトノ事故、各松影ニ伏セ敵寄来ラハ切り入ン

ト用意セシニ、敵ハ中ノ茶屋辺マテ襲来シ夫ヨリ曳返シ
乗艦出港ス、依リテ海岸ニ到リ見ルニ味方八九名戦死セ
リ敵ハ五六名死傷有リシテ戸板ニ
飛ビ曳揚シ殿后土人ヨリ聞ツ、其夜ハ坂ノ中央へ各隊哨兵ヲ張
ル、翌日海岸ニ下リテ守ル、全廿九日重富へ操出へキ旨
本営ノ命ニ依リ発シ行進十三番隊へ代リテ全所ヲ守ル、
六月廿二日黎明軍艦七艘・丸木舟數十艘押寄発砲ス、就
テ行進一分隊ト吾隊戮力防戦スト雖トモ衆寡不敵午后第
一時頃ニハ取巻カレ散々ニナリ、白(給良町)、立坂へ单身差越候処、
最早此所ハ敵地トナリタルニ依リ取りテ返シ、磯街道へ
趣キ夫ヨリ嶮ヲ攀テ吉野本道ニ出ントスルニ、小旗ヲ以
テ招ク者アリ、味方ト心得近寄り凹地ヨリ出テ見ルニ、味
方ニアラス敵ナルニ依リ、即チ曳返シ急ニ退クトキ敵一
声ニ発砲ストイヘトモ一発モ身ニ当ルナシ、夫ヨリ野ニ
潜伏セシニ此ヲ打ツコト雨注ノ如シ、暫アリテ発砲ヲ止
メ取囲ミ漸々近寄り来ルニ付出テ降伏シ、聞クニ第三旅
団四番小隊ナリ、

右之通形行上申候也、

鹿兒島県下日向国志布志郷

当時群馬県徴役人

明治十一年二月十日

東郷重郷

一三 鬼丸源作上申書

(卷第三十八号)
今般鹿兒島逆徒御征討始末御編輯ニ付、戦地ノ事情詳
細申上可キ旨御達相成、謹テ左ニ上申ス、

私儀

明治拾年二月廿日居宅兵火ニ罹リ、第拾二大区下益
城郡(小川町)南海東村ニ家族共ニ立退居候処、同三月下旬官軍
八代日奈久表ヨリ上陸ノ際、熊本協同隊長村上貞雄・
同中島武平成ル者八代小川駅へ出張ノ際、不図モ面会
致シ、兵器周旋致シ呉候様依頼ニ付、銃器卅挺余・刀
式振周旋相渡宿元ニ罷在候処、三月下旬比捕縛ニ相成、
戦地ニ一切関係不仕候得共概略伝聞ノ次第録上仕候、
一二月廿二日高瀬通ニテ官軍熊本へ進入ノ際、薩兵ハ出
町口ヨリ繰出シ向坂ニテ戦争ニ及ヒ、官軍大ニ敗走シ
テ其夜高瀬町迄引揚ノ際、醉狂人熊本県士族春木某外
彦名何欵争論之末抜刀セシヲ、官軍ハ薩兵切り入タル
ト誤認シ惣隊俄ニ擾キ乱レ驚シ躰ニテ、高瀬町ヨリ北
ノ方彦里余モ道程川床村迄引揚ニ相成候様伝聞仕候事、
一三月下旬八代へ源作拘留被仰付候処、薩兵邊見十郎太
再ヒ兵ヲ募リ八代口ニ突出シ候由ニテ、萩原渡リ川越

ノ戦争相始リ、薩兵川ヲ渡リ宮地ヨリ進撃ス、既ニ八
 代乗取ヘク勢ノ際同所松井旧士百余名薩兵ノ側面ヨリ

(細川氏旧家老)

放発イタシ交戦ノ際、獄中へ銃丸度々相達シ、最早拘留
 ノ者廿四名相果申可キ哉モ難計候ニ付、此儘空敷獄中
 ニ相果申可キモ残念ノ次第ニ付、看守へ一同申出候故
 漸ク檻外へ出シ呉候処、苦戦ニテ兵難避候儀難相成故
 獄中ノ傍ニ看守始一同打臥居候処、次第ニ砲声モ遠ク
 相聞キ候ニ付、廿四名ノ内薩兵拾二名ハ其儘獄ニ繫レ、
 熊本県ノ者源作始拾二名八代官軍八代隊本営ニ連行レ、
 市中ノ者都テ他へ逃去リ、尤當中ニハ夫方躰ノ者老名
 有之而已ニテ焚出方実ニ間ニ合ス候ニ付、焚出方並戦
 地弾薬運送等外拾老名ノ者共へ指揮致ス可キ旨隊長西
 某ヨリ御達ヲ蒙ルニ依テ、二日二夜八代隊ニテ兵糧・弾
 薬運送指揮仕、竟ニ官軍御勝利ニ相成、是戦也八代隊
 大ニ奮戦仕候事、

右覚知候丈ヶ上申候也、

熊本県肥後国飽田郡

第壹大区八小区金峯山町居住

明治拾一年二月

鬼丸源作

一四 榎屋兼明上申書

(本)第三十九号一

鹿兒島逆徒御征討始末御編輯ニ付、右賊徒懲役人ノ内其
 事情及戦地ノ形状筆記上申可仕旨、太政官第四号ヲ以テ
 御達ノ趣奉拜承、筆記左ニ奉申上候、

明治十年二月中原尚雄外数名内命ヲ受テ帰省中、陸軍大
 將西郷隆盛ヲ暗殺セントノ謀計発覚シ終ニ捕縛トナリ、
 其状実白状ニ及ビ、依之政府へ尋問ノ為、陸軍大將西郷隆
 盛・同少將桐野利秋・同少將篠原國幹上京ノ際、途中警
 護ノ為メ旧兵隊隨行致シ発途熊本鎮台ニ道ヲ遮ラレ、止
 ム事ヲ得ス開戦ニ相成リ頗ル劇戦ノ報知伝聞スル中、鹿
 兒島へモ敵上陸セシニヨリ、中島健彦・貴島清振武隊ヲ
 引率シテ伊敷村ヲ本営トシ、堤甲介外三名ヲ使トシ我区
 ニ来ツテ諭シテ曰ク、今ヤ士タル者ハ国難義務ニ臨ンデ
 傍觀坐視シ敢テ尽サ、ルハ廉恥ニ反シ天地ニ容レラレザ
 ル国賊ナリ、早クモ募兵ニ応シ一滴モ報セヨト、是ニ於テ
 憤起シテ吾区八拾五名ト俱ニ直チニ宿所ヲ発シ、五月廿
 一日伊敷ノ本営ニ着ス、依之振武新式拾八番小隊ニ編制
 セラレ其ノ隊ノ小隊長ニ命セラレ、同所ノ小野村ヲ宿陣
 トシ玉江橋ノ壘ヲ守ル、同所ヲ固守スル事凡三十日間ニ

及ブ、其中互ニ劇戦ナシ、同六月廿一日出水表ニ上陸セシ敵兵進入シテ最早川内迄来レリト彼地ノ勇義隊ヨリ援兵ヲ乞フニ依リ、各隊ヨリ押伍一名兵卒拾名ツ、ヲ出シテ一中隊トナシ、貴島清之レヲ引率シテ彼地ノ応援ニゾ赴キケル、同日ニ宮之城モ敵既ニ攻取り危急ニ逼リタリ早ク援兵ヲ出シ呉ヨト報知ニヨリ、即チ吾小隊ヲ彼地ノ援兵ニ赴ケト本營ヨリ達ス、直チニ同所ヲ発シ昼夜ノ別ナク道ヲ急ヒデ同廿二日未明人來ノ本營ニ着スルヤ否ヤ同所ノ蘇井田原ノ守兵ノ援兵ヲ致シ呉レト、同所ニ至リ見レバ壘壁モ薄シテ防キ戦フアタハズ、各隊ト協議シ守壁ノコトヲ議セント我隊ハ半隊長ニ依頼イタシ置キ、本營ニ赴カント途中半里計リ歩ミ行クニ背後ニ砲声烈シク聞ヘケレバ、是レ定テ敵我が壘ヲ進撃スルナラント引返シテ元ノ壘壁ニ至ラントセシニ、敵已ニ壘ヨリ二三町モ進入シテ吾隊ニ歸ル事アタハス、我隊ハ敵ニ取囲レ漸ク一方ヲ衝テ出デタリト、於是味方ノ散兵ヲ集メテ入來ノ峠ニ於テ防ガズンバ外ニ防グベキ要地モナク、鹿兒島ノ敵兵ト連絡ヲ通シサセナバ一大事ナリト、郡山ニ至リ味方ヲ求ムレドモ得ス、從是伊敷ノ本營ニ至リ援兵ヲ乞ハズンバ叶ハズト道ヲイソヒテ、同廿三日同所ニ至リ中

島氏ニ面会シテ右ノ事実ヲ述ベ援兵ノ事ヲ談ス、中島氏答テ云フ、当地モ御覽ノ通り諸方ニ戦ヲ初メ頗ル劇戦ナリ、此地ヨリハ一分隊トテモ援兵可致兵ナシ、兎モ角モ彼地ニ赴カレ散兵ヲ集メテ防禦シ給ヘヨト、元ノ郡山へ至リ漸ク散兵二十名位ヲ集メテ入來峠ヲ守ラント、至リ窺見レバ已ニ同所モ敵ノ有トナリ居シニ、同所ノ本道ニ守ヲツケ居シガ昨夜ヨリノ風雨ニテ霧モ深ク咫尺モ不弁、左スルウチニ敵兵ハ早花尾街道ヲ越ヘテ川上ニ衝出テ已ニ四方皆敵地トナレリ、早々引揚クベキ報知ニヨリ直チニ壘ヲ捨テ隊ヲ解キ、諸所ノ山野ヲ超ヘテ同廿八日吾区ニ歸ル、七月上旬ニ至ツテ第三旅団第三大隊へ前非ヲ悔後シ自首帰順仕候、

右太政官第四号ヲ以テ御達ノ赴奉謹畏、形状筆記仕此段奉上申候、

鹿兒島県給黎郡第十三大区

二小区喜入居住

當時群馬県懲役人

明治十一年二月十二日

榎屋兼明

一五 池田貞英上申書

(卷一第四十号)

今般鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付、賊徒懲役人ノ内其事情及戦地形状等詳悉致候者ハ、該事ノ顛末筆記致スヘキノ趣奉拜承、左ニ筆記仕候、

十年二月上旬県内穩ナラサル際県令ヨリノ布達ニ、今般陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・全篠原國幹政府へ尋問ノ筋有之上京ニ付、旧兵隊ノ者共随從ノ趣有之ニ付國家ノ大事件ト思ヒ込ミ、殊ニ西郷・桐野・篠原何レモ維新以來ノ功臣ナルニ、此度モ定メテ報國ノ志操大ヒニ成ス事アラン、兎モ角モ出頭シ進退ヲ決スルノ意ニテ至急庁下へ參着ス、前後吾区ヨリ馳着者二百五十余名、時ニ私学校番兵アリ堅ク出入ヲ禁ス、故ニ其儘県庁へ出頭、今般ノ事件如何相心得然ル可ク裁伺ヒ候処、今般ノ儀ハ布達ノ通名分モ判然タルニ付、國家ニ尽力スル志操アラハ西郷へ随從然ルヘキトノ儀ニ付、私学校ハ出入嚴禁ノ旨ヲ陳述ス、然処西郷宛ノ一封ヲ渡サレ、是ヲ以テ參校スヘシトノ儀ニテ即持參セシ処、番兵ヨリ書翰ノミ請取り校門ニ入ルヲ許サス、書翰ノ返事ニハ後刻邊見參ルヘクトノ儀ニテ、県庁へ立戻リ形行申出置候処、暫アリ

テ西郷へ隨從ノ儀ハ今更出来サル故、自然見込モ有之ニ付旅宿へ滯留スヘキ旨ヲ達セラル、其中二月十五日ヨリ私学校ニハ追々出発有之其後日數廿日モ相過シ頃、県令ヨリ一先帰区致シ居候ハ、追て何分相達スヘクトノ趣ニテ一同帰区ス、然ルニ貴島清・折田某豐俊表へ出発ノ内命県令ヨリ受ケタルニ付、共ニ出発セン事ヲ促カスト雖、何分県令ノ指揮無之テハ出発出来サル旨ヲ演舌ス、三月四日頃淵邊^群軍平熊本ヨリ帰路ノ折柄、聞ク処先度該区ヨリ出庁セシ人員ハ未タ該区ニアリヤ、今般ノ一挙ハ名分大義モ判然タル事ナレハ若シ是ヲ傍觀スル者アラハ國家ノ為メ打果テモ可ナリト云ヘルニ就テ、当区ハ県令ノ指揮ヲ受ケ斯クノ如シト答ルニ、最早今日ニ至リ坐シテ命ヲ待ツハ因循ノ至ナラスヤ、速ニ出庁シ県令ノ指揮ヲ受クルニ如カスト云ヘリ、因テ翌日出庁ス、然ルニ該区二百五十名此度熊本表へ差遣スヘキ旨口達ノ末西郷宛ノ一封ヲ与フ、命ヲ受テ迅速帰区ス、全月八日一同発程全十二日熊本ノ本營ニ着ス、即チ県令ヨリ口達ノ趣キ申述彼ノ一封ヲ差出ス、然ルニ三十名ヲ砲隊ニ編入、二百二十名ヲ二小隊ニ分ケ遊撃一番・二番隊ト称号シ、二番遊撃隊分隊長命セラレ、即刻ヨリ安政橋ヲ守ル、全廿三日頃ハ

代口へ操出防戦スヘキ旨本管ノ指揮ニ依リ、吾カ守ヲ第

八番大隊四番小隊へ譲リ全廿四日頃小川へ着ス、戦争央

ナリ、因テ種山へ吾一番・二番遊撃隊外一小隊ヲ以テ進

撃ス、互ニ発砲日没迄戦フ中、敵管ヲ自燼シテ去ル、其

夜ヨリ種山ニ哨兵ス、全廿六日小川本道戦ヒ敗レ空シク

松橋へ曳揚、夫ヨリ海岸(下瀬男、宇土市)シワシワダニ哨兵ヲ張ル、全廿八日

頃敵ノ斥候ト見ヘ端舟寄セ来リ暫時砲撃シテ去ル、全卅

日頃敵襲来スト雖川ヲ隔テ互ニ砲戦勝敗ナシ、全卅一日

頃山手猫坂ノ戦ヒ苦戦ニ付応援トシテ迅速操出シ奮戦凡

ソ三時間、終ニ松橋ノ本道ヨリ敗レテ川尻へ退ク、其夜松

橋夜襲援兵トシテ吾遊撃一番・二番午后十一時頃ヨリ操

出セシニ、不図モ途中敵ノ伏兵ニ陥リ散々ニ敗走ス、死

傷甚多シ、此夜一層必死ヲ期シ当ルヲ幸ヒ鬪戦シ黎明ニ

至リ単身松橋駅ノ後ロニ出、味方ヲ顧ルニ一小隊程ノ兵

ヲ見認メ此レニ意ヲ寄セ退ク、折シモ吾隊士五六名ニ逢

フ、共ニ夫ヨリ見認メシ処ノ隊ニ暗号ヲ問ヒシニ味方ニ

アラスシテ第二中隊四本半九郎ト欵不分名乗シ故、即チ五

六発砲撃セシニ彼ヨリ何故ニ味方打スルト大声ヲ発セ

シニ傍倅ニシテ其場ヲ遁レ、溝ヲ匍匐シ或ハ山ヲ越ヘ其

中所々ニテ砲撃サレ、終ニ其五六名モ離散シ、辛フシテ

午后五時頃川尻ノ吾哨兵線ニ達スル事ヲ得タリ、其后三

四日ヲ経テ吾隊川尻ニ集ル者六十余名、其中川尻ニ壘ヲ

築キテ堅ム、四月五日吾遊撃一番・二番御舟へ繰出シ甲

佐道ノ西早川村ニ哨兵ヲ張ル、全十一日頃早天ヨリ敵大

進撃ス、各隊手ヲ尽シ防禦スト雖終ニ午后一時頃山手ト

哨兵線ノ西端ト同時ニ敗レ、吾隊中央ニ取り囲マレ大ヒ

ニ苦戦ス、死傷並踪跡ノ分ラサル者頗ル多シ、此時吾隊

離散シ矢部・木山ニ退ク、四五日ヲ経テ稍集ル、其中集

合ノ兵ヲ以テ南田代ヲ堅ム、外ニ四小隊、全十三日比敵

進軍ス、砲戦暫時ニシテ利ヲ得尾撃スルニ至ル、翌日金

内村ニ転シテ壘ヲ築キ哨兵ヲ張ル事一両日、全十七日比

木山ニ本管ヨリ御舟再タヒ吾有ニ帰セシニ依リ彼ノ地へ

繰出スヘキ旨相達、即刻出發山手矢部道ヲ守ル、翌日敵烈

シク迫ル、午前九時比ニ至リ各隊利アラスシテ木山ニ退

ク、此地熊本植木諸口ノ兵曳揚雲集ス、此ニ本管ノ口達

アリ、川尻敗レテ竟ニ熊本城ノ囲ヲ解キテ今斯ノ如シ、依

テ一時兵ヲ人吉ニ集メ兵氣ヲ養ヒ再ヒ敵ノ鋭ヲ挫カン、

就テ其隊ハ矢部へ曳揚ケ御舟間道ヲ堅ムヘシト、直ニ隊

ヲ整ヘテ矢部へ曳揚翌日ヨリ猿渡村ニ哨兵ヲ張ル、四月

下旬日向国尾前へ曳揚一週間程滑陣、此時遊撃一番・二

番ヲ干城八番中隊ト改称スベキ旨本営ヨリ相達シ、江口盛一吾左小隊ノ隊長ヲ命セラル、五月始人吉ニ出本営ノ指揮ニテ球磨川筋大野村(声北町)応援トシテ操出ス、四五日此村へ滞陣、五月中旬大口本営ヨリ援兵ヲ乞フ、此地ニ在ル所ノ干城二番・全四番・吾八番操出シ山中ヨリ突然敵ノ不意ヲ襲フ、忽チ久木野(水俣市)ノ壘ヲ拔キ進ンテ敵ノ營ニ至リ、諸器械ヲ得テ午后六時過大野へ帰陣ス、四五日経テ后大野村ノ内材木(才木、声北町)ナル鎌田清之丞ノ隊外二小隊ノ砲壘、未明ニ不意ヲ襲ハレ敵ノタメニ材木ノ壘悉ク乗取ラレ即死十五名アリ、時ニ吾隊援兵シ午后一時頃迄砲戦スト雖トモ一隊僅カニ三十余名衆寡敵シ難シ、依テ隊長江口盛一ニ策ヲ求メ共ニ必死ヲ究押伍藤井氏清始八九名ノ兵横合ヨリ銃ヲ背ニ負ヒ嶮ヲ攀チ、其二十余名ハ枚ヲ啣ミ溝ヲ下ル一声ノ下ニ正面ノ麦田ニ頭レ神速駆登ル、亦横合ヨリ突然山嶺ニ躍出駆込シニ敵死骸並銃器ヲ捨テ走ル、吾隊戦死一名負傷スル者僅カニ三名、午后五時比外隊へ壘ヲ譲リ大野ニ帰陣ス、后五月十九日大口ヨリ援兵ヲ乞フ、吾八番外三小隊操出ス、午前八時比味方ノ哨兵線ニ達ス、策略定マリ午前十一時比上木場進撃即チ開戦大ニ苦戦ス、殆ント彈藥モ尽キ互ニ砂礫ヲ抛ツニ至ル、時ニ干城二番

隊続ヒテ応援スルニ依リ午后五時比終ニ砲壘數ヶ所ヲ拔ク、吾隊長江口戦死ス、負傷スル者十二名、其夜此所ニ哨兵ヲ張ル、翌廿日大口ノ諸隊へ壘ヲ譲リ大野村へ帰營ス、其夜亦札松越へ哨兵ヲ置ク、全廿一日敵大進撃午前八時頃大野口尽ク敗走ス、吾隊揚越へ曳揚三四日哨兵ヲ張ル、然ルニ吾八番人吉本営ヨリ程角道(服岳道、人吉北郷)援兵トシテ操出スヘキ旨相達シ、吾守リヲ鎌田隊へ譲リ全廿六日比原田村へ操込、全卅日暁天ヨリ敵烈シク迫ル、午后一時比戦ヒ敗レテ井ノ口村迄曳揚ク、折節敵ノ追撃甚タ急ニシテ終ニ接戦ニ及フ、時ニ重創ヲ受ケ其場ヲ退キ、小木場(大畑、人吉市)一泊、翌廿一日鹿兒島県下小林病院へ着療治ヲ受ケ、翌六月一日帰区ス、療養中七月廿四日官軍進入ニ付、翌廿八日川村參軍へ帰順ス、右形行上申仕候也、

鹿兒島県日向国第十二大区一小区
都城当時群馬県岩鼻已決檻因
明治十一年二月十日
池田貞英

一六 塚元淳一上申書
〔卷〕第四十一号

鹿兒島逆徒征討始末御編輯ニ付、右賊徒懲役人ノ内其事
情及ヒ戦地ノ形状等筆記シ上申可仕旨、太政官第四号ヲ
以テ御達ノ趣奉拝承、左ニ録上仕候、

淳一儀私学校生徒ニハアラスト雖ドモ、十年ノ二月中原
尚雄外数名帰省中、陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺セントノ謀
計発覚シ終ニ捕縛トナリ其状実ヲ白状シ、依テ政府へ尋
問ノ為西郷隆盛ヲ始メ桐野利秋・篠原國幹上京スルニ付、
私学校生徒ニモ途中保護ノ為随行シ、発足ノ後熊本鎮台
ヨリ道ヲ遮ラレ開戦ニ成リタリト頻ニ伝聞ス、然ルニ五
月中旬比熊本県境出水米ノ津口エ敵軍襲来ルニ付、其敵
兵ヲ追払ハンカ為鹿兒島県三等警部中山盛高本営ヲ山崎
郷へ据へ、隊号ヲ勇義ト称シ、一週間位ヲ過テ川内隈ノ
城郷エ転營ス、此本営ニ有テ出兵可致旨相達セシニ付、
我区八九拾名右ノ本営ニ到レハ、右半大隊八番小隊ニ編
入セラレ、其隊ノ半隊長ニ命セラル、中山ノ曰ク、既ニ
出水津口へ敵兵襲来ル上ハ至急ニ隊ヲ編制シ彼ノ地ヲ
防禦セスンハ、自然川内モ敵地ト成ルハ案中ナリト言フ、
然ルニ出水郷并ヒ高尾野・阿久根ノ区内モ中山ノ手続キ
ニテ募兵ニナリ勇義左半大隊ト隊号ヲ定メ、彼ノ地へ本
営出張有リ、比ハ五月下旬ニ当リ先キニ有ル左半大隊ヲ

以テ同所ヲ防禦シ戦ヒニ及ヒケレハ、味方銃薬乏クシテ
戦ヒニ利アラストノ報知度々聞ク、然ルニ川内川津口へ
モ敵兵上陸スルモ難計此要地へ守兵ヲ不置ハ実ニ遺憾ノ
場所ニ付、我八番小隊ハ右ノ津口ヲ固守セヨト本営ヨリ
達セリ、壘壁ヲ敵ニ築キ同所ヲ固守スル事凡一週間位ニ
シテ最早六月上旬ニ到レハ、右半大隊ノ内各小隊ヲ川内
ヨリ出水へ応援トシテ追々操出ス、勇義左半大隊ノ内五
小隊ハ素ヨリ彼ノ地ノ士族ニシテ守壘敗ル、ヤ否ヤ官軍
ニ降り、時ニ敵軍阿久根桑原(阿久根市)ノ城迄進軍ス、其時応援ノ
各小隊ヲ以テ同所ヲ防禦シ戦ヒ三昼夜ニ及ブ、敵衆兵ニ
シテ増々勢ヲ得ルノ報連ナリト聞ク、我隊モ川内川津口
ノ守ハ捨置キ応援トシテ彼ノ地へ操出セリトノ一封同十
六日ニ来リ、急速彼ノ地へ趣キ着スルヤ否ヤ、不量同所
モ敗レケレハ、味方山下原(阿久根市)或ハ麓町迄引揚ケ来ルト聞ク、
我隊二手ニ分ツ、小隊長高木敬介右半隊ヲ引率シテ海岸
へ守ヲ付、左半隊ハ富町ト言フ所へ一泊ス、同十七日未
明ヨリ敵軍山下原ヨリ進撃ス、時ニ我左半隊ハ敵ノ右翼
ニ向ヒ高山ニ駆付防禦セヨト達シ有ツテ、山丘ニ駆登リ
戦ヒ二時間位ニ及ヒケレハ、我隊負傷スル者一二名、敵へ
捕縛セラル、者一名アリ、午前九時比ニ至レハ敵軍ヨリ

右ノ山手又ハ左ノ通路ヲ取巻マカレ我隊散乱シ、戦利ア
 ラスシテ山野ノ透ヲ伺ヒ終ニ川内迄引揚ケタリ、川ヲ境
 ニシテ大小砲ヲ発シ互ニ鬪戦スル事三日ノ間ニシテ、同
 十九日正午拾二時比ニ到レハ、敵軍川尻ノ高江渡シヲ突
 渡リ進軍ス、量ラシヤ川内口モ敗レケレハ限ノ城向田駅
 ノ民家八百余戸惣テ火ノ手トナリ、吾隊モ宮里村ノ敗ニ
 散乱シ、淳一儀ハ一週間位モ山中へ身ヲ潜メ、同廿五六日
 比ニモ候半我区ニ帰リ見レハ川内県庁出張所有リ、此庁
 ヲ伺ヒ村上九等警部へ悔悟帰順ヲ嘆願シ、自宅謹慎ノ沙
 汰有リケレハ、同八月上旬比本県警視出張所ヨリ粟屋三
 等警部帰順人取調方トシテ派出有リ、再ヒ帰順自首仕候、
 前件ノ通上申仕候、

鹿兒島県水引居住

當時群馬県懲役人

明治十一年二月十一日

塚元淳一

一七 土岐半介上申書

(朱)第四十二号
 今般鹿兒島御征討顛末御編輯ニ付、戦地ノ形状等詳悉仕
 候次第左ニ上申ス、明治十年第二月西郷隆盛・篠原國幹・

桐野利秋等県下出発ノ際ハ更ニ關係不致、第三月上旬逸
 見十郎太等熊本ヨリ帰県シテ応援ヲ四方ニ募ル、爰ニ於
 テ今般西郷等ノ一挙ハ国家人民ノ為大ニ臣子ノ尽ス可キ
 義務ト存シ、自カラ奮発シテ第四月一日庁下ヲ発シ、山
 崎・宮ノ城・鶴田等ヲ経テ、同二日午后大口本營へ到着、
 諸方ノ募兵モ馳聚シテ該所へ諸器械ヲ設ケ玉葉製造ス、
 其他事務尤混雜也、全三日佐土原・日向綾・大隅横川・高
 崎等ノ隊長ヲ任セシニ更ニ兵ヲ指揮スルヲ承諾セスト雖
 トモ強ヒテ申付ニ依リ、止ヲ得ス之ヲ諾シ、佐土原・綾等
 ノ兵百八拾余名ヲ一隊トシテ、宵ル該所ヲ発シテ翌四日
 午后四時頃(大口市山野)小河内ノ近村へ着シテ薩肥国堺ノ大堀石坂等
 へ次ル事数日所々探偵ス、全十日人吉本營ヨリ書翰ヲ以
 報スルニ、該所ハ巡查兵ニ讓リ人吉へ操込ム可シト、因
 テ翌十一日払晝該所ヲ発シ、大口郷肥国堺ナル深山岬々
 嶮隘ナル四里程ノ青木越ヲ経テ、午后四時頃人吉へ到着
 ス、此時已ニ別府晉介ハ(八代市)櫻馬場萩原ノ戦ヒニ銃創ヲ受ケ、
 逸見ハ神ノ(坂本村)瀬藤元邑ニ在リテ八代ニ迫ラントス、又熊本・
 八代ノ両口ニ募兵ヲ操出シ、且八代・熊本ヨリ負傷ヲ通送
 スル事数多也、而シテ逸見八代ニ迫リ鋒銳利ヲ得ルノ報
 ヲ聞ク、然ルニ全十四日黎明第五時人吉ヲ発シ午后四時

頃大野村ニ到着、(青北町)札松峠ヲ守ル事二三日也、全十七日頃
上白木村ニ転移シ、佐敷往還九ツ峠・鬼田村等ニ哨兵ヲ
出ス、斯リケル処ニ全十八日頃櫻馬場ノ戦ヒニ逸見ノ兵
敗潰シ神ノ瀬・藤元等へ走ル、逸見憤怒慨歎シテ諸隊ヲ
指揮ス、之レニ依テ全廿日頃半介兵三四名ヲ率ヒ佐敷駅
へ至リ該所ノ形況ヲ巡視スルニ、駅戸ヲ閉チ徘徊スル
者稀也、時ニ宵ル守有ノ地へ還リ、官軍櫻馬場ヲ敗リ不日
佐敷駅へ進軍スルノ探報ヲ知レリ、因テ驟カニ哨兵ヲ諸
道ニ張り罌壁ヲ固フシ敵ニ之レヲ守ルニ、全廿一日頃官
軍佐敷駅へ到着シ諸方ニ兵ヲ操出シ我壘へ迫ルニ依テ、
翌二十三日未明ニ材木村ニ引キ該所ノ嶮岨ヲ守有ス、此
時我軍大野邑・岩井阪・一ノ瀬等ニ守有スルニ、全廿四日
頃官軍我寨ニ襲来スレハ邀戦數時間ニシテ之レヲ退ク、
又全廿八日頃黎明ヨリ官軍煙霧ニ乘シ我壘へ不意ヲ襲フ、
是ニ於テ頗ル烈戦或ハ死シ或ハ傷シ遂ニ防禦スル能ハス、
忽チ我軍敗レテ數町引退キ防戦、午后二時頃ニ至リ奮戦
守壘ヲ復有シ官軍ヲ卻ク、此日我死傷四十八九名ニ及フ、
台兵屍一ツヲ捐テアリ、全三十日頃中隊ト編制ス、又廿
三日札松烈戦頻リナリ、同廿四日午前八時頃大野、札松敗
レシニヨリ材木等ヲ引揚ク可キノ報告アリ、依テ告村へ

退キ該所ヲ守ル、全廿五日渡リ村へ引キ全廿六日遠之原
村へ到着該所ヲ守有ス、全三十日程角道敗レシニヨリ人
吉へ引揚ク可キノ報告アルニ付、其夜遠之原ヲ発シ翌日
正午頃人吉ニ到着シテ淵邊軍平ト共ニ遽カニ大柿村ニ至
リ、三日ケ原ノ諸道ヲ守有セシカ官軍人吉ニ迫ル事愈鋭
シ、時ニ六月一日午前十時頃諸方ノ戦ヒ烈シケレハ、人吉
市中ノ放火黒煙熾也シカ淵邊ハ先キニ人吉ニ至リシニ、
既ニ午后遂ニ官軍人吉ヲ陥レ、我軍敗潰大畑村へ引揚タ
ル処急報アルニ付、即夜間道ヲ経テ翌二日未明ニ大畑村
へ到着スレハ、爰ニテ諸道へ守兵ヲ置キ守ル事數日、全
十一日官軍大畑村ヲ襲フ、我軍固ク防戦セシカ官軍モ壘
壁ヲ築キ防戦ス、全十二日午前十時頃大畑村敗レ諸隊潰
散、吾ハ单身球磨山ヲ経テ全十三日森田村ニ至リ該所へ
一泊シ、全十四日馬關田ニ至ルニ我軍爰ヲ守ルニ逢フ、
既ニ午后該所ヲ発シ加久藤ニ至リ小林ニ出、夜行村邑へ
一泊、翌十五日小林本營ニ至リ該村へ守兵ヲ張り、全十
六日又転シテ久保田村ニ次シ此村ヲ守ル、全廿二日頃飯
野ノ官軍ヲ進撃セシニ利アラスト雖トモ壘壁ヲ固フシテ
之レヨリ邀戦スル事數日也、全廿七日頃吉松郷ニ至リシ
ニ官軍般若寺越ノ諸山脈へ有テ防戦ス、全三十日頃加久

藤ノ内白鳥門前(えびの市)ニ引キ該所ヲ守有ス、第七月上旬官軍加

久藤へ迫リ遂ニ我軍敗潰散乱シテ高原郷・野尻等へ引上

ケ高原郷ヲ守ル、全十日頃官軍同所ヲ襲フ、我軍又敗潰シ

テ都ノ城高城口へ走り該所ヲ守有ス、全十二日頃我軍高

原ノ官軍ヲ進撃ス、利アラスシテ引揚ル、此日我軍死傷凡

五拾名余ニ至ル、全十六日頃又高原ヲ進撃復利ナシ、午后

四時頃高城へ引ク、全廿五日頃都ノ城敗レ諸方面大敗潰、

全廿六日高岡へ引ク、於是野尻モ亦敗レ全廿八日官軍高

岡ニ進撃スルニ付、高岡ノ内浦(高岡町)ノ名村ニ至リ、爰ニ始テ

先非悔悟自首帰順仕候、右戦地之形勢時日村邑等ニ至テ

ハ手帖等所持不仕候ニ付、前後致候得共形行上申仕候也、

明治十一年第二月

土岐半介

鹿兒島県下第二大区四小区

一八 阿萬甚五郎上申書

(卷)第四十三号

今般鹿兒島逆徒御征討始末御編輯ニ付、戦地事情見聞且

実行詳細可申上旨御達ニ因リ左ニ上申候、

甚五郎儀

兼て私学校へハ入校不仕候処、明治十年四月廿一日募兵

ノ為メ人吉本営別府督介令ヲ以テ、区长山本九介ヨリノ

達ニ曰ク、此節困難ニ付テハ郷内壮士ノ者共狼狽致候儀

更ニ之レナシト、出兵ノ旨ヲ以テ召募ニ相成、因テ郷内

壮士七拾式名、同廿三日出発人吉ヲ指シテ栗野迄差越候

処、鹿兒島沖へ軍艦相見得、就テハ敷根郷へ引返ス可ク旨

大小荷駄上原善藏ヨリ承知致シ、五月三日敷根郷へ着シ、

本営伊藤昌吉方へ届出候処、右七拾式名ヲシテ切込隊七

番小隊ニ編制、甚五郎小隊長へ右人員ノ入札ヲ以テ決議

致シ、再三辞退スレトモ相叶ハス、止ム事ヲ得ス小隊長ト

成リテ当所ニ番兵致シ候処、五月九日國分郷小濱村沖へ

敵ノ軍艦碇泊シ端舟ヨリ海岸近ク漕キ寄せ、既ニ上陸セ

ントノ模様ナリト報知ニ依リ、即チ本営ヨリ吾一小隊ヲ

シテ固守スヘキノ指揮ニ従ヒ、小濱村ニ出張シ所々ノ海

岸要害ヲ見定メ、壘ヲ築キ固ク守ヲ付今ヤ遅シト待掛タ

レト上陸セス只海上ヲ運働スルノミナレトモ、不意ヲ撃

レンカ為メ尤モ氣ヲ付ケ心ヲ配リ益敵ニ守リシカ、本営

ヨリ福山ニ引揚ヘシト報知アリ、六月廿九日該地へ繰入

テ又海岸防禦スルニ、七月十四日敵陸ヨリ進撃シ又洋灘

ニ碇泊セシ軍艦モ海岸近ク漕キ寄せ大小銃ヲ放出ス、味

方海岸ニ伏セ敵上陸セハ直ニ切込マント勇ヲ奮ヒ待受ケ

タルニ、料ラサラン山手ノ味方敗潰シタルニヨリ直ニ通(附)
山へ引揚クヘクトノ報知アリ、依テ該地ニ引揚ケ滯陣ス、
又七月廿三日末吉郷二方村へ移リシカ、翌廿四日敵ノ大
進撃ニ遭ヒ味方敗軍致シ、吾隊モ散乱シ夫レヨリ帰郷仕
候処、巡查派出ニ相成リ居候ニ付帰順自首仕候、

右之通取覽申候間上申仕候、以上、

鹿兒島第十七大区小十四区

穎娃郡穎娃郷居住

当時群馬県懲役人

明治十一年寅二月

阿萬甚五郎

一九 伊集院英輔上申書

〔朱〕第四十四号〕

英輔儀

兼て私学校へ入校罷在候処、客年二月東京警視庁警部巡
査之内追々帰省致シ、私学校党へ離間ノ策ヲ行ヒ且陸軍
大将西郷隆盛・同少将桐野利秋・同少将篠原國幹等暗殺
セントノ密謀発覚致シ候段承リ、実ニ不容易事件ニテ政
府ノ御処置如斯不正之義有之ニ於テハ往々如何成変態ヲ
現出センモ難計ト、西郷始大ニ此処ニ憂慮シ、政府へ右

不正之件々尋問ノ為メ上京ノ挙有之候付、西郷ハ陸軍大
将タルヲ以テ生徒中協議之上途中保護ノ為メ随行セン事
ヲ約シ、英輔儀(池上四郎隊長)ハ第五大隊四番小隊分隊長ト成リ、同二
月十七日鹿兒島ヲ発足、昼夜兼行同廿一日夜熊本県松葉
瀬へ到着致シ候処、川尻ヨリ報知アリ、鎮台兵前途ヲ遮
リ為何応接モナク砲発致シ不得止応砲ニ及ヒ候処、台兵
忽チ逃走シ且城下ノ方ニハ人家ニ放火シ愈軍備ノ勢ヒナ
リ、依之テ篠原國幹・池上四郎・永山彌一郎等明朝攻撃
ニ決シタリト承リ、直チニ発足シテ翌廿二日朝第五大隊
ハ鎮台城東北大手ヲ差テ進撃スルニ、中々城郭無双ノ要
害ニシテ攻入難ク竟ニ墨ヲ築テ防戦ス爾于時我隊ノ負傷
二名ナリ、同廿四日段山新八幡岡へ転シ防禦スルニ、敵
モ勢ヒ盛ニシテ昼夜砲声無間斷、然ト雖トモ数日ノ間ニ
負傷スル者半隊長染川彦八其他兵士二名、依テ英輔半隊
長ト成ル、同四月八日該地ヲ交代シテ向榮町へ引揚ケ、
翌九日植木へ転ス、然ル処村田新八ヨリ木留ノ方へ繰入(植木町)
ヘシトノ報知アリ、翌十日木留へ移リ候処、田原坂七本(植木町)
村へ敵襲來劇戦ニ及ヒ竟ニ味方敗軍ト成テ台場二ヶ所ヲ
乗取ラレ、少シク引退キ、于今防戦最中成ト報知アリ、
直チニ応援セント出發致シ其夜田原坂へ繰入、翌十一日

未明ヨリ攻撃致シ朝霧ノ間ニ盛返サント必死ヲ究メ敵地
 へ吶ト切入シカ忽チ逃走シテ難ナク盛返スニ、銃器數十
 挺・彈藥数千発分捕、我隊ノ死傷十二名、翌十二日未明
 ヲリ敵大兵ヲ以テ又襲来味方ノ台場迄攻入接戦ニ及ヒ必
 死ヲ究メ、前後左右ニ衝伏セ切伏セ戦ケレトモ全隊衆寡
 難敵竟ニ又台場ヲ乗取ラレ、二三十間モ引退キテ街道へ
 塁ヲ築キ防禦セシカ頻リニ残念至極也、又是非盛返サン
 ト決シ直チニ喇叭ノ合図ヲ以テ無息ニ敵中へ切込ミシカ
 大ニ狼狽シテ逃走セリ、然ル処ニ右翼ノ隊進ム事ヲ得ス
 故ニ横矢ヲ撃レ守事能ハス竟ニ元ノ街道へ又引揚タリ、
 此日我隊ノ死傷六十六名、然ル処ニ能勢十九郎・折田敬
 介各百六十余名ノ兵ヲ引率シテ援兵ニ来リ、依テ此由ヲ
 語りケレハ、今一度此ノ新兵ヲ以テ攻撃シ必ス盛返サン
 ト勇ミ進ンテ手配シ、又喇叭ノ合図ヲ以テ一同ニ進マヤ
 討テヤト闕ヲ吶ト揚ケ、敵ノ直中ニ駆込ミケレト敵モ中
 々大勢ナレハ容易ニ退カス、憤戦劇闘シテ能勢・折田ノ両
 名敵中ニ死ス、竟ニ敗軍ニ及ヒ又元ノ持場へ引揚タリ、
 味方ノ死傷百余名、翌十三日防戦劇敵然レトモ我隊ノ死
 傷五六名ナリ、翌十四日ニハ敵ニ中隊位ト見ヘシカ急ニ
 味方ノ台場迄一同ニ駆込ミ接戦ニ及ヒ、衝伏セ切伏セ必

死ヲ究メ戦フ処ニ、脇へ廻リ横矢ヲ撃ツニ敵ハ死骸ヲ楯
 ニ取り数刻劇戦敵數多討捕逃ケ去ル者ハ僅十名ニ出スト
 思フ、然ト雖トモ戦場混乱ノ折ナレハ確ト難申、此時我
 小隊長長崎直五郎憤戦竟ニ死ス、其他ノ死傷二十一名、
 英輔小隊長ト成ル、翌十五日ヨリ翌々十七日迄ハ防戦而
 已ニテ我隊ノ死傷十余名、翌十八日朝敵ノ大兵闕ヲ吶ト
 揚ケ一同ニ襲来セシニ、味方三百余名ノ兵ナレハ全隊衆
 寡難敵忽チ混乱敗軍ト成リ、且戦且走り植木ヲ通り向坂
 ヲ過（北郡町）キ鹿子木近ク引退テ支ヘ居シ処ニ、追々走セ来ル援
 兵ヲ中島健彦・貴島清ハ左右ニ手配リ、闕ヲ吶ト揚ケ一
 同ニ進メト無息ニ駆出テ敵中ニ切入レハ、大ニ狼狽シテ
 逃走スルヲ跡ヨリ追付ケ衝伏セ切伏セ進ミシカ、忽チ又
 植木迄追返スニ敵ノ死骸二百八首又銃器・彈藥・諸器械
 等ノ分捕夥數シテ數ルニ遑アラス、日暮ケレハ左右ニ
 配兵シテ防禦ノ用意ナサント、我隊ハ街道ノ左翼ヲ守ル
 ニ、最初ノ程ハ防戦頗ル劇敵シテ、前面ニハ敵十間余ノ
 距離ニ塁ヲ築キ無間斷小銃ヲ放チ、横ニハ大砲五門ヲ二
 ケ所ニ据テ頻リニ連発スルニ、三日ノ間ニ我隊ノ死傷ス
 ル二十六名ナリ、數日防戦ニ及ヒシカ余日ノ死傷確ト不
 覚也、同四月十四日ニ熊本川尻方面ノ堅メ敗軍致シ、早

敵ハ城下迄乱入セシ故ヘ木留・植木・鳥ノ樓方面ノ堅メ

ヲ解キ木山村ヘ引揚ヘシトノ報知有之候付、植木口ノ兵

ハ中島・貴島兩名ノ指揮ヲ以テ永峯迄繰入候処、是レ全

ク報知ノ誤ナリ、依之翌十五日大津口ヨリ線ヲ竹宮ニ取

テ配兵スルニ、我隊ハ新銅ヨリ北ノ方五六丁ノ処ヲ守ル、

同十九日未明ヨリ保田窪・竹宮ノ方面ヘ敵ノ大兵襲来頗

ル劇戦數刻ニ及ヒ竟ニ味方敗軍スルニ、早敵ハ永峯近ク

進入ルニ我隊ノ堅メハ無事成故、隣守ノ隊ト共ニ敵ノ背

後ヘ吶ト衝出レハ、敵大ニ狼狽シテ忽チ逃走スルヲ追払

フテ又元ノ守場ヘ引揚ケ、大砲四門・小銃・彈藥等ノ分

捕ハ夥敷シテ數ルニ違アラス、我隊ノ死傷五名也、敵ノ

死骸ハ幾百ヲ不知、然ト雖トモ同日木山村方面ノ戦悪シ

クシテ諸方面ノ隊ヲ木山村ヘ繰入ヘシト報知有之候付、

其夜永峯ヲ発足、翌廿日未明木山村ヘ着ス、然ル処第二大

隊六番小队ヲ我隊ニ合併シ竹宮街道ノ左翼ヲ守リシカ、

河原口ヘ敵襲来味方敗軍ニ付、本営ヨリ矢部ヘ引揚ヘシ

ト報知アリ、依テ隊ヲ纏メ木山町口ヘ行掛リ候処、市街

ヘ台兵群集シ進退爰究リ劇戦ニ及テ衝抜ケ切抜ケ竟駈敗

テ矢部ヘ引揚ク、翌廿一日同処ニ於テ各隊号ヲ改メ、田

原坂ヘ出兵セシヲ振武隊、山鹿口ヲ奇兵隊、木留口ヲ行進

隊、城郭守兵ヲ干城隊、竹宮口ヲ正義隊ト改号、英輔振

武五番中隊長ト成ル、于時桐野申スニ、如斯成タル上ハ

敵鹿兒島ヘ兵ヲ出スニ相違ナシ、依テ此兵ヲ人吉ト鹿兒

島ヘ出シテ二ヶ処ヲ敵ニ守防ヲ成シ、当地ハ手広クシテ

守ルニ無益ナリ、此処ハ引退キ險ニ依テ守ルヘシト決シ、

同廿五日該地ヲ発足シテ同廿七日江代ヘ着ス、翌廿八日

同処ヘ滞在致シ候処、果シテ鹿兒島ヘ台兵襲来ノ報アリ、

依テ振武全隊ヲ以テ討払ハント同夜出發同五月二日鹿兒

島県蒲生郷ヘ着シ、翌三日同処ニ於テ評議スルニ、今晚

夜襲ヲ懸テ城山ヲ討払ヒ、夫ヨリ新正院・西田橋・武橋

ノ三ヶ処ヨリ衝入ラント議論一致シ、午后該地発足致シ

候処、雨降暗夜ニ道悪シクシテ遅刻ニ及ヒ、翌四日ノ未

明ニ伊敷村ヘ着シケレハ該所ヘ潛ミ、今夜襲ハント決定

シタリ、依テ夜半ヨリ進撃致シ候処直チニ城山迄ハ攻上

リテ砲臺下迄進入リ頗ル劇戦スレトモ、虎落ヲ構ヘ翌ヲ

高フシ中々要害敵ナレハ、攻入事能ハスシテ竟ニ引揚タ

リ、又日ヲ替テ荒田川尻ヨリ夜襲ヲ懸ケ川向ヘ涉リ石垣

ノ下迄攻付シカ、其上ニ虎落ヲ構ヘ翌ヲ築キ大砲・小銃

ヲ連発シテ攻入り難シ、竟又伊敷村ヘ引揚テ評議スルニ

中島・貴島曰ク、最早兩策モ尽キタレハ此上ハ防禦ヲ敵

ニシ敵ノ襲ヲ待受、透ヲ窺ヒ衝入ヘシト、諸方ヘ配兵スルニ我隊ハ草牟田道ヲ堅ム、数日ノ内ニ武村又郡元村ノ浜橋ニハ敵度々襲来セシカ、味方一度モ敗軍スル事ナシ、戦毎ニ勝利ナリ、然ル処六月廿四日未明ヨリ右浜橋ヘ敵襲来終日劇戦竟ニ味方敗軍致シ、水上街道ヘ翌ヲ築テ防禦セリ、此トキ振武九番中隊長松元與八郎武岡ノ砲台ニ死ス、同廿五日宮城口ノ敵処々討敗リ吉野ノ背ヲ衝キ来ルニ、本営ノ指揮ニ依リ振武隊ハ下田村ヘ引揚テ配兵ス、我隊ハ伊敷村ヘ通フ間道ヲ守ルニ、翌廿六日午前九時頃鹿兒島ノ方ヨリ敵襲来互ニ砲撃ニ及ヒシカ、我隊ノ持場ハ無事成故、味方危ケレハ救ハント待受シニ、未タ勝負不分内報知ノ誤聞ニテ隊ヲ引揚ケ来リ、然ト雖トモ宮城口敗レテハ該地守事ヲ得ス、故ニ白金坂ヲ下リ重富郷ヘ一泊シ、翌廿七日蒲生郷ヘ転シ本営ヲ麓町ヘ据ヘ、翌廿八日配兵スルニ、我隊ハ吉田街道ヨリ右ニ当ル高牧村ヲ堅ム、(蒲生町) 翌廿九日吉田街道涼松ヘ敵大兵ヲ以テ襲来頗ル劇戦ニ及ヒ、味方竟ニ敗軍スレハ敵直チニ蒲生麓ヘ進入テ我持場ノ糧道ヲ絶タレ、高牧ヨリ漆村ヘ出テ鹿倉山ヲ越テ溝邊郷ヘ引揚ケ、三日ヲ経テ加治木郷ヘ転ス、此トキ志布志・高隈方ヘ敵兵屯集セル由報知アリ、依テ中島・貴島ノ兩

名振武全隊ヲ引率シテ攻撃セント該地ヲ出発ス、日ヲ経テ同七月八日日ハ薩比上不覺福山郷ヘ致着候処、其夜牛根郷二川村ヘ敵屯集ノ由報知アリ、依テ振武五番・七番・九番三中隊ノ百五十余名ヲ以テ討払ハント、翌九日日ハ薩未明同処出発シテ山手ト浜手ト兩方ニ分レテ、我五番中隊ハ山手ヨリ進撃シテ急ニ唎ト駈入レハ、忽チ敵引退テ要処ニ依リ罌ヲ築テ砲発スルニ、单騎通ノ道ナレハ中々進入リ難ク互ニ防戦ト成リ、宵ヲ入レテ竟ニ引揚ケ、小銃七八挺・彈藥数百ヲ分捕、廣島鎮台兵佐藤左吉ヲ生捕、味方死傷二十四名、翌十日日ハ薩中島・貴島ノ跡ヲ慕ヒ末吉郷ヘ繰入レシニ最早恒吉郷ヘ出発跡ニテ、翌十一日日ハ薩該地ヘ繰入候処、志布志・高隈郷ノ敵ハ引揚又百引郷ヘ敵屯集ノ由報知アリ、彼ノ敵ヲ討払ハント同夜午後八時比ヨリ中島・貴島ノ兩名振武十二中隊人員五百余名ヲ以テ進軍ス、翌十二日日ハ薩朝八時比四方ニ手配リ敵ノ不意ヲ襲シ処敵少シハ支ヘタレトモ、竟ニ散乱シテ逃走スルヲ追払ヒ、大砲二門・小銃・彈藥・諸器械・米金等之分捕ハ夥敷シテ数ルニ違アラス、會計吏一名・医員一名生捕、兵卒・夫卒ノ降ル者五十余名、近衛鎮台兵ノ道路ニ斃レシ八百余為有之由、味方ノ死傷十余名、同夜又恒吉ヘ引揚

タリ、翌十三日口雖ト不覺又大崎郷へ敵屯集ノ由報知アリ、依テ彼ノ敵ヲ討払ハント奇兵隊ヲ先鋒トシ、振武隊ヲ応援トシテ同夜発足致シ、翌十四日口雖ト不覺朝荒佐村(大崎町)へ敵ノ屯集アルヲ知ラス教導(禮)ノ為メニ敵台場ノ前面ニ偽引入ラレ劇戦数刻、竟ニ味方敗軍ニ及ヒ人家ニ放火シテ去リ、志布志ノ村家へ着致シ候処、奇兵隊ハ大崎へ進撃致シ候得共市街四方ニ虎落ヲ構ヘ罌ヲ築キ、又透間ナク串ヲ建テ勝敗決セスシテ引揚ケ、翌十五日口雖ト不覺未明ヨリ又進撃致シ候処、途中ニテ敵ト出逢テ互ニ砲撃ニ及ヒシ由、味方彈藥ノ乏敷ヲ以テ振武隊ニ援兵ヲ乞フ、依テ我隊外ニ二中隊ヲ以テ救ハント急ニ進軍劇戦ニ及ニ、敵追々退ク模様ナレハ味方ハ勢ヒヨ益シ竟ニ切入ラント関ヲ揚ケテ駆出セハ、敵忽チ散乱シテ逃走スルヲ追払テ志布志ノ麓へ引揚ル、此トキ鎮台軍曹一名降伏ス、就テ見レハ負傷者也、依テ病院へ送り療養ヲ加ヘタリ、翌十六日口雖ト不覺志布志へ滞在致候処、村田新八ヨリ日州高崎堅メ敗軍致シ莊内又財部ノ両処大ニ懸念ナレハ彼ノ処へ振武隊ヲ繰入ヘシト報知アリ、翌十七日口雖ト不覺該地ヲ出発シテ庄内へ移リ、尤干城隊・雷撃隊ノ持場ナレハ彼ノ隊ト打合、振武隊ト供ニ八百余名ヲ以テ高崎ヲ盛返サン事ヲ約シ、翌十八日口雖ト不覺

未明ヨリ進撃ニ及ヒ初戦ハ味方勝利ヲ得一里計リ追崩セシニ、又敵勢ヒ盛ニ進来リ竟ニ味方敗軍シテ、振武隊ハ庄内山田村へ引揚ケ又日ヲ替ヘテ進撃セシニ、道路ニ虎落ヲ構ヘ頗ル敵ナル故、互ニ砲撃シテ竟ニ敗勝決セスシテ又山田村へ引揚タリ、同廿八日村田新八ヨリ、不日敵ノ総進撃有之由ニ付通り山(財部町)へ在ル処ノ行進隊ヲ末吉へ移シ其跡へ振武隊ヲ出スヘシト報知有之、即日該地出發シ翌廿三日未明通り山へ着シテ行進隊ト交代ス、翌廿四日早朝ヨリ果シテ敵ノ総進撃ニ遭ヒ全隊衆寡敵セス忽チ敗軍ニ及ヒ、且戦且走リテ退ク内ニ庄内又財部ヲ押敗リシ敵急ニ都城ニ衝入り前途ヲ絶チ、味方大ニ狼狽ス、然ト雖トモ衝抜ケ駆抜ケ山野口へ引揚シカ、牛根ニテ生捕候佐藤左吉ハ兼て我隊ノ給養方へ召置候処、此日ノ混乱ニ取紛レ給養二名右左吉モ先行相知レス、振武全隊ノ纏マリシ兵僅二百余名也、依テ干城隊・雷撃隊ト共ニ当処ヲ守リ行進隊ハ三俣ヲ守ルト約セシカ、如何成誤ニ候哉板屋(北郷町)迄引揚タル由ニテ、翌廿五日敵三俣ヲ経過シ板屋ヲ差シテ進軍セシ報知アリ、彼ノ地ヲ敵ニ渡セハ山野口ノ背面ニ衝出ル間道アリ、依之テ振武隊ハ直チニ該地ヲ発足シ天神河原ヲ通り越シ(田野町)學木街道ヲ堅メシカ、同廿七日敵板

屋ヲ押敗リ我持場ノ後へ衝出街道ヲ絶チ進退究リ竟ニ間道ヲ通り宮崎中村町^(高崎市)へ一泊ス、翌廿八日振武隊ハ街道ノ右ニ当リ二三十丁モ隔テシ時雨野^(高崎市)へ配兵ト成テ守居候処、五番・六番^{即チ我隊五番ナリ}ノ持場向へ敵ノ斥候四五名後ニ繼テ二中隊計リ進来ヲ見付、伏兵シテ待受間近ク引寄せ不意ニ砲撃セシニ敵大ニ狼狽シテ忽チ逃走スルニ、外套百余枚・弾薬箱入十三箇ヲ分捕ス、然ル処ニ街道ノ方敗レ該地守ヲ得ス、貴島清来テ振武全隊ヲ纏メ高岡郷ヲ經過シ、其夜村家ニ一泊シテ翌廿九日佐土原木脇村^(岡高町)へ移リ、翌卅日同処ニ於テ振武隊ヲ五中隊ニ編制シテ七番・八番・九番中隊ヲ我隊ニ合併ス、同夜六野原^(岡高町)ノ方面へ敵襲来ノ模様ニ付彼ノ地ヨリ報知来テ援兵ヲ乞フ、因テ翌卅一日未明我一中隊ヲ繰出シテ彼ノ本営ニ至リ河野四郎左衛門・高城十次ニ面談ス、両名申ケルハ、即今此処ニ於テハ格別懸念ナケレトモ佐土原へ出ル間道へ全ク守兵ナキ故大ニ懸念ナレハ、暫時ニテモ彼ノ処へ出シ呉ルヘシト申ケルニ該所ヲ守居候処、木脇・六野原ノ両道敗レ佐土原町へ各隊ヲ引揚ケケレトモ、該地ハ不要害ナル故川打渉テ配兵ス、于時振武隊ハ街道ノ左翼ヲ守リ川ヲ前ニシタル要地ナレハ此地ヲ以テ是非繰留ント、翌ヲ高フシ溝ヲ深フ

シ敵ニ防禦ノ用意ヲ成シテ堅シカ、八月二日未明ニ川向ヨリ敵関ヲ揚ケ頻リニ烈シク砲発スルニ味方一発モ放サス間近ク引寄せ撃ヘシト待受タル処ニ、背面へ砲声相聞ヘ追々間近ク成ケレハ不審ニ案シ斥候ヲ出サントスル折節本営ヨリ報知来テ、川上ノ方敗レ本営ノ後ニ敵攻来リ直チニ守兵ヲ引揚ヘシト云、依テ隊ヲ纏メ高鍋差テ引揚シニ、早其地モ敵地ト成故ニ浜辺ヲ通り都濃町へ引揚タリ、然ル処各本営會議ニ耳津川ヲ越シテ防禦スヘシト決定シ、同夜出發シテ翌三日該川ヲ涉リ、振武隊ハ本道ヨリ二十町余川上ヲ守ルニ同六日各本営ノ會議ニ、川上ノ方守兵薄クシテ彼ノ地尤懸念ナレハ川下ヨリ隊ヲ繰上テ振武隊ノ持場ヲ行進隊へ渡シ又振武隊ヲ川上へ繰上ヘシト決シ、翌七日朝行進隊ト交代シテ本営ニ至ルニ奇兵隊本営ヨリ報知来テ、今朝山陰^{ヤマガタ(東郷町)}ノ方へ敵襲来頗ル劇戦ニ付援兵ヲ乞フニ依リ、我一中隊ヲ以テ救ハント直チニ発足ス、途中央ノ処ニテ敵山陰ヲ押敗リ富高新町^(日向市)へ進入セシ報知アリケレハ我隊ハ是ヨリ今夜中ニ新町道ヲ横ニ衝抜ケ延岡城下ヲ差テ引揚ント決シ、其趣ヲ至急本営へ報知シテ教導ヲ頼テ行進スルニ、雨降暗夜ノ事ナレハ道路路ニ迷ヒ隊ハ散乱シテ僅四名ト成リ戦ニ及フ力モナシ、宵モ

明ケレハ敵ノ様子ヲ窺ハント山野田村へ出シニ、砲声聞
近ク相聞ヘ早敵来リト土民共逃走ルニ付、其場ヲ立去四
方取囲マレ進退爰ニ究リ山中ニ潜伏シテ猶敵ノ模様ヲ窺
ヒ、透アラハ抜ケ出ント奔走スル処ニ、同十一日敵ト出
逢テ竟ニ第四旅団ノ軍門ニ降ル、

右ハ今般御達ノ趣ニ付、戦地ノ形状等詳悉仕候次第筆
記差出候善之処、戰場騒劇ノ際手帳等遺失致シ尔来年
ヲ超ヘ日ヲ弥リ何分記憶シ得ス、胸間ニ浮ヒ候丈ハ録
上仕候得共月日等多ク忘失仕各段御採用ノ件モ有之間
敷近比恐怖仕候、此段可然御執達被下度奉願候也、

鹿兒島県第三大区五小区

上旧本立寺馬場居住

当群馬県惣役人

明治十一年二月

伊集院英輔

二〇 兒玉利謙上申書

(朱二第四十五号)
今般鹿兒島県逆徒御征討始末御編輯被為在候ニ付、戦地
之事情詳細可申上旨獄司公ヨリ更ラニ御達シ相成り、謹
テ左ニ誌上ス、

昨明治拾年ノ春陸軍大将西郷隆盛以下私学校徒随行政府
へ尋問ノ際、県内動搖ニ立至リ候得共、利謙儀ハ兼テ入
校罷居ラスニ付關係仕ラサリシカ、全三月上旬比邊見十
郎太・淵邊群平・別府晉介等鹿兒島ニ立帰リ再ヒ兵ヲ諸
方ニ募リ諭シ曰ク、今哉士タル者困難義務ニ飽食匍匐シ
テ尽サ、ルハ廉恥ニ反シ、天地ニ容ル可カラサル国賊ニ
有之、早々出京一滴モ報ス可キノ秋也、曩キニ県令大山
綱良布達ノ赴キモ有之、同三月卅日午后六時ヲ以テ我カ
朋友輩拾八名故郷出發、全卅一日横川ニ一泊、全四月一日
大口本営ニ至ル、深見有常ニ届ケ全所ニ次ル事三日、全五
日加世田・阿多・出水・串良・鶴田・都之城・甌島・佐
土原諸方ノ人員百六十余名編制セラレ、拾番大隊拾番小
隊ト称シ、小隊長ハ小田良輔申長、分隊長ハ山田伊右衛門
出水、半隊長ハ利謙ニ命セラル、銘々辞退ニ及相済ス止ヲ得
ス達シニ從ヒ、本営ノ門外ニ整列シ、中原尚雄等ノ口供
隊下ニ示セト令アリ、即チ相示シ一同ニ大音ヲ挙ケ午后
六時大口ヲ立チ、壹里半程モ過キ行ケハ名モ高キ(高嶺山)熊山ニ
相成リ、中々峻嶮ナル山路ニテ比シモ五日ノ暗夜ニ小雨
降り続キ炬火モ尽キ果テ百事混雜、竟ヒニ其夜ハ山中ノ
峠ニ滞陣シ、明ル六日ノ東明ヲ遅シト相待チ午前拾時人

吉ニ至リ、別府晉介ニ届ケ全所ニ一泊、全七日神之瀬本(球磨村)當ニ到着、午后八時邊見・淵邊等ノ達シニ、明八日ハ黒木龍助隊先鋒ニテ熊川舟ヨリ進軍、我カ小隊熊川挟ミ右半隊ハ川ノ左側、左半隊ハ川ノ右側応援ノ賦ニテ整列シ、此時津留親章都之我カ監軍ニ命セラル、午前六時ヨ期シ(藤瀬、坂本村)雖ナク釜瀬ニ至リ、夫ヨリ黒木隊等藤元ヘ進軍、我カ小隊ハ萩村ヘ進ミ日奈久越ノ要路ヲ守ル事四日、夫ヨリ狙撃隊前田萬次郎ト供ニ鶴伴坂相越ヘ日奈久ニ赴キ、全所モ官軍引払ヒ遙カノ沖ニ碇泊ノ軍艦壹艘而已、探索セシニ間々バツテラヨリ上陸致シ候哉ニ探偵シ、両隊ノ中交番ヲ以テ壹分隊宛磯辺ノ堤ヘ兵ヲ伏セ待居候処、全拾三日ノ午后三時バツテラヨリ式百間内外ノ灘目ニ寄來リ砲発致シ候得共、尚寄ルヲ相待チ砲発セス、暫時アツテ小數ノ側ヨリ窺フニ近寄ル舳モ相見得ス、即チ諸兵ニ指揮シ一同ニ砲発暫時ラク抗戰勝敗決セス、官軍舟ヲ洋中ニ漕出シ、明ル拾四日黎明迄ハ空ク堤ヲ守リ、夫ヨリ八代之内古田ヘ引上ケ候処、櫻馬場砲戰相始リ、邊見・淵邊ノ両氏ヘハ進軍ノ途中ニ行逢ヒ、我カ小隊ヲ二ツニシ右半隊ハ小田指揮ニテ猫谷ニ進軍、左半隊ハ利謙率ヒ赤塚源太郎郷生風呂上仁之助郷大口両隊ト萩原ノ涉リ固ム

可キノ令ニ從ヒ、飯リニ宿陣ヲ豊井邑ニ移シ、官ノ巢穴ヲ抜クノ賦ヒニテ萩原ヘ進軍、我カ兵鼓譟シテ大ヒニ迫ル、官兵墨ヲ堅フシテ頻リニ拒キ敢テ進ム事能ハス、退ク事拾八九間、川手ノ大堤ニ抛リ川ヲ隔テ戰フ事三晝夜、全拾六日午后二時本官ヨリ諸隊ニ廻文アリ、曰ク、軍評議及フ可キニ付三官之内壹名宛出頭ト有之、頓テ各隊長本營ニ会シ銘々討論時ヲ移ス、然リト雖トモ官兵ノ墨堅キカ故ニ狼リニ砲発セス、只要地ニ伏セ官兵ノ近寄ルヲ待チ切込ヲ良策ト相決シ候処、官兵戸下ノ涉リヲ越ヘ全村ヘ放火ノ報アリ、速カニ馳付候処赤塚隊我カ左半隊等馳付民家五六軒モ焼失、探偵候得共尋ネ出サス、全四時猫谷進軍ノ我カ右半隊引上ケ、共ニ守ル可キ淵邊ヨリ承リ、即チ押伍高江次郎兵衛郷出水ヲ以テ小田方ヘ申越候処、彼方モ要地ニテ難迦旨喇叭役境田軍平郷出水ヲ以テ申遣シタリ、形行淵邊ヘ相伺ヒ候処、彼方ハ諸隊ヘ引渡シ參ル可キ等ノ達シニテ、亦候軍平ニ申遣シタリ、全夜五更ノ比小田等引上ケ來リ互ヒニ恙ナキヲ悦ス、全拾七日ノ曉ヨリ官ノ彈丸相絶ヘ櫻馬場砲聲常ヨリ繁シ、愈々味方進軍、官ノ要壘ヲ抜ハ今日ニ在リト隊伍ヲ誠メ益嚴ニ守備シ、官兵旗ヲ返セハ銃器ヲ擲捐テ腰劍ニテ八代ヲ抜キ、櫻馬

場ニ劣ラス勝利ヲ取ル可シト心計リニ相存シ待居候処、

豈圖ラン哉午后二時邊見・淵邊方ヨリ急使達ス、櫻馬場

苦戦ニ付応援早々致ス可キ段申来リ、直チニ赴キ候処実

ニ味方危急ニ迫リ必死ニ防禦ス、我カ右半隊ハ櫻馬場向

川原、左半隊ハ正面ヨリ防戦ス、官兵大挙シテ頻リニ襲

フ、互ヒノ砲煙一天ニ漲リ咫尺モ弁ヘス恰モ晴天白日蝕

ノ如シ、最早櫻馬場中央官兵ニ拔レ候得共素ヨリ喉口ノ

地ナレバ死傷ヲモ顧ミス奮戦ス、時ニ官兵稻荷山ヨリ不

意ニ横ヲ撃ツ、我兵頗ル散乱シ竟ヒニ保ツ事能ハス味方

一同ニ引ク、我カ兵八代市宮地妙見山向手ノ岡ニ引キ散兵ヲ纏メ、全

所小高キ丸岡ノ旧壘ニ抛リテ小川越ノ間路ヲ禦ク中央ハ、

古田ニ在ル本宮ハ拔レタル報アリ、益力ヲ屈シ日モ黄昏

ニ相及ヒ二三発ノ彈藥ヲタノミニ思ヒ壘ニ待居候処、官

兵雲霞ノ如ク群リ来テ襲フ、我兵等最早玉藻尽キテ皆々

拔刀ニテ力ヲ限リニ支ヘントハ思ヘトモ、悪敷地ノ利

ニ臨ミ数日戦ヒ疲レタル者ヲ以テ切込ミ兵ヲ損シ候てハ

策ノ得タル者ニアラスト、此上ハ宜ク退キ再会ヲ期シ會

稽ノ恥ヲ雪カント相決シ、午后二時頃釜瀬(鎌瀬)ニ引ク、全拾

八日又候神之瀬(球磨村)ニ引上ク、昨拾七日ノ敗戦ニ邊見十郎太・

小田良輔ハ敵中ニ陥リ進退ヲ失シ岡手ノ荆棘ニ潜匿シ僅

カニ身ヲ挺キ三日目に到着ス、是ヲ八代両度ノ敗ト云フ、

全拾九日及ヒ廿日迄ハ休息シ全廿一日拾壹ノ二番小隊外

ニ壹小隊隊名ヲ失スト交番ヲ以テ山手ノ間路地名ヲ失スニ哨兵線ヲ張

ル事三日、全廿四日大槻邑ニ宿陣ヲ転シ、水無瀬(山形村)ノ比丘

野ニ哨兵ヲ張ル事二日、全廿六日比丘野引上ケ拾壹ノ二

番小隊ト大槻邑ヲ守ル、全廿八日ヨリ疫症ニ罹リ宿陣ニ

立帰リ居候処、全卅日大隊ヲ改メ壹小隊ヲ以テ壹中隊ト

シ更ラニ破竹五番中隊ト称シ、中隊長ハ稻田眞平鹿兒、島

右小隊長ハ向田幸藏鹿兒、島、半隊長ハ利謙、分隊長ハ高江

郷太郎出水、郷、左小隊長ハ小田良輔、半隊長ハ佐土原士姓名ヲ失ス

分隊長ハ前田左内都之、城郷、右銘々ニ命セラレ候得共、利謙儀

ハ日増シ重体罷成り竟ヒ二人吉病院へ送ラレ、療治中当

所モ官兵攻メ入ルモ量リ難キニ付、重体ノ者ハ日州飯野(えびの市)

ニ差送ラル、ニ付、利謙儀モ其ノ数ニ加ハリ飯野之病院

ニ至ル、全六月上旬比掃宅仕、前非ヲ悔ヒ帰順自首奉リ

候也、但シ八代ノ戦ヒニ監軍押伍三名兵士拾六名手負、兵士三人即死、餘隊知レ、ザルモノ押伍名兵士名ノ數ハ相覚ヘ候得共、姓名ハ取覚ヘ申サス候

鹿兒島県薩摩国山谷郡山谷郷

第四大区壹小区八拾壹番地居住

利貞長男

明治拾一年第二月

兒玉利謙